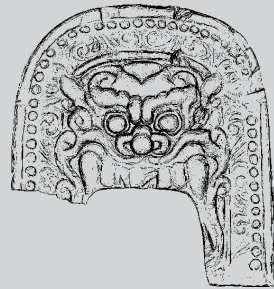


平成 19 年度

財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報



2010



写真1 I - 2 平安宮豊楽院清署堂南面西階段（西より）



写真2 I - 1 平安宮朝堂院昌福堂北端布石（西より）

平成 19 年度

財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報

2010

序

歴史都市京都は平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積し、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの貴重な文化財をいまなお多く地下に埋蔵しています。

この歴史都市京都における都市機能の整備・再開発による市内の近代化の過程で、埋蔵文化財を含む遺跡の破壊や遺物の消滅が予測されますところから、それを未然に防ぐための事前の調査・保存を図る必要があります。そのために昭和 51 年秋、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が設立され、以来、平安京と周辺の多くの遺跡について当研究所は発掘調査を実施し、多くの調査成果をあげており、それらを公表し普及・啓発するための事業もあわせて進めてきました。

当研究所ではその年度に実施した諸事業を報告、紹介するため、年報を毎年、発行しています。この年報をご一覧いただき当研究所の事業内容についてご理解いただく一助になれば幸いに存じます。

本年報の内容につきましては、はじめに市内で実施しました発掘調査事業の概要と試掘や立会調査の成果と概要を報告、次に保存処理や復元彩色の内容を紹介し、そして普及・啓発事業等を報告しています。

なお、発掘調査に関しましては、個々の遺跡の発掘調査報告書を本年報とは別に刊行しております。本年報はその年度に実施しました発掘調査の全体を一覧していただくために、それらの内容を要約し紹介しております。

本年報についてご意見、ご批評をお聞かせいただきますようお願い申し上げます。

この年度の調査を実施するにあたり、原因者の方々をはじめとし、関連する京都市の諸機関の各位に多大なご協力をたまわりました。ここに記し、厚く感謝しお礼申し上げます。

平成 22 年 1 月

財団法人京都市埋蔵文化財研究所
所長 川上 貢

凡 例

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が平成 19 年度に実施した事業の年次報告である。発掘調査と試掘・立会調査（第 1 章）、資料整理（第 2 章）、普及啓発事業等報告（第 3 章）とした。
- 2 本書中に示した方位・座標値は、日本測地系（改正前）平面直角座標系VIによつた。ただし座標値は単位（m）を省略している。座標及び水準は、京都市遺跡発掘調査基準点と京都市水準点を使用した。
- 3 本書中の地図は、京都市長の承認を得て、同市発行の都市計画基本図（縮尺：1/2,500）、市街図（縮尺：1/30,000）を複製して調整した。
- 4 長岡京の条坊呼称は、新呼称に準拠した。
- 5 平安時代以降の土器編年の型式は、当研究所『研究紀要』第 3 号の「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」に従つた。
なお、「平安京 I～V 期」、「京都 VI～XIV 期」を「京都 I～XIV 期」で統一した。
- 6 各報告の調査位置図の方位は北を上配置した。黒塗り部分が、調査対象地である。縮尺は、1/5,000 ないしは 1/10,000 とした。
- 7 平成 19 年度調査のうち、文化庁国庫補助事業による発掘調査は、『京都市内遺跡発掘調査報告』に、同じく市内遺跡立会調査は『京都市内遺跡立会調査報告』（いずれも京都市文化市民局発刊）に報告されている。
- 8 掲載写真は一部を除き村井伸也・幸明綾子が撮影した。
- 9 本書の執筆は、報告書として発刊されているものについては、その要約を資料課で行い、その他のものについては文末に記した担当者が行つた。
- 10 本書の作成にあたっては、編集・調整を資料課が行つた。

目次

第1章 調査報告

I 平成19年度の発掘調査概要	1
1 平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡	6
2 平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡	7
3 平安京左京三条二坊十町跡	8
4 平安京左京四条二坊十五町・本能寺城跡1	9
5 平安京左京四条二坊十五町・本能寺城跡2	10
6 平安京左京五条三坊十一町跡	11
7 史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊十町跡	12
8 史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊六町（東市）跡	13
9 平安京右京六条二坊六・十一町跡	14
10 平安京右京六条二坊三・六町跡	15
11 平安京右京七条一坊二町跡	16
12 平安京跡・史跡西寺跡	17
13 長岡京跡右京二条三坊一町・八町跡・上里遺跡	18
14 羽束師志水町遺跡・長岡京跡	19
15 妙満寺瓦窯	20
16 植物園北遺跡1	21
17 植物園北遺跡2	22
18 植物園北遺跡3	23
19 史跡賀茂御祖神社境内	24
20 史跡・慈照寺（銀閣寺）旧境内	25
21 北白川廃寺跡	26
22 法勝寺跡・岡崎遺跡1	27
23 法勝寺跡・岡崎遺跡2	28
24 鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	29
25 伏見城跡1	30
26 伏見城跡2	31
27 平安京右京三条一坊三・六・七町跡	32
II 平成19年度の試掘・立会・確認・分布調査の概要	33
1 史跡旧二条離宮	34
2 平安京右京六条一坊三町跡	38
3 名勝清風荘庭園	42
4 史跡荷田春満旧宅・伏見稻荷大社境内	48
5 特別史跡・特別名勝醍醐寺三宝院庭園	51

6	名勝龍安寺庭園	60
7	常盤仲之町遺跡宮	65
8	史跡・名勝嵐山	67

第2章 資料整理

I	保存処理	72
1	出土木製品の受入れ状況	72
2	木製品保存処理	72
3	金属製品の受入れと保存処理	72
4	ガラスの比重測定	72
5	骨の受入れと保存処理	72
6	遺構・遺物の取上げ	72
7	土サンプルの洗浄・選別	74
8	修羅の保存処理	74
9	樹種同定	74
10	受託事業	74
II	復元彩色	74

付 章

伏見城跡出土の江戸時代人骨の分析

「伏見人骨資料からの江戸時代町民の人口学的分析」	1～9
「伏見人骨資料からみる江戸時代人の体格、虫歯、病気」	10～32

第3章 普及啓発事業等報告

I	普及啓発事業報告	75
1	京都発掘30年事業の開催	75
2	現地説明会の開催ほか	75
3	報告書の刊行	75
4	「リーフレット京都」(No. 207～No. 218)の発行	76
5	全国埋蔵文化財法人連絡協議会への参加	76
6	その他研究会等への派遣	77
7	講師等の派遣	77
8	ホームページアクセス件数	77
II	京都市考古資料館状況	79
1	京都市公の施設の指定管理者への指定	79
2	特別展示の実施	79
3	小・中学生夏期教室の開催	79
4	文化財講座の開催	79
5	情報コーナーにおける普及啓発	79
6	考古資料の貸出	79
7	博物館学芸員課程実習生の受入れ	79
8	生き方探究・チャレンジ体験の受入れ	83
9	教育機関の学外授業等の受入れ	79
10	関係機関等への協力	79
11	その他機関への協力等	79
12	入館状況	79
III	組織構成	83

図目次

カラー図版1

写真1 I-2 平安宮豊楽院清署堂南面西階段

カラー図版2

写真2 I-1 平安宮朝堂院昌福堂北端布石

図1	調査地点位置図	5
図2	平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡調査位置図	6
図3	” 遺構平面図	6

図 4	平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡調査位置図	7
図 5	” 遺構平面図	7
図 6	平安京左京三条二坊十町跡調査位置図	8
図 7	” 調査区配置図	8
図 8	平安京左京四条二坊十五町・本能寺城跡 1	9
図 9	” 遺構平面図	9
図 10	平安京左京四条二坊十五町・本能寺城跡 2	10
図 11	” 遺構変遷図	10
図 12	平安京左京五条三坊十一町跡調査位置図	11
図 13	” 遺構変遷図	11
図 14	史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊十町跡調査位置図	12
図 15	” 江戸時代の遺構平面図	12
図 16	” 室町時代以前の遺構実測図	12
図 17	史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊六町（東市）跡 調査位置図	13
図 18	” 平安時代遺構平面図	13
図 19	” 桃山～江戸時代遺構平面図	13
図 20	平安京右京六条二坊三・六町跡調査位置図	14
図 21	” 1区遺構平面図	14
図 22	” 2区遺構平面図	14
図 23	平安京右京六条二坊六・十一町跡調査位置図	15
図 24	” 1区遺構平面	15
図 25	” 2区遺構平面図	15
図 26	平安京右京七条一坊二町跡調査位置図	16
図 27	” 調査区配置図	16
図 28	” A 1・2区遺構平面図（平安時代）	16
図 29	平安京右京一条二坊跡調査位置図	17
図 30	” 調査区配置図	17
図 31	” 遺構平面図	17
図 32	長岡京跡右京二条三坊一町・八町跡・上里遺跡 調査位置図	18
図 33	” 長岡京期遺構平面図	18
図 34	” 弥生時代遺構平面図	18
図 35	” 縄文時代遺構平面	18
図 36	羽束師志水町遺跡・長岡京跡調査位置図	19
図 37	” 遺構平面	19
図 38	妙満寺瓦窯調査位置図	20
図 39	” 遺構実測図	20
図 40	植物園北遺跡 1 調査位置図	21
図 41	” 遺構平面図	21
図 42	植物園北遺跡 2 調査位置図	22

図 43	”	調査区全景（西より）	22
図 44	”	遺構平面	22
図 45		植物園北遺跡 3 調査位置図	23
図 46	”	調査地配置図	23
図 47	”	遺構平面図	23
図 48		史跡賀茂御祖神社境内	24
図 49	”	遺構平面	24
図 50		史跡・慈照寺（銀閣寺）旧境内調査位置図	25
図 51	”	遺構変遷図	25
図 52		北白川廃寺跡調査位置図	26
図 53	”	遺構平面図	26
図 54		法勝寺跡・岡崎遺跡 1 調査位置図	27
図 55	”	遺構平面図	27
図 56		法勝寺跡・岡崎遺跡 2 調査位置図	28
図 57	”	遺構平面	28
図 58		調査区全景（南西から）	28
図 59		鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡調査位置図	29
図 60	”	土坑 1 土器出土状況	29
図 61	”	1 区遺構平面	29
図 62	”	2 区遺構平面	29
図 63		伏見城跡 1 調査位置図	30
図 64	”	遺構平面図	30
図 65		伏見城跡 2 調査位置図	31
図 66	”	遺構平面図	31
図 67		平安京右京三条一坊三・六・七町跡調査位置図	32
図 68	”	調査区配置	32
図 69	”	遺構平面図	32
図 70		史跡旧二条離宮調査位置図	34
図 71	”	調査区配置	34
図 72	”	遺構実測図	36
図 73	”	1 トレンチ全景（南西から）	37
図 74	”	2 トレンチ全景（北西から）	37
図 75		平安京右京六条一坊三町跡調査位置図	38
図 76	”	遺構配置図	39
図 77	”	断面図	40
図 78		名勝清風荘庭園調査位置図	42
図 79	”	トレンチ配置図	43
図 80	”	層位	43
図 81	”	遺構実測図 1	44
図 82	”	遺構実測図 2	46
図 83		史跡荷田春満旧宅・伏見稲荷大社境内調査位置図	48

図 84	”	遺構平面	・・・・・・・・・・	49
図 85	”	断面図	・・・・・・・・・・	50
図 86	”	調査地状況	・・・・・・・・・・	51
図 87	”	調査地全景（南西より）	・・・・・・・・・・	51
図 88	特別史跡・特別名勝醍醐寺三宝院庭園調査位置図		・・・・・・・・・・	51
図 89	”	調査区配置図	・・・・・・・・・・	52
図 90	”	J 地区実測図	・・・・・・・・・・	53
図 91	”	J 地区天端石実測	・・・・・・・・・・	54
図 92	”	O 地区平面図及び立面図配置	・・・・・・・・・・	54
図 93	”	O 地区 A・B 実測	・・・・・・・・・・	55
図 94	”	O 地区 C・D 実測図	・・・・・・・・・・	55
図 95	”	O 地区 E・F・G・H 実測図	・・・・・・・・・・	56
図 96	”	O 地区 I・J・K・L 実測図	・・・・・・・・・・	57
図 97	”	O 地区 M・N・O 実測図	・・・・・・・・・・	57
図 98	”	三段の滝実測図	・・・・・・・・・・	58
図 99	名勝龍安寺庭園調査位置図		・・・・・・・・・・	60
図 100	”	調査区配置図	・・・・・・・・・・	61
図 101	”	調査区実測図 1	・・・・・・・・・・	62
図 102	”	調査区実測図 2	・・・・・・・・・・	62
図 103	”	参考資料 1 階段に転用された礎石図	・・・・	63
図 104	”	参考資料 2 『寺院明細帳』附録 西源院古図		63
図 105	”	調査区東側全景（東より）	・・・・・・・・・・	64
図 106	”	調査区南西側全景（南西より）	・・・・・・・・・・	64
図 107	”	礎石据付け穴 1・2（北東より）	・・・・・・・・・・	64
図 108	”	階段に転用された礎石（北西より）	・・・・・・・・・・	64
図 109	常盤仲之町遺跡調査位置図		・・・・・・・・・・	65
図 110	”	調査区配置図	・・・・・・・・・・	65
図 111	”	第 3 地点及び第 5 地点断面図	・・・・・・・・・・	66
図 112	”	断面模式図	・・・・・・・・・・	66
図 113	史跡・名勝嵐山		・・・・・・・・・・	67
図 114	”	層位図	・・・・・・・・・・	68
図 115	”	調査区配置図	・・・・・・・・・・	68
図 116	”	遺構平面図	・・・・・・・・・・	69
図 117	”	1 区北壁断面図	・・・・・・・・・・	70
図 118	清暑堂	土層転写作業	・・・・・・・・・・	72
図 119	清暑堂	転写土層	・・・・・・・・・・	72

表 目 次

表 1	平成 19 年度調査一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 2
表 2	その他契約一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 4
表 3	木製品受入れ一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 72
表 4	3 m 含浸槽収納木製品一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 72
表 5	5 m 含浸槽収納木製品一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 73
表 6	金属製品処理一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 73
表 7	ガラス処理一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 73
表 8	骨の処理一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 73
表 9	取り上げ・土層転写一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 73
表 10	種実洗浄・選別一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 73
表 11	樹種同定一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 73
表 12	復元彩色一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 74
表 13	講師等派遣一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 78
表 14	文化財講座一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 80
表 15	新規貸出一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 80
表 16	博物館実習受入れ一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 81
表 17	市内中学生チャレンジ体験受入れ一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 81
表 18	教育機関の学外授業等の受入れ一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 81
表 19	関係機関等への協力一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 82
表 20	その他機関への協力等一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 82
表 21	入館者数一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 82
表 22	役員・評議員名簿	・ ・ ・ ・ ・ 83
表 23	組織構成表	・ ・ ・ ・ ・ 83

第1章 調査報告

第1章は、発掘調査（Ⅰ）と試掘・立会・確認調査（Ⅱ）とした。

Ⅰ 平成19年度の発掘調査概要

平成19年度に実施した発掘調査件数は、表1に示したとおり26件であった。以下、主な調査を紹介する。

平安宮跡内の調査では、2つの大きな成果があった。朝堂院内の調査（Ⅰ-1）では、東第一堂である昌福堂の北端を示す凝灰岩基壇を検出した。また、豊楽院の調査（Ⅰ-2）では、豊楽殿の北側に位置する清署堂凝灰岩基壇や豊楽殿北廊を検出するに及び、史跡指定地とし追加となった。（現在は、基壇や廊の位置が表示され見学できるようになっている。）

平安京跡内の調査は、17件を掲載した。

左京三条二坊十町の調査（Ⅰ-3）は、堀河院推定地にあたり景石を配した平安時代後期の池跡を検出した。堀河院は、南北4町東西2町におよぶ大邸宅であり、これまでにも池跡を検出していることから、敷地全域に苑池が展開している姿が浮かび上がってきた。

左京四条十五町の調査（Ⅰ-4・5）は、織田信長が討ち死にした本能寺城の推定地である。町の中央（Ⅰ-4）では、建物の礎石を据えた根石跡を検出し、付近に大規模な建物が配置されていたことがわかった。また、焼けた瓦や「𦵑」を配する軒丸瓦も出土した。町の南東隅（Ⅰ-5）の調査では、本能寺の南限を示す東西方向の濠跡を検出するに及び寺域を確定することができた。

右京六条二坊域で実施した調査（Ⅰ-9・10）は、五条通拡幅に伴う継続調査である。本年の調査で最も大きな成果としては、西堀川の検出、宅地の変遷、北二門と三門の堺に東西方向に通路が通ることなどがあげられる。

史跡西寺跡の調査（Ⅰ-12）では、西回廊の遺構は削

平されていたものの、4基の柱穴が南北に並ぶことがわかった。回廊造営以前の何らかの施設とみられる。

Ⅰ-13 長岡京右京二条三坊一町・八町及び上里遺跡の調査は、新設街路建設に伴う継続調査である。今年度の調査でも長岡京期・弥生時代前期・縄文時代晩期の遺構が展開していることがわかった。

植物園北遺跡で実施した調査（Ⅰ-17・18）では、竪穴住居を検出し、一帯に広く集落が展開していることがわかった。

史跡慈照寺旧境内（Ⅰ-20）では、北側の山際に直角に折れ曲がる石垣を検出した。

その他、鳥羽遺跡の弥生時代の遺構（Ⅰ-24）、伏見城城下町大名屋敷の遺構（Ⅰ-25）など、今年度も各時代の遺構遺物の発見があった。

なお、Ⅰ-27で掲載した「平安京右京三条一坊三・六・七町跡」は、平成12年度から平成14年度にかけて実施した調査であるが、未掲載であったため本書にて収録した。

※ 報告の詳細については、研究所ホームページ

(<http://www.kyoto-arc.or.jp/>) - 活動内容 - 調査報告書（シリーズ）にPDF形式で公開しておりますのでご活用ください。

表1 平成 18 年度調査一覧表 (1)

契約番号	遺跡名	略記号	調査住所	内容	担当者	面積	期間	本書番号	備考
H19-001	京都市内遺跡	2007BB-	京都市内一円	立会	吉本、卜田		2007.04.01～		2007 立会
H19-006	史跡本願寺境内・平安京跡	2007HK-WI021	下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町	試掘・立会	菅田		2007.04.02～ 2008.03.13	2008	
H19-007	平安京左京三条二坊十町跡	2006HK-MN002	中京区油小路通押小路下る押油小路町(元城巽中学校)	発掘	丸川・東・田中・南出・能芝(妙)・加納	3,354	2006.12.08～ 2008.03.10	I -03	2007-17
H19-008	植物園北遺跡 2	2006RH-ST001	京都市左京区下鴨北野々神町	発掘	平田・モンベティ	1,470	2007.01.24～ 2007.04.27	I -17	2007-1
H19-009	平安京跡・史跡本願寺境内	2006HK-WI019	下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町地内	発掘	近藤(奈)	240	2007.03.05～ 2007.06.04	2008	2008-1
H19-010	平安京右京六条二坊六・十一町跡	2006HK-XH002	下京区西七条御前田町～右京区西院高田町地内	発掘	小檜山、布川、能芝(勉)、尾藤、卜田	1,643	2007.03.27～ 2007.08.03	I -10	2007-3
H19-020	史跡・名勝嵐山	2007UZ-HN001	西京区嵐山西一川町阪急嵐山駅前駐車場内	確認	加納	300	2007.04.18～ 2007.05.23	II -08	
H19-022	長岡京跡(右京二条三坊一町・八町)・上里遺跡	2007NG-EW006	京都市西京区上里南ノ町地内	発掘	高橋潔・津々池惣一・大立目一	1,500	2007.04.16～ 2008.01.10	I -13	2007-12
H19-023	史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊十町跡	2007HK-WI020	下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町地内	発掘	近藤(章)	110	2007.05.22～ 2007.06.27	I -07	2007-2
H19-025	平安京跡(右京七条一坊二町・西坊城小路跡)	2007HK-SM007	下京区朱雀分木町地内(中央市場)	試掘	内田	148	2007.06.13～ 2007.06.21	2008	
H19-026	植物園北遺跡 3	2007RH-YA001	京都市左京区下鴨松ヶ崎芝本町	発掘	山本	120	2007.05.29～ 2007.07.02	I -18	2007 国補
H19-028	平安宮朝堂院	2007HK-KN001	上京区竹屋町通千本東入東主税町	発掘	西森	80.1	2007.06.06～ 2007.06.28	I -01	2007 国補
H19-030	史跡西寺跡・平安京跡(右京九条一坊十四町)、唐橋遺跡	2007HK-SG015	南区唐橋西寺町	発掘	柏田	170	2007.07.23～ 2007.08.20	I -12	2007-4
H19-031	平安京跡(右京七条一坊二町・西坊城小路跡)	2007HK-SM008	下京区朱雀分木町地内(中央市場)	発掘	内田、加納	278	2007.07.02～ 2007.08.13	I -11	2007-6
H19-032	妙満寺瓦窯	2007RH-MA001	京都市左京区岩倉幡枝町	発掘	上村(和)	152	2007.06.25～ 2007.07.27	I -15	2007 国補
H19-033	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	2007TB-TB152	伏見区竹田西内畑町	発掘	平田	138	2007.07.11～ 2007.08.03	I -24	2007-5
H19-034	平安京左京五条三坊十一町跡	2007HK-WK001	京都市下京区仏光寺通室町東入釘隠町	発掘	伊藤	105	2007.07.02～ 2007.08.10	I -06	2007-7
H19-035	法勝寺跡・岡崎遺跡 2	2007KS-IH001	左京区岡崎南御所町	発掘	網	112.5	2007.07.09～ 2007.07.27	I -23	2007 国補
H19-038	常盤仲之町遺跡	2007UZ-SN005	右京区太秦西蜂岡町、太秦蜂岡町地内	立会	網・内田・卜田	100	2007.08.27～ 2007.08.28	II -07	
H19-040	平安京跡・史跡本願寺境内	2007HK-WI022	下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町地内	立会	菅田		2007.06.18～ 2008.03.31	2008	
H19-042	史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊六町(東市)	2007HK-WI023	下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町地内	発掘	木下保明	400	2007.08.13～ 2008.03.28	I -08	2007-18
H19-043	平安京左京四条二坊十五町・本能寺城跡 1	2007HK-WL001	中京区小川通六角下る元本能寺町	発掘	山本	100	2007.08.22～ 2007.09.14	I -04	2007 国補
H19-044	平安京右京六条二坊三・六町跡	2007HK-XH003	京都市下京区西七条赤社町～西七条御前田町	発掘	小檜山、布川、能芝(勉)、尾藤	1,500	2007.08.21～ 2007.12.21	I -09	2007-14
H19-045	平安宮豊楽院消暑堂跡・豊楽院北廊跡	2007HK-LZ002	京都市中京区聚楽廻西町	発掘	西森・内田	176	2007.08.31～ 2007.10.05	I -02	2007 国補
H19-050	史跡・慈照寺(銀閣寺)旧境内	2007KS-GK005	左京区銀閣寺町	発掘	内田好昭	227	2007.11.09～ 2008.01.29	I -20	2007-16
H19-052	伏見城跡 1	2007FD-KY001	伏見区桃山福島大夫西町	発掘	平田・布川・辻(裕)	597	2007.09.25～ 2007.11.28	I -25	2007-10
H19-054	名勝滴翠園	2007HK-WI025	下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町	確認	菅田薫	12	2008.02.07～ 2008.04.21	2008	
H19-055	伏見城跡 2	2007FD-FP002	京都市伏見区竹中町	発掘	山本雅和・能芝(妙)	540	2007.11.27～ 2008.02.04	I -26	2007-15
H19-056	名勝龍安寺庭園	2007RH-RJ001	京都市右京区龍安寺御陵下町	確認	柏田	50	2007.10.11～ 2007.10.26	II -06	

表1 平成17年度調査一覧表(2)

H19-058	法勝寺跡・岡崎遺跡1	2007KS-TA001	左京区岡崎天王町	発掘	辻(裕)	265	2007.10.24～ 2007.11.27	I-22	2007-9
H19-059	史跡荷田春満旧宅・伏見稲荷大社境内	2007FD-FI002	京都市伏見区深草藪之内町	試掘・確認	西森	40	2007.12.10～ 2007.12.26	II-04	
H19-060	植物園北遺跡1	2007RH-KW001	北区上賀茂豊田町	発掘	柏田	183	2007.11.19～ 2007.12.15	I-16	2007 国補
H19-062	羽束師志水町遺跡・長岡京跡	2007NG-PS002	伏見区羽束師志水町地内	発掘	木下	330	2007.11.30～ 2008.01.11	I-14	2007-13
H19-063	平安京左京四条二坊十五町・本能寺城跡2	2007HK-WN001	中京区西洞院通六角下る池須町	発掘	平尾	10	2007.12.03～ 2007.12.17	I-05	2007-11
H19-065	史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊七町跡	2007HK-WI024	下京区堀川通花屋町下ル本願寺門前町地内	発掘	近藤(奈)	240	2008.01.17～ 2008.04.23	2008	2008-1
H19-066	名勝 清風荘庭園	2007KS-ST001	左京区田中関田町	確認	辻(裕)	7.3	2007.12.03～ 2007.12.17	II-03	
H19-067	平安京右京五条四坊六町跡・西京極遺跡	2007HK-QU001	京都市右京区西院安塚町	発掘	西森	415	2008.1.21～ 2008.3.19	2008	2007-20
H19-068	特別史跡・特別名勝醍醐寺三宝院庭園	2007FD-DT009	伏見区醍醐東大路町	確認・立会	近藤(章)	100	2008.01.08～ 2008.02.26	II-05	
H19-070	史跡賀茂御祖神社境内	2007RH-UU006	左京区下鴨泉川町地内	発掘	平尾	100	2008.02.07～ 2008.03.26	I-19	2007-19
H19-074	平安京左京五条三坊五町	2007HK-SL002	下京区高辻通室町西入繁昌町(成徳中学校)	発掘	平田	210	2008.03.07～ 2008.05.26	2008	2008-9
H19-077	史跡 旧二条離宮(二条城)	2007HK-JJ012	中京区二条通堀川西入二条城町	確認	辻(裕)	4	2008.01.28～ 2008.02.01	II-01	
H19-078	平安京右京六条一坊三町跡	2007HK-SM009	下京区朱雀分木町	試掘	辻(裕)	250	2008.02.18～ 2008.03.07	II-02	
H19-079	平安京左京四条四坊二町	2007HK-VJ001	中京区東洞院通蛸薬師上る御射山町(御射山公園)	発掘	東、山本、能芝(妙)	838	2008.04.11～ 2008.10.31	2008	2008-12
H19-083	六波羅政庁跡・法住寺殿跡・方広寺跡	2007RT-AA009	東山区茶屋町	確認	網	290	2008.02.12～ 2008.03.25	2008	報告第23冊
H19-084	北白川廃寺跡	2007KS-TU001	左京区北白川堂ノ前町	発掘	布川	80	2008.02.01～ 2008.03.07	I-21	2008 国補
H19-085	平安京跡・史跡本願寺境内	2007HK-WI026	下京区堀川通花屋町下ル本願寺門前町	立会	菅田薫	0	2007.03.10～	2008	
H19-086	左京区大原草生町地区埋蔵文化財遺構確認調査	2007RH-HJ002	左京区大原草生町地内	確認	尾藤	98	2008.02.12～ 2008.02.26		2008 立会
H19-091	平安京右京六条二坊六町跡	2008HK-XH004	京都市下京区西七条東御前田町地先	発掘	小檜山・能芝(勉)	658	2008.3.17～ 2008.5.27	2008	2008-02
H19-095	常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内	2008UZ-SN006	右京区太秦一ノ井町～太秦青木元町地内	発掘	前田、尾藤、小松	1,360	2008.04.09～ 2008.06.27	2008	2008-3

本書番号欄： I-＊・II-＊は、本書第1章の報告番号を示す。

2008は、本書次年度以降にて報告することを示す。

備考欄： 2007-＊は、2007年度発掘調査分の京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告番号を示す。

2008-＊は、2008年度発掘調査分の京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告番号を示す。

2007 国補は、『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日にて報告を示す。

2008 国補は、『京都市内遺跡発掘調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年3月31日にて報告を示す。

2007 立会は、『京都市内遺跡立会調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日(4～12月調査分)及び、『京都市内遺跡立会調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年3月31日(1～3月調査分)にて報告を示す。

2008 立会は、『京都市内遺跡立会調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年3月31日(1～3月調査分)にて報告を示す。

報告第23冊は、『京都国立博物館構内発掘調査報告書—法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡—』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23冊にて報告を示す。

表2 その他契約一覧表

契約番号	内容	遺跡名	調査住所等	担当者
H19-002	遺物整理	埋蔵文化財出土遺物整理	京都市	小森俊寛
H19-003	遺物保管	埋蔵文化財出土遺物保管	京都市	中村 敦
H19-011	整理	中臣遺跡	京都市山科区勸修寺西金ヶ崎	西森正晃
H19-012	整理	寺戸大塚古墳	京都市西京区大枝南福西町	吉崎 伸
H19-013	整理	平安京西寺跡	京都市南区唐橋西寺町	能芝妙子
H19-014	整理	平安宮跡	京都市上京区日暮通丸太町上ル西入西院町	布川豊治
H19-015	整理	大原野	京都市西京区大原野域	加納敬二・津々池惣一
H19-016	整理	大原野	京都市西京区大原野域	加納敬二・津々池惣一
H19-017	測量	八幡市女郎花遺跡・西車塚古墳	八幡市大幡大芝	宮原健吾
H19-018	講師	講師派遣	(奈良大学)	辻 純一
H19-019	測量	旦棕遺跡	宇治市大久保町上ノ山	宮原健吾
H19-021	普及啓発	普及啓発	京都市内一円	長宗繁一
H19-024	保存処理	東京大学構内遺跡	(東京大学)	竜子正彦
H19-027	測量	平安京跡	京都市中京区室町通錦小路下ル菊水鉾町	宮原健吾
H19-029	遺物復元	遺物復元	大阪市城東区野江	村上 勉・出水みゆき
H19-036	測量	京都大学構内遺跡	(京都大学)	宮原健吾
H19-037	測量	京都大学構内遺跡	(京都大学)	宮原健吾
H19-041	整理	平安宮跡	京都市上京区竹屋町通千本東入主税町	西森正晃
H19-046	整理	植物園北遺跡	京都市左京区松ヶ崎芝本町	山本雅和
H19-047	写真撮影	長岡京跡	京都府長岡京市奥海印寺東条	村井伸也・幸明綾子
H19-048	発掘調査支援	基地内遺跡ほか	沖縄県宜野湾市ほか	辻 純一
H19-049	整理	法勝寺跡	京都市左京区岡崎南御所町	網 伸也
H19-051	測量	聖護院川原町遺跡	京都市左京区聖護院川原町	宮原健吾
H19-053	整理	妙満寺窯跡	京都市左京区岩倉幡枝町	上村和直
H19-057	確認	名勝龍安寺庭園	京都市右京区龍安寺御陵下町	柏田有香
H19-061	整理	平安京跡・本能寺城跡	京都市中京区小川通六角下る元本能寺町	山本雅和
H19-064	パネル製作	平安京跡	京都市上京区千本丸太町東入る田代ビル	中村 敦
H19-069	遺物復元作業		(京都大学)	村上 勉・出水みゆき
H19-071	整理	植物園北遺跡	京都北区上賀茂豊田町	柏田有香
H19-072	撮影	恵解山古墳	(長岡京市)	村井伸也・幸明綾子
H19-073	保存処理	特別史跡・特別名勝醍醐寺三寶院庭園	京都市伏見区醍醐東大路町	竜子正彦
H19-075	整理	平安宮跡	京都市中京区聚楽廻西町	西森正晃
H19-076	写真撮影	長岡京市遺物写真撮影	京都府長岡京市奥海印寺東条	村井伸也・幸明綾子
H19-080	測量	平安京跡	京都市下京区四条通西洞院東入郭巨山町	宮原健吾
H19-081	測量	吉田泉殿町遺跡	(京都大学)	宮原健吾
H19-082	撮影	長岡京跡	(長岡京市)	村井伸也・幸明綾子
H19-087	撮影	稲荷山古墳	(向日市)	村井伸也・幸明綾子
H19-088	展示	水垂遺跡、淀城跡、長岡京跡	伏見水垂収蔵庫ガイドンスルーム	中村 敦
H19-089	報告書作成	京都市内遺跡	京都市内一円 (国庫補助)	長宗繁一
H19-090	発掘調査支援	基地内遺跡ほか	沖縄県宜野湾市ほか	辻 純一
H19-092	写真撮影	絵巻物	(京都市生涯学習財団)	村井伸也・幸明綾子
H19-093	測量	平安京跡・東寺旧境内遺跡	京都市南区大宮通八条下る	宮原健吾
H19-094	遺物復元	遺物復元	大阪市城東区野江	村上 勉・出水みゆき

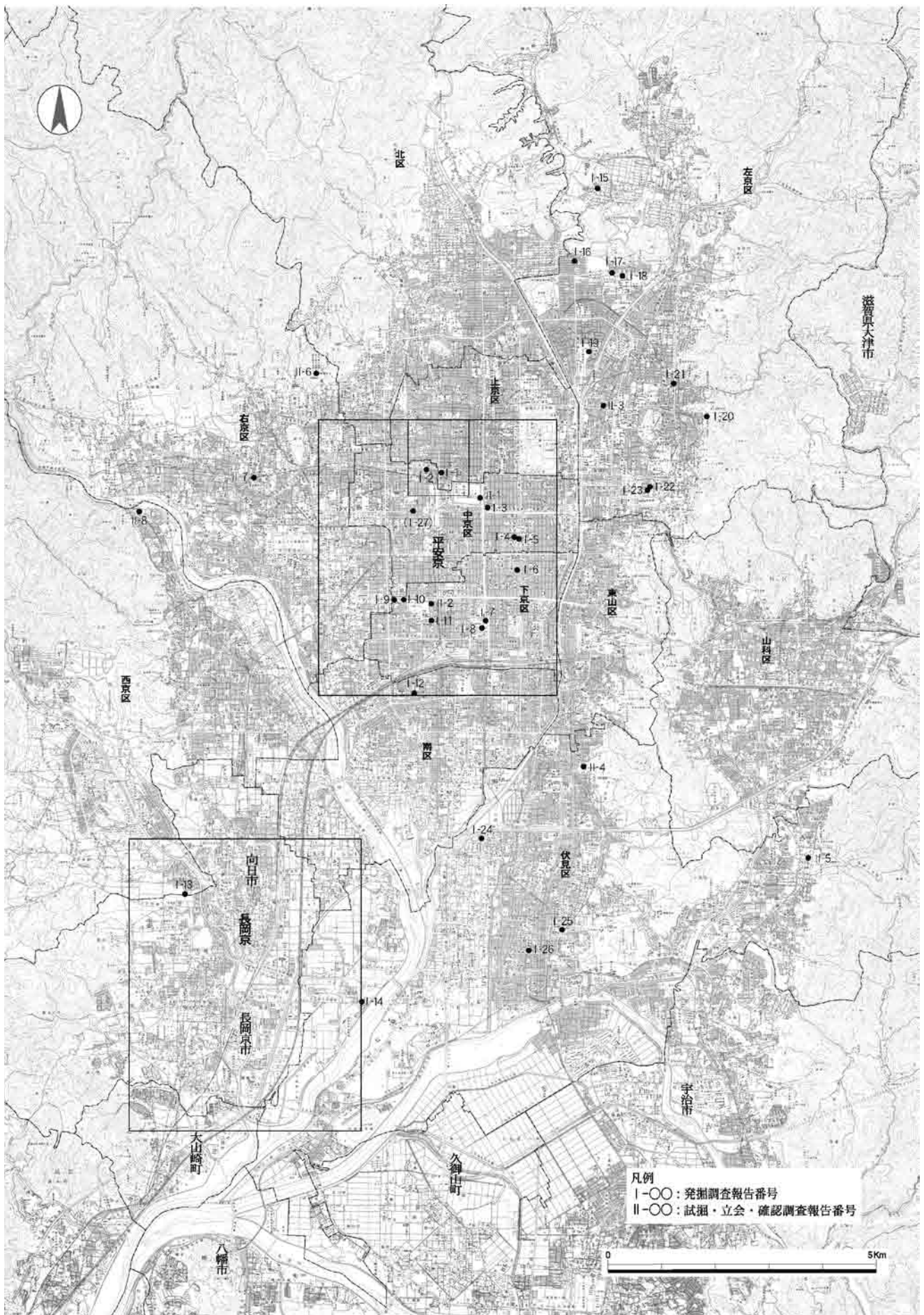


図1 調査位置図

1 平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 19 年度』京都市文化市民局 2008. 3.31

経過 今回の調査は、民家の新築工事に伴う発掘調査で、平成 19 年度の国庫補助事業である。調査地は、京都市上京区竹屋町通千本東入主税町 1155 番に位置し、古墳時代の集落跡である聚楽遺跡と平安宮朝堂院昌福堂跡に相当する。昌福堂は朝堂十二堂中、東第一堂であり、太政大臣・左大臣・右大臣の座とされる。朝堂院の復元図では、調査地は昌福堂の北西部にあたることから、関連する遺構の検出が予想された。

遺構 昌福堂基壇 壇上積基壇の一部である延石と内側の基壇盛土、裏込め土、地覆石掘形、地覆石抜き取り痕、延石外側の整地層、化粧土を検出した。延石は全て凝灰岩で、1 石の長さ約 100cm、幅 34～38cm、厚さ 11～21cm で 4 石分確認した。

基壇盛土 固く締まっており、地山の上に厚さ約 10cm を一単位として積み上げられている。

地覆石掘形 地覆石抜き取り痕は、凝灰岩の破片を多量に含んでいることで判断した。地覆石掘形と抜き取り痕の土はよく似ていたが、上層に含まれる凝灰岩の破片が大きく目立ったことから、抜き取った痕跡と考えた。

延石外側の土層は、地山を掘り込んで形成されている。この層は、遺物をほとんど含まないため、成立年代は不明であるが、延石を据えた後に埋めもどされていることを確認している。礫もほとんど含まず、土も締まっていることから、基壇構築に伴う整地層と考えられる。

遺物 大半は江戸時代の瓦溜から出土した平安時代の瓦である。土器類は少量である。また、延石を覆う埋土からは緑釉瓦の出土も目立つ。

小結 今回の調査では、初めて平安宮朝堂院昌福堂の遺構を確認できた。確認したのは壇上積基壇の最下部を構成する延石、裏込め土、地覆石掘形、地覆石抜き取り痕、基壇盛土、整地層、化粧土である。延石は全て凝灰岩である。延石は厚みが個々に違い、上面を揃えるため



図 2 調査位置図

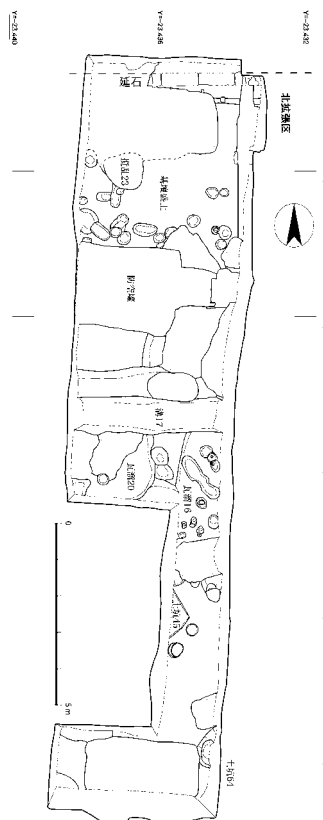


図 3 遺構平面図

に地山を掘り込んで据えるもの、延石の下に土を入れるもの、ほぼ地山に据え置くものがある。延石の厚みが違うことは、別の場所（長岡宮か）から転用しているものとする

2 平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008. 3.31

経過 今回の調査は、所在した建物が解体され更地になったことを機に、対象地南側に史跡平安宮豊楽殿跡が存在することから、遺跡の確認を目的として行った発掘調査である。調査地は、平安宮豊楽院清暑堂と豊楽殿北廊跡に相当する。1987年の豊楽殿跡の調査で、北廊は豊楽殿北面中央階段を壊して造られていることが明らかになっている。

遺構 調査の結果、清暑堂と北廊の遺構が遺存していることを確認した。清暑堂の遺構としては、基壇盛土、壇上積基壇南縁の凝灰岩抜き取り溝と南面西階段を確認した。北廊の遺構としては、基壇盛土、雨水受けと考える埴敷きを確認した。

遺物 古墳時代、平安時代、江戸時代の遺物であるが、平安時代の遺構は保存することとなり、掘削を限定したことから、出土した遺物の大半は江戸時代の土取穴から出土した平安時代の瓦である。

小結 清暑堂の基壇南縁を確認でき、豊楽殿北縁から約28m離れていることが明らかとなった。清暑堂が豊楽殿後堂、後房、小安殿と称されることは文献に記されている。この名称が示す通り、清暑堂は豊楽殿と対にな

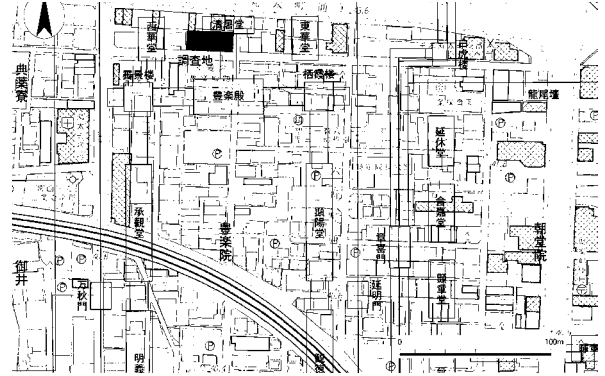


図4 調査位置図

り、天皇の控えの場としての役割を果たしている。

規模については、清暑堂基壇凝灰岩の抜き取り溝が確認できたことによって、南縁が定まった。また、西縁は調査区西端の地山の高さや瓦の堆積状況から、Y=23,725付近と想定できる。復元をすると、基壇東西幅は約34～35mであることがわかった。基壇南北幅は、1928年の調査で確認された凝灰岩の位置を階段延石あるいは北縁基壇延石と判断するかで、約10.5mあるいは約12mとなる。

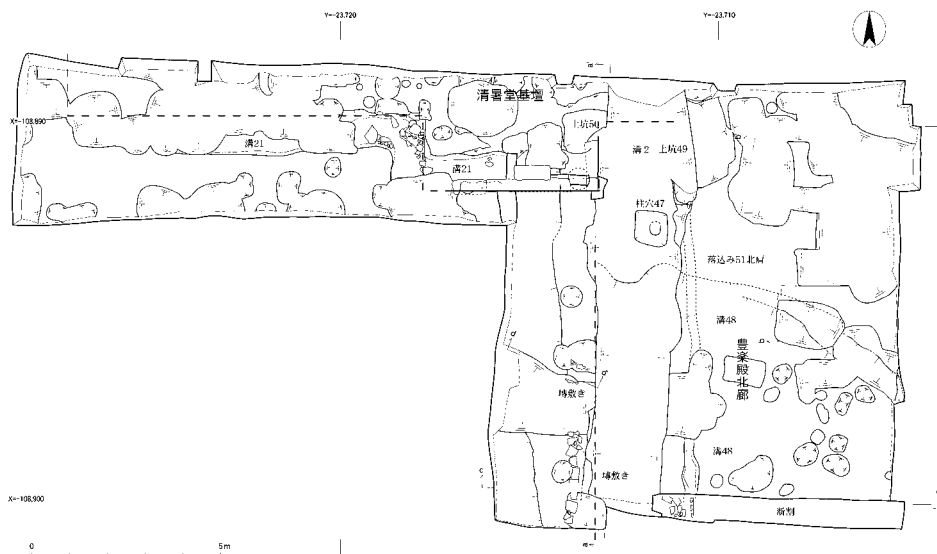


図5 遺構平面図

3 平安京左京三条二坊十町跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-17『平安京左京三条二坊十町（堀河院）跡』2008.3.31

経過 本調査は京都市立音楽高等学校移転整備事業に伴う発掘調査である。調査地である城巽中学校跡地は平安京左京三条二坊十町にあたる。平安時代、この十町と北側の九町は、円融天皇・白河天皇・堀河天皇の里内裏「堀河院」に該当する。十町における鎌倉・室町時代での利用は知られていないが、江戸時代には徳川家の有力家臣、土井家の藩邸として使用された。その後、明治5年に学校用地となり現在に至っている。

遺構 調査区は、大きくは3区を設定し、適宜拡張区を設けた。平安時代の遺構には、池、井戸、土坑、地業、礎石、景石、溝、柱穴、石敷があり、白河・鳥羽天皇が利用した堀河院の苑池を2箇所検出した。江戸時代では、土井家の屋敷跡を検出し、建物跡をはじめとして南限の溝・柵及び東限の門を検出した。

遺物 旧石器時代から明治時代にいたる各時代の遺物が出土した。出土遺物の内容は土器・陶磁器・瓦類・土製品・木製品・金属製品・骨角製品・ガラス製品・石製品・動植物遺体など多岐にわたるが、遺物の大半が土器類や瓦類である。木製品には、堀河院の時期の荘園名を記した木簡2点がある。

小結 11世紀後半から12世紀前半にかけて堀河院はもっとも頻繁に利用されたが、調査地では、池1810・1570をはじめとする多くの遺構・遺物が当該期に属しており、史料頻度と遺構密度の関係はうまく整合することがわかった。しかし、調査地においては、生活関連遺構、特に井戸の出土例が少なく、この点は調査地が苑池部分に該当したためと考えられる。

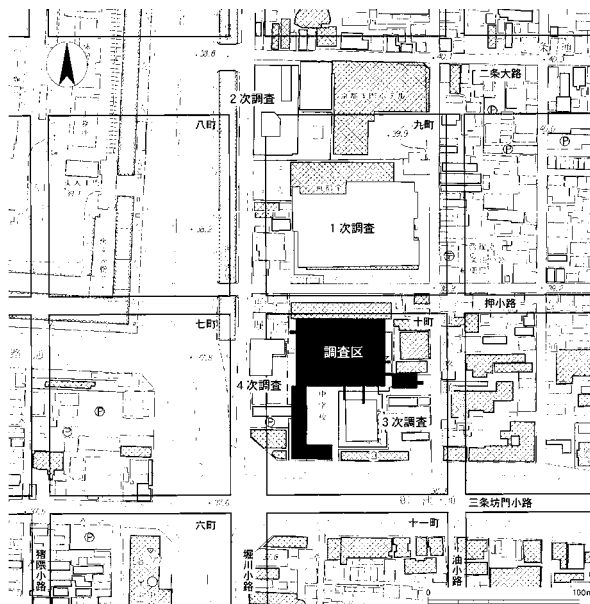


図6 調査位置図

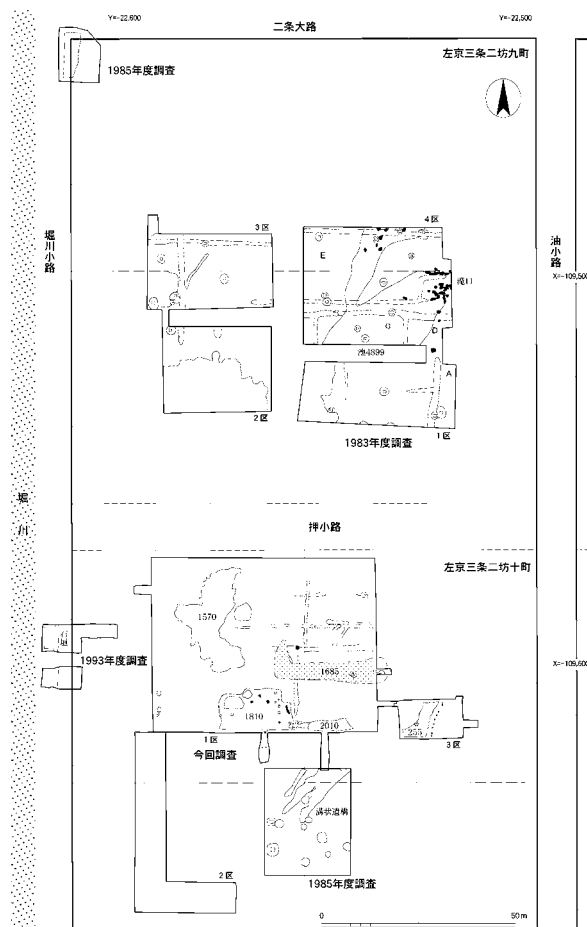


図7 調査区配置図

4 平安京左京四条二坊十五町・本能寺城跡 1

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008. 3.31

経過 建物建設に伴う調査である。調査地は十五町の中央部北西寄りに位置している。調査地西隣接地で行われた立会調査では、平安時代後期の井戸、鎌倉時代から室町時代の土坑・水溜遺構などを検出している。2007年、十五町東部で関西文化財調査会により行われた発掘調査では、本能寺に伴う南北・東西方向の堀が発見された。南北方向の堀の内側には石垣が積まれており、堀の埋土などからは「能」の異体字を刻んだ軒丸瓦をはじめとして遺物が大量に出土している。

遺構 最も古い遺構は、平安時代中期の土坑97である。室町時代前期から中期には検出遺構数、遺物出土量とも増加する。調査区西端の溝70は規模が大きいことから区画施設の可能性がある。室町時代後期は調査地に本能寺が造営された時期で、この時期の遺構は2つの段階に分けることができる。古い段階の遺構は土坑17・土坑46・土坑49・土坑98・溝28、新しい段階の遺構は土坑6・土坑26である。土坑46・土坑49・土坑98は約2.1m（7尺）の間隔で東西方向に並ぶ。

遺物 土器・瓦類が大部分を占め、他の遺物は少ない。全体では桃山時代から江戸時代の遺物が約3割、室町時代後期の遺物が約5割、室町時代前期から中期の遺物が約2割を占め、鎌倉時代以前の遺物は少ない。土坑26からは「能」の異体字である「能」の字を刻んだ軒丸瓦や火を受けて赤く変色した平瓦・丸瓦、焼けた壁土と考えられる焼土塊・焼土粒・炭が出土した。

小結 室町時代後期の土坑46・土坑49・土坑98は、上部が削平されるが、埋土に河原石を含む状況から礎石を据えた柱穴の根石部分と考えられる。遺構の時期はこの地で本能寺が再興された時期におさまるので、本能寺の建物の一部を検出したと判断した。

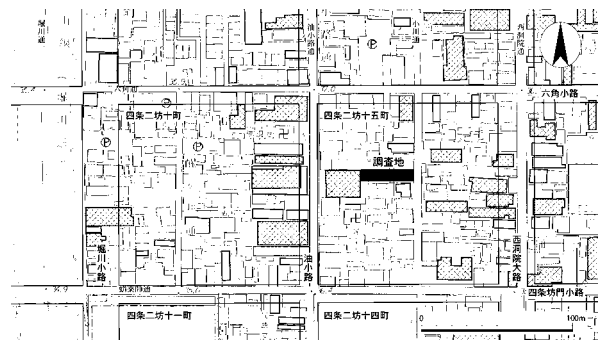


図8 調査位置図

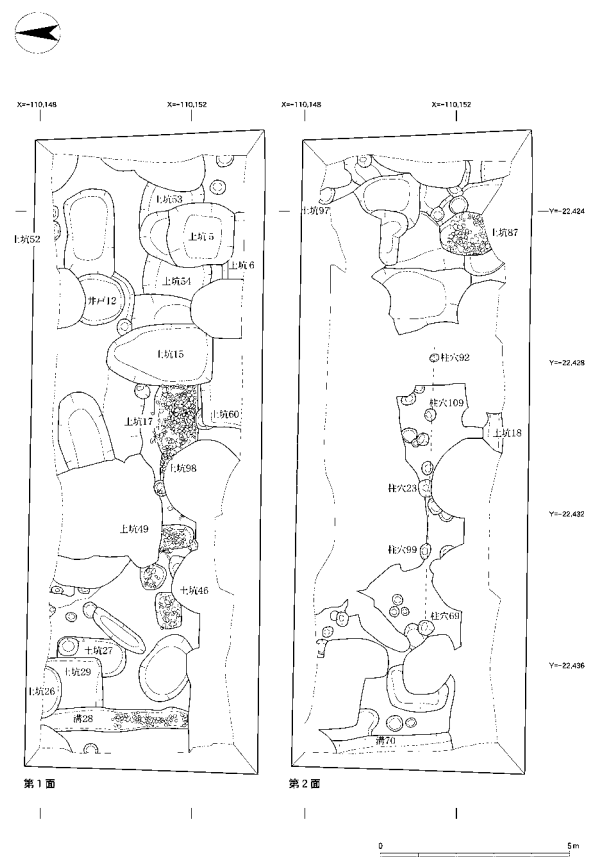


図9 遺構平面図

5 平安京左京四条二坊十五町・本能寺城跡 2

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-11 『平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡』 2008.1.31

経過 中京区池須町の南端部に所在する住宅建築予定地で実施した調査である。平安京の条坊では左京四条二坊十五町の東に接する西洞院大路の路面に該当する。本能寺文書などによれば、大宮・櫛笥間にあった本能寺が天文法華乱で焼亡した後、天文十四年（1545）に再興のため、この地を当時の所有者であった土倉の沢村氏から買い入れた記録が残る。今回の調査地の約60m北方で平成19年8月に関西文化財調査会により実施された調査では、本能寺に関わる構・石垣や西洞院川を埋め立てた整地層が発見されている。

遺構 調査地全体が旧西洞院川の流路上であったこともあり、室町時代前期以前の遺構は全く検出できなかった。江戸時代前期の土坑SK03、東西方向の濠SD04、小礎石、土坑SK09・SK10などを検出した。下部では室町時代後期の流路を検出した。この流路堆積は表土下約2mまで確認している。

遺物 遺物は主に西洞院川SD12の流路堆積・その上部の整地層・濠SD04から出土した16世紀代のものと、土坑SK03から出土した17世紀初頭のものがある。他に瓦・石製品・銅銭などがあるが、総量は少ない。

小結 今回の調査で南濠を検出した本能寺は、天正十年（1582）に明智光秀による本能寺の変によって焼失したものである。その後、同寺は当地に再建が試みられたが、豊臣秀吉の命により現在の位置に移転している。当地に所在したこの本能寺の位置に関しては、江戸時代中期に森幸安が作成した『中京師絵図』では南側の十四町を含めた南北2町を旧本能寺寺域として復元しているが、2002年に当研究所が実施した旧本能小学校跡地の発掘調査によって下京惣構の濠を検出した結果、寺域は四条坊門小路（現蛸薬師通）より北に位置することを確認している。今回検出した南限の濠の検出は、その調査成果とあわせ、本能寺文書にみられる「下京六角が四条



図10 調査位置図

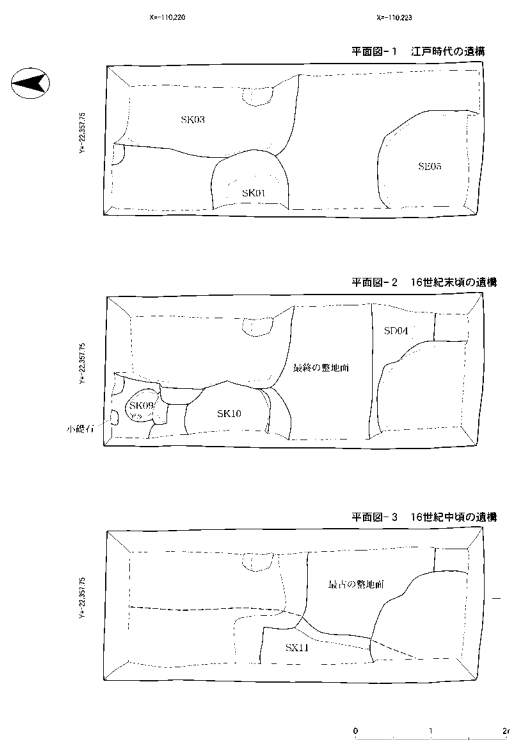


図11 遺構変遷図

坊門 油小路西洞院中間 方四丁町」という記載を裏付ける重要な成果といえよう。

6 平安京左京五条三坊十一町跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-7『平安京左京五条三坊十一町跡』2007.10.31

経過 事務所ビルの建設が計画され、試掘調査を実施したところ、平安時代後期から江戸時代にかけての遺構が複雑に切り合っている状況を確認した。調査地は平安京の条坊では左京五条三坊十一町の中央部北半にあたる。また、1町内を区分する「四行八門制」では、十一町内の「西二・三行北一・二門」の四戸主分に該当する。同町に関連する平安時代の文献資料は不明確であり、特定の邸宅や諸施設の存在は推定されていない。

遺構 第1面は江戸時代後期、第2面は桃山時代から江戸時代中期、第3面は室町時代、第4面は平安時代の遺構が主体をなす。第1面では、拳大から人頭大の河原石を円形に積んだ石組み遺構 (SK15)、南北方向の礎石列 (SA 1) を検出した。第2面では、土器埋納遺構 (SK55) を検出し、17世紀代の土師器皿大17枚、皿小15枚の完形品が重なった状態で出土した。第3面の南半は、室町時代後半の土取り土坑が、複雑に重なり合っている。同北半では、鎌倉時代から室町時代後半の遺物を含む土坑などが、わずかに認められる。第4面では、南北方向の溝跡1条を検出した。

遺物 江戸時代の遺物には、土器類・瓦類・金属製品・石製品などがある。室町時代の遺物には、土器類・金属製品がある。鎌倉時代の遺物は、土器類が土坑や後世の遺構から少量出土した。平安時代の遺物には、土器類・瓦類がある。弥生時代の遺物は、前期から中期に属する壺・甕・鉢の小片が少量出土した。

小結 平安時代には、平安時代中期末頃の溝が、西二行と三行を区画する推定ライン上に位置し、土地の区画に関する遺構と考えら

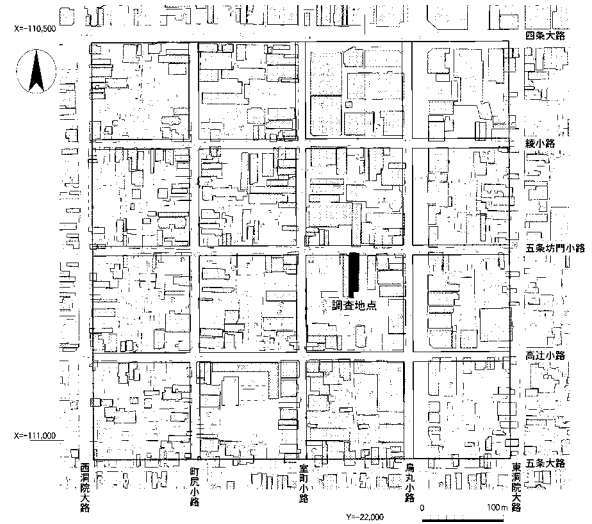


図12 調査位置図

れる。鎌倉時代から室町時代前半にかけての遺構は、ほとんど残っていない。室町時代後半では、現仏光寺通南端から南へ15m付近から内側で、土取り土坑が重なり合って認められ、建物の背後空間の土地利用とみられる。

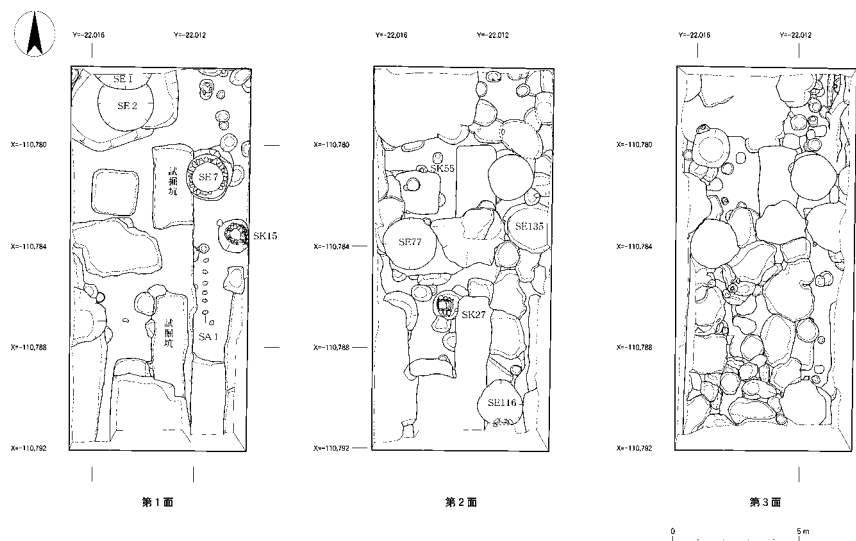


図13 遺構変遷図

7 史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊十町跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-2『史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊十町跡』2007.7.31

経過 調査は、本願寺防災センター新築工事に伴い実施したものである。当地は平安京左京七条二坊十町跡に該当する。平安時代前期に造営された官営市場である東市が、その後さらに発展して造営された外町の東及び北に隣接する。

遺構 平安時代後期の土坑・柱穴、鎌倉時代の土坑・井戸、室町時代の柱穴、江戸時代の整地層・柱穴・井戸である。

遺物 弥生時代、平安～室町時代、江戸時代の遺物が出土した。土器・瓦類以外に泥面子・伏見人形などの土製品、石鍋・砥石などの石製品、釘、銭貨などがある。

小結 主な遺構としては、平安時代後期・末期の小穴・土坑、鎌倉時代初頭の井戸、鎌倉時代から室町時代の柱穴群・小穴・土坑、江戸時代の整地層・井戸・建物・柱穴などがあげられる。

調査地は平安京の条坊では、堀川小路に面した宅地内に相当するが、平安時代前期・中期の遺構は皆無であった。遺構の出現は平安時代後期後半から始まり、室町時

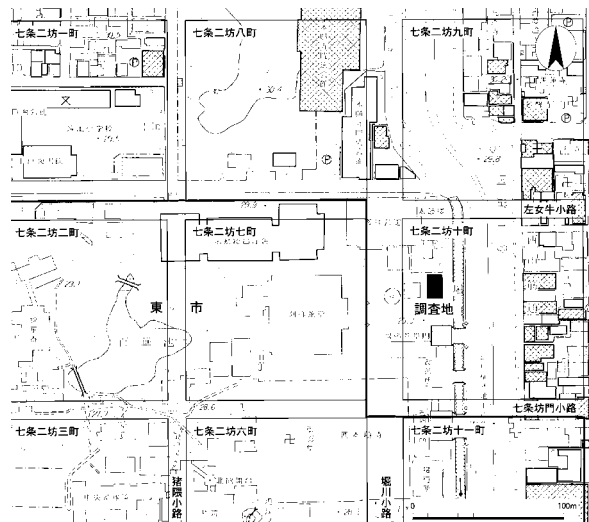


図 14 調査位置図

代前半にかけて盛んになる。本願寺関連の遺構は、掘立柱建物・整地層・井戸があげられる。建物は東西2間、南北2間分を検出したのみで、全容は明らかではない。

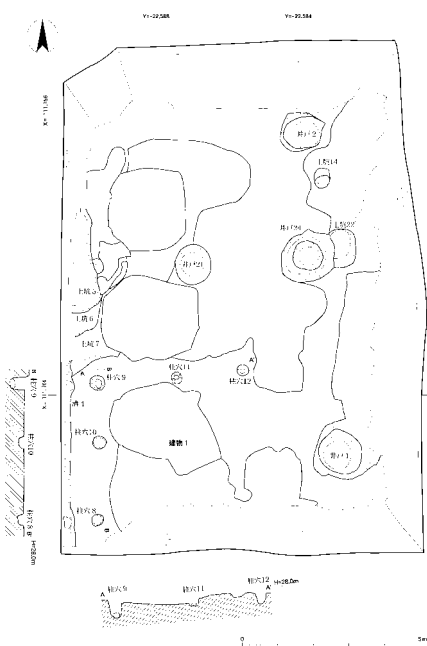


図 15 江戸時代の遺構平面図

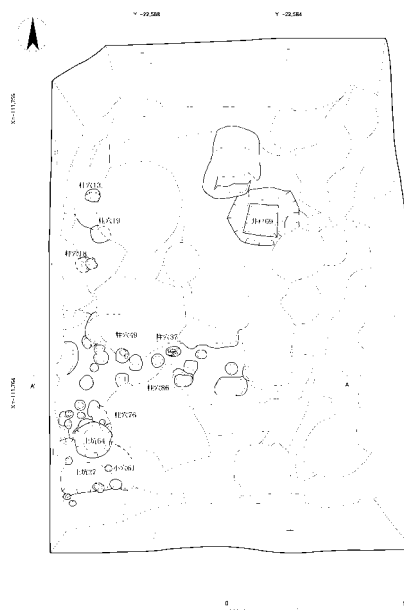


図 16 室町時代以前の遺構実測図

8 史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊六町（東市）跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-18 『史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊六町（東市）跡』 2008.3.31

経過 本調査は、親鸞上人七百五十回大遠忌の記念事業として実施される本願寺の参拝部棟の建替えに伴う発掘調査である。調査地は、史跡本願寺境内の御影堂の南側、平安京左京七条二坊六町（東市）にあっており、関連の遺構の検出が期待された。発掘調査に先立って、建設予定地の現代層を重機によって掘削・除去し、遺構の残存状況を確認する試掘調査を実施した。その結果、遺構が良好な状態で残存していることが判明したので発掘調査を実施することになった。

遺構 1区では、江戸時代の遺構面を東半で高台状に検出した。また、攪乱の底部近くで、所々島状に中世の面が残存していた。検出した遺構は、補足調査区で平安時代末期から鎌倉時代の溝、土坑、井戸、江戸時代元和の火災時の焼土を含む処理土坑などを検出した。寛永十三年（1636）に御影堂が再建された整地面の上で建物・井戸・土坑・溝などを検出した。大半の遺構は保存を前提としているため、検出したままの状況で掘下げは行っていない。2・3区は、江戸時代の遺構面の有無と攪乱の範囲を確認するために設置した試掘トレンチである。2区では中世の面、3区では江戸時代の面を検出し、調査後、両区とも遺構面に真砂を敷き詰めて保護し、埋め戻した。

遺物 平安時代の遺物には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入磁器、鬼瓦などがあるが、すべて二次堆積である。江戸時代の土器類のうち約半数は土坑22から出土したもので、うち約9割を肥前磁器の染付の椀・皿が占める。瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、獅子口、鳥龕、熨斗瓦、平瓦、丸瓦があり、刻印・ヘラ描きを有する瓦も出土している。

小結 当地は、本願寺の創建にあたって造成がなされ、表面を厚さ約5cmの黄灰色粘質土で化粧された可能性がある。その創建時の造成土を覆って元和三年の火災の時

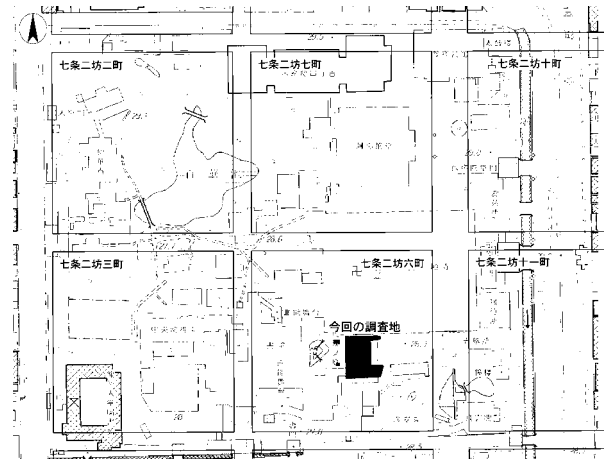


図17 調査位置図

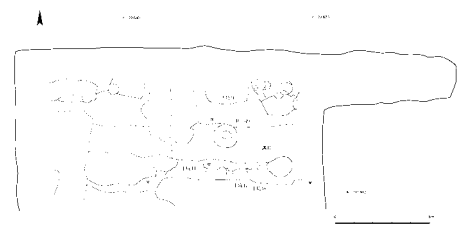


図18 平安時代遺構平面図

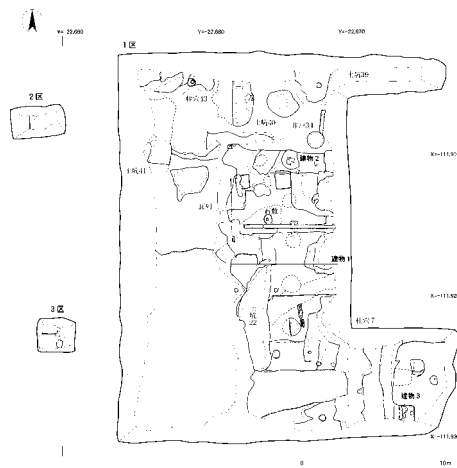


図19 桃山～江戸時代遺構平面図

に生じたとみられる焼土が含まれている整地層が検出された。これは、寛永十三年の御影堂再建に際して整地されたものと考えられる。この整地面の上で、建物の礎石の据付け穴とみられる土坑を検出した。

9 平安京右京六条二坊六・十一町跡

報告書名： 2007-3 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告『平安京右京六条二坊六・十一町跡』2007.8.20

経過 国土交通省が実施する五条大宮通拡幅事業に伴うものである。調査地は、平安京右京六条二坊六町の西北部と西堀川小路、そして同坊十一町の北部東端部が想定される。また、敷地の北側 20 m に六条坊門小路が推定される。四行八門制では六町の東三行北二・三門、東四行北二・三門と、十一町の東一行北二・三門にあたる。

遺構 弥生時代または古墳時代から江戸時代以降のものがある。室町時代から江戸時代以降の遺構数は少なく、さらに古墳時代以前の遺構はごくわずかである。平安時代前期に属する遺構が 8 割以上を占めた。1 区で検出した遺構は、室町時代以降の溝・杭跡・土坑など、平安時代前期の街路に関連する遺構と宅地内施設に関連する遺構、古墳時代の落込みなどである。2 区で検出した遺構は、江戸時代後半の耕作溝、平安時代前期の建物・柱列・溝・井戸・土壙など、弥生時代から古墳時代にかけての溝・土坑などである。

遺物 縄文時代から近代にわたる各時代の遺物が出土した。その内訳は土器類、瓦類、金属製品、銭貨、石製品、木製品、自然遺物などである。土器類の出土が最も多く、その他のものは少ない。平安時代の遺物はほとんどが前期に属する。内訳は、土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、銭貨、木製品、自然遺物などの多種類にわたる。

小結 平安時代前期の 2 期にわたる建物遺構を中心に、井戸・土坑など多くの宅地内関連遺構や西堀川小路関連遺構を検出し、当地域の変遷を知ることができた。西堀川については、東築地・東側溝・西堀川東肩などをほぼ推定位置で検出した。川底東部には護岸の杭列を検出し、杭の頭を東に傾けて打ち込む様子などは他の調査例にもみられ、川の補修に関して一貫した工法がとられていたものと考えられる。

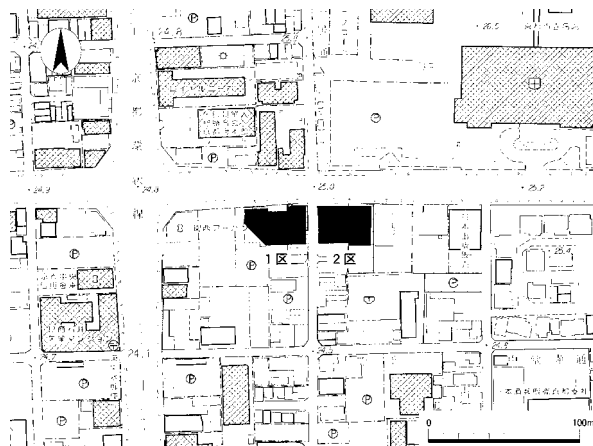


図 23 調査位置図

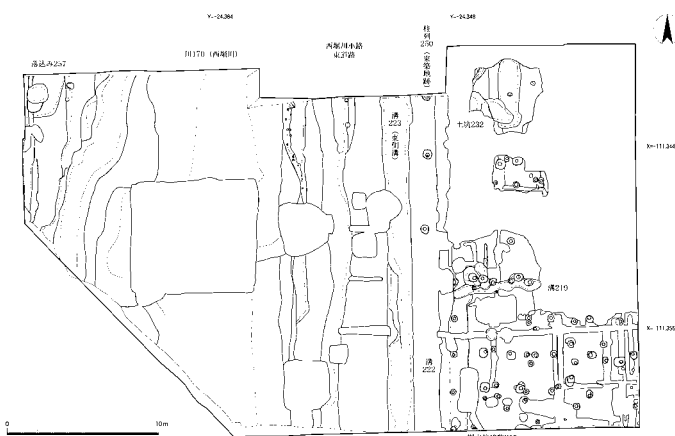


図 24 1区遺構平面図

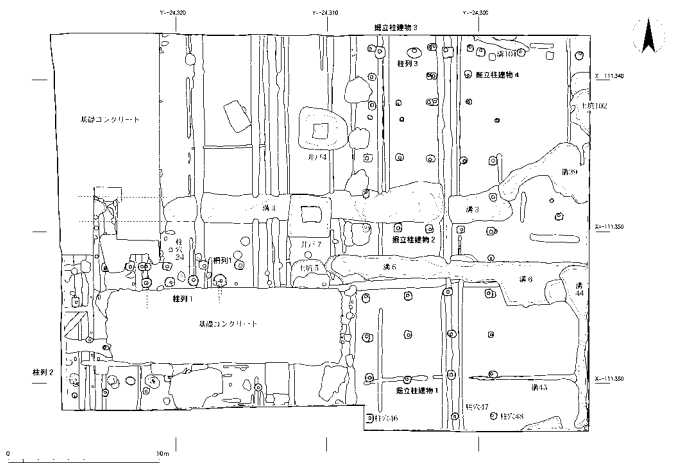


図 25 2区遺構平面図

10 平安京右京六条二坊三・六町跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-14『平安京右京六条二坊三・六町跡』2008.3.19

経過 五条大宮通拡幅事業に伴う調査である。調査地は、平安京右京六条二坊三町及び六町にあたる。平成18年度から実施している第1次・第2次調査に引き続く第3次調査である。これまで周辺では、多くの調査が行われ平安時代前期を中心とした多くの遺構・遺物が検出されている。

遺構 主な遺構には、1区では、平安時代前期の掘立柱建物・通路（小径）・土坑・溝などがある。また、古墳時代以前とみられる土坑群や溝なども検出した。2区では、平安時代前期の掘立柱建物・通路（小径）・土坑・溝・整地土層などがある。また、古墳時代とみられる自然流路も検出した。

遺物 弥生時代の土器は、1区で壺が出土している。古墳時代の土器類は、1区の土坑や2区の流路などから土師器・須恵器が出土した。平安時代の遺物は多くが前期のもので、土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器などの土器・陶磁器類や瓦類などのほか、木製品・銭貨など多岐にわたる。平安時代末～鎌倉時代初頭の遺物は、土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器など、少量であるが主に2区の整地層から出土している。

小結 三町宅地内では、北東部に古墳時代後期の自然流路が存在し、その上部は落込みとして湿地状の堆積をしていた。9世紀中頃になって整地し、宅地として整備されたことがわかった。そして、9世紀中頃から後半頃の間には大まかに3時期の建物配置があることがわかった。六町宅地内では、9世紀中頃から後半頃の間には2時期の変遷がある。先行する掘立柱建物の後に北二門と北三門の境に2条の並行する溝を側溝とする通路が造られ、土地を分割していくことがわかった。

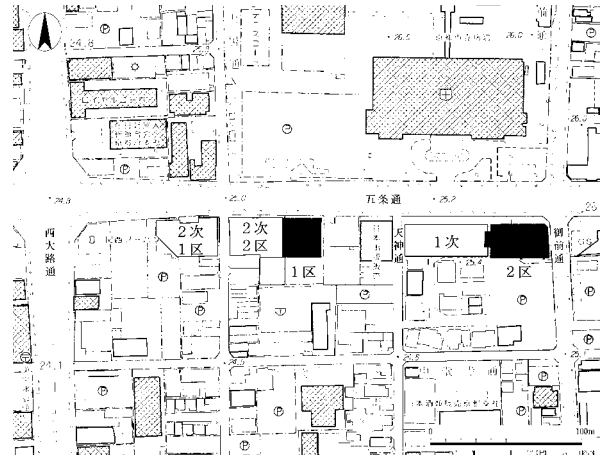


図20 調査位置図

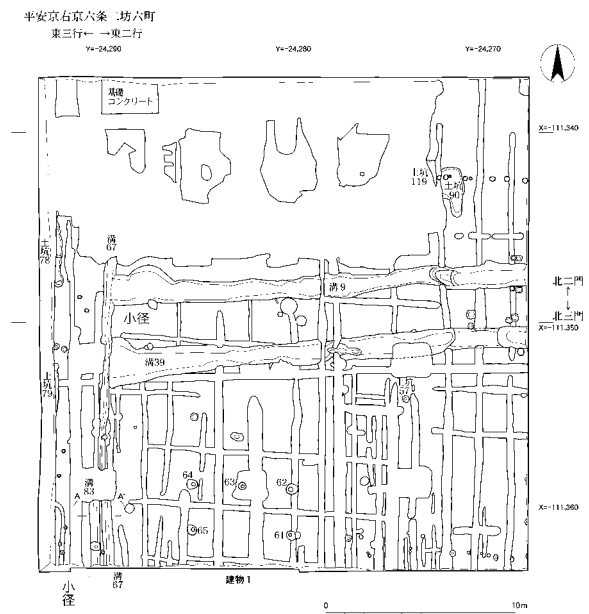


図21 1区遺構平面図

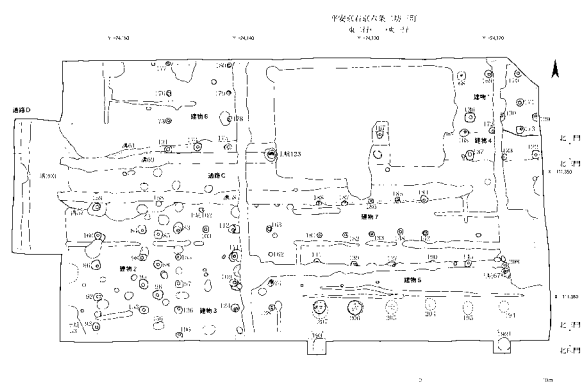


図22 2区遺構平面図

11 平安京右京七条一坊二町跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-6『平安京右京七条一坊二町跡』2007.10.31

経過 調査地は京都市中央卸売市場内にあり、現況は駐車場であるが、それ以前に大型の建物が存在していたことが明らかであったため、遺構の残存状況を確認する目的で、まず確認調査を実施した。その結果、遺構の残存する北区と南区を設定し発掘調査を実施した。平安京条坊では、敷地東半は右京七条一坊二町、敷地西半は西坊城小路となる。敷地のすぐ北には右京七条一坊二町の北側の道路である左女牛小路が想定された。

遺構 両区とも遺構面は現代の攪乱によって著しい破壊を受けていて、遺構の残存状況は悪い。平安時代の遺構は溝1と溝2のみである。両溝は一連の遺構であり、西坊城小路東側溝と考えるものである。柱穴6は平安時代に遡る可能性がある遺構であるが、時期は不明である。柱穴7は中世以降の遺構と考えられるが、これも時期不明である。土坑4-1、土坑4-2、土坑5、土坑8、土坑9は、いずれも安土桃山時代から江戸時代にかけての遺構であり、埋土の堆積状況などから土取穴と考えるものである。

遺物 土取穴などから9世紀から10世紀にかけての土師器、須恵器などの土器類が多く出土した。11世紀から12世紀にかけての土器類は、溝1と溝2から残存状態の良いものが数点出土している。13世紀から16世紀にかけての土器類は少量のみ出土している。17世紀から19世紀にかけての土器類も少量が出土している。瓦類は平安時代（9～12世紀）の範囲に収まると考えられる小片が出土しているが、軒瓦はない。石製品は、滑石製石釜を再加工した温石の完形品が出土している。

小結 西坊城小路東側溝（溝1・溝2）を検出することができた。溝内からの出土遺物の最も新しい一群は平安時代（11世紀から12世紀）にかけてのものであった。

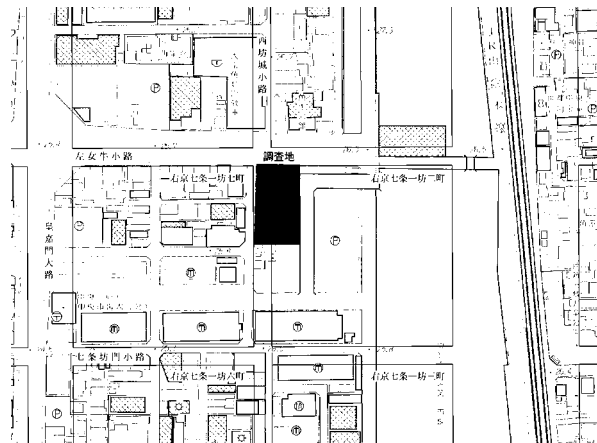


図 26 調査位置図

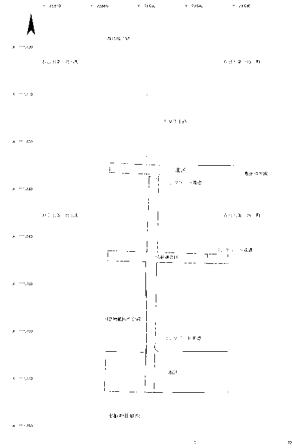


図 27 調査区配置図

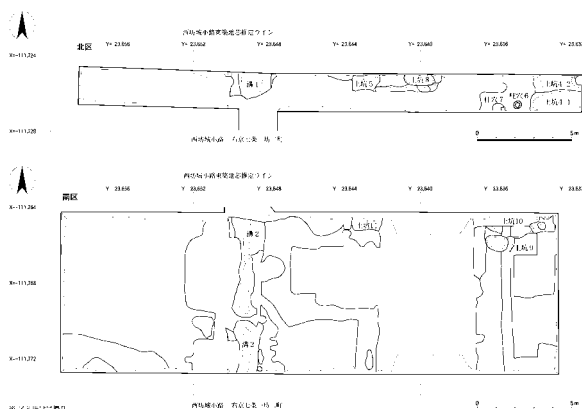


図 28 A 1・2区遺構平面図（平安時代）

12 平安京跡・史跡西寺跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-4『平安京跡・史跡西寺跡』2007.9.28

経過 児童館の新築工事に伴うものである。市立唐橋小学校の敷地西端で、史跡西寺跡の中門と金堂を結ぶ西回廊推定地に該当する。そのため、西寺に関連する遺構を保存する必要があることから、児童館の建築場所や設計資料を得ることを目的とし、西回廊の正確な位置と遺構の遺存状況を確認した。

遺構 1区で、南北に並ぶ柱穴を4基検出した。並びはほぼ正方位を向き、柱間は1.9mの等間、柱掘形は一边65～70cmの隅丸方形である。遺構保存のため、柱穴3のみ半裁して、埋土の状況を確認した。柱穴3の深さは約22cmある。1区の北半では、瓦溜り6・7を検出した。1区西端と、2・3区では西寺造営に伴うと考えられる整地層が認められた。平安時代前期の瓦と土器片を含む。整地の時期は明確ではないが、整地層の確認できる範囲が西回廊の推定位置に沿って、それより西に拡がることから、回廊の築造との関連が考えられる。

遺物 瓦は、平安時代の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。これらの瓦の中には二次的に火を受けたものが認められる。瓦溜り7からはややまとまった量の瓦が出土した。

小結 西回廊も東回廊と同様、礎石建ちの複廊であったはずであり、今回検出した遺構が掘立柱の柱穴であることから、どの段階で成立したものが問題となる。

柱穴の形状が隅丸方形、版築状の埋土、整然とした並び、これらは平安時代としても比較的古い時期に特徴付けられるものであり、西寺が衰退した鎌倉時代以降のものとは捉え難い。こうしたことから、南北3間分は回廊が完成するまでの期

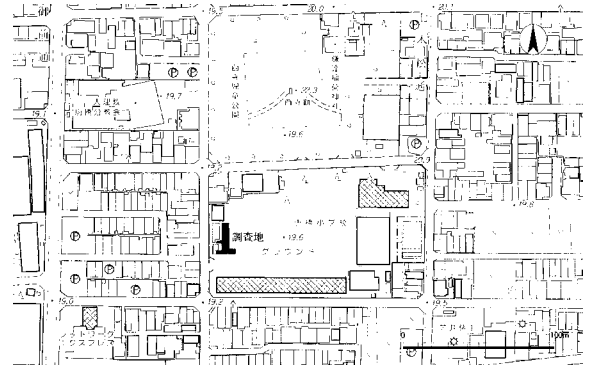


図29 調査位置図

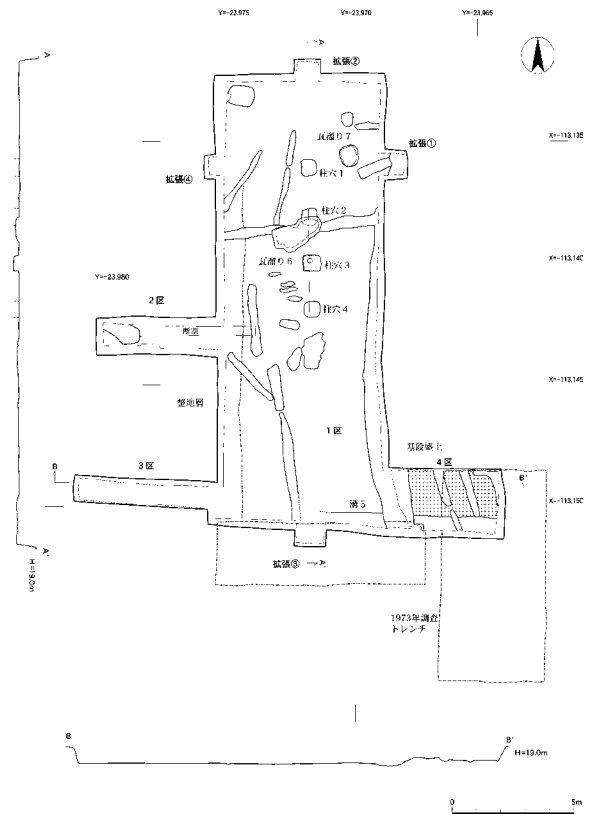


図31 遺構平面図

間に、何らかの区画が必要とされたために、回廊を意識して構築された施設である可能性を考えておきたい。

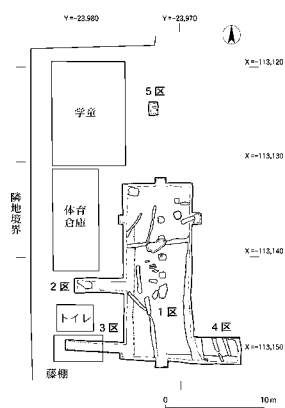


図30 調査区配置図

13 長岡京跡右京二条三坊一町・八町跡・上里遺跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-12『長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡』2008.3.14

経過 京都市建設局街路部街路建設課による、I・II・3 伏見向日町線道路建設に伴う調査である。長岡京及び上里遺跡の範囲内にあたる。調査地は、長岡京条坊復元推定によると右京二条三坊一・八町、西三坊坊間東小路にあたる。また、縄文時代から中世に至る遺跡である上里遺跡にも含まれる。

遺構 第1面では、長岡京期の一条大路や西三坊坊間東小路に関する遺構と、三坊八町では掘立柱建物などを検出した。また、やや先行する造営期の遺構として三坊一町で整地に関する遺構や八町では排水に関すると思われる遺構を検出した。さらに同一面で奈良時代以前と考えられる溝などを検出した。第2面・第3面では、弥生時代前期の竪穴住居、土器棺墓、溝、土坑、ピット、炉などを検出した。第4面・第5面では、縄文時代晩期の竪穴住居、炉、土器棺墓、土坑、大溝、ピットなどを検出した。

遺物 土器類・石器類のほか、木製品・玉類・皮革製品などがあり、主に長岡京期、弥生時代、縄文時代のものである。長岡京期の遺物は大半が土器類であり、少量の瓦類・木製品・土製品・皮革製品などがある。弥生時代の遺物は、畿内第I様式の中段階から新段階のもので、土器類・石器類がある。縄文時代の遺物は晩期中葉（滋賀里Ⅲa～Ⅲb式）の遺物群で、土器には浅鉢・深鉢があり、石器類は石鏃や石刀のほか石皿・敲石など器種が豊富であり、剥片や未成品と考えられる破片もある。

小結 長岡京右京二条三坊八町・一町の状況を明らかにし、一条大路の南側溝及び西三坊坊間東小路の東西両側溝を推定通り検出した。また、上里遺跡に関しては、弥生時代前期、縄文時代晩期の遺構・遺物を多く検出した。特に、これまで近畿地方以西では部分的にしか知られていなかった縄文時代晩期の集落をまとまった状態で良好に検出できた。

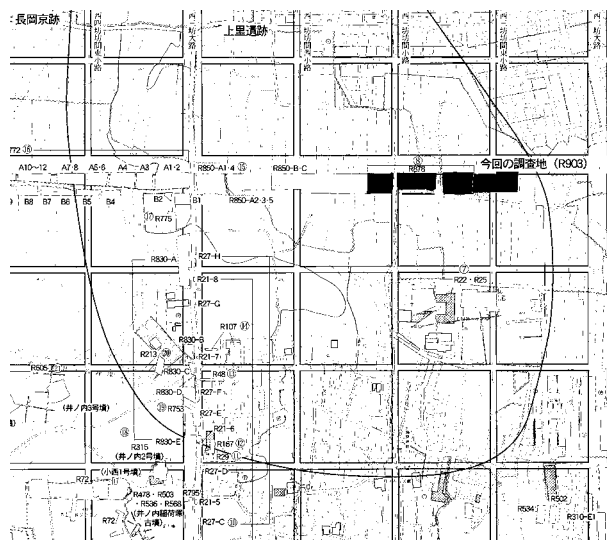


図 32 調査位置図



図 33 長岡京期遺構平面図

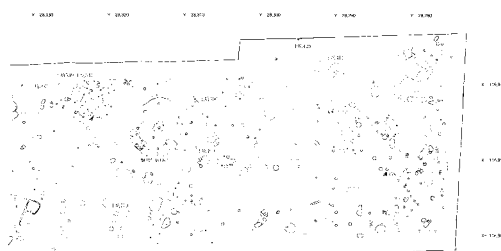


図 34 弥生時代遺構平面図

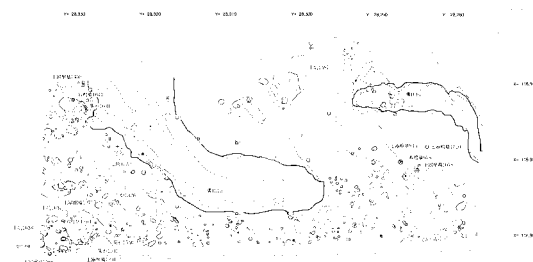


図 35 縄文時代遺構平面図

14 羽束師志水町遺跡・長岡京跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-13『羽束師志水町遺跡・長岡京跡』2008.3.14

経過 羽束師橋関連道路建設に伴う発掘調査である。調査地は古代末期から中世にかけての集落遺跡である羽束師志水町遺跡、また、長岡京左京五条四坊十六町の東京極の推定地に隣接している。

遺構 検出した遺構はすべて江戸時代後期から明治時代の遺構である。断面観察によって確認した水田耕作土も、ほとんど遺物を含まず、時期を決定するのは難しいが、中世から近世にかけて営まれたものと考えられる。

遺物 大半が江戸時代後期から明治時代の遺物で、土器類・瓦類・木製品・金属製品・石製品などが混じる。平安時代の遺物は後世の遺構から出土しており、須恵器の甕、灰釉陶器の壺などがある。室町時代の遺物も後世の遺構から出土しており、瓦器の椀がある。江戸時代後期から明治時代の遺物は溝・土坑・遺構検出中に出土しており、土師器の皿、土師質土器の炮烙・胞衣壺、軟質施釉陶器の皿、京・信楽系施釉陶器の椀・壺・甕、堺・明石系焼締陶器の播鉢、肥前磁器染付の椀・皿・壺、瀬戸・美濃の磁器染付、九谷の磁器赤絵、木製品の下駄・曲物・加工木・板材・杭、金属製品の煙管、石製品の砥石・硯、瓦類の棧瓦・丸瓦・鬼瓦などがある。

小結 調査地は桂川右岸の後背湿地に立地し、中世に至るまで湿地状堆積が継続していたと考えられる。したがって、当地は長岡京左京五条四坊十六町の東京極の隣接地であるが、長岡京期においても湿地であり、長岡京の造営は及ばなかったと考えられる。中世になって、水が退いて陸化した後、水田として利用されるようになったものとみられる。

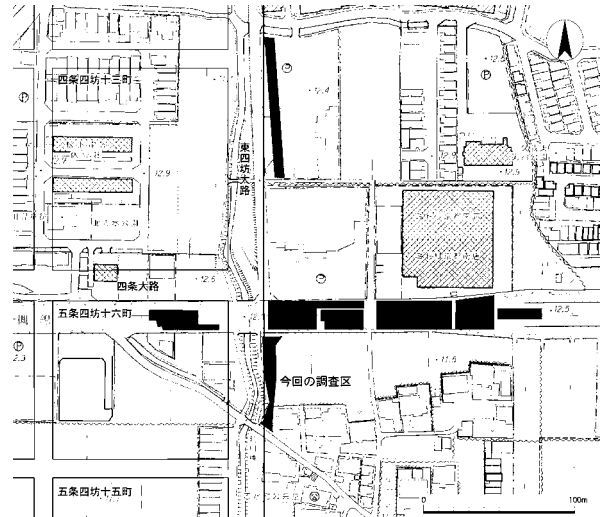


図 36 調査位置図

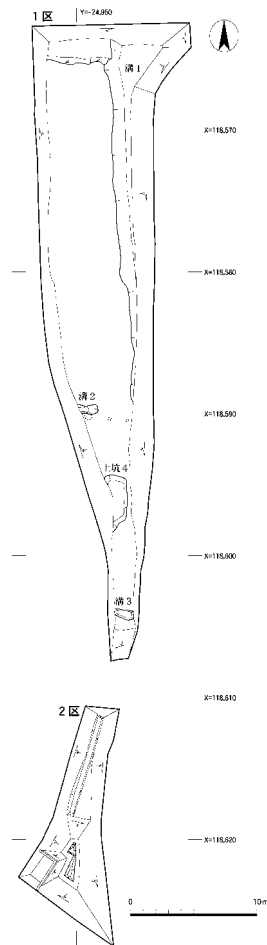


図 37 遺構平面図

15 妙満寺瓦窯

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 19 年度』京都市文化市民局 2008. 3.31

経過 住宅建設に伴い、当該地が妙満寺窯跡の範囲に含まれるため試掘調査を実施した。その結果、地表下約 1.5 m で炭層・遺物包含層を検出、平安時代の瓦・土器が出土するため、発掘調査を実施することとなった。

遺構 攪乱・削平がひどく、江戸時代以降の遺構を検出したが、それ以前の遺構は検出できなかった。遺構面の検出高は西端の方が東端より 0.4 m 高く、西側から東に若干傾斜する地形を呈する。標高は、調査区中央で 46.5 m である。調査区南東部で落込 1 を検出した。西肩部は攪乱溝に切られる。西側は直に落込み、底部は平坦で深さは約 0.4 m である。埋土は 3 層に分かれ、遺物は 2 層に多く、瓦・土師器・須恵器・施釉陶器・素地・窯壁などが出土した。土師器は江戸時代に属する。落込 1 の底部で落込 2 を検出した。西側は傾斜し、底部は平坦で深さは約 0.4 m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で黄色砂泥ブロックを含む。埋土中の遺物は少なく、瓦・土師器・須恵器・緑釉陶器素地などが出土した。土師器は江戸時代に属する。

遺物 種類には瓦類・土器類などがあり、大半が土器類である。その他、窯壁も若干出土した。時期別には、飛鳥時代から江戸時代で、飛鳥時代のものが最も多く、次いで平安時代前期のものが占め、他の時代に属する遺物は微量である。窯壁は落込 1・2 などから出土した。スサ入り粘土が焼き締まり、表面には灰が掛かり、光沢を持った面も見られるが、時期は不明である。

小結 調査では、飛鳥時代・平安時代の窯関係の遺構検出を期待したが、後世の削平などにより、当該期の遺構は全く検出できなかった。しかしながら小面積で削平が大きかったにもかかわらず、多くの出土資料が得られた。そして、窯本体は検出できなかったものの、周辺出土資料との比較検討によって、幡枝地域内の瓦窯・須恵器・陶器窯の変遷を明らかにする手がかりを得ることが

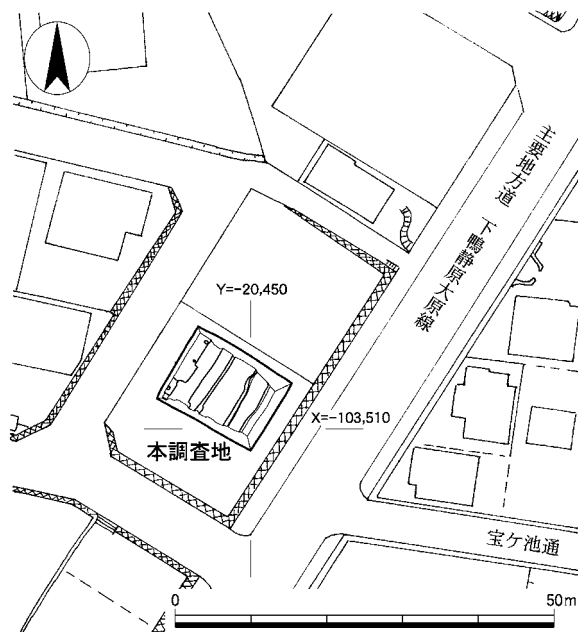


図 38 調査位置図

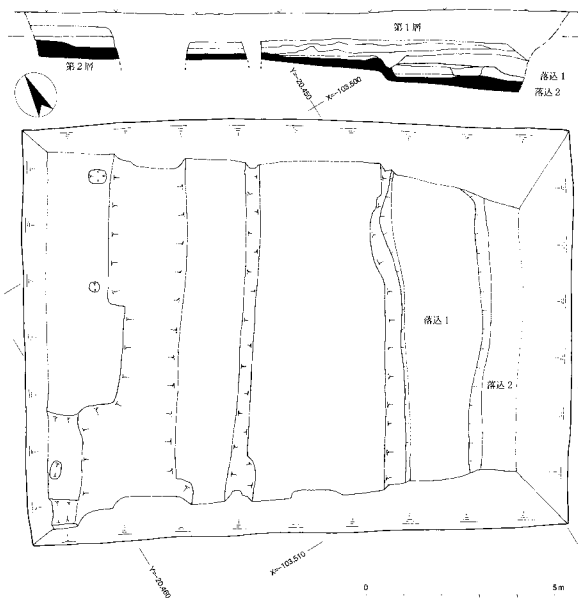


図 39 遺構実測図

できた。

16 植物園北遺跡1

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008. 3.31

経過 小規模共同住宅建設に伴うものである。試掘調査の結果、平安時代の遺構が良好に残存していることが判明したため、発掘調査を実施した。調査地は、植物園北遺跡の中央北側に位置する。

遺構 奈良時代の遺構としては土坑と溝がある。平安時代の遺構として、建物3棟をはじめとして、柱列・溝・土坑・礎敷がある。建物1・2の方位は、北に対して約15度西に振れる。建物3の方位は、北に対して約5度西に振れる。規模としては、建物2が最も大きく、桁行3間、梁間1間以上の南北棟建物で、北には底が取り付く。建物1とほぼ柱筋を揃え、柱間は桁行が2.3mの等間、梁間が北柱筋では2.1m、南柱筋では2.6mある。底の出は2.65mである。

遺物 時期別では平安時代前期・中期のものが9割を占め、縄文時代、古墳時代、奈良時代、近代の遺物が各少量ある。種別では、大半を占める土器の他に、瓦、金属製品、石器が出土している。土坑30出土遺物は、9世紀半ばから10世紀末頃までのものが混在する。土師器、須恵器に次いで白色土器が高い割合を占める。また、杯・碗・皿の供膳形態に限れば、白色土器の破片数が最も多い。また、須恵器の杯・碗・皿のうちには、緑釉陶器と共通する器形を示すものがある。この土坑からは瓦類も多く出土している。

小結 奈良時代の土坑・溝、平安時代前期から中期の建物跡とそれに付随する柵と考えられる柱列を検出した。平安時代の建物群については、建物1と2は、柱列が通ることや柱穴の規模などの類似性から同時併存した建物と考えられる。また、柱列1は、建物1・2とほぼ平行することから、建物1・2を区画する柵であったと推測される。これらの建物の成立時期は、柱穴掘形の出土遺物から9世紀の半ば頃、廃絶時期については、建物1の柱抜き取り穴出土の遺物の時期から9世紀末頃と推

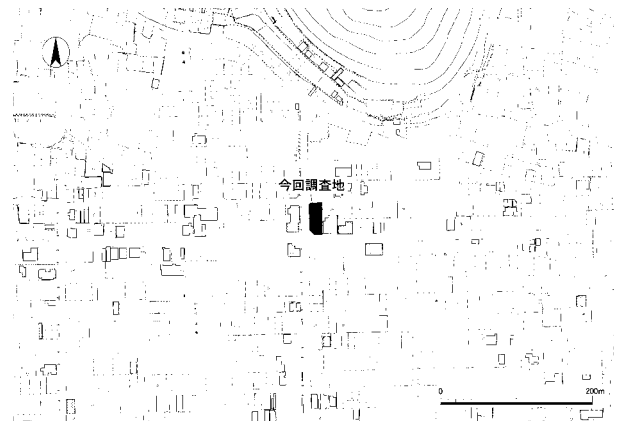


図40 調査位置図

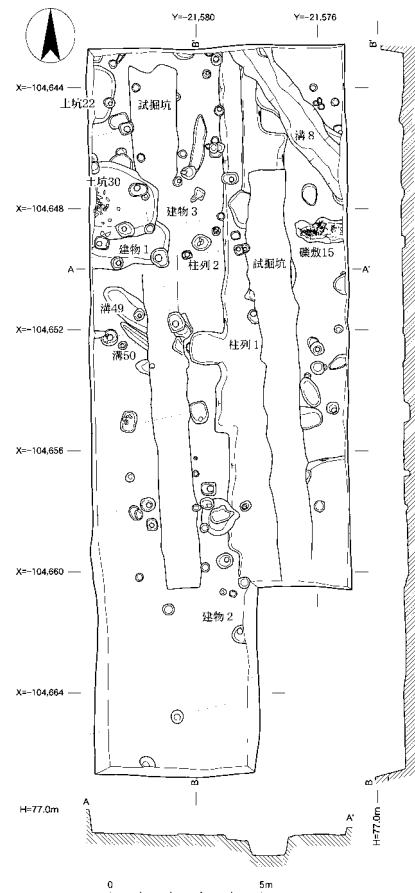


図41 遺構平面図

測される。これらの遺構の性格は、今のところ不明であるが、調査地の北西約1kmには賀茂別雷神社が位置し、調査地の西一帯には明神川に沿って社家町が形成されるという立地にあることも考慮に入れ、今後明らかにしていく必要がある。周辺調査での資料の増加が望まれる。

17 植物園北遺跡 2

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-1『植物園北遺跡』2007.6.29

経過 京都市ふれあいセンター（仮称）の建設に伴う発掘調査である。敷地一帯は植物園北遺跡範囲の南東地区に含まれ、過去の周辺調査でも竪穴住居をはじめとした遺構・遺物が検出されるなどの重要な調査成果が得られている。

遺構 調査で検出した遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居 9 棟、土坑 7 基、ピット群、飛鳥時代の溝 1 条、平安時代の遺物を含む遺物包含層、中世から近現代に至る耕作土層がある。

遺物 縄文時代前期の石匙、弥生時代後期から古墳時代前期に属した土器壺・甕・鉢・高杯・器台、飛鳥時代の須恵器杯身、平安時代の灰釉陶器碗、室町時代の瓦質土器鉢、焼締陶器鉢、江戸時代の土師器皿、土師質土器塩壺、陶器碗、瓦類がある。弥生時代後期から古墳時代前期の土器は竪穴住居 2・5・6 の床面から出土したものと、竪穴住居 1 上面土坑埋土、土坑 2・4・5・6 埋土、竪穴住居 6 貯蔵穴から出土したものがあり、各竪穴住居の上面検出中のもの、遺物包含層検出中に出土したものがある。また、調査区東端の遺物包含層からは縄文時代の石製品が出土している。

小結 弥生時代後期から古墳時代前期の土器には、V 様式新相期に比定できる土器が、竪穴住居 1 上面土坑、竪穴住居 2、竪穴住居 5 から出土し、庄内式古相と比定できる土器が竪穴住居 6、土坑 4、土坑 6 から出土した。竪穴住居 2 は竪穴住居 3・4 と重複し、竪穴住居 7 は竪穴住居 8・9 と重複する。このため、調査地で変遷した遺構は、竪穴住居 4・9 が先行し、竪穴住居 1・3・8、竪穴住居 1 上面土坑・竪穴住居 2・5 と続き、竪穴住居 6・土坑 4・6 の順で変遷したと考えることができる。その後、長期の空白期を経て、飛鳥時代の 7 世紀後半期に至って溝 1 が造られている。平安時代後期には耕作に関係したと

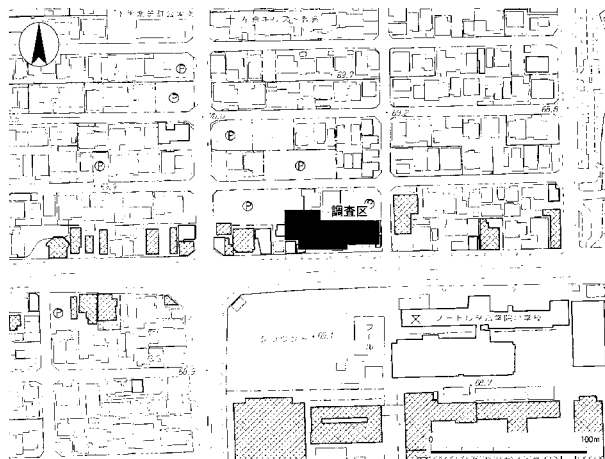


図 42 調査位置図

みられる遺物包含層が形成され、中世から江戸時代にかけて耕作地となり、とりわけ水田耕作が盛行したのは江戸時代後期以降とみることができる。



図 43 調査区全景（西より）

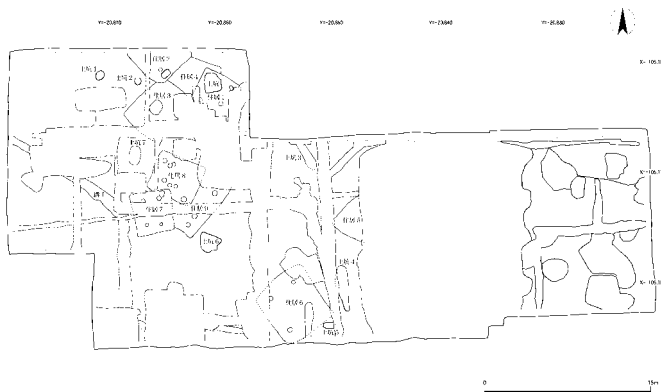


図 44 遺構平面図

18 植物園北遺跡3

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008. 3.31

経過 個人住宅兼共同住宅新築工事に伴う発掘調査である。調査地は植物園北遺跡にあっており、周辺の調査成果から遺構が良好な状態で残っていることが推測されたため、発掘調査を実施することとなった。植物園北遺跡は京都盆地北部の鴨川扇状地上に広がる東西約2km・南北約1kmの大規模な集落跡で、縄文時代晩期から室町時代の遺構・遺物が確認されている。

遺構 奈良時代後半の竪穴住居10、古墳時代前期の竪穴住居20・30・25などを検出した。最も大きい規模を有する竪穴住居30の平面形は北・西・南の3箇所には鈍角の屈曲があることから、多角形であると考えられる。検出長は南北約9.0m、東西4.3m以上で、長さが測定できる北西辺は約4.1m、南西辺は約7.2mである。

遺物 出土遺物のほとんどは土器類である。古墳時代前期の遺物が大部分を占め、弥生時代後期、飛鳥時代以降の遺物はわずかである。

小結 調査地が盛期を迎えるのは古墳時代前期である。庄内式併行期の遺構には竪穴住居30・竪穴住居25・土坑23・溝38などがある。竪穴住居30は多角形の大型住居の類例として特筆できる。溝38は集落内の区画溝の可能性が考えられる。また、布留式の段階の遺構には竪穴住居20がある。竪穴住居30と竪穴住居

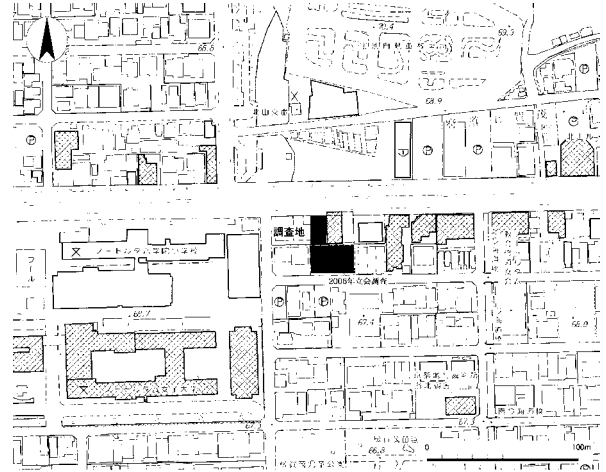


図45 調査位置図

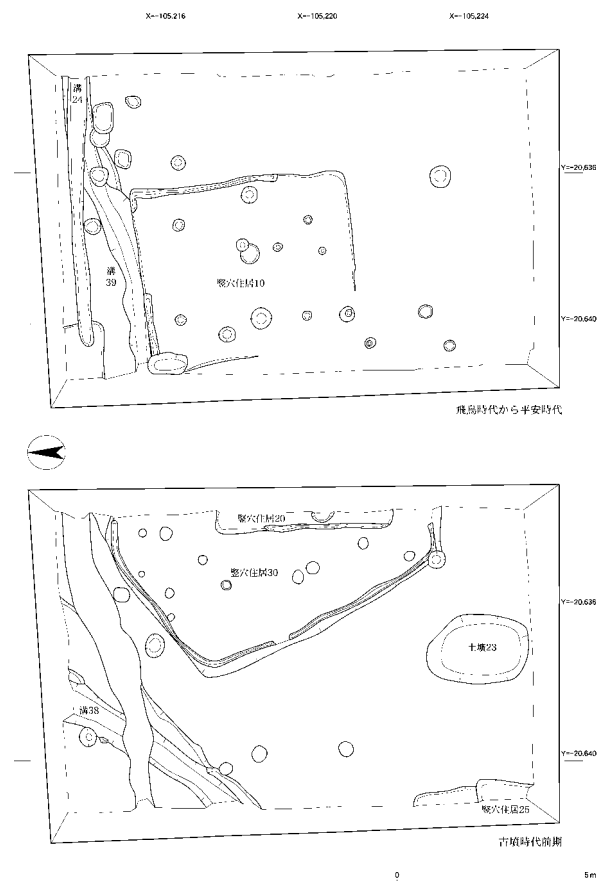


図47 遺構平面図

20は重複することから、竪穴住居を建て替えながら集落が継続していたことがわかる。

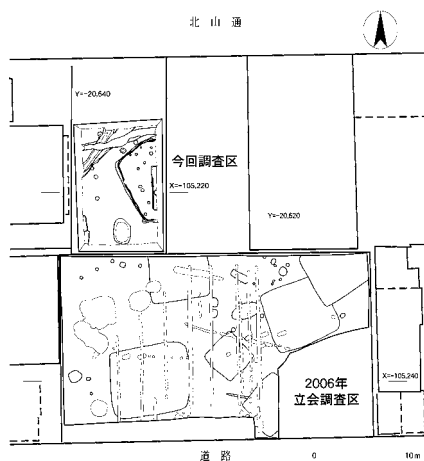


図46 調査地配置図

19 史跡賀茂御祖神社境内

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-19『史跡賀茂御祖神社境内』2008.3.31

経過 境内整備事業に伴う調査である。調査地は賀茂御祖神社本殿南東部に位置する船島とその周辺である。調査では島本来の形状とその変遷の確認・記録を目的とした。

遺構 南区の南方で石組み井戸 SE01 を検出した。東区では検出した地山面を東方に追求したところ、平安時代とその下層に古墳時代の遺物を少量含む流路跡 SD02 を検出し、一時期の島の東端が確認できた。北及び西調査区では、表土と江戸時代後期の遺物を含む土層を除去した時点で平安時代の土器類を多く含む砂泥層や砂層を検出した。この上面で遺構検出を試みたが、顕著な遺構は認められなかった。下層では平安時代の土師器皿などを多量に含む砂層及び砂礫層を確認した。また、その下層に古墳時代の流路跡 SD03・SD04・SD05 を検出し、東調査区のものとはほぼ対応する時期の島北端及び西端を検出した。さらに、この流路の西限を確認するため西調査区と小川を隔てた西側に拡張区を設定した結果、これらの流路は現在の島西側を流れる小川付近以西には広がっておらず、安定した基盤層が存在することが判明した。

遺物 古墳時代の土器類、平安時代の土器、瓦類には軒瓦を含む平安時代後期の瓦と江戸時代の丸瓦片がある。

小結 島の東西で古墳時代の流路を検出したが、これらの流路は泉川の旧流路と考えられ、現在島の西部を流れる小川付近を西限とする範囲を時期とともに位置を変えながら南西方向に流れていた状況を示している。また、平安時代の流路の砂礫層や整地層の状況から、船島は12世紀代に泉川旧流路内の中州状の地形を核として整地が行われ、ほぼ現在のものに近い形状となったことが確認できた。



図 48 調査位置図

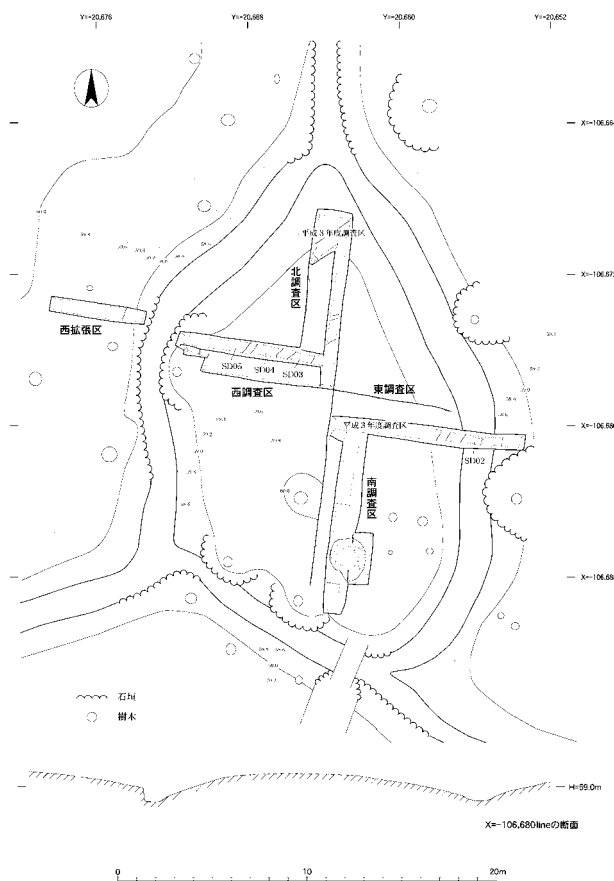


図 49 遺構平面図

20 史跡・慈照寺（銀閣寺）旧境内

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-16『史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内』2008.3.31

経過 慈照寺研修道場及び休憩所の新築工事に先立って実施したものである。両建設計画地は史跡慈照寺（銀閣寺）旧境内にあたるため、工事によって地中の遺跡が破壊されるおそれがあった。そのため、計画地の遺跡の時期、性格、広がり、深さなどを確認するために発掘調査を行った。3箇所の調査区を設け、1～3区とした。調査地の調査前の状況は、駐車場、車庫、休憩所などであった。

遺構 第8層上面で検出した遺構は、室町時代後半期のものである。1区では溝29・33、堤30、2区では石垣7、溝8、石組41、落ち42、3区では溝31・33・34、堤30、小堤35・36・37を検出した。

遺物 平安時代及び室町時代後半から江戸時代にかけての遺物が出土した。土器類のほか、瓦類の出土がある。その他、金属製品や石製品が少量ある。

小結 室町時代後半の調査地付近は、2区で検出した台地斜面の擁壁（石垣）、導水路、1区で検出した水防・砂防施設が存在した地域であり、東山殿・慈照寺の主要建物は存在しなかった。また、平成5年度調査で検出された「池」は、今回調査で検出した砂溜りの窪地と考えるのが妥当である。したがって、この「池」を園池と考える復元案は成り立たなくなった。

なお、室町時代後半期の調査地付近には、座標の正南北方向に準拠した地割が存在したことが明らかとなった。

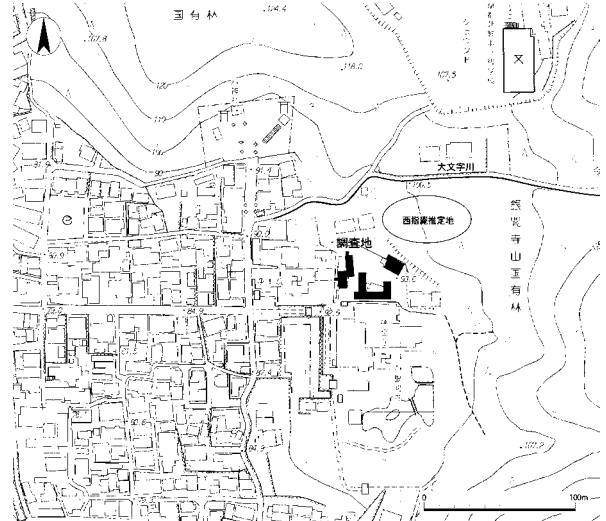


図50 調査位置図

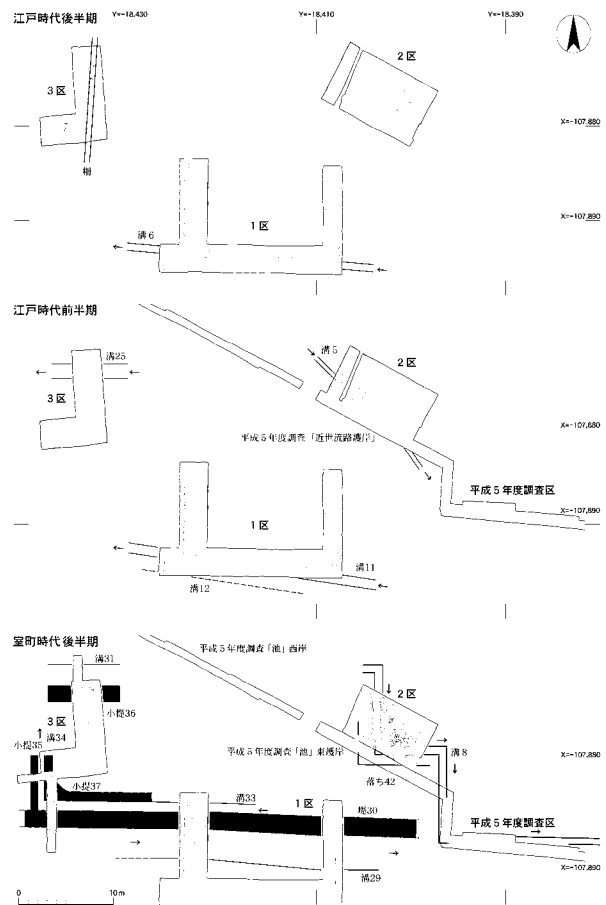


図51 遺構変遷図

21 北白川廃寺跡

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 20 年度』京都市文化市民局 2009. 3.31

経過 診療所の新築工事に伴う発掘調査である。調査地は、1934年に東方基壇（金堂）跡、1975年に塔跡が発見された北白川廃寺の寺域南限推定地に位置することから、北白川廃寺に関連する遺構の検出が期待された。

遺構 第1面では、土坑・溝・柱穴を検出したが、数は少なく、まとまりはない。第2面では、少数の柱穴や土坑と東に向かってやや南寄りに振れる東西方向の耕作溝を多数検出した。第3面では、調査区北部で溝を検出した。第4面では、調査区西半部を断ち割った際に、東西方向に広がる谷状遺構を検出した。

遺物 奈良時代から江戸時代の遺物が出土した。多くは中世の土器類である。瓦類については、ほとんどが古代のものであった。

小結 谷状遺構56は、南北両肩の盛土が鎌倉時代後半頃に形成されたと考えられる。埋没は、室町時代前半と考えられる。溝54は、室町時代前半の15世紀代に形成され、流水があったと考えられ、16世紀までには、埋没したと考えられる。

北白川廃寺の寺域南限推定地であるが、関連する遺構を確認することはできなかった。しかし、谷状遺構の埋

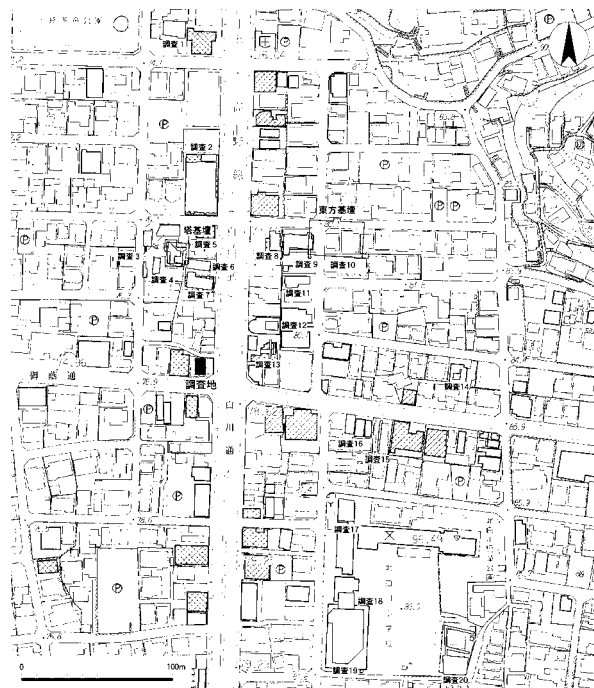


図 52 調査位置図

土から、平安時代以前の瓦を含む古代の遺物が出土したことは、北白川廃寺関連の遺構が調査地近隣にあったことを示していると考えられる。

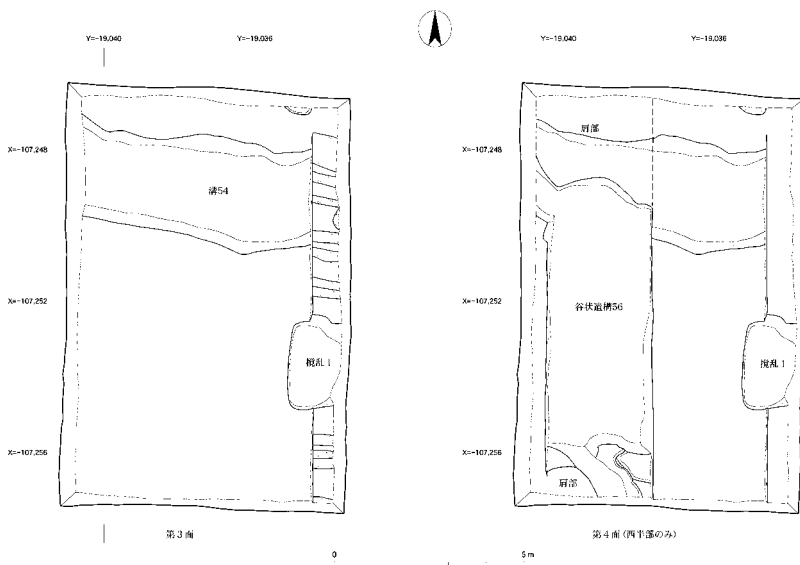


図 53 遺構平面図

22 法勝寺跡・岡崎遺跡 1

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-9『法勝寺跡』2007.12.28

経過 共同住宅が建設されることになり、試掘調査が実施された結果、平安時代後期から中世の遺構・遺物が検出されたことから、発掘調査を実施することとなった。弥生時代から古墳時代の遺跡である岡崎遺跡や平安時代後期に形成された白河街区並びに法勝寺を含む六勝寺跡に相当する。

遺構 検出した遺構には、平安時代後期、室町時代後期、江戸時代に属するものがある。平安時代後期の遺構には土坑が2基（16・56）ある。室町時代後期の遺構には溝（11・12）・土坑（17）・柱穴などがある。

遺物 平安時代後期の遺物は、平安時代から室町時代の遺構や土層から出土した。土坑16以外では、土師器のほか緑釉陶器・灰釉陶器があるが、細片である。土坑16からは、細片を多く含むものの平安時代後期に属する土師器が多く出土した。また、瓦類はほぼ調査区全域並びに各遺構から満遍なく出土しているが、細片が多い。

小結 調査地点が冷泉通（冷泉小路末相当路）に面することから法勝寺北限に関する何らかの境界を示す遺構の検出が期待されたが、区画を示す遺構は未検出であり、土坑1基を検出したにとどまる。室町時代から江戸時代にかけてこの場所には東西方向の溝ないし堀が延長しており、また、溝間には遺構の分布が希薄であることから、当該箇所に境界意識が働いていたことが窺われる。冷泉通を含むこの場所が境界としての機能を維持し続けた可能性があり、法勝寺の北限を考えるうえで一つの手懸りとなろう。

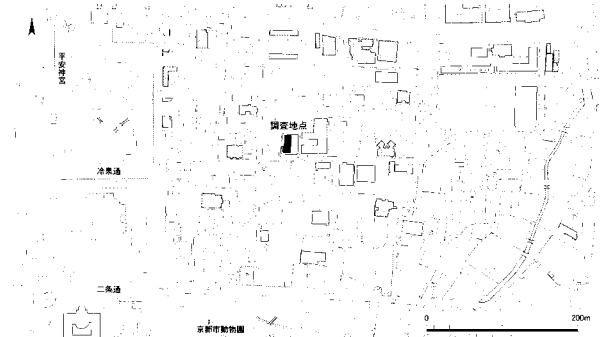


図54 調査位置図

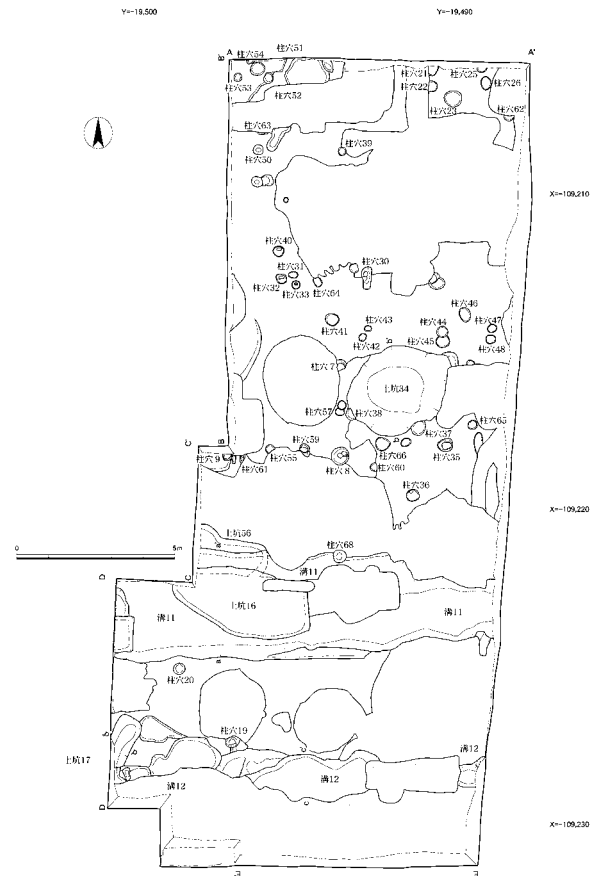


図55 遺構平面図

23 法勝寺跡・岡崎遺跡 2

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 19 年度』京都市文化市民局 2008. 3.31

経過 建物建設に伴う試掘調査が行われ、南北方向の溝及び多くの平安時代後期の瓦が出土した。そのため、発掘調査を行うこととなった。調査地は、白河天皇が創建した法勝寺の伽藍北辺地にあたる。調査地の東を通る南北通りは法勝寺中心伽藍の中軸にほぼ乗っており、調査区の南約 100 m の地点には金堂基壇が遺存している。

遺構 検出した遺構は江戸時代以降の溝や攪乱土壌が主体であり、法勝寺に関する遺構は確認できなかった。これらの遺構の中で注目できるのが調査区西端部で検出した南北溝（SD 9）である。西肩が調査区外となるため溝幅は不明だが、2 m 以上になることは間違いない。検出面からの深さは約 0.8 m で、溝底部の標高は北端で 51.05 m、南端で 50.9 m と北から南へ流れる。断面を観察すると、最下層に流水堆積を示す黄灰色砂質シルトが堆積しており、中層に黒褐色粗砂、上層には暗灰黄色シルトが堆積していた。出土土器から 16 世紀末から 17 世紀初頭に成立した堀状の人工溝と考えられる。

遺物 大半は平安時代後期の瓦類である。土器類は SD 9 及びその上層の土塁西側落ち部から若干の資料が出土しているにすぎない。江戸時代以降の瓦類は多量の棧瓦が攪乱土壌から出土しているが、これらの中に元禄 16 年（1703）に岡崎村へ移転してきた満願寺関係の軒瓦が含まれていた。

小結 法勝寺中心伽藍の北半部に所在したと考えられる堂の位置や、伽藍地北辺に想定される諸施設について現状では全く不明といえる。今回の調査ではそれらの解明が重視されたが、残念ながら遺構としては寺院施設の存在は確認することができなかった。しかし、多くの法勝寺関係の瓦が出土することから、当地が法勝寺の伽藍地内であることはほぼ間違いないであろう。



図 56 調査位置図

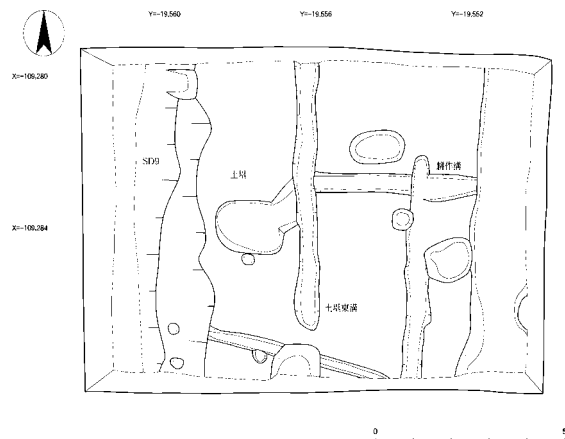


図 57 遺構平面図



図 58 調査区全景（南西から）

24 鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-5『鳥羽離宮跡』2007. 9.30

経過 集合住宅の新築工事に伴う調査である。当地は、鳥羽離宮跡の田中殿の比定地であり、鳥羽遺跡にもあたる。試掘調査の結果、弥生時代の遺構、遺物が検出された。

遺構 調査で検出した遺構は、北調査区で弥生時代中期の土坑、溝、柱穴、南調査区で弥生時代中期の土坑、柱穴がある。

遺物 出土した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器、施釉陶器、染付磁器、石器、焼土塊、瓦片などがある。弥生土器、石器、焼土塊は弥生時代の土坑、柱穴から出土した。その他は各耕作土層、盛土層などから出土した。弥生土器には壺、甕、高杯、鉢、把手付台付鉢、把手付水差がある。石器は磨製石剣の折片、焼土塊は加熱を受けた粘土が赤色化したものである。

小結 土坑は土器類を中心にした排棄土坑で、柱穴には重複があり、建替えを含めた小規模な建物の存在がみてとれる。また、その一部の柱穴から、焼土塊が投棄された状態で大量に出土している。焼土塊は径2cm前後から15cm前後のものまであり、面を有する部分も認められる。何らかの構築物や建築物の一部とも考えられ、建物の性格を考えるうえで重要な資料となろう。

鳥羽離宮跡第71次調査で検出された溝、土坑などの遺構群は、調査地の南東50m前後を離れた位置にあり、伝承で真幡寸神社跡とされる若宮八幡宮が調査地北西100mの位置にある。鴨川の自然堤防を利用した集落の立地から推定すれば、この3地区を含めた北東から南西に延びた範囲が集落の主要地区とみられる。

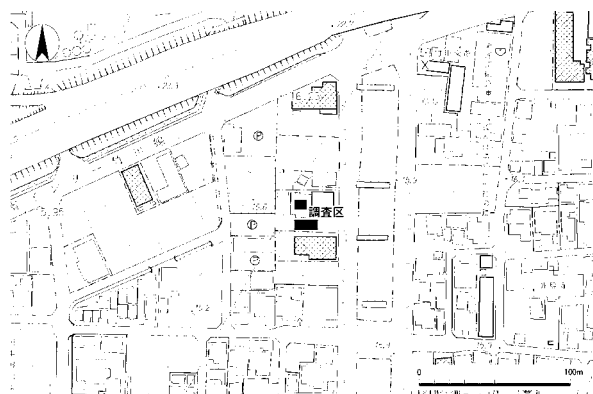


図59 調査位置図



図60 土坑1 土器出土状況

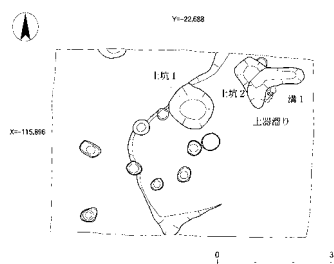


図61 1区遺構平面図

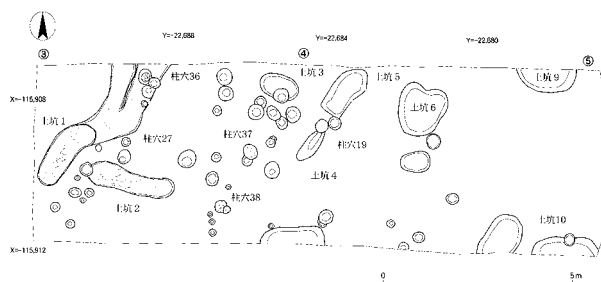


図62 2区遺構平面図

25 伏見城跡 1

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-10『伏見城跡』2008.1.31

経過 敷地内に社員寮の新築が計画された。当地は伏見城下の大名屋敷が配置されていた一角にあっていることから、試掘調査が実施され、礎石、瓦溜り、溝などを良好な状態で検出したことから発掘調査を実施することとなった。

遺構 桃山時代から江戸時代の石組側溝、石垣基礎、礎石土坑 2 基、柵 6 列、土坑 4 基がある。礎石土坑 1（土坑 1・3）は、長径 2.4 m と短径 1.5 m、長径 2.1 m と短径 1.1 m の平面が瓢形をした 2 基の土坑が対になって成立する。それぞれの土坑の底面に、径約 20cm を測る礎石が置かれる。礎石土坑 2（土坑 2・4）は、隅丸方形で、径 1.0 m のものと、長径 1.5 m、短径 1.2 m のやや長方形を呈する 2 基が対になっている。

遺物 平安時代の須恵器杯、桃山時代から江戸時代の土師器皿、施釉陶器、焼締陶器、明染付、瓦類、銭貨などがある。江戸時代から近代の遺物は盛土などから出土したもので、染付磁器、陶磁器などがある。

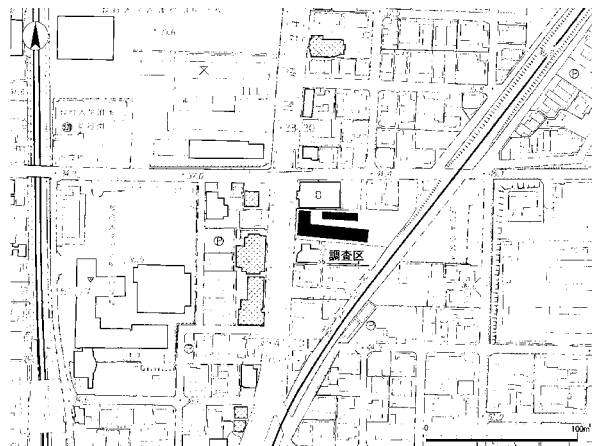


図 63 調査位置図

小結 石組側溝は西側の道路沿いに検出したもので、伏見城期の道路（大和街道）に伴う東側溝である。石垣基礎や礎石土坑は道路に近接した位置にあり、出入に関わる門と付随した施設を検出したものといえよう。

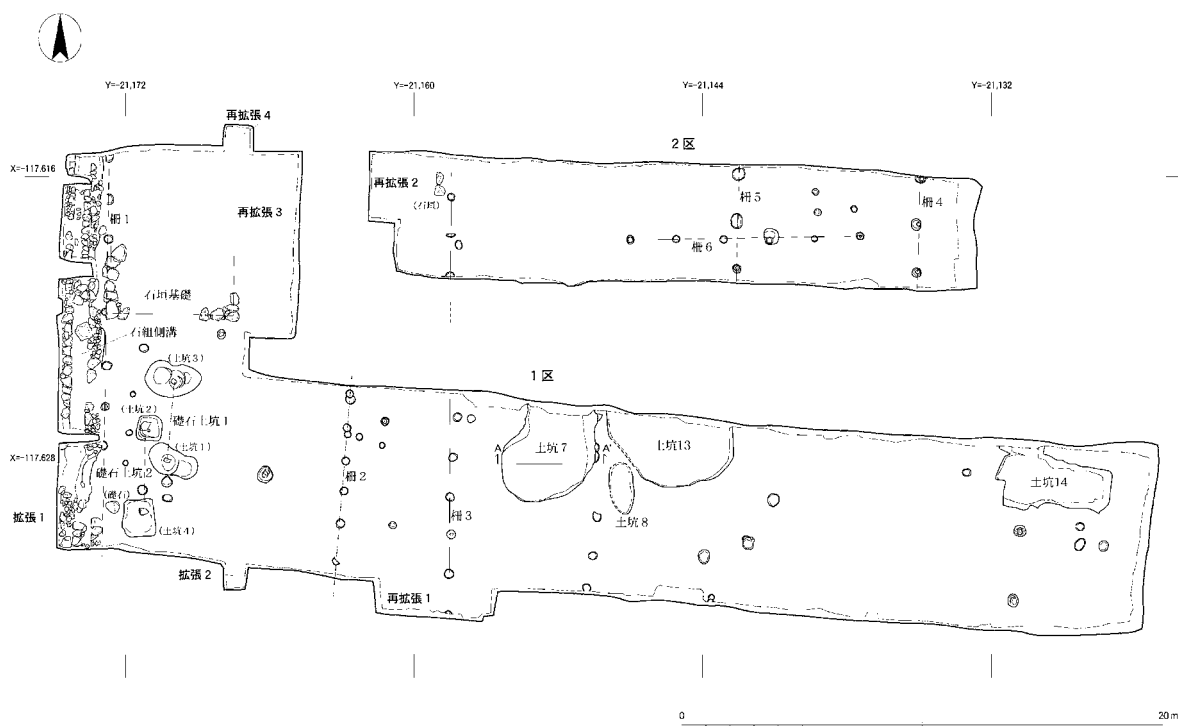


図 64 遺構平面図

26 伏見城跡2

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-15『伏見城跡』2008.3.12

経過 伏見区総合庁舎整備事業に伴う伏見城跡埋蔵文化財発掘調査である。調査地では2005年に第1次調査を実施しており、今回の調査は第2次調査となる。第1次調査では室町時代後期から江戸時代の遺構を多数検出するとともに、多量の遺物が出土した。調査区は開発対象予定範囲にあわせて第1次調査の調査区に接する4箇所に設定した。

遺構 4区では、室町時代後期の溝、江戸時代前期から中期にかけて西部を中心に多数の土取穴が分布する。5区では、室町時代の土坑、桃山時代の段差がさらに南へ延びていることが追認できた。6区では、室町時代後期の溝、土坑を検出し、集落が調査地よりさらに西側に広がっていたことが追認できた。7区では、室町時代後期の集落の東側を画する溝を検出した。また、江戸時代の溝を検出し、第1次調査で検出した墓地への出入りは本堂があったと推定している北側から行われたと判断できる。

遺物 出土遺物は、4区で出土したものが多く、他は少ない。4区の出土遺物には、江戸時代の土器類・瓦類・木製品・土製品・石製品・金属製品などがあり、木製品



図65 調査位置図

には下駄や墨書のある曲物底板がある。

小結 今回の調査で、1次調査の成果を含めて、室町時代の集落の続きや江戸時代の南部町通に面した様子がさらに詳しくわかってきた。また、江戸時代の土壌から出土した木製品類は、1次調査で検出した寺院跡とともに当時の伏見の生活を知ることのできる成果であった。

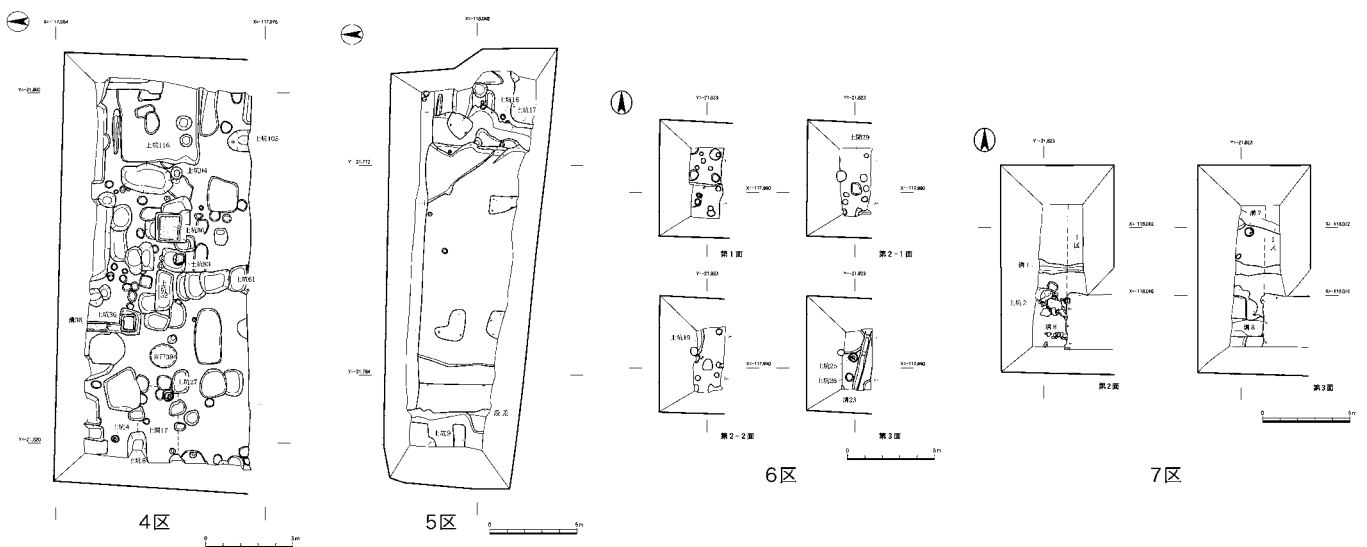


図66 遺構平面図

27 平安京右京三条一坊三・六・七町跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-5『平安京右京三条一坊三・六・七町跡』2002.5.31

経過 二条駅地区土地区画整理事業に伴うもので、1992年度から続く15次、16次、17次目の調査となる。三条一坊には一・二町と七・八町に穀倉院、三町に右京職が置かれた地である。

遺構 15次調査では、平安時代の掘立柱建物2棟、柵列、湿地状の落ち込みなどを検出した。16次調査三町域では、平安時代前期から後期にかけての西面築地・三条坊門小路路面・北側溝・南側溝などがある。16次調査七町域では、平安時代の掘立柱建物、南面築地、三条坊門小路南・北側溝、路面、築地内溝、土壌、瓦落ちがある。17次調査六町域では、洲浜と池跡を検出した。池は9世紀初頭と9世紀後半の2時期あり、当初の池を縮小し改修を行った様子が確認された。

遺物 弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦、土製品、木製品、金属製品等である。時代は弥生時代から江戸時代末期までのものがあるが、そのほとんどが平安時代のものである。木簡に「齋衡四年三條」と記した題箋がある。

小結 六町の池（新）から出土した土器類は870～900頃に該当し、齋衡四年（857）よりやや新しいものであるが、文書が一定期間保存されることを考慮すれば、

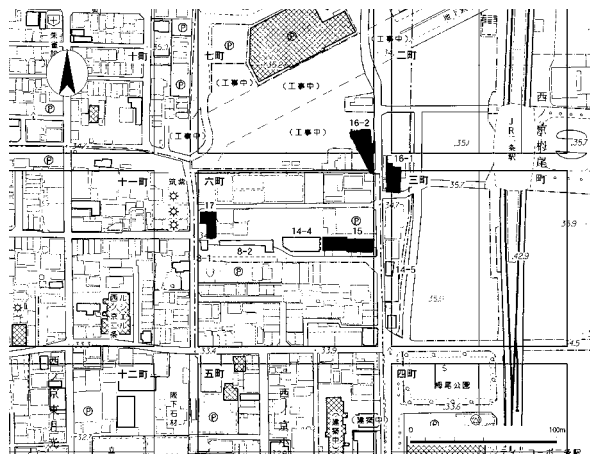


図 67 調査位置図

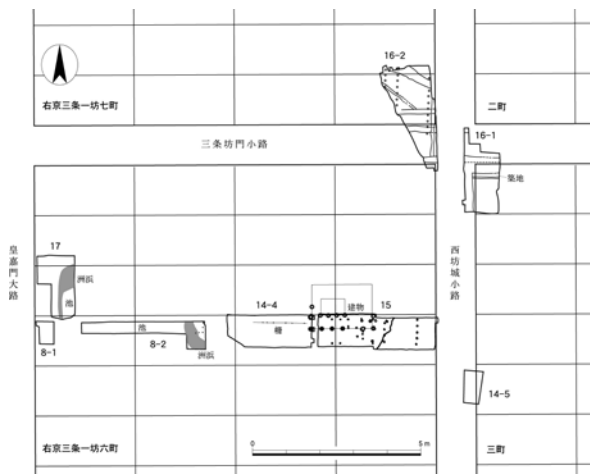


図 68 調査区配置図

この年代の差は矛盾するものではなく、この地が「西三条第」の有力な推定地のひとつである可能性は否定できない。

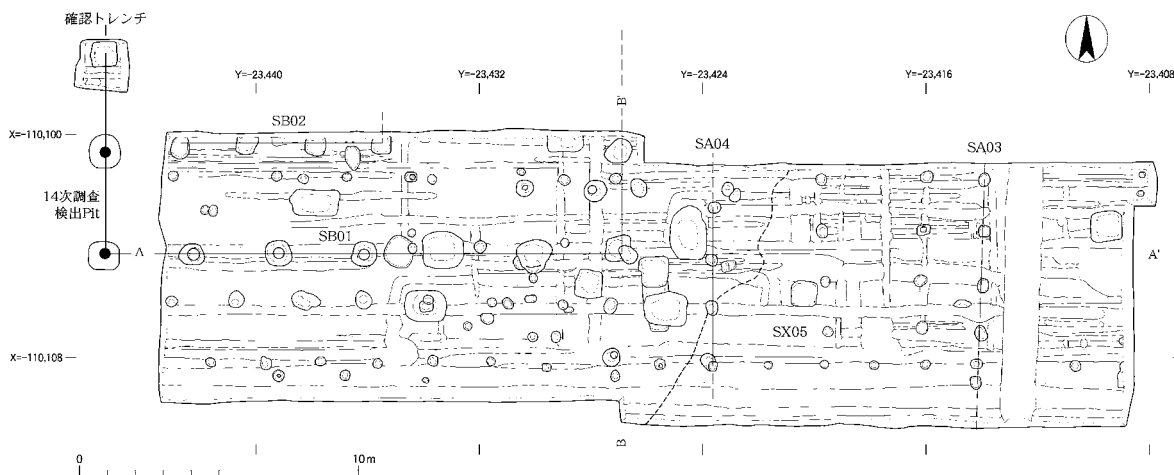


図 69 遺構平面図

II 平成19年度の試掘・立会・確認・分布調査の概要

平成19年度に実施した試掘・立会・確認・分布調査は、表1に示した16件である。このうち、京都市内遺跡を対象とした立会調査の報告については、別途報告書が発刊されておりそちらを参照いただきたい。16件のうち、8件の報告を本書に掲載した。

今年度の庭園関連の調査としては、名勝清風荘（II-3）の整備に伴う確認調査、特別史跡・特別名勝醍醐寺三宝院庭園の整備に伴う確認・立会調査を実施した。

II-4史跡荷田春満旧宅・伏見稲荷大社境内の確認調査では、江戸時代の指図に記されている建物に伴うとみられる礎石根固め石を5箇所を確認する成果を得た。

また、今回はじめて名勝龍安寺庭園で防災工事に伴う確認調査（II-6）を実施した。その結果、礎石掘付け穴を数箇所を確認することができた。

1 史跡旧二条離宮

経過 二条城の正門である東大手門には、門石畳からの高さ約 4.7m の石垣の上に南北に長い建物、いわゆる櫓が乗る。門の北側及び南側には、櫓へ昇降する花崗岩製の階段と 20～25㎡の踊り場のような平坦面があり、東大手門に取り付く築地塀（多聞塀）は、この空間を取り囲む範囲に L 字状に配される。

なお、当該地を平安時代の条坊で示すと、平安京左京三条二坊八町に該当する。

築地塀の裏面には約 1.8m 間隔で花崗岩製の石柱が築地塀に沿って連続する。築地塀と石柱間には分厚い板材でできた上下 2 枚と斜方向の支持材がある。石柱の上下に開けられたほぞ穴に板材を通すことによって固定されており、石柱は、築地塀を固定し倒壊を防ぐ目的の控え柱である。

今回の確認調査の目的は、この石柱の根入れ深度、固定方法並びに石垣裏側の状況、石垣と築地塀の接地状況などを確認することにある。確認調査を実施するにあたっては、元離宮二条城事務所・財団法人建築研究協会と協議を重ねた。

確認調査トレンチは、南側に 1 トレンチ、北側に 2 トレンチを各 1 箇所ずつ、両トレンチとも東西 1.8m、南北 1.2m の範囲に設定した。設定箇所は石垣裏面及び石柱を通す箇所とした。

調査は、現地表面から人力で行うこととし、2 トレンチから調査を開始した。両トレンチとも、大半が栗石で埋まっており、壁面の崩落が激しい。石柱の底面と据付け方法を確認した時点で、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導を受けた。両トレンチとも写真撮影を行い、平面図・見通し図などを作成したのち人力で埋め戻し、調査を終了した。

遺構 1 トレンチでは、現地表面から 0.08～0.12m の厚さで表土・積土が堆積する。積土直下には石柱を支



図 70 土層断面図 2

えるコンクリート製の根巻きがある。厚さは 0.25m 前後ある。コンクリート製根巻き下約 0.1m には表面を平滑に調整した花崗岩がある。厚さ約 0.25m ある。検出箇所では向かって左（西）側が L 字状に折れ北へ延長するため、石柱を支える根巻きの可能性がある。この花崗岩根巻き直下にも表面を平滑に調整した花崗岩割石がある。現存厚さ約 0.1m ある。この上面に石柱底面が位置することから、この花崗岩は根石と位置付けられる。根石の直下にはコンクリートがある。根石底面はコンクリートに埋まる状態にあることから、コンクリートを打ち、乾燥する前に根石を据えたことがわかる。

石垣は裏面を検出した。トレンチの下半で検出した石垣裏込めは、栗石のみで構成される。栗石間には空隙があり、栗石表面には石灰状の白色粉状の膜が見られる。この状態はトレンチ内の大半で検出した攪乱を受けた栗石とは異なる。よって、石垣構築当初の栗石の可能性が高いと考えられる。

調査区内では石垣裏込め以外の土層も大半は栗石で構成されるが、石の間に砂泥などの土が詰まっており、石垣裏込め栗石とは対照的である。石柱敷設時に掘り返されたと考えられる。

なお、調査区西端下半の栗石には、石垣裏込の栗石と同様の空隙があり、攪乱は受けていない。

2 トレンチでも積土直下には石柱を支えるコンクリート製の根巻きがある。厚さは 0.12m 前後ある。コンクリート製根巻き直下には表面を平滑に調整した花崗岩

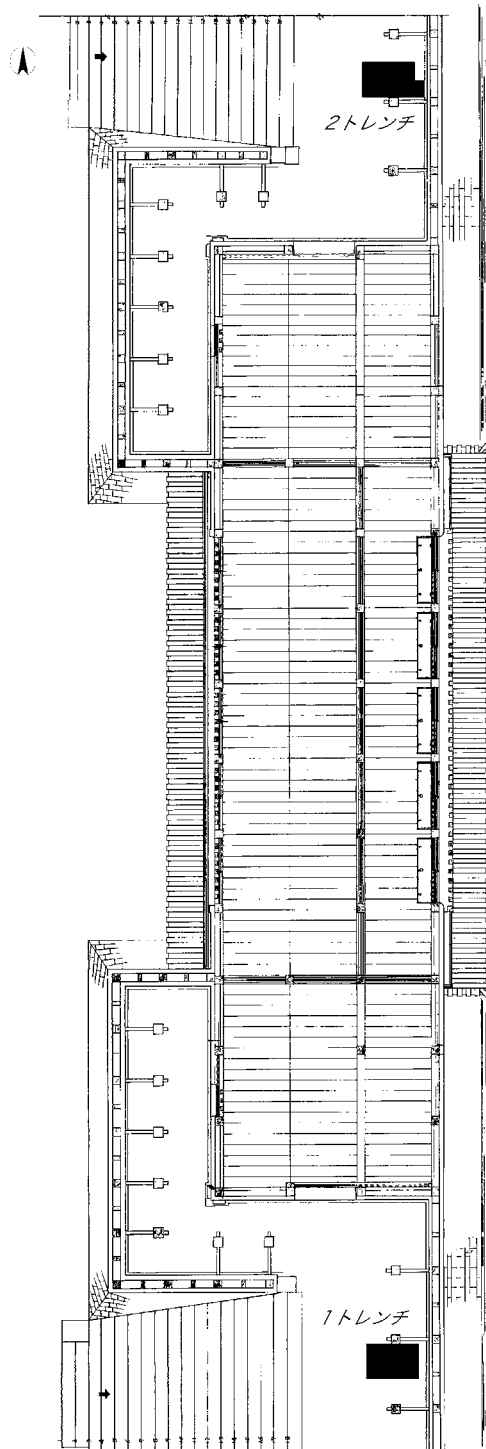


図 71 調査区配置図

がある。厚さ約 0.16m ある。検出箇所では向かって右（西）側が L 字状に折れ南へ延長するため、石柱を支える根巻きの可能性がある。この花崗岩根巻き下約 0.32m に表面を平滑に調整した花崗岩割石がある。現存厚さ約 0.11m ある。この上面に石柱底面が位置することから、この花崗岩は根石と位置付けられる。根石の直下は 1 トレンチと同様である。

石垣は裏面を検出した。一部築地までの間を調査し、石垣の直上に築地が構築されていることを確認した。石垣裏面下半の栗石や調査区内の状況は、1 トレンチとほぼ同様である。

遺物 出土遺物は、石柱敷設時の掘形から出土したものであり、大半は江戸時代以降の遺物である。

軒平瓦には、文様から平安時代中期のものと考えられる唐草文軒平瓦が 1 点ある。

小結 1・2 トレンチの調査の結果、石柱の敷設状況を明らかにした。次に石柱の構築方法を示す。

1・2 トレンチとも、石柱の敷設方向に沿って約 2.0m 幅の布掘り状土坑を南北方向に設定し、1 トレンチでは現地表面から約 0.9m 下、2 トレンチでは現地表面から約 1.1m まで掘り下げる。土坑底面にコンクリートを打つための栗石を敷く。栗石上に根石を据えるためのコンクリートを打つ。コンクリート上面はならず程度である。コンクリートの乾燥前に根石を据える。この時点で、1 トレンチでは石柱を立て、根元西側に花崗岩割石を巻き、東側には長径約 0.4m のチャートを寄せて石柱を固定する。固定後は埋め戻す。2 トレンチでは石柱を立て、根石と石柱間には 0.05m 程度の礫を挟み込み石柱の垂直方向を調整する。その後、一端底面から 0.4～0.5m 程埋め戻し、その面で石柱西側に花崗岩割石を巻き、さらに花崗岩に接して長軸約 0.4m の花崗岩割石を寄せて石柱を固定する。固定後は埋め戻す。

また、1・2 トレンチとも、現地表下 0.1～0.2m には 1 辺約 0.9m のコンクリート製の根巻きが石柱周囲に巡る。このコンクリート（上部コンクリート）は、次に

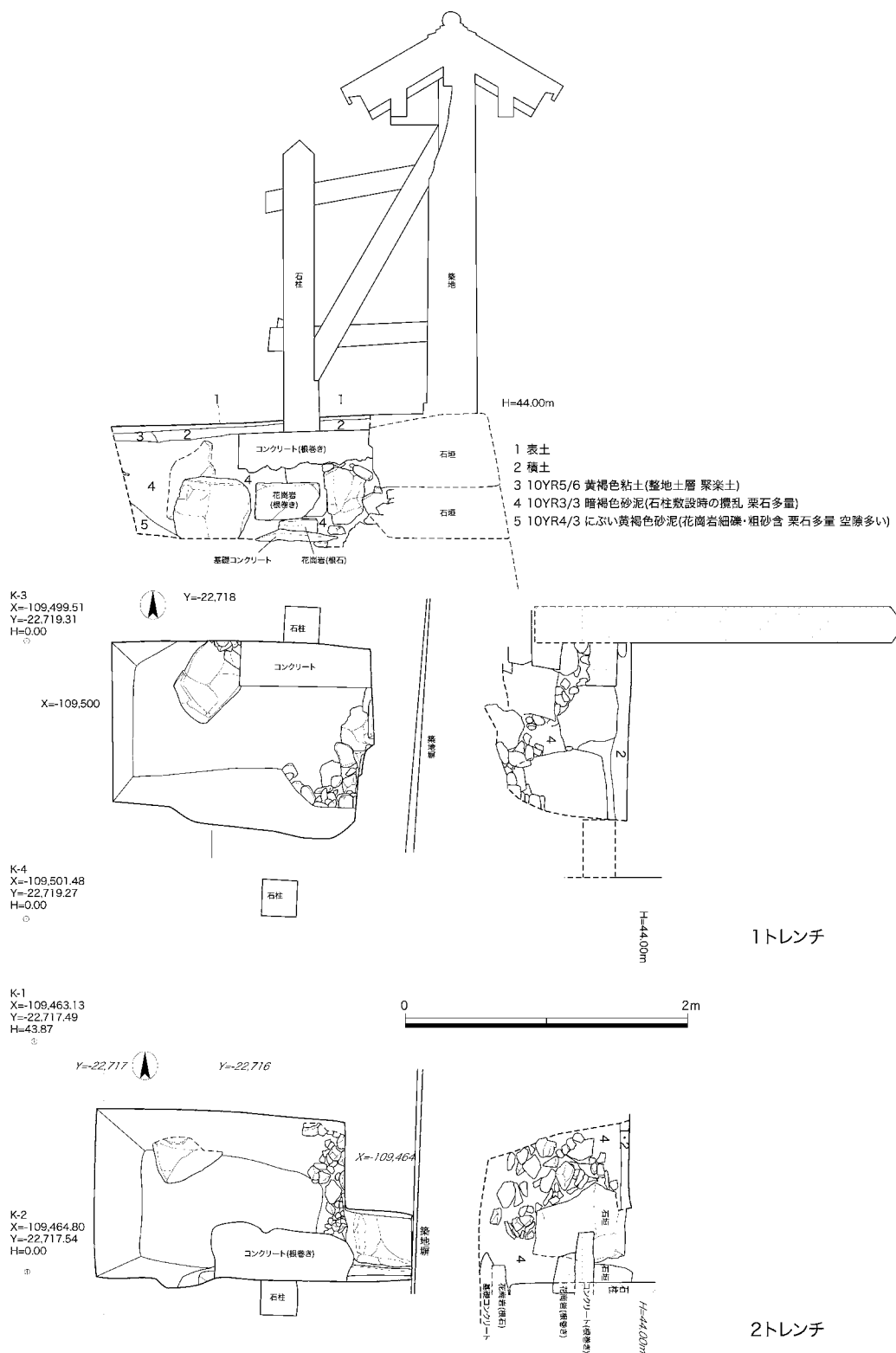


図 72 遺構実測図

示す観察によって、石柱を敷設した時期の工程で施された最底面のコンクリート（下部コンクリート）とは施工方法及び時期が異なる可能性がある。上部コンクリートと下部コンクリートとは、使用する骨材（礫）の大きさが異なり、下部のコンクリートは径0.2～1cmの礫を使用するのに対し、上部のコンクリートは径3～10cmの礫を使用する。同じ工程で打たれたコンクリートであれば、コンクリート打ち工程に時間差・日程差があったとしても、礫の大きさを上下で取って分ける必然性はないと考えられる。したがって、上部・下部コンクリートは、同じ工程で施行されたものではない可能性がある。

コンクリートを使用した石柱が敷設された時期については、大正4(1915)年には大正天皇即位に際し、現在の清流園の位置に大饗宴場が造営されており、この折に東大手門築地塀も整備された可能性がある。昭和24(1949)年には東大手門の修理が行われており（図71調査区配置図、図は同年作成図）、この時期にも手が加えられた可能性がある。

一方、石垣については、石垣裏込を含めた裏面を検出することができた。今回の調査で検出した石垣に使用された石材は、長軸1m前後に達する花崗岩割石を使用していることが判明した。また、築地塀は石垣上面に直接構築されているようである。石垣に接する栗石間には空隙があり、石柱敷設時に攪乱を受けた栗石とは識別できることが判明した。

なお、東大手門櫓内の板敷き下は、栗石が露呈しており、表面に整地が施されていないことを観察できた。

以上、2箇所の特レンチ調査から、東大手門築地塀に係る新たな知見を得ることができた。

（辻 裕司）



図73 1トレンチ全景（南西から）



図74 2トレンチ全景（北西から）

2 平安京右京六条一坊三町跡

経過 調査地点は、京都市下京区朱雀分木町に所在する。平安京の条坊では、右京六条一坊三町東三・四行、北七・八門に該当し、調査対象地内西端に西坊城小路が南北方向に、南端に楊梅小路が東西方向に延長する。この場所に、京都市中央卸売市場第一市場青果加工配送センターが新築されることに伴い、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が試掘調査を実施、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が支援業務を担当することになった。調査対象地は、調査直前まで駐車場として利用されており、地表面はアスファルトで舗装されている。

調査対象地周辺は、JR 丹波口駅周辺市街地再開発などに伴い、市街地の中でも比較的多くの調査が実施されている地域である。これら一連の調査では、平安時代前期の邸宅跡や鎌倉時代の御堂、建物群をはじめ、六条大路・西坊城小路・楊梅小路などの条坊路、あるいは縄文時代から新墳時代にかけての湿地や流路なども検出されている。

本試掘調査は、調査対象地内に東西1条(1トレンチ)、南北2条(東側が2トレンチ、西側が3トレンチ)のトレンチを直交するように設定した。調査は、調査予定区画のアスファルトをカッターで切断したのち、耕作土層まで重機で掘削し、その後、人力掘削を開始した。調査区内の無遺物層は、1トレンチから南側では砂礫層や砂礫まじりの砂泥ないしシルト・粘土層が堆積し、北側では所謂聚楽土に近似する砂泥ないしシルト・粘土層が堆積している。調査は、無遺物層上面に堆積していた旧耕作土層などと考えられる土層を掘り下げたのち、遺構検出を行った。

調査の結果、西坊城小路並びに楊梅小路に関連すると考えられる溝状を呈する遺構を検出した。町内の、東四行・北八門の区域では、柱穴や土坑と考えられる遺構を検出している。一方で、東四行・北七門の区域では、土取穴と考えられる遺構が連続することが判明し、概して、

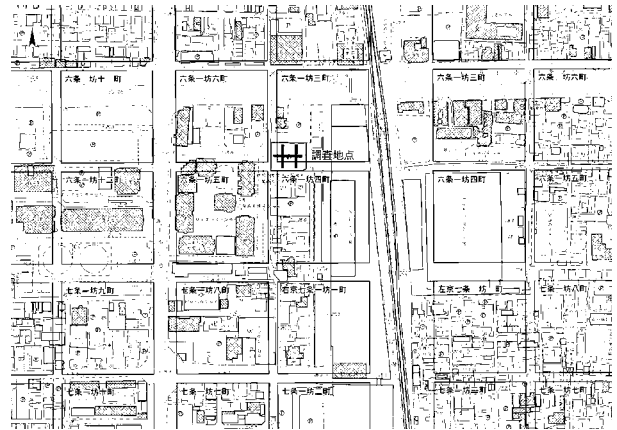


図 75 調査位置図

遺構の遺存状態は良好であるとの調査成果を得ることができた。

遺構 1トレンチの西坊城小路東側溝相当位置で、南北方向を示す溝1～3を検出した。いずれも南北へは調査区外へ延長すると考えられる。溝1は西坊城小路東築地芯から西へ約2.6mで東肩口を検出した。西肩口は調査区外に広がる。検出面での規模は、検出長約1.2m、幅約0.6m、深さ0.25mある。鎌倉時代に属する遺物が出土した。溝2は西坊城小路東築地芯から西へ約2.0mで東肩口を検出した。西肩口は溝1に、東肩口は溝3により削平を受ける。検出面での規模は、検出長約1.2m、幅約0.6m、深さ0.13mある。平安時代中期に属する遺物が出土した。溝3は築地芯相当位置にある南北方向の溝と考えられる遺構であり、断割により幅、深さを確認した。西肩口は築地芯から西へ約2.0m、東肩口は東へ約4.2mの位置にある。検出面での規模は、幅約6.2m、深さ約1.0mある。安時代後期に属する遺物が出土した。

3トレンチの楊梅小路北側溝相当位置で東西方向を示す溝4を検出した。溝4は楊梅小路北築地芯相当位置にある。検出時の肩口の平面形状は、やや屈曲する。北肩口は築地芯から北へ平均で0.14m、南肩口は南へ平均0.6mの位置にある。検出面での規模は、検出長約2.6m、幅約0.6m、深さ約0.6mある。室町時代に属すると考えられる遺物が出土した。2トレンチの当該箇所では、トレンチ際で2箇所断割を行ったが、無遺物層のみで当該溝は未検出である。

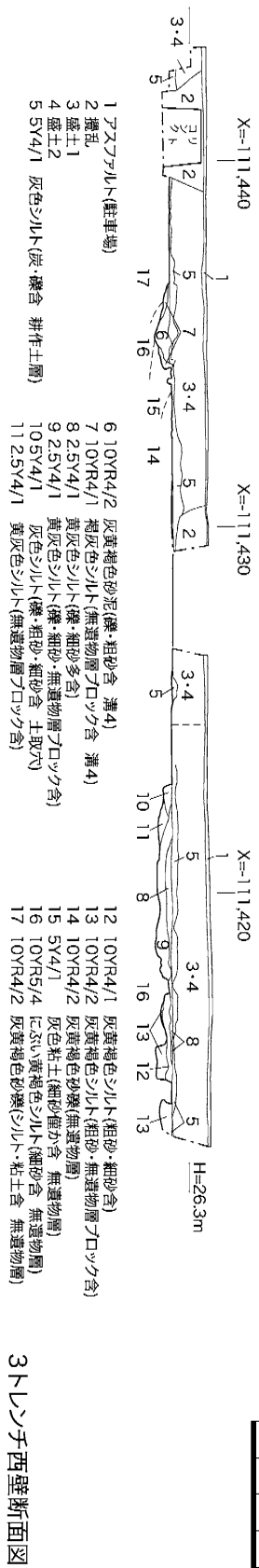
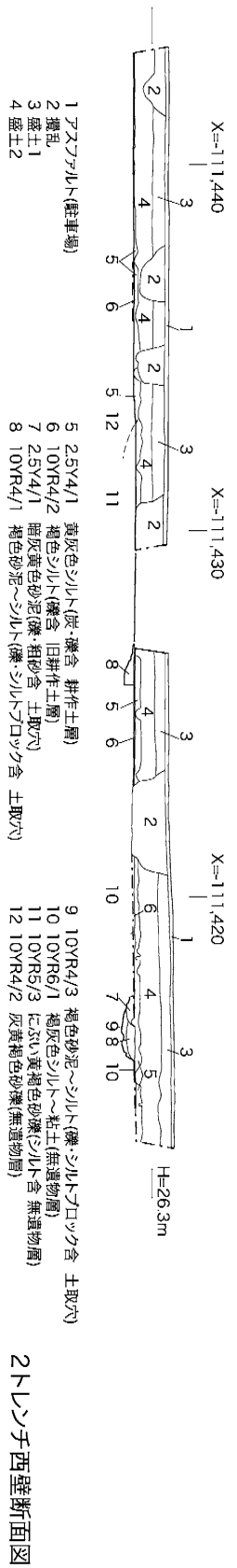
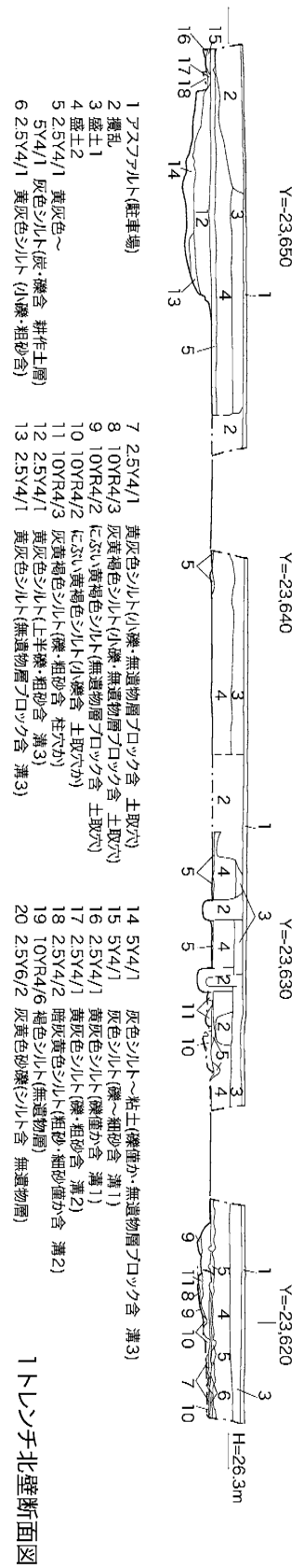


図 77 断面図

なお、1・2トレンチの西坊城小路並びに楊梅小路の道路敷相当箇所では遺物を包含する土層が薄く堆積するが、この土層が、道路敷に関連するものであるかは未確認である。

土坑は、1トレンチ中央部及び3トレンチ中央部から南端にかけて検出した。断割を行った土坑は次の4基であり、他は行っていない。したがって、これら全てが土坑であるか遺物包含層や土取穴などであるかは未確認である。土坑5は3トレンチ南端で検出した。西は攪乱を受け、東及び南は調査区外へ広がる。北肩口は楊梅小路北築地芯から約6.4mに位置する。検出面での規模は、検出長約2.7m、幅約1.0m、深さ0.22mである。土師器・輸入陶磁器・瓦などが出土したが、詳細は不明である。土坑6・7とした遺構は、1トレンチ中央東寄りで検出した。平面形は不定形であり、2トレンチで検出した土取穴に近接することから、土取穴の可能性もある。平安時代から室町時代後期に属する遺物が出土した。土坑8は3トレンチ中央南寄りで検出した。平面形は東西に長い楕円形を呈する。検出面での規模は、長さ約1.7m、幅約0.8m、深さ0.2mある。室町時代後期に属する遺物が出土した。

柱穴と考えられる遺構は、1トレンチ中央部で検出した。断割による破壊を最小限にとどめるため、柱穴については断割は行ってない。柱穴9・10は平面形や攪乱を利用した断面観察で柱穴である可能性は高い。平面形は方形を呈し、柱穴10は一辺約0.4mある。柱穴10の中央部には、径0.1m程度の柱当たりがある。

土取穴は、1トレンチ東端部(検出長約6.3m)、2トレンチ北半部(検出長約13.6m)、3トレンチ北半部(検出長約9.8m)で検出した。平面観察では、無遺物層のシルトないし粘土層が途切れ、砂礫層が露出する箇所では肩口は立ち上がる。各トレンチで断割を行った結果、土取りは無遺物層のシルトないし粘土層を対象としていることが判明した。ただし、土取穴の底面は、下層の砂礫層までは達していない。土取穴には、土取りの作業単位

を示すと考えられるシルトないし粘土層の立ち上がりが複数箇所ある。立ち上がり間の距離は、1.1～1.7m程度あり、中には5.6mある箇所もある。検出面からの深さは、0.35～0.6mある。

遺物 遺物は、断割トレンチ、遺構検出などから出土した。

縄文土器は縄文時代後期に属すると考えられる小片である。器面に沈線の一部が遺存する。

平安時代の遺物は、大半は小片である。

土器類では、土師器は平安時代前期から後期に属するものがある。灰釉陶器には山茶碗がある。輸入陶磁器には、口縁に玉縁の付く白磁碗がある。銭貨は北宋の「熙寧元寶」(初鑄1068年)と考えられるものが1点ある。

瓦類では軒平瓦がある。平安時代後期と考えられる唐草文1点、不明1点、平安時代後期から鎌倉時代と考えられる剣頭文が1点ある。

鎌倉時代から室町時代の遺物も大半は小片である。

土器類では、土師器は鎌倉時代前期から室町時代後期に属するものがある。瓦器には、大和系、楠葉系と考えられる碗、皿や、大和型と考えられる火舎、播鉢がある。輸入陶磁器には、白磁皿、青磁皿・碗、青白磁碗などがある。

小結 今回の試掘調査では、条坊路や町内で柱穴や土坑などを検出することができた。

条坊路は、西坊城小路東側溝及び楊梅小路北側溝と考えられる遺構を検出した。西坊城小路東側溝と考えられるものは2条あり、平安時代と鎌倉時代に属すると考えている。当該箇所の西側で平成10年に発掘調査(98HK-XF014)が行われ、西坊城小路西側溝(SD-30)及び楊梅小路北側溝(SD-23)が検出されている。また、当該箇所の北側で平成9年に発掘調査(97HK-XF013)が行われ、西坊城小路西側溝(SD-40～42・50)が検出されている。平成10年調査の西坊城小路西側溝(SD-30)溝芯と今回の東側溝の溝1・2間は約7.6mあり、溝1・2は東側溝であると考えてよい。一方、楊梅小路北側溝

は、平成 10 年調査の楊梅小路北側溝(SD-23)と今回調査の溝 4 とは約 3 m 程のずれが生じていることが判明した。今回検出した溝 4 は楊梅小路北築地芯の直上に位置しており、問題を残した。

柱穴は、建物として復元するには至らないが、平安時代と考えられるものを 2 基検出した。

土取穴と考えられる土坑群は、1 トレンチ東端、2 トレンチ北半、3 トレンチ北半で検出した。断割の結果では、土坑間には対象となる無遺物層の掘り残しが壁となって遺存しており、土取穴で比較的良好な形態を呈する。ただし、今回検出した各地点の土取穴は、下層の砂礫層には至らず、シルトないし粘土層中が底面となっている。このため、無遺物層のシルトないし粘土層が堆積している箇所的大部分で土取穴が広がっている可能性が高いが、掘削深度が 0.5m 前後程度であることから、やや深い遺構であれば、土取穴の底面に遺存している可能性があると考えられる。また、当該箇所から平安時代前期から室町時代後期にかけての遺物が出土しており、土取りは室町時代後期に行われたことを示している。

出土遺物の大半は、土取穴の断割ないし遺構検出中に出土したものである。縄文時代後期に属すると考えられる土器片が出土したが、西接する六町域の調査では縄文時代の湿地が広がっていたことが明らかにされており、関連する遺物であろう。歴史時代の遺物では、平安時代前期から室町時代後期にかけてのものが出土している。土器の破片数は、供膳形態のもので土師器が 86.5%、須恵器が 1.3%、黒色土器が 0.3%、緑釉陶器が 1.3%、灰釉陶器が 1.0%、瓦器が 4.4%、輸入陶磁器が 5.4% の比率を示す。

以上、今回の試掘調査における成果を示した。断続的ながら、遺構・遺物ともに今回の調査地点における遺跡の変遷を示すものである。

(辻 裕司)

3 名勝清風荘庭園

経過 清風荘は京都市左京区田中開田町に所在する、西園寺公望が使用した別荘である。大正期に造作された和風庭園並びに数寄屋建築群及び江戸時代末期に造られたとされる茶室からなり、庭園は国指定の名勝、建築群は京都市の登録有形文化財に指定されている。

邸内には主屋に面して北東から南西方向に広がる池がある。池の平面形は瓢箪形を呈し、西方の土橋が架かる箇所狭まる。池の現況は、底面から水際までモルタルで仕上げられる。近年、モルタルの劣化によるひび割れで漏水が確認され、池の修理が計画され、事前に確認調査を実施することになった。確認調査によって得られた成果が池の修理時の参考とされるため、確認調査では池の破壊を最小限にとどめたくて、池底面の造作及び構築方法、池底面に対する護岸石敷設方法などを明らかにすることを目的とし、原則として陸側の調査はしない。また、池底面に張られているモルタルは当初(大正期)の造作(池底面)であるか、後世の造作であるがについても明らかにすることも目的としている。

上記目的から、当初、トレンチ設定箇所は土橋が架かる箇所を境に東側で 2 箇所、西側で 2 箇所とし、西側池に飼育中の鯉を移動し東側池の水を抜いたのち、確認調査トレンチを設定する工程を反復することで東西池の調査を進める予定であった。しかし、池修理に関連する他業種との日程調整や移動に伴う鯉の衰弱などが危惧されたことから、東側池で 4 箇所確認調査トレンチを設定し



図 78 調査位置図

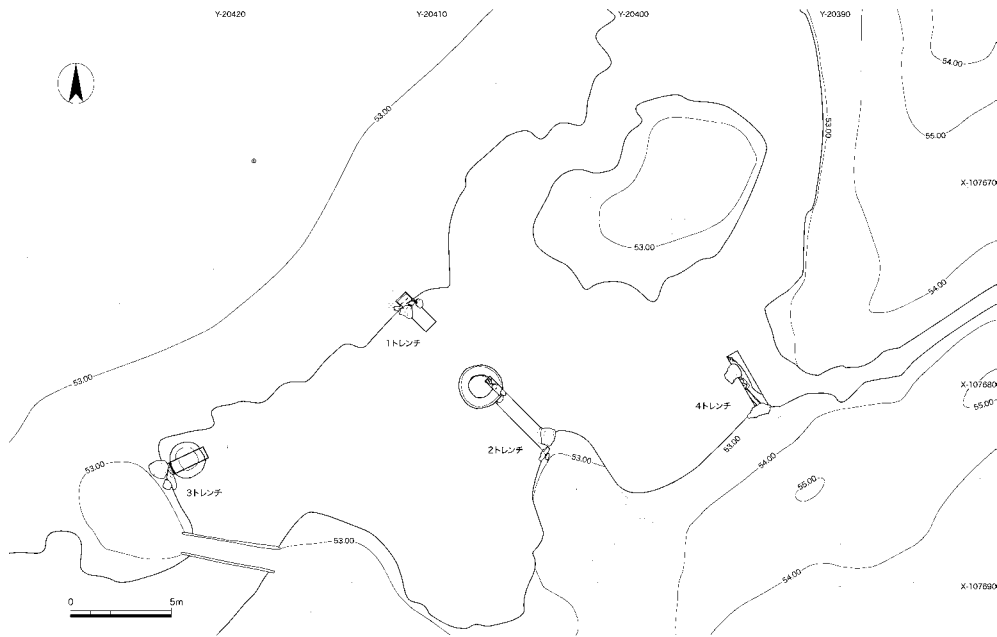


図 79 トレンチ配置図

前記目的を追求することになった。

トレンチ設定箇所は、底面の構造を把握する目的に沿う地点を検討した上で、トレンチ間に偏りがなく概して等間隔である地点に設定した。確認調査後は池の復旧がなされることから、モルタルは破壊を最小限にとどめるため、電動カッターで切断し、下面を損傷しない配慮をしつつタガネと小型ハンマーで破砕した。確認調査は平成19年12月4日に1トレンチから開始し、池底面と考えられる平坦面及び底面から護岸石に向かって張り付

けられた粘土塊を検出した。2～4トレンチについてもほぼ同様の状況を確認した。

調査面積は4箇所のトレンチを合わせ7.3㎡である。

清風荘は北白川の扇状地上に立地する。周辺には北白川縄文遺跡群をはじめ、北白川追分町遺跡、吉田本町遺跡、吉田泉殿町遺跡など縄文時代から中世・近世に至る複合遺跡が広く分布している。

邸内に広大な面積を占める庭園は、緩やかな勾配をもった芝生広庭が主屋から池に向かって広がり、池及び

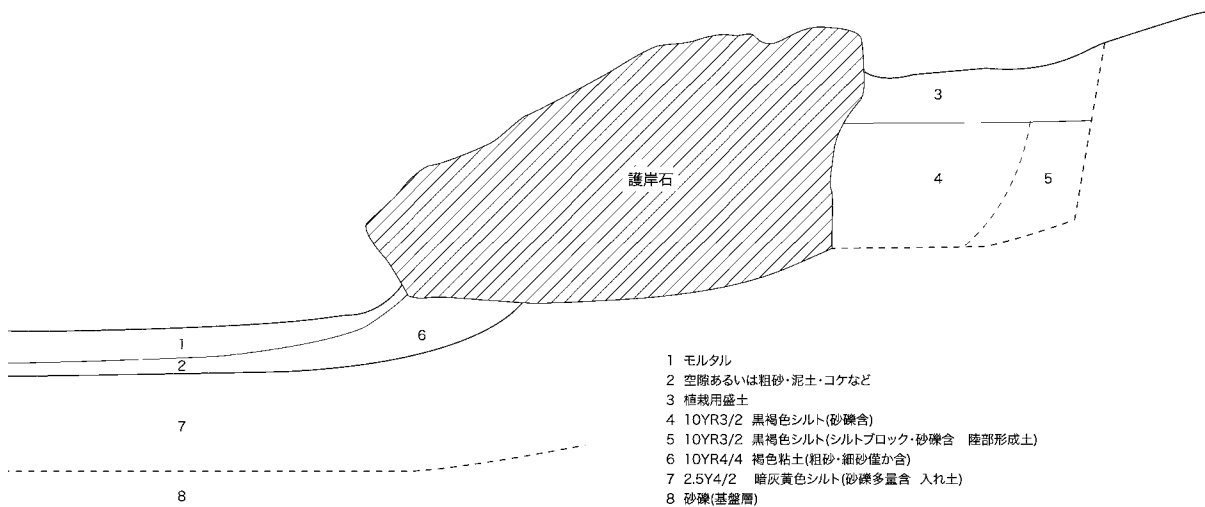


図 80 層位図

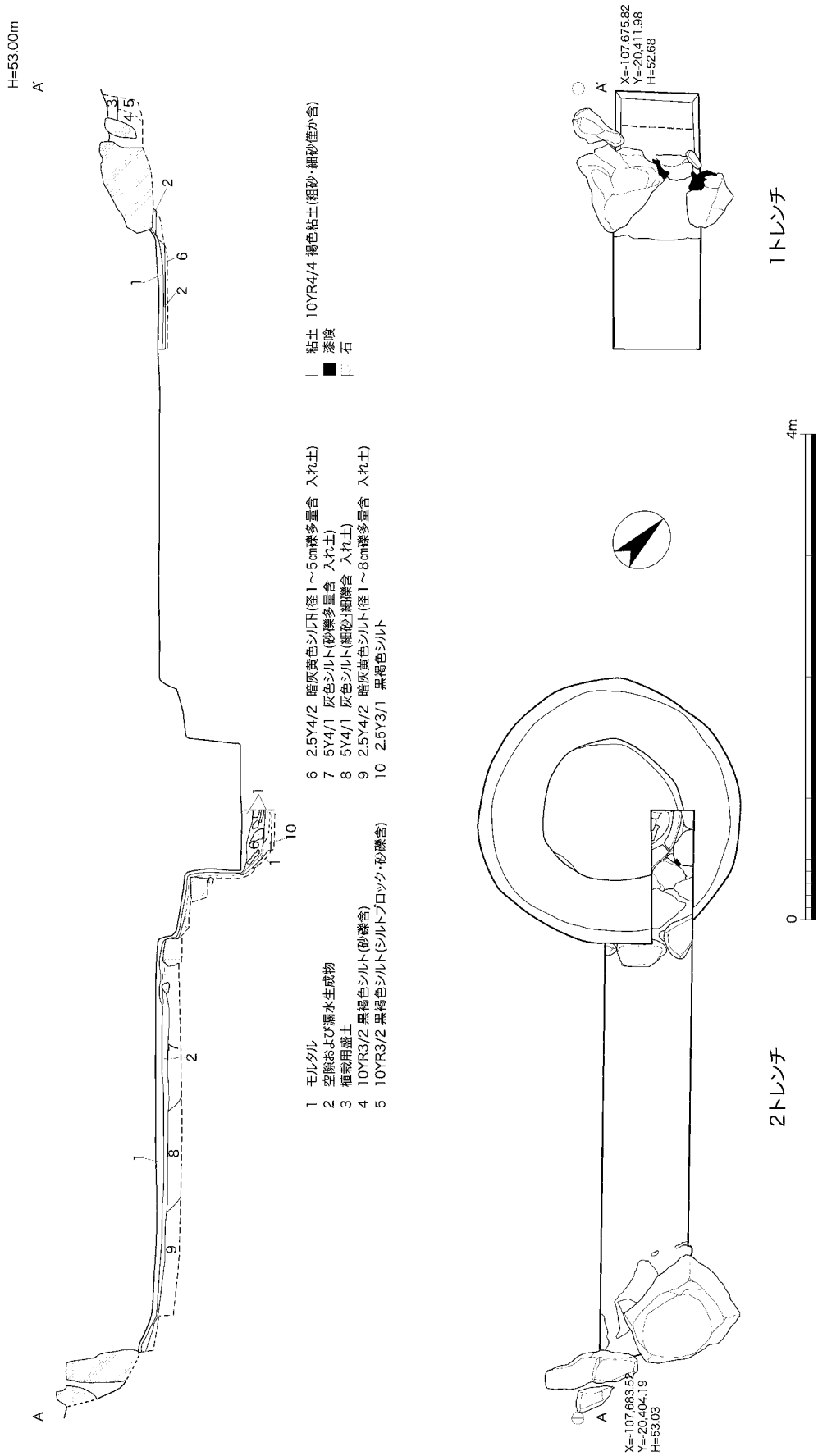


図 81 遺構実測図 1

池の背後に高まる築山などと多種多様な植生からなる。

庭園内には池が2箇所ある。1箇所は築山の南側に位置する池で、現在水は張られておらず、使用されていない。肩口に護岸石はなく、立ち上がる肩口の現況から護岸石は抜き取られた可能性がある。1箇所は調査対象となる池で、邸内北東部の水調整施設から延長する遣水が北東から南西方向に向かって蛇行し、池南東隅に位置する滝へ至る。池は北東から南西方向に弧状に広がり、肩口には密に大小様々な護岸石を敷設する。池内には東部に中島や石橋・飛石を、滝口や主屋正面付近には岩島を配する。池底面は概して南西方向に僅かに傾斜する。数箇所に深浅様々な魚溜まりを設けており、池中央部にはこの池で最も深い魚溜まりがある。池底はモルタルが張られている。中央部付近にモルタルが重なり線となって南北に延長する箇所があり、北東側から塗り上げた過程を示すものと考えられる。モルタルは各所で亀裂が走り、一部では段差が生じる箇所もある。また、底面から護岸石にかけて漆喰を使用した後世の修理痕跡も各所で見られる。

清風荘庭園の造作は、七代目小川治兵衛(植治)が行った。植治は山県有朋の別荘である無隣庵をはじめとして、平安神宮神苑、都ホテル庭園、円山公園のほか、鹿ヶ谷別荘、有芳園、碧雲荘などの作庭を明治時代から大正時代にかけて手掛けたとされ、清風荘庭園は植治がもっとも精力的に活動した時期の作庭と言える。

遺構 トレンチは図2に示したように、池中央部の魚溜まりを中心にほぼ四方に配した。このうち、1トレンチと2トレンチは、中央部にある魚溜まりを通して設定しているため、軸方向は等しい。いずれのトレンチも池底面から護岸石にかけて設定しているが、1トレンチのみ約0.4mほど護岸石から陸部にかけてトレンチを延長している。

各トレンチでは、モルタル底を除去した時点で、護岸石下部から底面にかけて、細礫・細砂を含むシルトないし泥土及びコケなど漏水に伴う生成物が堆積し、あるいは

空隙となる箇所もみられる。これらを除去すると礫を多量に含むシルト層上面となる。池の底面を整えるための入れ土と考えられる土層で、厚さは約0.3mある。土層に含まれる礫は概して平坦面を上にしており、シルト層上面で何らかの圧力を受け、面が整えられたことが窺われる。護岸石は底面(入れ土)上に直接配置しており、配置形を整えるために護岸石と底面間には据付石を置く。

なお、入れ土層の下面は未検出であるが、ボーリング棒による確認では、砂礫層が堆積しており、基盤層と考えられる。

次に、各トレンチごとに調査状況を示す。

1トレンチ 中央部魚溜まりの北側に長さ2.2m、幅0.7mの規模で設定した。底面は平坦である。底面から護岸石に向かってすりつくように粘土を貼る。粘土は褐色粘土層で僅かに粗砂・細砂を含むが、一部グライ化して灰色を呈する箇所がある。粘土と護岸石間には僅かに隙間がある。漏水によって粘土が解け流れたと考えられ、隙間には小礫を含むシルト層が堆積する。粘土層はモルタルを張り付ける工程で、底面から護岸石までの立ち上がりを緩やかに表現するための下地材と考えられる。底面を構成する入れ土層は、暗灰黄色シルト層で、径1～5cm大の礫を多量に含む。ボーリング棒による確認では、入れ土は厚さ0.3m程堆積する。入れ土下は砂礫層となり、基盤層と考えられる。

陸側では護岸石から約0.5mトレンチを拡張した。土層は上から植栽用盛土、細礫を含む黒褐色シルト、シルトブロックや砂礫を含む黒褐色シルトが堆積しており、下層の黒褐色シルトにはさらに多くの粘土塊を包含する。これらシルト土層は陸部を形成する盛土と考えられる。

2トレンチ 中央部南側に護岸石から底面及び魚溜まりにかけて長さ3.35m、幅0.7m、更に魚溜まり対し連続して長さ1.1m、幅0.35mの規模で設定した。底面から護岸石に向かってすりつくように粘土を貼るが、粘

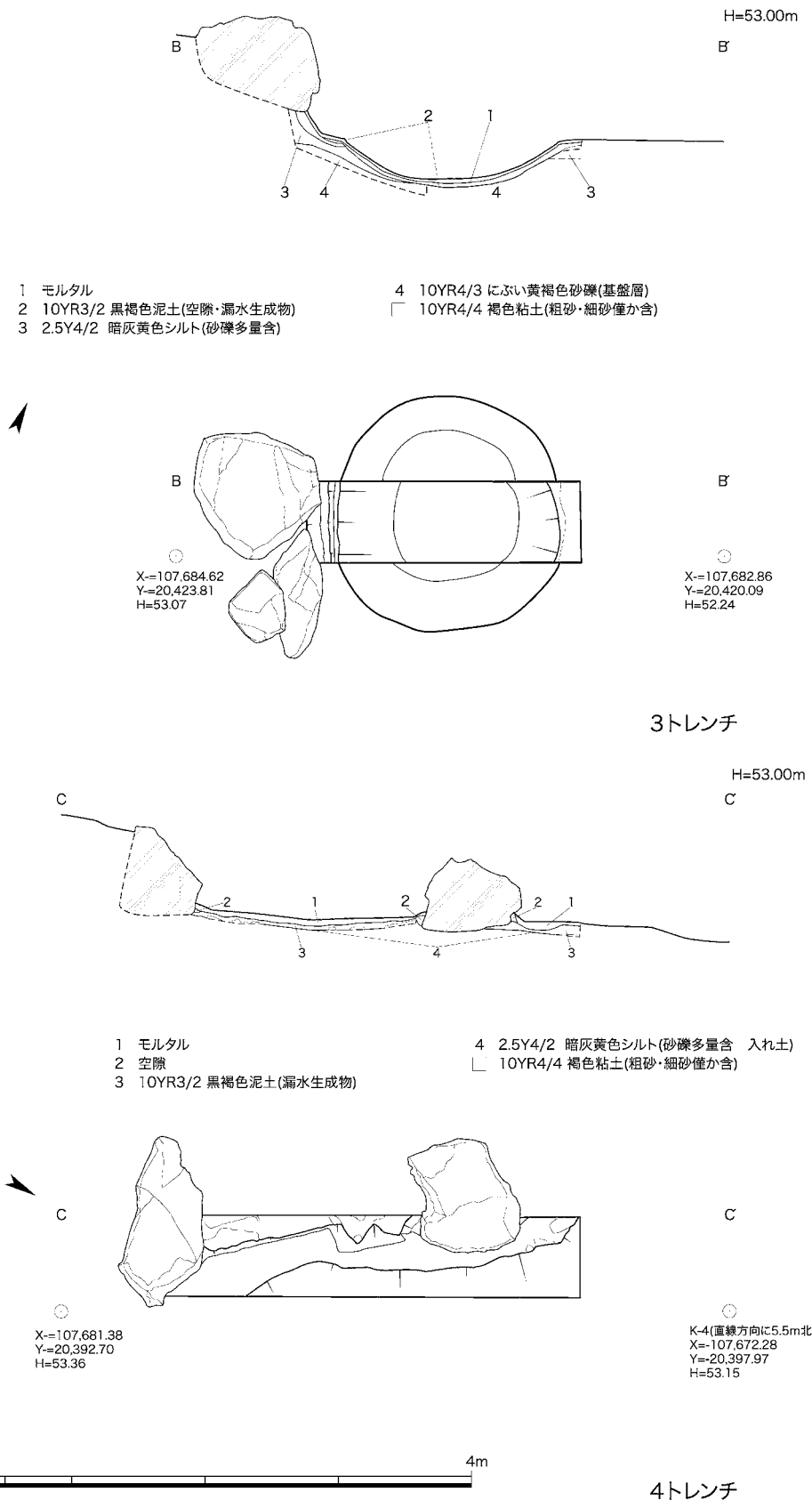


図 82 遺構実測図 2

土は漏水のためか僅かに遺存する程度で、グライ化しておりオリーブ褐色を呈する。底面は平坦で、礫は平坦面を上にした状態にある。東壁に沿って0.1mの深さで断割を行った結果、池肩口から中央に向かって入れ土を順次施したことが判明した。池肩口から順に径1～8cm前後の礫を含む暗灰黄色シルト、細礫少量や粗砂・細砂を多く含む灰色シルト、径1～15cmの礫を多く含む灰色シルトが堆積している。上面はいずれも平坦であるが、中央部の魚溜まりに行くにしたがって漏水のためにシルトが流れ出した箇所もある。

魚溜まりは、花崗岩切石などを積み上げて基礎とし、縦面に粘土を張り付けたのち、漆喰を塗り上げる。上部には目地として塗ったと考えられる漆喰が遺存する。また、上面には粘土塊が張り付けられており、モルタルを塗るための素地と考えられる。

3トレンチ(1.95m×0.6m) 西端に護岸石から底面(浅い魚溜まり)にかけて設定した。全体に入れ土を行うが、魚溜まりには基盤層の砂礫層上に直接モルタルが塗られている。他のトレンチの池底面と構造が異なり、この魚溜まりは当初のものではない可能性が高い。

4トレンチ(3.1m×0.6m) 滝口下に護岸石から底面及び島石にかけて設定した。底面は平坦で、礫は平坦面を上にした状態にある。護岸石から島石にかけて粘土の帯が延長しており、モルタルを塗るための下地と考えられる。この箇所が最も高位にあり、滝口から流れた水を北側へ導く造作であろう。

遺物 遺物は1トレンチの護岸石背面の陸部で近現代の陶磁器類の極細片が数片出土したに過ぎない。

なお、モルタルの破片も暫定的に遺物として記録した。モルタルは、下地と上塗りの2層からなる。上塗りには砂粒とともに石灰と考えられる白色粒を多量に含む。

小結 清風荘に所在する池について確認調査を実施した結果、池の構造の一端を明らかにすることができた。2トレンチでは魚溜まりの構造から複数の時期にわたる工程が読み取れる。また、3トレンチでは他のトレンチ

と比較すると造作過程に相違箇所が多く見受けられ、2・3トレンチの成果からこの池が2時期ある根拠の一つと考えられるため、次に概要を示す。

2トレンチ

1)魚溜まりは幅0.3mのトレンチであり全容は不明であるが、底面は少なくとも2時期あるようである。最下部からの層順を示すと、基盤層(砂礫)?→黄色粘土→黒色粘土シルト→モルタル(水平、中央に向かいレンズ状に窪む。規模や原位置にあるかは不明)・側縁にはコンクリート片を斜めに立てる・水平モルタル外縁から斜めコンクリート片にかけて黄色粘土を貼る→長さ0.1～0.15mの栗石を敷き詰める→現モルタルの順序となる。

栗石は底上げ材と考えられ、現モルタルと一体の造作である。栗石下部の水平モルタルや斜めコンクリート片及び黄色粘土は、現モルタルと一体の造作であるか、旧池の構造材であるかはわからない。しかし、斜めコンクリート片に含まれる礫材の大きさは、現モルタル下半のコンクリートに含まれる礫材の大きさに比較して大粒であることから、現モルタルとは素材は異なる。また、下部構造材とは言え、敢えてコンクリート片を搬入したとは考えられず、前身となる魚溜まりに敷かれていたコンクリートを破壊し、再利用したことが想定できる。したがって、水平モルタルや斜めコンクリート片及び黄色粘土は、現モルタルと一体の造作である可能性もある。

なお、水平モルタルや斜めコンクリート片及び黄色粘土は縦面の黄色粘土表面に遺存する漆喰(痕跡)と同じ工程に含まれる可能性もあるが、斜めコンクリート片上の黄色粘土表面には漆喰はみられない。結果、漆喰を塗りあるいは目地として利用した魚溜まりと、現モルタルで成形した魚溜まりの2つの造作過程のあることが明らかになった。

3トレンチ

1)他のトレンチではモルタル直下の面から約0.3m程度入れ土を施すが、このトレンチでは先述したように魚溜まり肩口下部から底面にかけて基盤層である砂礫層を

掘り込み、砂礫層上に入れ土は施さない。砂礫層上面は他に比べ高い。

2) 魚溜まりの肩口は護岸石側を除いて付近の池底面に比較して最も高い位置にあるが、魚溜まり東肩口では他のトレンチと比較して入れ土の厚さは約 0.1m と薄い。

これらの状況から、3 トレンチの魚溜まりは、当初の造作ではない可能性が高く、この魚溜まりを含めた池全体にわたる現モルタルの塗り上げが、日程差はあるものの原則として同一工程で施行されたものであると仮定すれば、現モルタルは3 トレンチの魚溜まり新設時に新たに塗り上げられたと考えられる。

(辻 裕司)

4 史跡荷田春満旧宅・伏見稲荷大社境内

経過 今回の調査地は、江戸時代の国文学者で「国学の四大人」の一人である荷田春満の居宅跡とされ、史跡荷田春満旧宅として伏見稲荷大社の楼門脇に位置する。敷地は、もともと伏見稲荷大社の社家の屋敷地の一つであり、現存する建物は、社家の屋敷構えがわかる貴重な例である。天明年間の建物指図によれば、建物の南東にさらに屋敷が広がっていることが確認できる。

今回の調査は、敷地内で庭園整備が計画されたことから、地下の遺構状況を確認することを目的とした事前確認調査である。また、調査地の東側に広がる稲荷山には、稲荷山古墳群が存在することから、当該期の遺構、遺物の検出も予想された。

調査の結果、整地層と建物礎石に伴うと考えられる根固石を5箇所確認した。天明時代の指図に照らし合わせると、根石が残存する柱相当部分とよく一致する。

調査終了後は、根石部分に不織布を敷き、真砂土で覆い、土嚢を置いて埋め戻しを行い、遺構の保存を行った。

遺構 今回の調査は、地下の遺構の状況を確認することを主眼とした調査であることから、天明時代の指図を参考に調査区を配置するように指導を受け、3箇所の調査区を設定し、1～3 トレンチとした。



図 83 調査位置図

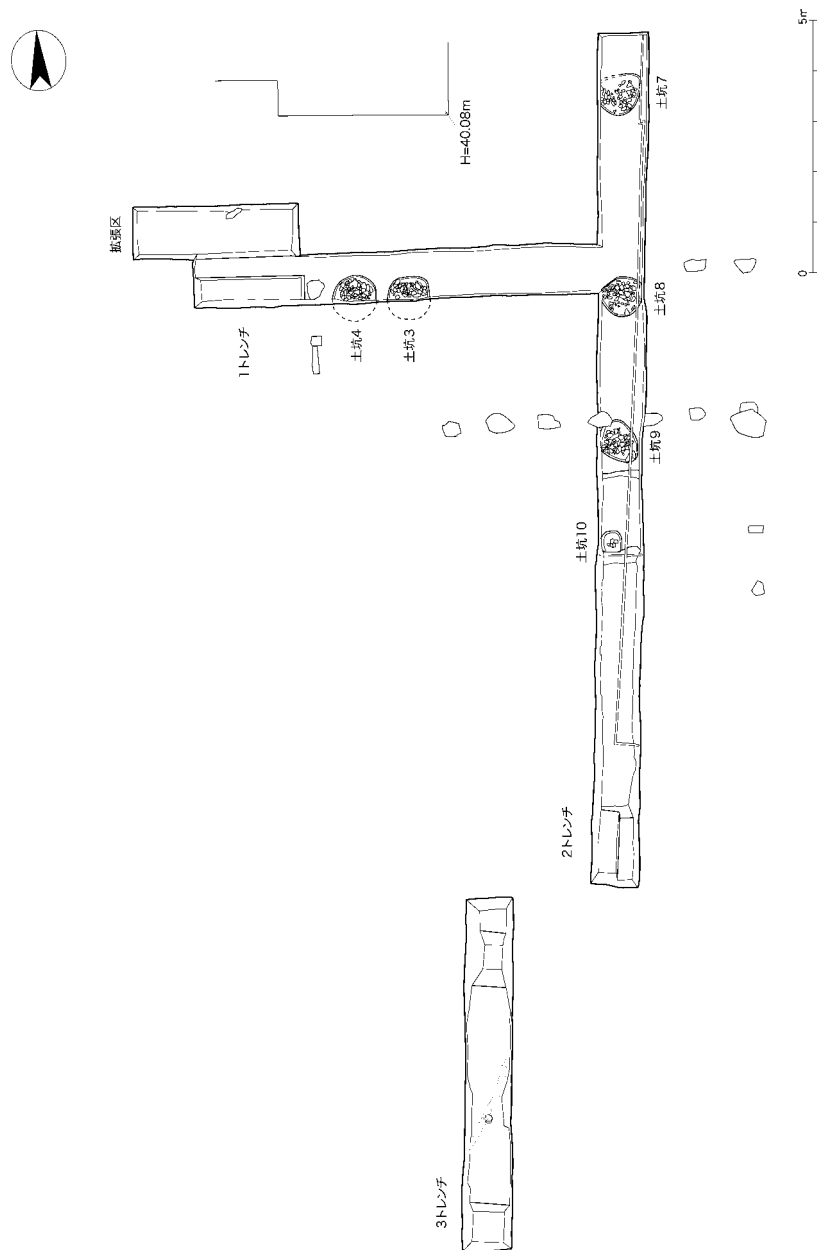


図 84 遺構平面図

基本層序

調査地の現地表面の標高は約 40.0 mであるが、敷地西端は高さ約 3 mの石垣によって土地境となっており、邸宅造成時に大規模な造成がなされたと考えられる。今回の調査においても、下層の確認のため、3トレンチの一部を GL-1.3 mまで掘り下げたが、最下層でも江戸時代の整地層であり、無遺物層は確認できなかった。基本層序は、1トレンチと2トレンチの北側では、厚さ約 5 cmの表土を剥ぐと、屋敷が成立していた旧地表面の黒褐色

色砂質土となる。以下 GL-0.15 mで根固石を検出した黒褐色砂質土層である。敷地の南半分に該当する2トレンチ南側と3トレンチでは GL-0.3 ~ 0.4 mまで耕作土であり、旧地表面は一部削平されている。しかし、3トレンチの断割では、耕作土の下層で遺構を確認している。

江戸時代の遺構

1トレンチ、2トレンチで建物礎石に伴うと考えられる根固石を5箇所確認した(土坑3・4・7~9)。いずれも直径約 80cmであり、約 5 cm掘り窪めて、5 ~ 15

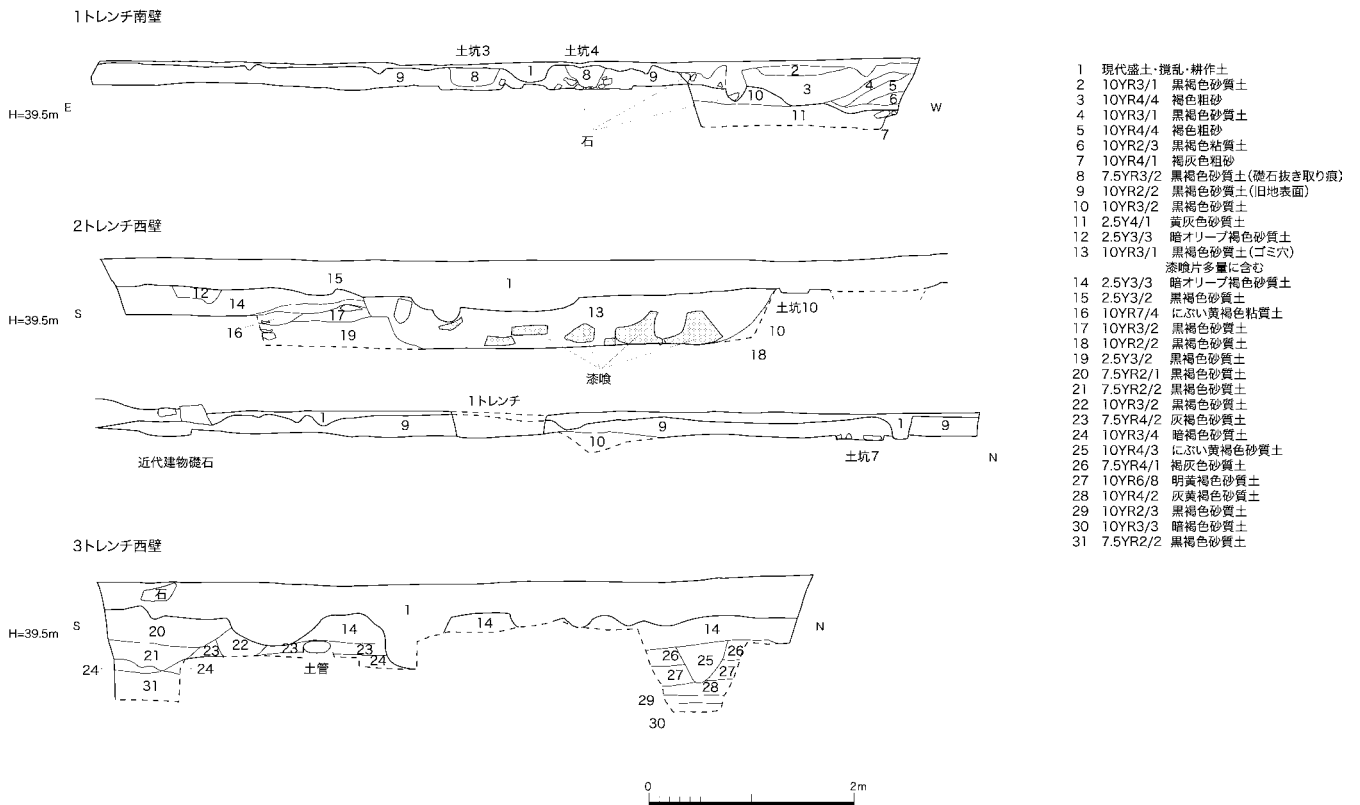


図 85 断面図

cmの大きさの栗石を敷き詰めている。土坑3・4では、栗石の中央部分が凹んでおり、礎石を据えつけていた痕跡が残る。土層の観察状況から、栗石を敷いた上に礎石を据えて、礎石上面まで黒褐色砂質土で整地を行っていることがわかる。

建物指図から、確認した根石跡5箇所中、4箇所は隅柱に相当することがわかる。

また、3トレンチの断割断面で遺構を確認している。遺構から遺物は出土していないが、遺構成立面から出土している遺物は17世紀後半に属するものである。

遺物 伏見稲荷大社社家が存在した江戸時代の遺物が大半を占める。

古墳時代の遺物

表土層から古墳時代の須恵器杯蓋が出土している。

平安時代後期

明治時代のゴミ捨て穴から山城産の単弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している。

江戸時代の遺物

遺物は表土層、各遺構、整地層から出土しているが、ほとんどが整地層から出土している。土師器皿の出土が目立つのは、社家という遺跡の性格に関係するものと考えられる。また、国産の施釉陶器、焼締陶器もあるが、禁裏御用品の肥前系染付も数点出土している。整地層からは、えな壺も出土しており、中からは炭が確認できた。

確認できた最下層の整地層(土層30)から出土した土師器皿と染付の年代は17世紀後半域である。

小結 今回の調査の主眼は、江戸時代に存在した建物の痕跡を確認することであった。調査の結果、栗石を敷き詰めた根石跡を5箇所確認することができた。天明年間に描かれた指図から、確認した5箇所の根石の内、4箇所が隅柱に相当する場所であることがわかり、建物の存在が裏付けられた。調査区の南側は廃絶後に耕作地として利用されたと考えられ、実際に建物の痕跡を確認することはできなかった。

また、現存する礎石列の礎石の下には根固石は存在せ



図 86 調査地状況



図 87 調査地全景（南西より）

ず、土層の関係から近代以降の建物に伴うものであることがわかった。

出土遺物は、17世紀以降のものがほとんどである。確認した最下層の整地層（土層30）から出土した遺物の年代は17世紀後半に属するものであり、上層の整地層（土層9・14）から出土した遺物は17世紀後半域～18世紀初頭に属する。以上のことから、当地は17世紀後半に大規模な盛土（土層26～31）を行い、その後、17世紀後半域～18世紀初頭にかけて再度盛土（土層9・14など）を行い、現存する建物を含む屋敷が成立したと考えられる。また、19世紀後半の遺物の出土も目立つことから、屋敷が廃絶した年代を表していると考えられる。

（西森 正晃）

5 特別史跡・特別名勝醍醐寺三宝院庭園

経過 本調査は、平成14年度から継続して行われてきた、特別史跡・特別名勝醍醐寺三宝院庭園修理整備に伴う立会調査である。

今回の調査箇所は、重要文化財に指定されている純浄観の床下を潜り、宸殿西側から松月亭へと続く池（J地区）、純浄観南の土橋から純浄観までの兩岸（N・E地区）、表書院前の入り江（O地区）である。また、池南東に位置する三段の滝（E地区）で、流れ底に貼られたモルタルに亀裂等の破損があるため、下部の状況を確認する目的で、上段・下段の2箇所に調査区を設定した。

調査にあたり、池底から天端石下部までは、昭和58年の修復時の覆土及び栗石を除去した。石上面は陸部際の表土を剥ぎ、一部植栽による腐植土層などを除去した。

J地区では、表土を除去した段階で、露出した天端石や、排水路を確認した。また、据え直しが必要であると考えられる天端石の背面には、必要に応じて断割りをし、土層観察を行った。

O地区では、池底で杭を確認した。また、天端石の下部に、マンガンを多く含む堆積層が強く締まった状態の箇所を確認した。北岸・南岸の一部では、

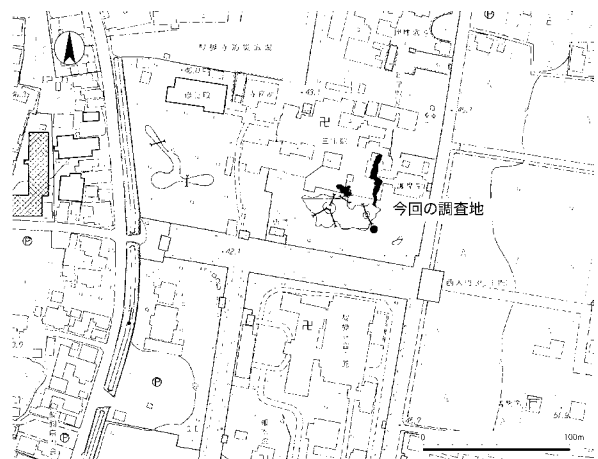


図 88 調査位置図

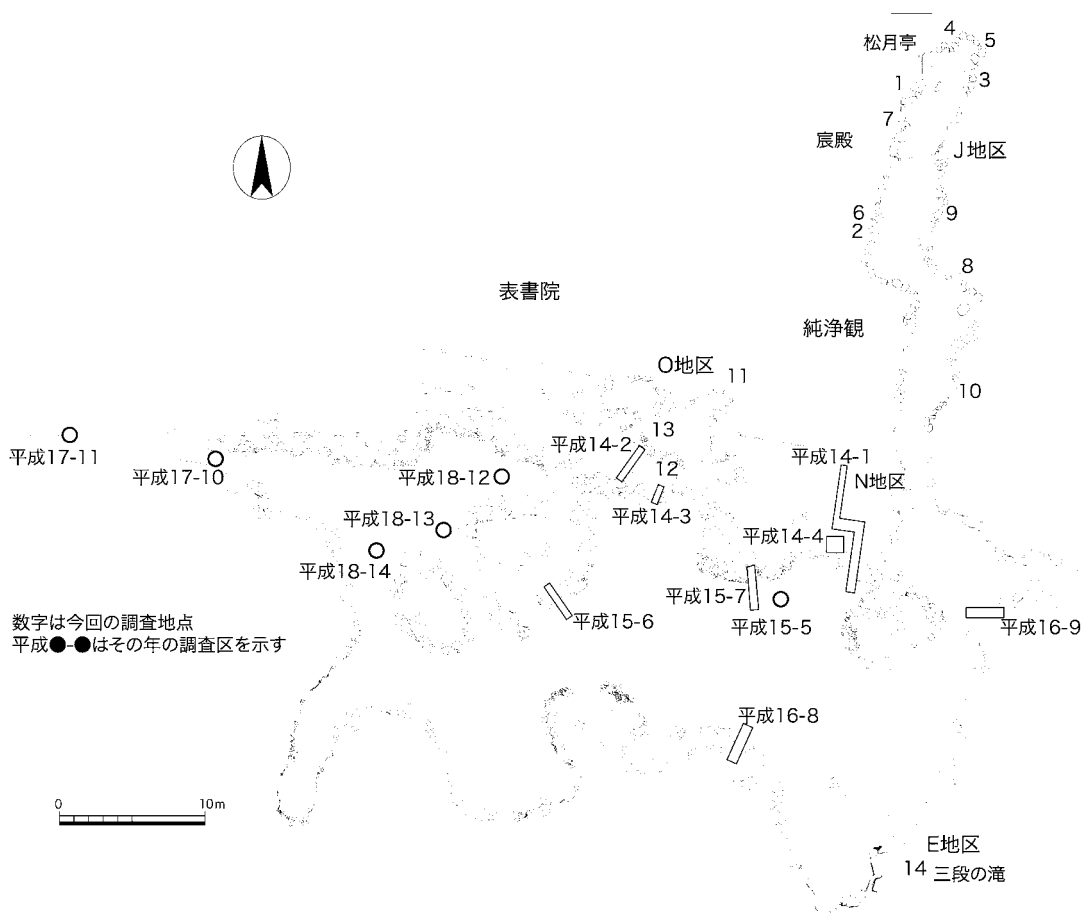


図 89 調査区配置図（単独数字は、本文中の調査区 No. に対応）

石の背面が空洞化した箇所を確認したが、概ね基盤面は安定していた。

E地区の三段の滝では、上段から下段にかけて幅0.5 m、長さ約4 mを断割った。その結果、基盤面と考えられる整地層を一部で確認した。石の周辺では空洞化した箇所や前回の修復時に混入したモルタルや漆喰片を確認した。この部分は修理の必要の是非を確認するための調査区であったため、掘削は最小限に留めた。

なお、本報告で使用した地区名・天端石の番号については、昨年に引き続き、修理検討委員会で提示された護岸修復工事計画平面図による。

遺構 以下では、地区ごとに観察結果を述べていく。工事の進捗に合わせて調査を行ったため、調査地点の番号は不規則になっている。主なものは図化し、後記した。

N・E地区（土橋北から純浄観前） 表土を除去した状態で観察したが、石の崩れはなく、基盤層は安定していた。掘削した箇所がないため写真で記録した。

J地区（純浄観床下から北の池）

No.1 表土を除去した段階で確認した、漆喰の縦樋排水路である。縦樋から雨水を受け、石52・53の間から池に排水する。漆喰は劣化しており、土壌化している部分もあるため、すべて取り除いた。漆喰の排水路は現陸部を掘り込んで造られていることを確認した。漆喰は、現存する厚さが最大約2 cmあった。縦樋からの受け部分は周囲三方を石で囲み、モルタルが詰められている。この部分は現状を維持したまま造り直すため、下部の確認はしていない。しかし一部が漆喰の上に貼られているため、後に修理されたものであろう。

No.2 石36・37間に土管の排水口が確認された。石

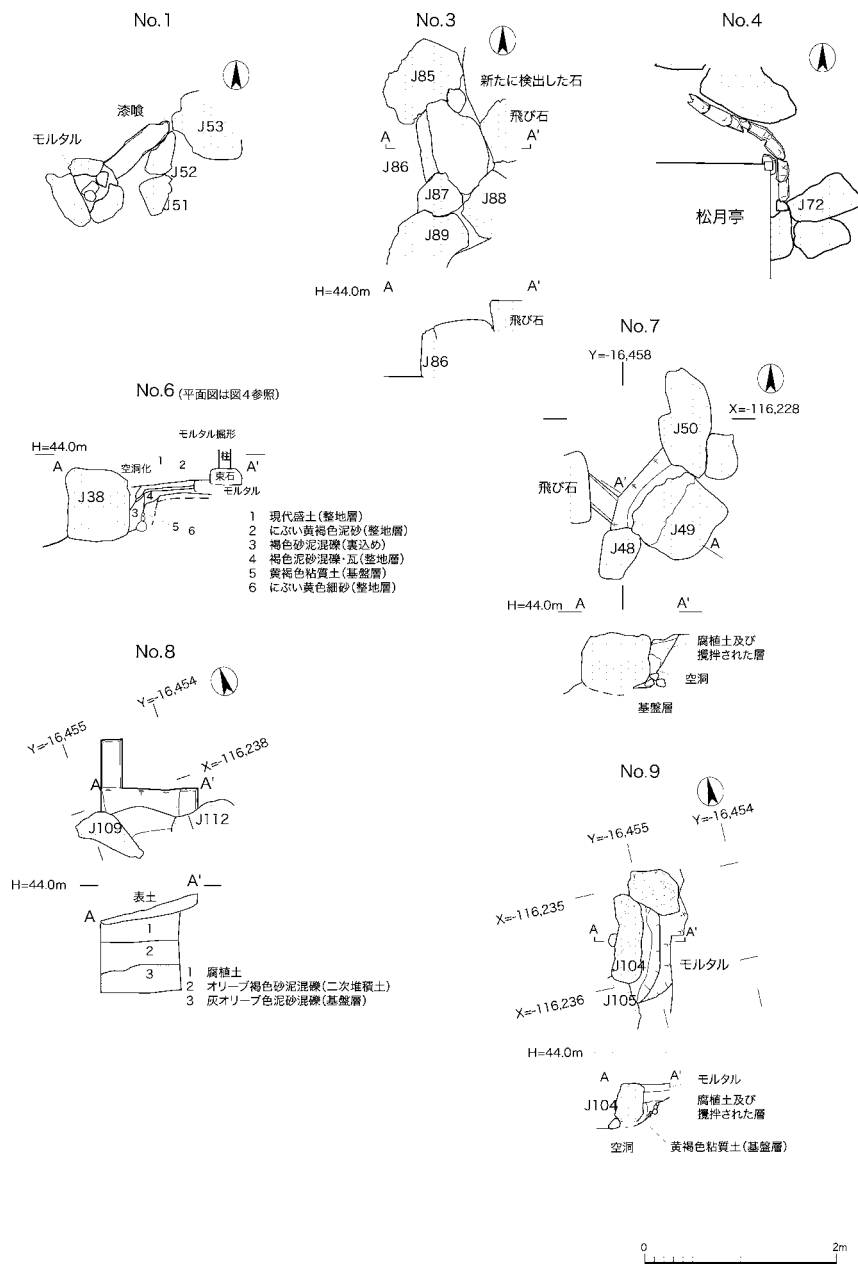


図 90 J 地区実測図

と接する部分はモルタルで接着しているが、破損しており、排水口から流れる水は石の背面を伝っていく状態であった。土管の状態及び空洞化した石の背面を確認するため、南北約 0.5 m、東西約 0.7 m の断割を入れた。地表下 0.15 m に土管は設置されており、上面の一部は地表に露出していた。土管の北側では現整地面のにぶい黄褐色泥砂層、瓦片・礫を混入した褐色泥砂層、にぶい黄色細砂層の整地層を確認した。上層の 2 層は版築状に突き固められている。下層の細砂層はこの上面までの掘削

であったため、詳細は不明であるが現建物以前の整地層の可能性もある。土管の南側ではこの細砂層の整地面は検出していない。石 36 の背面の土層に大きく亀裂が入っており、水の浸食による空洞が石 36 から石 37 にかけて広がる状況であった。

No. 3 表土を除去し検出した天端石である。厚く苔に覆われた状態であった。石 86 と並列し、密接して平坦な面を作る。この石の東から一段上がって飛び石が連なる。

No.4 表土を除去した段階で確認された瓦敷きの排水路である。松月亭の北側の縦樋から雨水を受け、建物を回りこみながら石 72 の際から池へ排水する。丸瓦 8 枚を裏向きに並べる。瓦の一部が破損していたが、状態の良い瓦を 1 枚取り上げ、実測図を作成した後、現状復帰させた。瓦は室町時代から江戸時代初期に造られたものであるが、松月亭が江戸時代末期に建てられたものとされているため、この排水路もその後のものと考えられる。

No.5 モルタルで造られた排水路で、石 78・79 の間から池に排水される。ほぼ現状のままであるため、写真記録のみである。

No.6 石 38 と陸部の間が大きく窪んでおり、背面の状況確認のため東西約 0.9 m、南北 0.5 m の断割を入れた。整地層の堆積状況は No.2 とほぼ同じである。陸部と石との境が攪拌され明確ではないが、にぶい黄色細砂の整地層を掘り込み、基盤となる黄褐色粘質土層がみられる。上 2 層の整地層は基盤層の上に堆積している状況がみられる。裏込めの褐色砂泥層は水の浸食が著しく上の整地層とともに崩落している。石 38 をはずした状態で

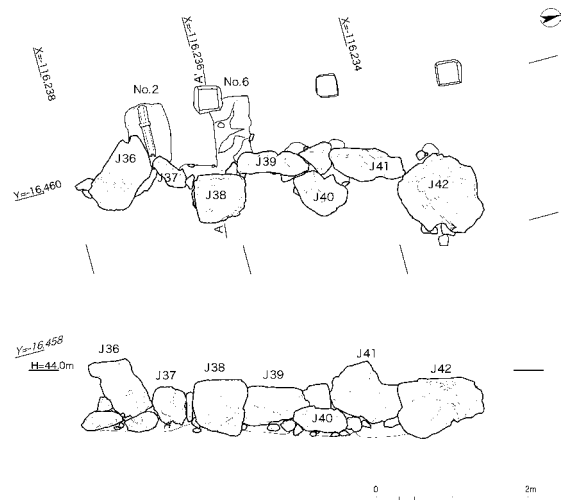


図 91 J 地区天端石実測図

下面を確認したが、池底部から汀の上がりを検出したため、前面にやや張り出したと判断した。

この断割では、西側の奥宸殿の回廊の柱を支える束石までの断面を確認した。束石周辺は現地表から掘り込み、厚さ約 10cm、幅約 18cm のモルタルで補修していることが判明した。

No.7 石 49 と陸部の境が表土を除去した段階で空洞化していることが判明したため、その背面の状況を確認

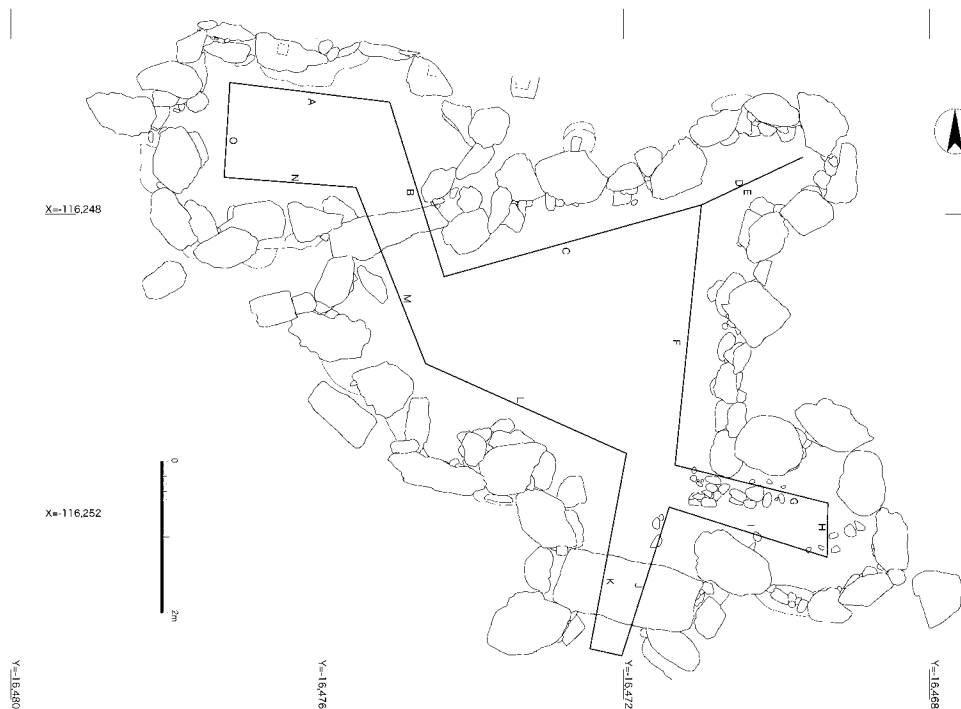


図 92 O 地区平面図及び立面図配置図

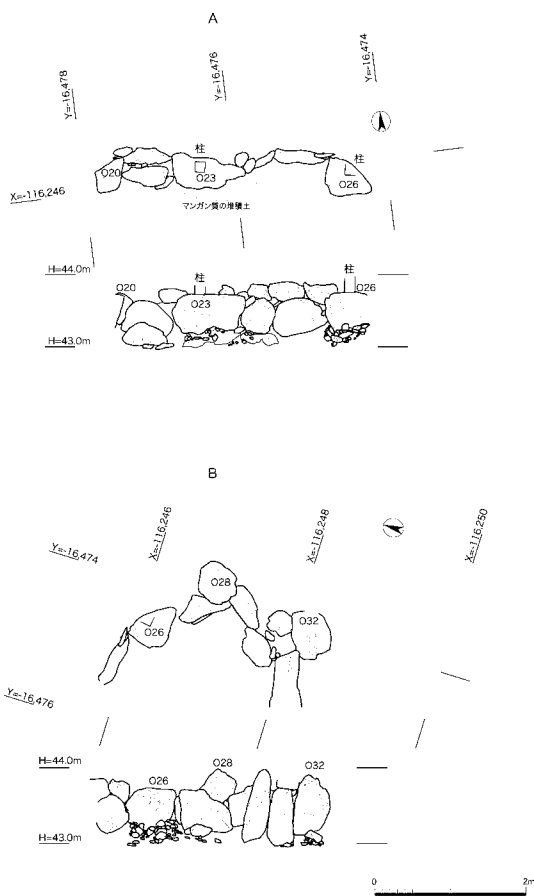


図93 O地区A・B実測図

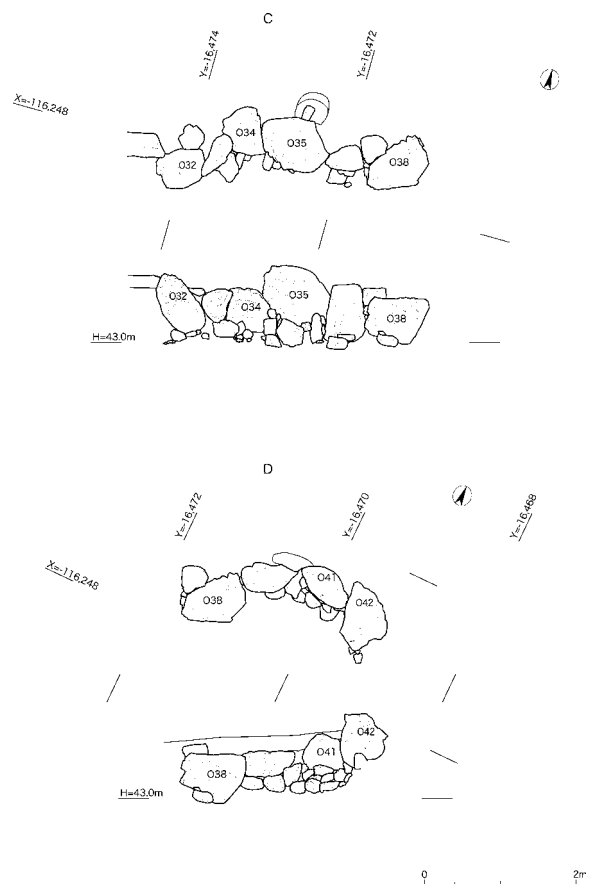


図94 O地区C・D実測図

するため断割を入れた。上層は植物の根により攪乱され腐植土が堆積していた。下層は水の侵食により削りとりられ、空洞化していた。石49は石50と接しており、背面下部に15～20cm大の礫が当石の役割をはたしている。基盤となる面も確認できたため、この状態を維持していると判断した。

No.8 石109～112間は池東岸の滝の南側で、池が屈曲する位置にあたる。東側が一段高く盛り上がり、自然地形を利用した築山状になる。石109～111は表土を除去した段階で、南西に崩落していることが予想された。石の背面では崩落した堆積土とその下は空洞化した状況をみられた。さらに径約0.3mの石が堆積土中より出土し、池底にも0.2～0.4mの石が崩落していた。石110を移動させ、土層観察をした結果、底部から陸部へ上がる傾斜面を確認し、造成基盤となる層を検

出した。

No.9 石104は滝口となる天端石である。下部背面が空洞化している状況がみられたため、東西約0.4m、南北約1.2mの断割をいれた。流れ底には厚さ5～8cmのモルタルが貼られており、その下は植物の根により攪拌された腐植土層となる。裏込には厚さ4～5cmの以前のモルタル片が瓦片、礫と共に混入していた。石104の背面と下部は大きく空洞化しており、北側にその傾向が顕著であった。

No.10 石128・129は純浄観床下の東側である。上面は漆喰を薄く貼って仕上げた堅牢な床面である。下部背面に空洞化がみられるため、128・129の間を一部土層確認のため削ったが、上面と同じ土層であった。下部の空洞化した箇所から背面の土層を削りとり、確認した結果、上面と同様の土層で一体の基盤層であることが判

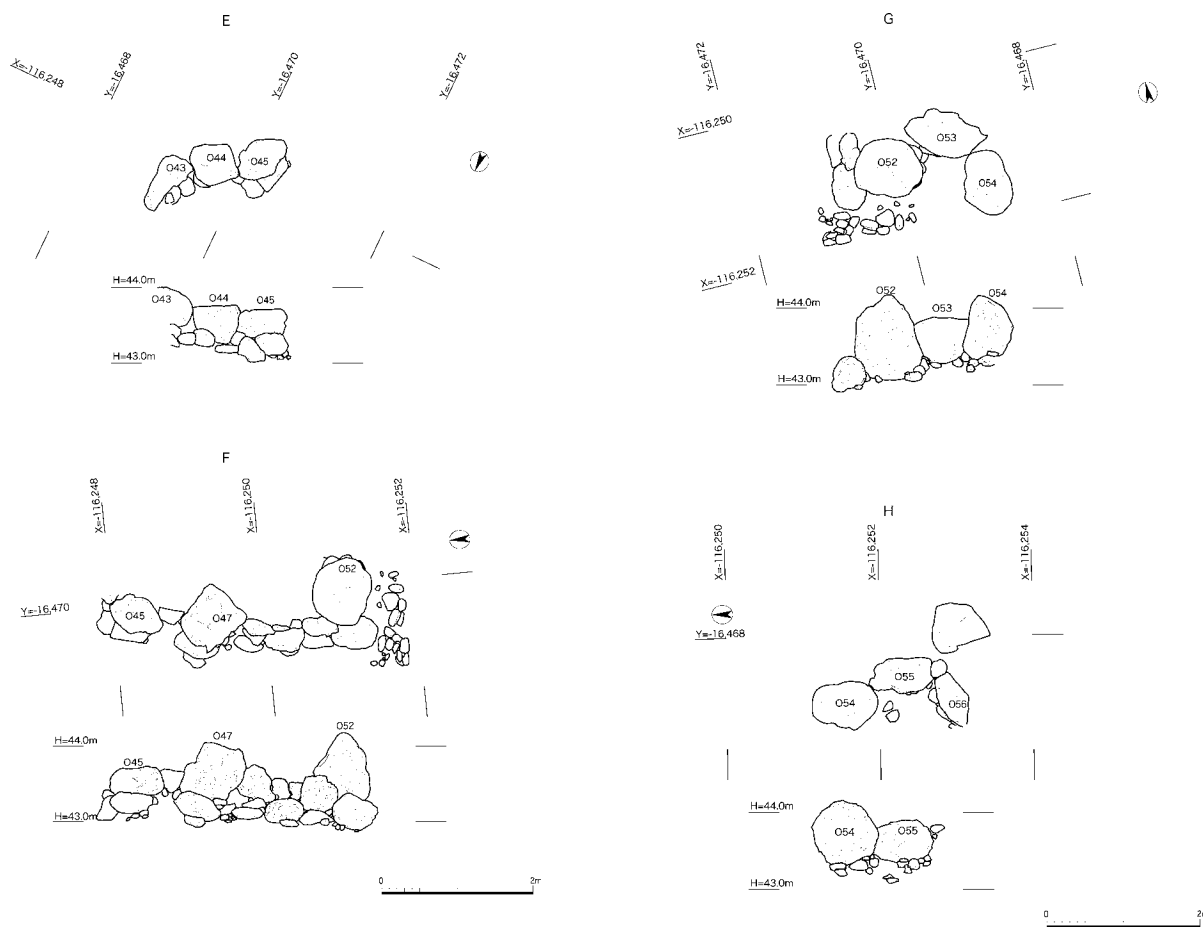


図 95 O 地区 E・F・G・H 実測図

明した。

J 地区ではそれ以外に、純浄観床下にあたる池部分で、根固めの石が周りを囲む柱状の木や杭を検出した。これは現状のまま埋め戻した。また幅 0.14 m、長さ約 1.2 m の板材が石 122 の下に敷かれた状態で検出された。板は 0.66 m 分が石より突き出した状態であったが、鋸目の残存状況などから近代の修復時にいれられたものと判断して、取り除いた。

なお、池北部の底部の標高は 43.16 m、石 106 前付近で 43.14 m であった。

O 地区（表書院前）O 地区全体をオルソ実測し、平面・立面図を作成した。

No. 11 石 39 ～ 43 の接する部分で土層を観察した結果、表土以下、黄褐色粘質土の基盤層を確認した。

No. 12 石 6 ～ 8 の接する部分で土層を観察した。表

土以下、0.2 m 厚のオリーブ褐色砂泥層、それ以下は基盤となる粘質土層が緩やかに池底へと続く。石橋西側の陸部の表土を除去し、土層観察を行った。表土直下に灰色泥砂の整地層となり、石橋付近まで続く。この面での石橋の改修は確認していない。整地層は平成 14 年調査の 3 トレンチで検出した、江戸時代初頭の整地層と同様のものとみられる。

小さな入り江の池底で、杭を 1 本検出した。用途は不明である。この杭は現状のまま残した。

この地区ではマンガンを含む堆積土がみられた。表書院の縁の礎石となる石 24 付近の下部には、凝固した状態で確認された。池底部が浅いため、乾燥と浸水を繰り返すことによっておきた現象であろう。

E 地区（三段の滝）上段の流れ底から下段の流れ底まで延長約 4 m、幅 0.5 m の断割を行った。上段・下段

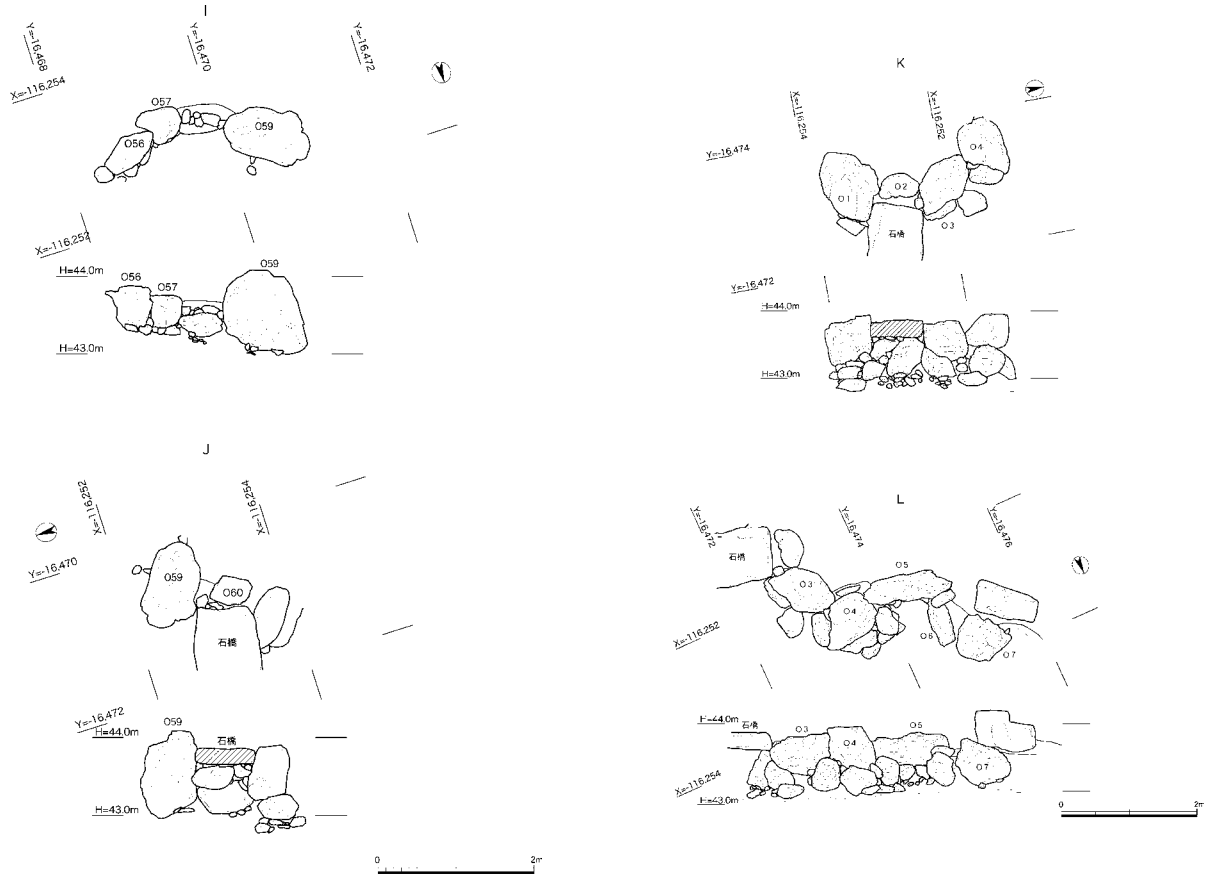


図 96 O地区I・J・K・L実測図

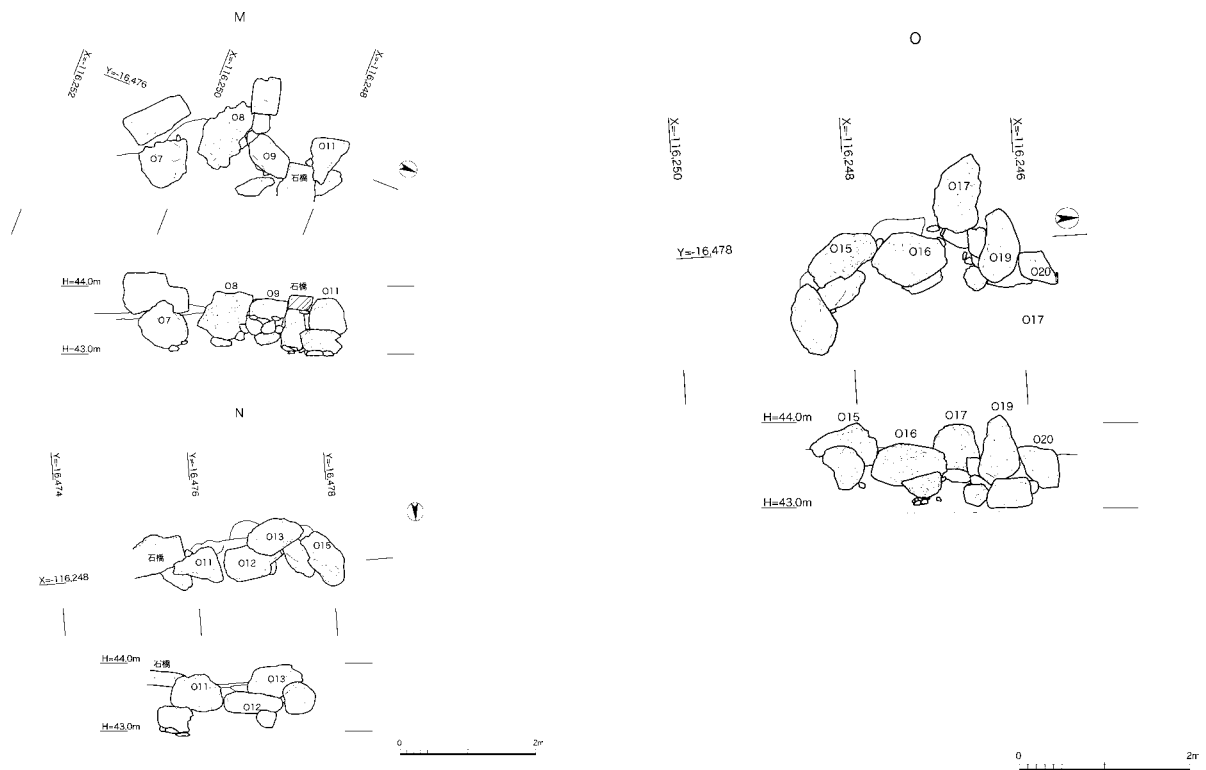


図 97 O地区M・N・O実測図

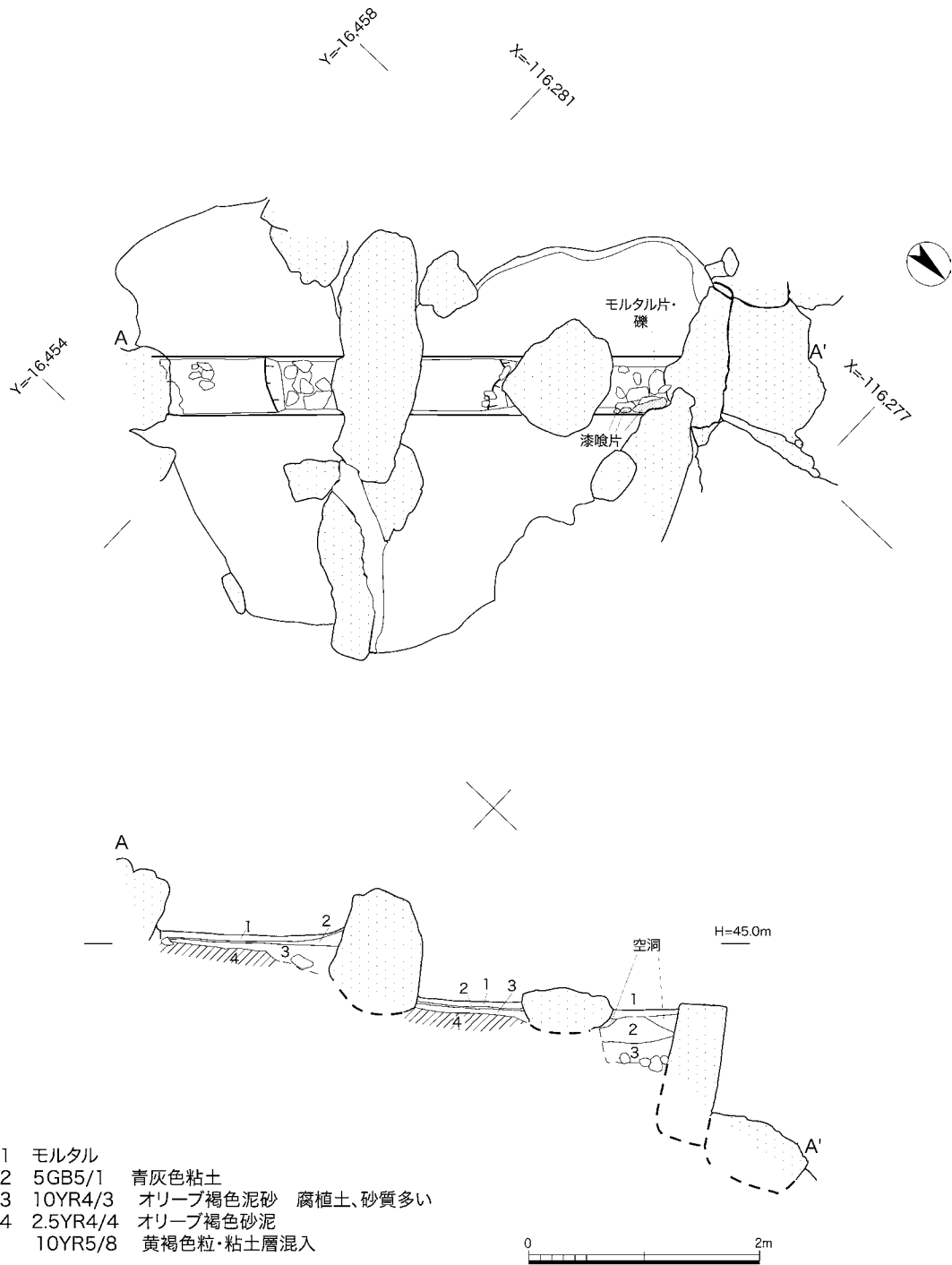


図 98 三段の滝実測図

ともに現モルタル(第1層)以下、青灰色粘土層(第2層)、砂を多く含むオリーブ褐色泥砂層(第3層)で、この層は根による攪拌を受け、腐植土層や以前のモルタル片・礫などが混入する。最下層はオリーブ褐色砂泥層(第4層)に黄褐色粒・粘土質の土層が混じる整地層の様相を

呈する。粘土層は現モルタルに張り替えたときの補修のために入れられた層であると考えられる。第3層は上段と下段の段差の境となる石の手前から、整地層を抉るように落ち込む。ここは水流の影響を強く受ける場所であるため、破損が著しく、補修の粘土層が厚く入れられて

いる。また下段中央に置かれた景石でも石の手前から下がり、景石と滝口となる天端石との間はさらに深く下る。滝口の石の背面では礫を多く含み、モルタル片・瓦片・漆喰片が混入している。空洞化している箇所もある。また景石の下面も空洞化しており、粘土層を詰めた様相もみられる。こうした状況から景石は据え直した可能性もある。第4層の整地層にみられる層は、この面までの掘削であったため、詳細は不明であるが、造成基盤となる層である。

上段の流れ底の標高は45.08 m、下段滝口の石上面で44.45 m、滝口下の石上面で43.62 mであった。ちなみに滝東側の地表面の標高は46.7 mであった。

遺物 出土遺物はごくわずかである。J地区の池底で室町時代の土師器片を採取したが、周辺に近代の金属片などがあり、混入したものであろう。

整地層、天端石の裏込めなどから棧瓦が出土した。裏込めからは少量であるため、積極的に混ぜたというより、石などに混入して入ったものと考えられる。また、No.2・6で検出した整地層からは、確認した面積が狭小であるが棧瓦が一定量出土した。これは石とともに整地するために混入したものと考えられる。

小結 平成14年度から実施した三宝院の調査は、今回の調査で6回目となる。今年度は純浄観前から北の池（J地区）、表書院前の入り江（O地区）、池南東部の三段の滝を調査した。

J地区では、版築状に突き固めた整地層を検出した。第2層の整地層には江戸時代の棧瓦が混入していた。第3層の整地層は、上面の細砂層は化粧砂の様相を呈している。遺物の出土がないため時期は不明である。この面を掘り込み、池の造成基盤となる層が検出され、護岸されている状況を確認した。このことから第3層は、池が作られた時期より古いものである。

またJ地区では5箇所に排水施設を確認した。この池は宸殿や松月亭・新居間・純浄観などの建物に囲まれた場所である。それらの屋根を伝い流れる雨水を、排水す

るための場所として池を利用していたことが窺える。純浄観の樋からは、縦樋なしに直接上から落水する。松月亭の北に作られた瓦敷きの排水路は、松月亭が新居間とともに江戸時代末期に建てられたものと推定されている。用いられた瓦の年代は江戸時代初期までのものも含まれるが、古瓦を再利用して作ったものであろう。土管を埋めて作った排水路やモルタル製の排水路などは、近代以降のものであるが、引き続き池を排水として利用していったと考えられる。

三段の滝の確認調査では、造成基盤となりうる整地層を検出した。東側の地表の標高は約47 m、滝の落ちる池底では約43 mで、4 mの落差がある。東から西に下る自然地形を利用し、地山を削り取った上に整地層を入れ、造成していると考えられる。今回は下層を確認していないが、ボーリング棒で滝口となる石の背面の最下面よりさらに0.25 m下で、堅い土層を確認した。昨年の調査では、滝口の下に位置する石94直下で、造成基盤または地山と考えられる層を検出しているが、この層と同様である可能性もある。

(近藤 章子)

6 名勝龍安寺庭園

経過 今回の調査は、名勝龍安寺庭園の防災事業に伴うものである。調査地は、龍安寺境内の北西、方丈と仏殿の西側で「西之庭」と呼称されている庭の園路部分である。西之庭は、明治三十一年（1898）頃まで現在の鏡容池の北西に位置する塔頭西源院の敷地であったことから、西源院に関連する遺構を確認することを主たる目的として調査を行った。

龍安寺は、宝徳二年（1450）に細川勝元によって創建され、応仁の乱により一度焼失する。その後、勝元の実子細川政元により再興されたが、寛政九年（1797）に火災により再び方丈・開山堂・仏殿を焼失する。その後、西源院の本堂が龍安寺に移築され、それが現在の方丈となっている。その点で、移築前の現方丈が所在した調査地は龍安寺全体としても重要な意義をもつ。

調査区は、園路部分に幅 1.5 m、総延長約 34 mにわたって設定した。遺構面まで、重機で掘削を行った。東側では、現地表面から約 1 m掘り下げたところで、地山を検出した。現地表面は北東から南西に傾斜するが、地山はほぼ水平のため、南西に行くに連れて掘削深は浅くなり、南端では約 0.5 m掘り下げた深さで地山を検出した。地山面では、礎石据付け穴と考えられる遺構 6 基と、その他溝状遺構、ピットなどを検出した。予定される工事配管の掘削深より遺構検出レベルが深いことから、遺構の掘り下げは行わず、保存することとなった。写真撮影と図面類の記録を行い、礎石据付け穴 6 基については、砂嚢で保護し、調査を終了した。

遺構 調査区東端では、現地表面から約 0.8 mは、西之庭造成に伴う盛土であった（図 101 1～3 層）。うち第 3 層は地山起源の土と考えられ、均質な黄褐色の粘質粘土～シルトで固く締まる。その下に断面図 4・5 層の腐食した旧表土と床土が 0.1～0.2 m堆積する。それらを除去し、断面図 6 層の地山を検出した。地山面の標高は、95.0～95.1 mである。東端で、地山の上にマンガ

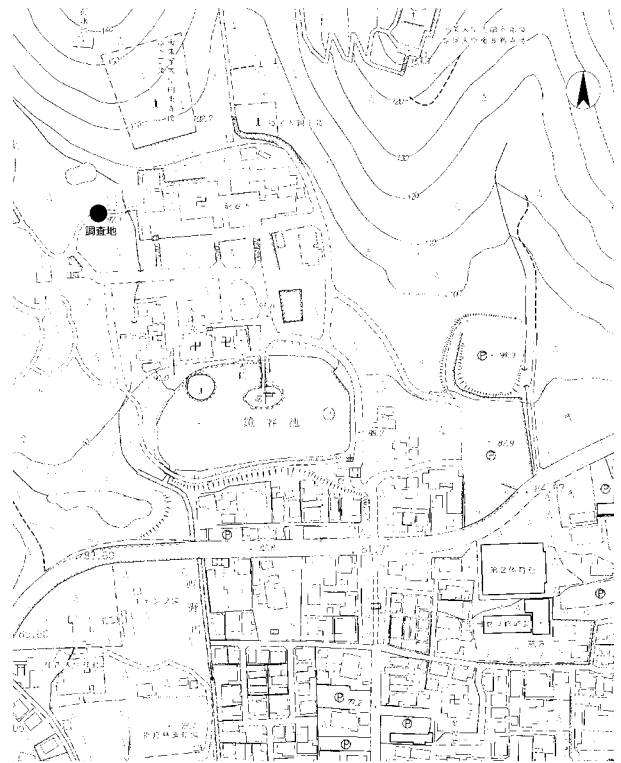


図 99 調査位置図

ンを多量に含む砂層の堆積が見られた（断面図 11 層）。この層は、礎石据付けに伴う部分的な整地層である可能性がある。

遺構は全て地山面で検出した。調査区東側では 3 基の礎石据付け穴と考えられる遺構を検出した。礎石据付け穴 1・2 は南北に並ぶ。方位は北がやや西に振れる。礎石据付け穴 1 は、直径約 1 mと推測され、根固めに直径 5～20cm のチャートの礫が密に詰まる。礎石据付け穴 2 も同様に直径約 1 mで、周囲にやや大きめの直径 15cm 前後のチャートの礫が置かれ、中心の礎石が座っていたと考えられる部分はやや凹んで、直径 5 cm 前後の礫が散見された。この 2 基については、規模がほぼ等しく、埋土も類似する（断面図 8・12 層）ことから、一連のものである可能性が高い。柱間は 1.5 m。礎石据付け穴 3 は、礎石据付け穴 1 の東で検出した。推測される直径は約 0.8 m。直径 5 cm 未満の小礫と直径約 20cm のやや丸みのある礫が置かれるが、礫の詰まり方は礎石据付け穴 1・2 と比較してやや粗である。埋土は砂質で締りが悪く 1・2 とは異なる。1・2 とは時期差

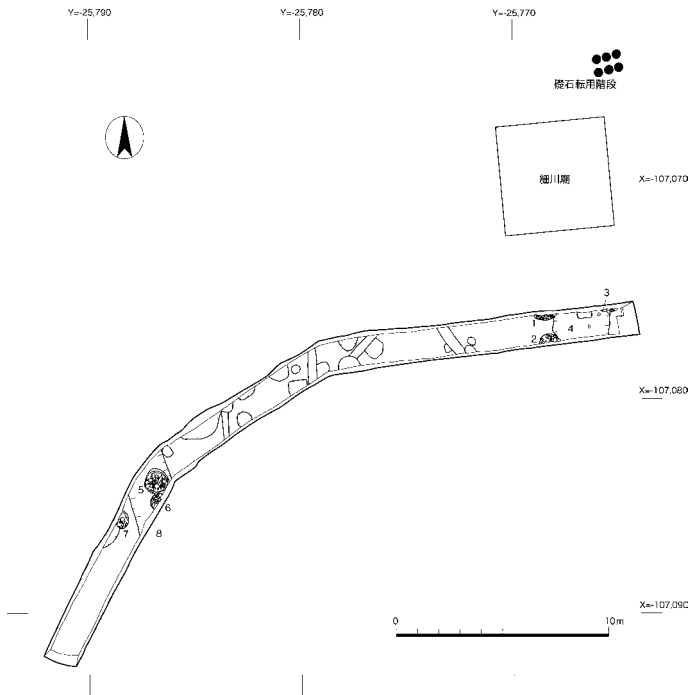


図100 調査区配置図

があるか、性格が異なる可能性がある。この礎石据付け穴1・2と礎石据付け穴3の間では、南北方向の溝状遺構4を検出した。幅は約2.6mある。

調査区の南西でも、3基の礎石据付け穴と考えられる遺構を検出した。礎石据付け穴5は、ほぼ全体を検出した。直径は約1.1m。直径20cm前後のチャートの根固め石を円形に並べ、その隙間に5～10cm程度の礫が詰まる。礎石据付け穴6は、礎石据付け穴5に南接する。直径約0.8m。直径10～20cmのチャートが隙間なく詰まる。この2基と重複して、南北方向の溝状遺構8がある。重複関係から、礎石据付け穴に先行する。幅約2.1mで、上層の埋土は、5Y4/2灰オリーブ色粗～極粗砂混シルト～極細砂である。礎石据付け穴6の南西では、礎石据付け穴7を検出した。直径は0.8～0.9mと推測される。上部を攪乱により削平されるためか、礫はまばらである。

遺物 遺構の掘り下げを行っていないことから、出土遺物は少量である。すべて重機掘削中及び精査中に出土したものである。種類としては、染付の盤・碗、常滑産焼締陶器、施釉陶器がある。いずれも小片で、時期の特

定は困難である。

土器以外では、埴の破片が10点出土している。厚さ1.5cmのもの8点、厚さ2.5cmのものが2点ある。2次的に火を受けたものが少量認められる。

小結 今回の調査では、塔頭西源院に関連すると考えられる遺構を多数検出した。トレンチの幅が狭く、範囲が限られていたため、建物の復元は困難であった。しかしながら、東端で検出した南北に並ぶ礎石据付け穴1・2については、手がかりとなる史料が存在する。『寺院明細帳』の附録にある西源院の古図で(図104 参考資料②)、これには敷地の東西南北の規模と、内部の建物のおよその配置と規模が記されている。現在はここに記載された建物が全く存在しないため、その正確な位置は不明であるが、地形などからある程度推測することが可能である。西之庭と龍安寺の仏殿の間は谷地形であることから考えて、今回の調査区の東端付近が、西源院敷地の東限と考えられる。そこで、古図を見ると、東に「小門」があり、その横に規模が「明五尺」と記されている。今回検出した礎石据付け穴1と2の柱間は約1.5mで、この「小門」の柱間と一致し、位置的に見ても、この2基の礎石据付け穴はこの「小門」のものである可能性が高いと考えられる。

また、敷地南限については、西之庭を囲む生垣より南は斜面となるため、これが西源院の南限と考えられ、現在の西之庭に入る門は、古図にある本来の西源院の「門」を踏襲したものである可能性がある。そうすると、今回の調査区では南の「門」から東の「小門」の間を調査したことになる。古図では、この間に『寺院明細帳』本文に「本堂庫裏兼用」と記された桁行五間、梁行三間半の建物がある。今回南西で検出した3基の礎石据付け穴については、この建物の一部を構成するものである可能性がある。

これら、西源院の建物の存続時期については、下限は明確に判明している。

II 平成 19年度の試掘・立会・確認・分布調査概要

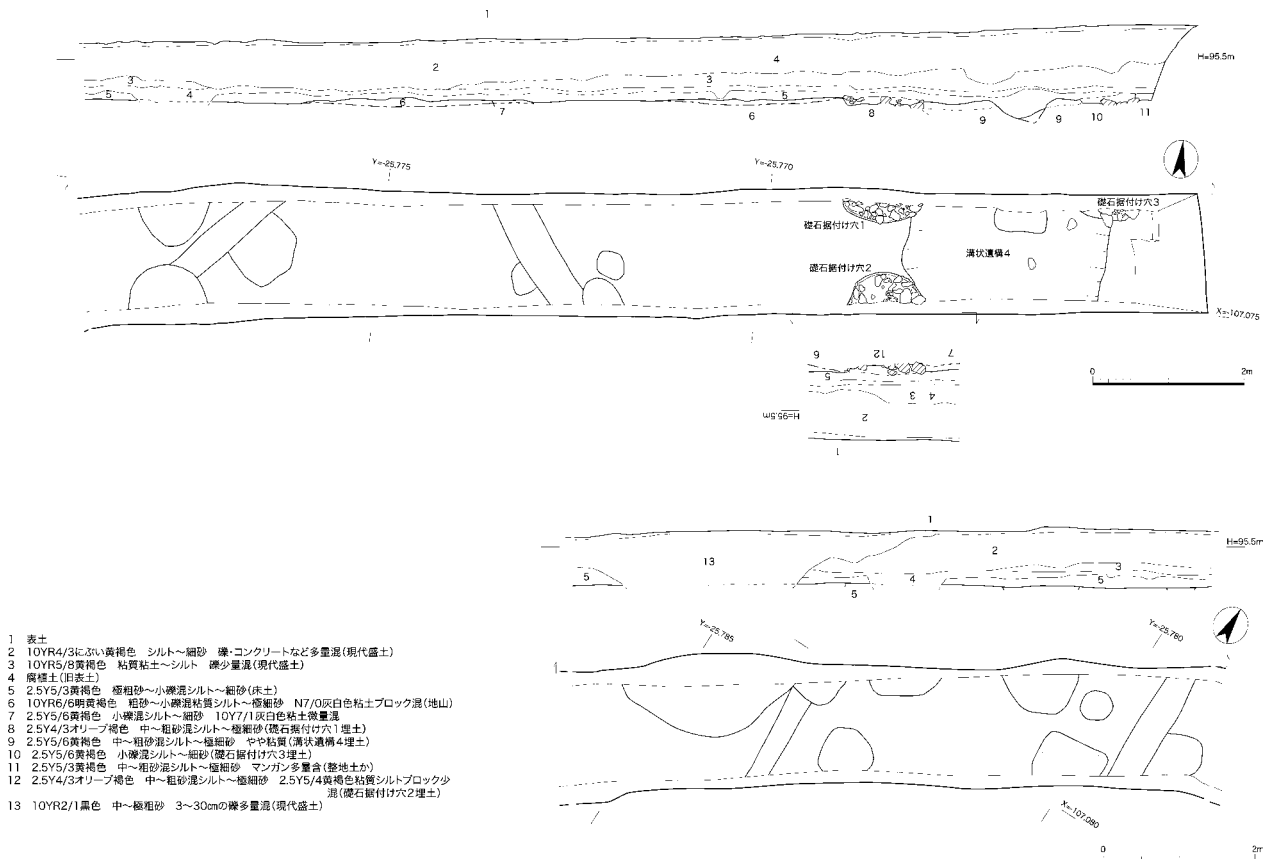


図 101 調査区実測図 1

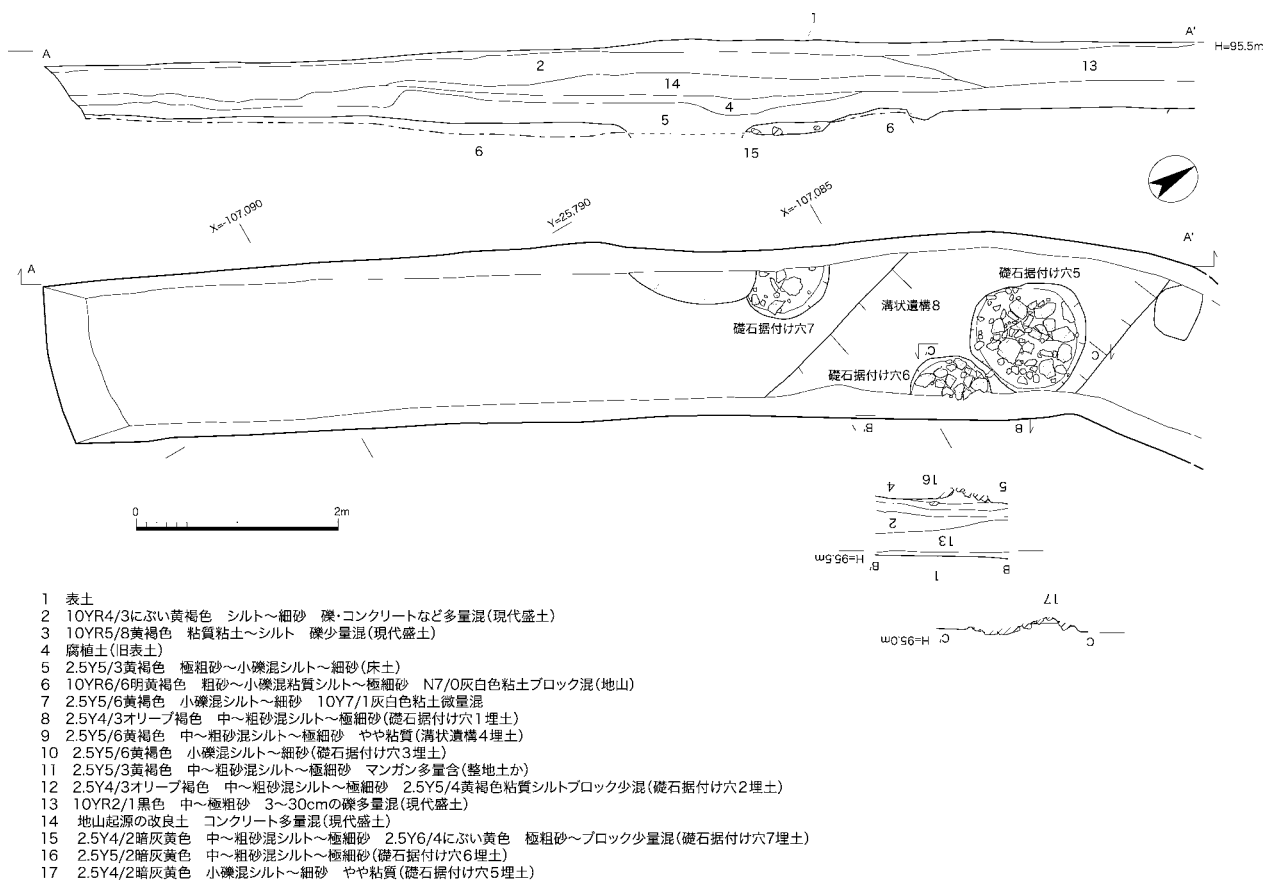


図 102 調査区実測図 2



図 105 調査区東側全景（東より）



図 107 礎石据付け穴 1・2（北東より）



図 106 調査区南西側全景（南西より）



図 108 階段に転用された礎石（北西より）

『寺院明細帳』に、

葛野郡花園村

臨済宗龍安寺塔中

西源院

右寺院儀薄禄無檀ニシテ諸建物大破二及ビ修繕ヲ加
ヘントスルモ腐朽ノ箇所多ク修繕之

見込無キニ付建物売却シ元宜春院建物ヲ住財ノ支金
ヲ以テ購求其儘寄付シ法院跡地へ寺

院移転願明治三十一年四月二日許可

との記載が見られる^{註1}。これによれば、明治時代には衰退し、明治三十一年（1898）まではかろうじて所在したが、建物の腐朽が著しく修繕が不可能であるため、元の塔頭宜春院の建物を購入して移転したことがわかる。

また、上限については、「本堂庫裏兼用」の建物は、元の西源院の本堂が火災で方丈を失った龍安寺に移築さ

れた 1799 年以降に再建されたものと捉えることができるが、門やそれ以外の建物はそれ以前より存在した可能性も残る。『寺院明細帳』によれば、西源院の創建は延徳元年（1489）であるが、移築された元の本堂が建立されたのは慶長二年（1606）である。そうしたことから、少なくとも 17 世紀前半までには、寺域を囲う施設が完成していたと考えられる。しかし、今調査では遺構に伴う遺物が出土しなかったことから、成立時期については明らかにできなかった。

西之庭内に礎石が階段の踏み石に転用されているものが見られた。この礎石の大きさは、今回検出した据付け穴の規模とも見合うものである。また、これらが西之庭造成前からあったものではないかとの証言も得られた^{註2}ため、西源院の建物に使用された礎石の可能性があるので、参考資料として記載することとした。これは、細川廟の北東に位置し、下段 3 石、上段 3 石の計 6 基ある。

石材はすべて花崗岩である。下段中央の1基は、自然石の平らな面を利用したものであるが、それ以外は加工が施される。下段西側の1基は直径約45cm、高さ15cm以上の円柱座に加工される。他の4基は、方形の台座の上に円柱座を作り出している。下段東側のものは円柱座にさらに地覆を支えるための突起が付く。いずれも台座は打ち欠かれるが、一辺約50cm、高さは10～15cm以上ある。円柱座の直径は37～43cm、高さは3～7cmである。

今回は、龍安寺境内では初の本格的な調査となったが、遺構の残存を確認できたことは大きな成果といえる。今後、立会調査などでも、注意を払う必要がある。

(柏田 有香)

註1 龍安寺岩田氏より御教示を得た。
 註2 龍安寺村田氏より御教示を得た。

7 常盤仲之町遺跡

経過 調査対象地は、広隆寺旧境内の北西隅部分、常盤仲之町遺跡の西端付近にあたる。この場所で、JR山陰線の高架化工事が行われ、これに伴う立会調査を実施した。調査地付近では、線路は地表から高さ約3～4mに積み上げられた土盛り上に敷設されているが、工事はこの土盛りの南側斜面を長さ約80mにわたって掘削

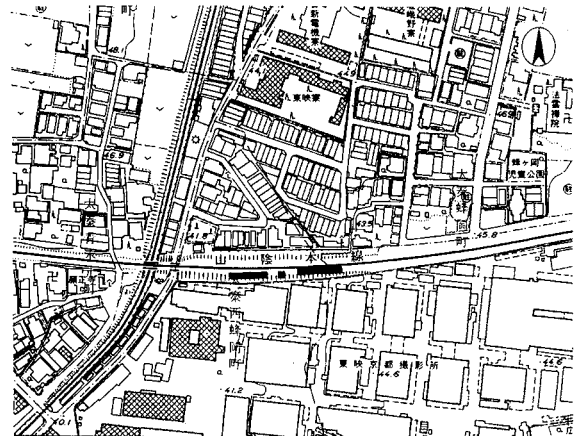


図109 調査位置図

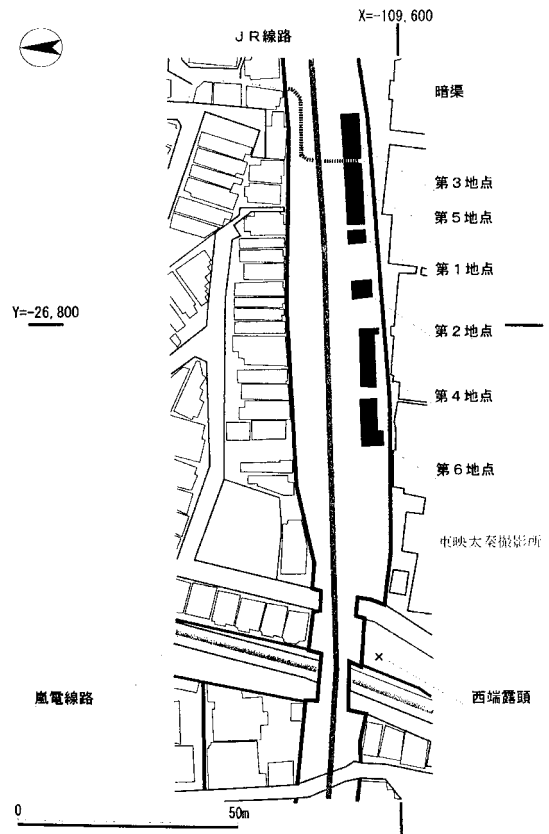


図110 調査区配置図

した。また、その内の東半約 40 m分については、土盛りの基底を幅約 1 mで筋掘りした。これらの工事に立ち会って、遺構・遺物の確認と記録作成作業を行った。

遺構 土盛り斜面の掘削工事では、地層断面を調査し、記録した。土盛りの頂部では線路敷きのバラス層、その下に旧表土層状の黒色（10YR5/6）土層があり、それ以下が盛土の本体である。盛土の上半は、暗褐色（10YR3/3）～にぶい黄褐色（10YR4/3）の粗粒砂～礫層からなる盛土(1)である。盛土の下半は褐色（10YR4/6）～黄褐色（10YR5/6）の礫混シルト層からなる盛土(2)である。また、盛土(1)と盛土(2)は、地層の境界に土壌化した地層などを挟まないことから、一連の盛土と考える。また、盛土(2)が第3地点と第5地点の境界に位置する明治期のものと推定されるレンガ製の暗渠水道を整合的に覆うことから、盛土(1)と盛土(2)は 19 世紀末の鉄道敷設時の盛土と考える。土盛り斜

面では、基底部に至るまで、これらの盛土が確認でき、土盛りは全体的に鉄道敷設時の人為的なものであることが明らかである。また、盛土(1)と盛土(2)の斜面の表層は土壌化した表土で覆われ、現代遺物も包含している。東半で行った土盛り基底部の筋掘りは深さ 1 m程度に止まったが、そこでも盛土(2)が確認できるのみで、盛土下に存在すると推定される旧表土や包含層及び遺構面を形成する地山層などは検出することができなかった。また、東半部分でも、第4地点で土盛り基底部より約 0.4 m、第6地点で基底部より約 1 mを部分的に掘り下げたが、ここでも旧表土や包含層及び遺構面を形成する地山層などは検出することができなかった。掘削深がもっとも深い部分は、第6地点で標高約 41.00 mに達したが、ここでも盛土(2)を確認したのみであった。

なお、今回調査対象地の更に西側に工事による掘削で生じた露頭があり、ここで、地山層（低位段丘層相当層）

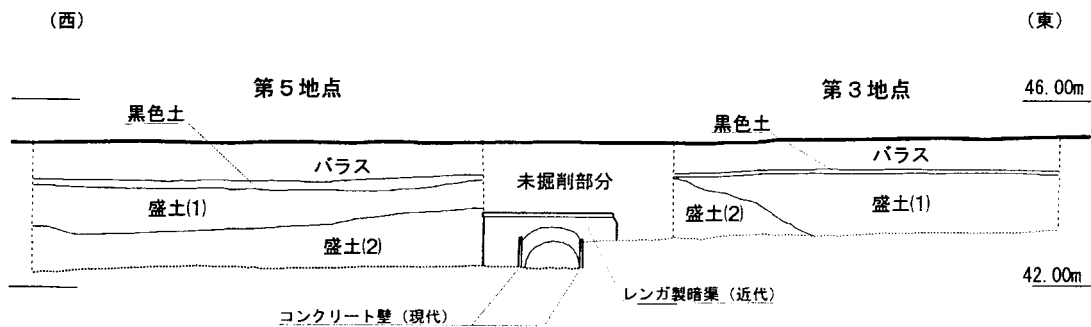


図 111 第3地点及び第5地点断面図

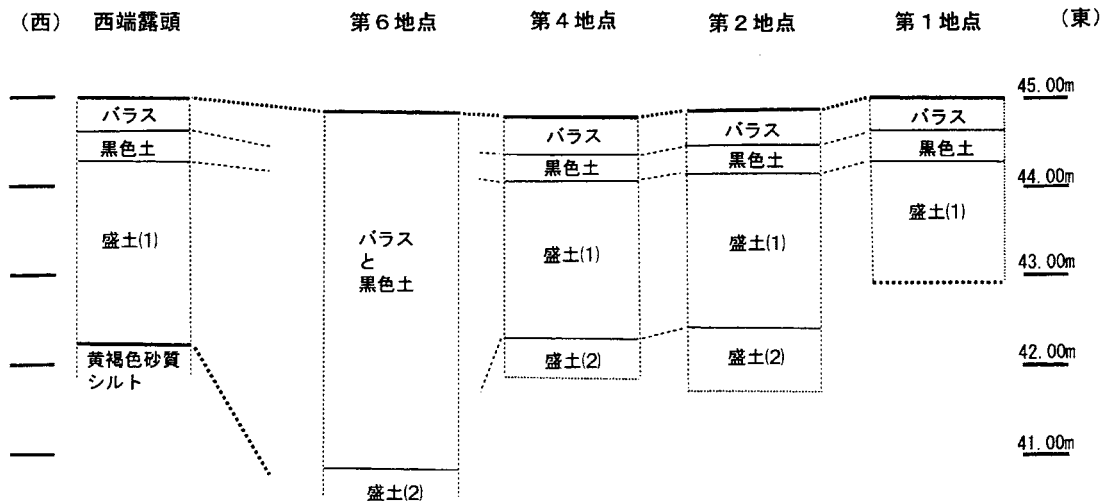


図 112 断面模式図

を確認できた。ここでの地山の高さは標高約 41.20 m であり、第6地点の掘削深より高い位置で地山を確認している。

遺物 前近代の遺物としては、江戸時代中期以降の堺明石系すり鉢の口縁部破片が1点あるのみである。鉄道の盛土(1)から出土している。他は近代以降の遺物が少量出土している。常盤仲之町遺跡に関連する遺物は出土していない。

小結 調査地の現況 JR 山陰線の土盛りは、基底部に至るまで鉄道敷設時の盛土で、遺跡に関連する地層を含まないことが明らかとなった。また、この盛土は線路敷設用の路盤を形成する土盛り基底部以下にも深く及ぶものであり、工事掘削は常盤仲之町遺跡の遺構面に達しなかった。常盤仲之町遺跡は御室川の扇状地上に立地し、南に広がる桂川の沖積低地より低位段丘崖を介した高位にある。しかし、調査地はこの扇状地を下刻する谷部分にあたるため、鉄道敷設時に旧地表上に高い土盛りを行っているようである。したがって、遺跡の遺物含層や遺構面は、さらに深い部分に良好に残存しているものと考えられる。また、調査地西側の露頭では、比較的浅い部分で地山面を確認できた。露頭の西側は、嵐電の線路を介して仲野親王墓古墳や上ノ段町遺跡が展開する台地上につながる急斜面となっており、露頭付近から西に向かって地山面が高くなっていると考えられる。

(網 伸也・内田好昭・ト田健司)

8 史跡・名勝嵐山

経過 ホテル建設に伴う埋蔵文化財の確認調査である。調査地は西京区嵐山西一川町に位置し、国指定の史跡・名勝嵐山の範囲に含まれる。また、周辺では南西に史跡・名勝嵐山と重複する平安時代の嵐山谷ヶ辻子町遺跡、北西には奈良時代の法輪寺境内遺跡が存在し、これらはいずれも 1993 年に実施された公共下水道工事に伴う広域の立会調査で発見された遺跡である。調査地は桂川右岸にあたり、南には中世に開削された桂川用水路のひとつである一井用水が現在も桂川右岸幹線用水路として流れている。

今回の調査は、奈良時代から平安時代の遺跡及び中世の用水路に関連する遺構の有無や、さらに新たな遺跡の存在に関わる遺構の検出を主眼に行った。

調査は、対象地内の南北フェンスを境に東部と西部に分けて実施した。調査区は、いずれも 2 m 幅で 1 区(東西方向に長さ 59.5 m)、また 1 区に直交する南北方向の調査区を西から 2 区(南北 31 m)、3 区(南北 30 m)、4 区(南北 9 m)、5 区(南北 26.5 m)と設定した。東部は 1 区東、4・5 区、西部は 1 区西、2・3 区である。調査は東部から進め、続いて西部の調査を実施した。

遺構 調査地の基本層位は、現代積土以下、第1層灰白色砂泥(近代耕作土)、第2層明黄褐色砂泥(近代床土)、第3層にぶい黄褐色泥砂(中世耕作土)、第4層明黄褐

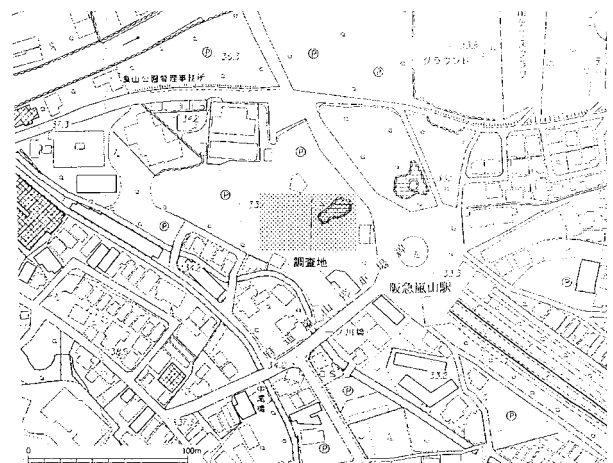


図 113 調査位置図

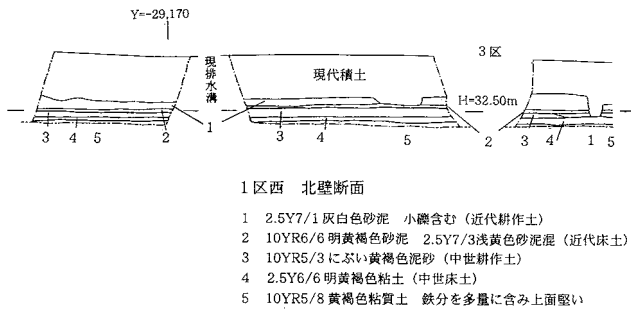


図 114 層位図

色粘土 (中世床土)、第 5 層黄褐色粘質土 (マンガン層) である。ただし、5 区北端、2・3 区北半には第 3・4 層下にさらに耕作土、床土とみられる遺物包含層が堆積する。各土層を時期別にみると、現代積土、近代の耕作土・床土以下は、13 世紀末から 14 世紀後半の遺物を含む第 3・4 層、第 5 層はベースとみられる鉄分を多量に含む黄褐色粘質土である。遺構は第 3 層上面、第 5 層上面でのものが主体である。検出した遺構には土壌、溝、

流路、杭跡がある。遺構の時期は室町時代前半から近代のものである。以下、主要な遺構について概説する。

流路 22 1 区西、4・5 区で検出した。1 区西では東端で地表下約 1.2 m で、中世の耕作土とみられる、にぶい黄褐色泥砂層上面で西肩を南北約 1.8 m 検出した。流路内は砂礫層が厚く堆積していた。肩部は、ほぼ垂直に近く下がる。4 区の南端では 1 区の西肩に繋がる肩部を、現地表下 0.85 m の中世の耕作土上面で東西約 1.1 m 検出した。肩部は 1 区同様に、ほぼ垂直に下がる。流路内は検出面から深さ 0.85 m まで砂礫層と砂層が厚く堆積し、それより下には細砂層を確認している。5 区の南半では現地表下 0.8 m で洪水層が厚く堆積し、現地表下 1.5 m で東肩を東西約 1.1 m 検出した。肩部は西肩と同じ様相であった。1 区東は現地表下 1.1 m から砂礫層が堆積しており、調査区全体が流路内であった。深さは攪乱の断面から 1.5 m 以上とみられ、層位は上から灰黄

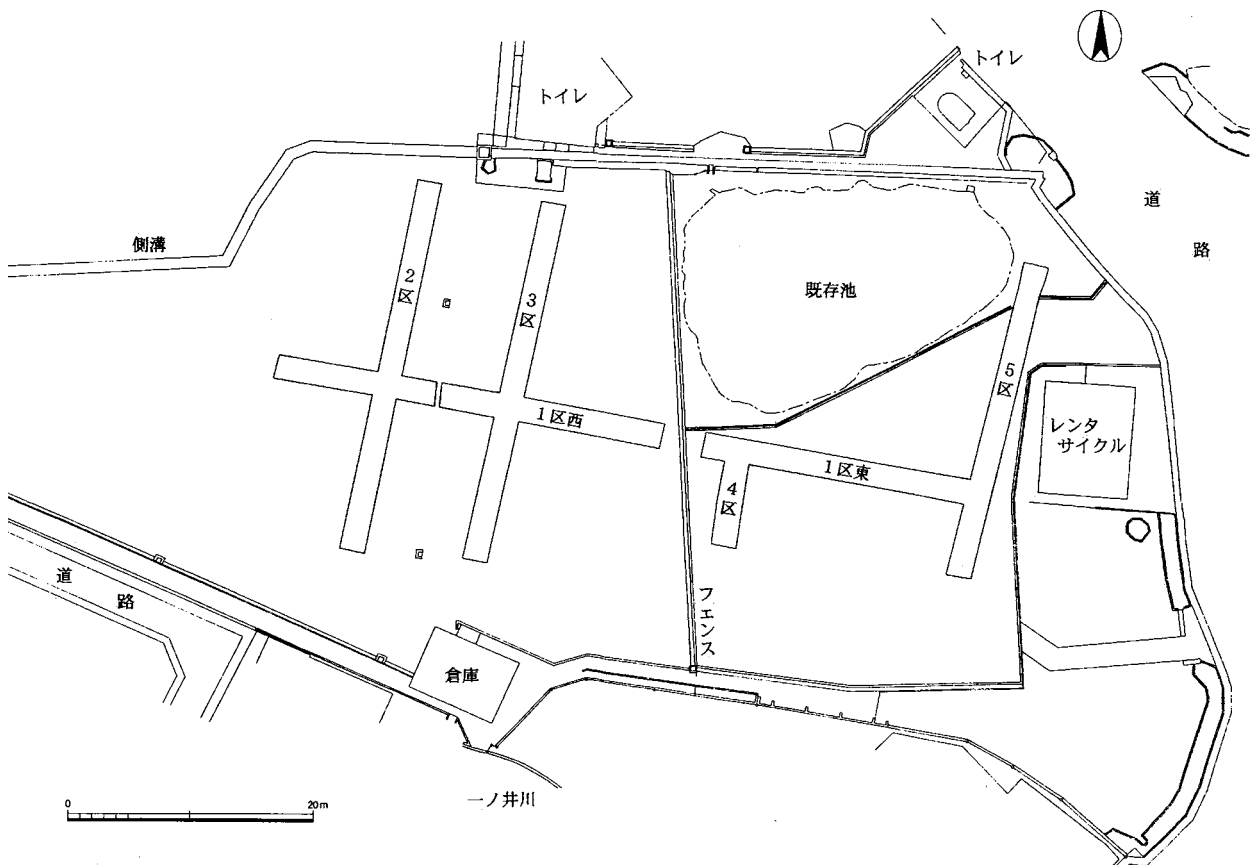


図 115 調査区配置図

褐色砂礫、黄褐色砂礫、黄褐色粗砂である。流路の規模は4区西肩と5区東肩から幅約23mである。深さは1区東の撈乱の断面から1.5m以上で、流れの方向は北西から南東である。

流路23・26 いずれも東西方向の流れで、いずれも近代耕作土・床土の直下で検出した。流路23は2区北半と3区北半で検出した。断面は緩やかなU字形で幅9～12m、深さ約0.7mである。流路内の堆積は上層が灰黄色砂礫層で下層は黄褐色粗砂層である。流路26は2区南半と3区南半で検出した。2区南半では両肩を検出したが、3区南半では北肩を検出した。断面はなだらかなレンズ状で幅約4m、深さ約0.2m。流路内はオリブ褐色砂礫層である。

小溝群 いずれも中世の耕作土・床土下の黄褐色粘質土で検出した東西方向の溝である。溝の規模は幅0.2～0.3m、深さ0.1～0.2mである。埋土は2・3区の小

溝群は黄褐色粗砂層で、1・5区は明黄褐色粘土層である。

畦27・28 いずれも東西方向の畦である。大畦27は3区北半の小溝群と同一面で検出した、畦の基底部分である。幅0.9m、高さは残存長が0.1mである。大畦28は2区南半の流路26南で、東西の壁面で検出した。基底部分の幅1.5m、高さ0.5mの断面台形状である。

遺物 出土遺物は整理箱2箱である。土器類が大半を占め、遺物の時期は13世紀末から14世紀後半にあたる鎌倉時代後半から室町時代前半が中心である。以下、主要な出土遺物について概述する。

1区の遺物

室町時代前半 土器類がある。小溝群と遺物包含層(耕作土)から出土した。土器類は土師器小片で白色系の土師器皿が多くみられる。

2区の遺物

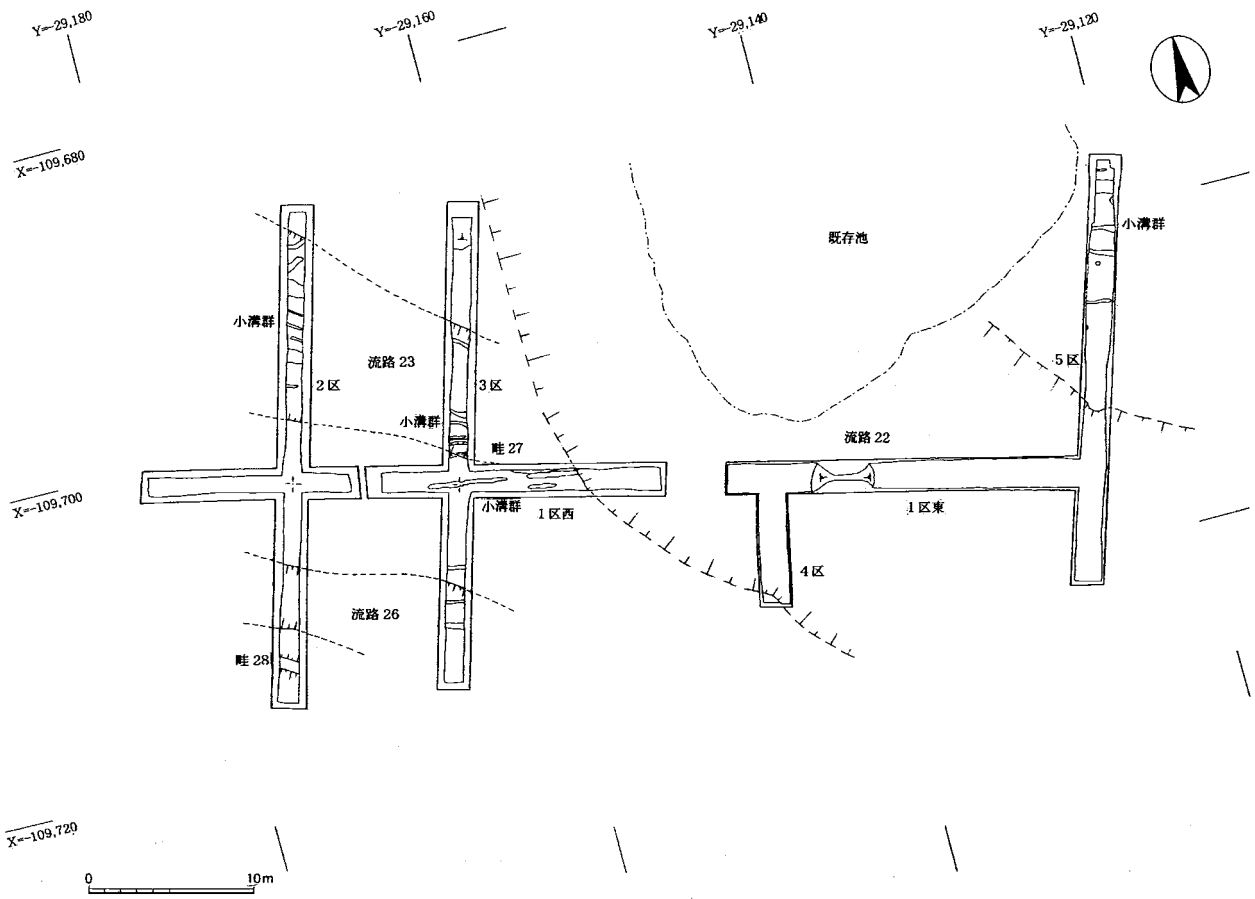


図116 遺構平面図

鎌倉時代後半から室町時代前半 土器類がある。小溝群と流路 23、遺物包含層（耕作土）から出土した。土器類は土師器、須恵器、瓦器がある。土師器は皿の小片がほとんどである。流路 23 からは摩滅しているが、口縁部外面に一段ナデが施された鎌倉時代の特徴を示す土師器皿と瓦器碗もみられる。

3 区の遺物

室町時代前半 土器類がある。小溝群と流路 23・26、遺物包含層（耕作土）から出土した。土器類は土師器皿、須恵器甕、瓦質土器、輸入陶磁器がある。小溝群からは土師器皿片で白色系のタイプが多い。流路 23 からは摩滅が著しい土師器皿片がみられる。遺物包含層（耕作土）からは土師器皿、瓦質土器鉢、青磁碗小片が出土している。

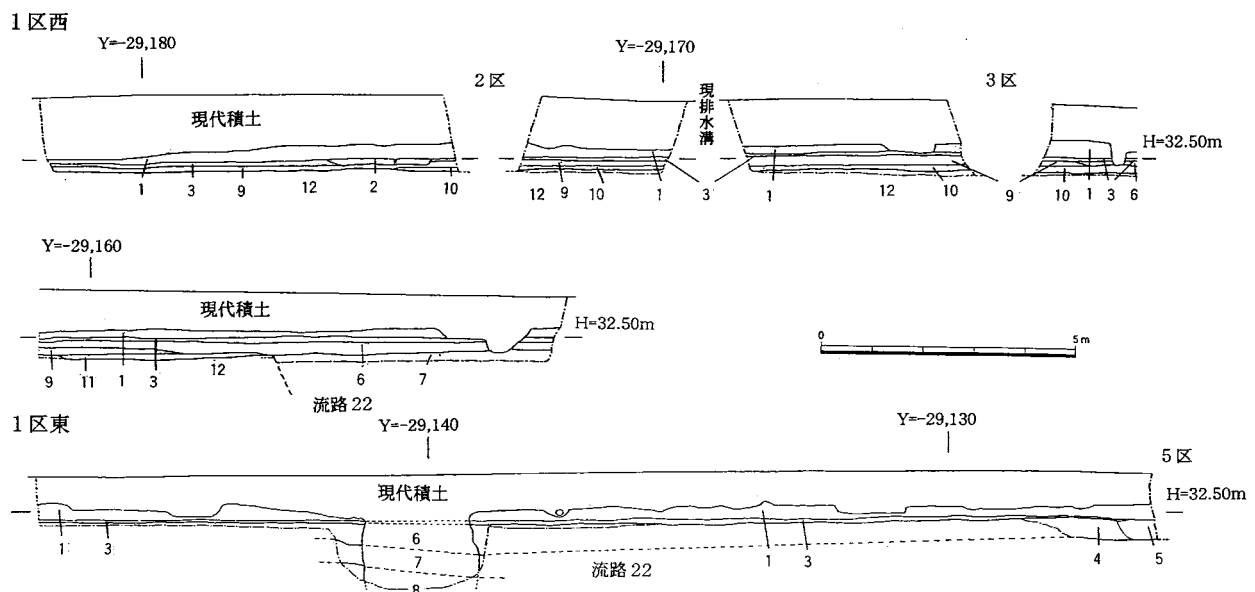
4 区の遺物

室町時代前半 土器類がある。流路 22 と遺物包含層（耕作土）から出土した。土器類はいずれも土師器皿の小片で、摩滅が著しい。

5 区の遺物

鎌倉時代後半から室町時代前半 土器類がある。小溝群と遺物包含層（耕作土）、流路 22 から出土した。土器類には土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器がある。土師器はほとんどが皿の破片である。須恵器は東播系の大型甕である。瓦器は碗の口縁部である。輸入陶磁器は口縁部外面に蓮弁を配置した龍泉窯系の青磁碗である。

小結 調査地は桂川右岸の嵐山一川町に位置し、史跡・名勝嵐山の範囲に含まれる。



1 区北壁断面

- 1 2.5Y7/1 灰白色砂泥 小礫含む (近代耕作土)
- 2 2.5Y5/3 黄褐色微砂 (近代溝)
- 3 10YR6/6 明黄褐色砂泥 2.5Y7/3 浅黄色砂泥混 (近代床土)
- 4 2.5Y7/2 灰黄色混礫泥砂 (流路 22)
- 5 2.5Y4/2 暗灰黄色混礫泥砂 (流路 22)
- 6 2.5Y7/2 灰黄色砂礫 (流路 22)
- 7 2.5Y5/3 黄褐色砂礫 (流路 22)
- 8 2.5Y5/3 黄褐色粗砂 (流路 22)
- 9 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂 (中世耕作土)
- 10 2.5Y6/6 明黄褐色粘土 (中世床土)
- 11 2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂 (中世溝)
- 12 10YR5/8 黄褐色粘質土 鉄分を多量に含み上面堅い

図 117 1 区北壁断面図

調査の結果、近代の耕作土・床土下に北西から南東方向の幅約 23 mの室町時代前半以降から近代以前の流路 22 を検出した。流路の両側には室町時代前半の耕作地がみられ、耕作に関連する東西方向の小溝群、大畦を検出した。

流路 22 内は洪水層とみられる砂礫・砂層が主体であることから、洪水により埋没したことが伺える。東西方向の流路 23・26 は、流路 22 に合流することから、流路 22 の埋没に直接かかわるものと考えられる。流路 22 の両肩の傾斜は急激に下がるが、護岸の施設は確認できなかった。径 20～30cm 大の石が肩部近くに散在することから、当初は護岸に使用されていた可能性も考えられる。

流路 22 の両側で検出した小溝群は水田あるいは畑作などの耕作に関連したものとみられる。また、東西方向の畦を境に両側に耕作土層がみられることから、この畦は耕作地間を区画する境界と考えられる。それらの遺構は当流路が洪水による砂礫・砂層に覆われる以前の土地利用の一端を示している。

出土遺物は小溝群や中世耕作土層から 13 世紀末から 14 世紀後半にあたる鎌倉時代後半から室町時代前半の土器類が出土しているが、量的には僅かである。これは、当地が耕作地として利用されていたことに起因するものである。

当調査地における耕地開発については、平安時代の田図である「山城国葛野郡班田図」（天長五年（828））に記載されている「小社里」にあたり、9 世紀代には開発の対象地であったことがうかがわれる。しかし、今回の調査では当該期の遺構・遺物は検出していない。当地周辺で用水路の開削を伴う本格的な耕地開発がなされるのは、中世に入ってからである。調査地の南には桂川中流域兩岸の諸荘園を灌漑する目的で、中世に開削された桂川用水路のひとつである一井用水が、法輪橋下流を取水口として、現在も幹線の用水路として流れている。検出した流路 22 は一井用水から北約 24 m に位置している。

流れの位置は異なるが方向は同じであり、何らかの関連が伺われる。

調査地周辺での調査例は数少ない。1993 年に実施された公共下水道工事に伴う広域の立会調査と、史跡・名勝範囲での試掘・立会調査が数件実施されているが、当地域の土地利用の実態を把握できるに至っていない。今回の調査で検出した中世以降の流路 22、中世の耕作関連遺構は、桂川上流右岸域での、耕地開発の実態の一端を示す考古資料として重要である。今後の調査によって遺跡の全体像をより明確にしたい。

（加納 敬二）

第2章 資料整理

I 保存処理

1 出土木製品の受入れ状況

表3参照。

2 木製品保存処理

表4・5参照。

3 金属製品の受入れと保存処理

表6参照。

4 ガラスの比重測定

表7参照。

5 骨の受入れと保存処理

表8参照。

6 遺構・遺物の取上げ、土層転写

表9参照。

豊楽殿北廊跡（I-2）の版築を土層転写した。（図

118・119）



図118 清暑堂 土層転写作業

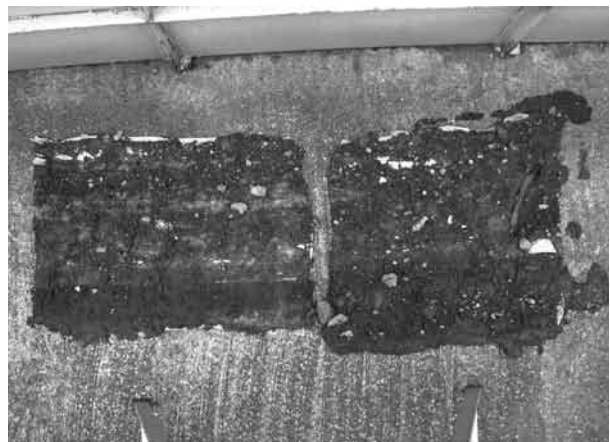


図119 清暑堂 転写土層

表3 木製品受入れ一覧表

遺跡名	調査記号	遺跡名	調査記号
平安京右京北辺三坊八町	05HK-J I001	長岡京右京二条三坊八・九町・上里遺跡	06NG-EW004・5
平安京左京三条二坊十町	06HK-MN002	長岡京右京二条三坊一・八町・上里遺跡	07NG-EW006
平安京左京三条三坊十町（二条殿）	06HK-VI001	平安京左京三条三坊十一町	07BBHL272
平安京跡・史跡本願寺境内	06HK-W I019	平安京左京四条一坊九町	07BBHL225
平安京右京六条四坊二町・西京極遺跡	06HK-QX001		

表4 3m含浸槽収納木製品一覧表

遺跡名	調査記号	遺跡名	調査記号
平安京左京三条四坊十町・烏丸御池遺跡	03HK-RC002	平安京左京四条一坊一町	05BBHL83・100・109
平安京右京六条三坊二町	03HK-QO001	平安京左京四条一坊四町	05BBHL167
平安京右京三条一坊二町	04HK-Y002	平安京右京北辺三坊八町	05HK-JI001
平安京右京一条四坊十三町	04HK-JH001	長岡京右京二条三坊九・十六町・一条大路・上里遺跡	05NG-EW003
鳥羽離宮跡	04TB-TB150	平安京右京六条四坊二町・西京極遺跡	06HK-QX001
白河街区・岡崎遺跡	04K S-OJ001	長岡京右京二条三坊八・九町・上里遺跡	06NG-EW004・5
淀城跡・長岡京跡	04NG-YE003		

表5 5m含浸槽収納木製品一覧表

遺跡名	調査記号
伏見城跡	04FD- F P001

表6 処理金属製品一覧表

遺跡名	調査記号	内容
平安京左京四条三坊十二町	06HK-HW001	鉄製品 5点・銅製品 5点・銭貨 8点
平安京左京四条四坊三町	06HK-X Z001	刀子 1点・刀剣 1点
平安京左京三条三坊十町（二条殿）	06HK-VI001	鉄・銅製品 16点・銭貨 2点
平安京跡・史跡本願寺境内	07HK-W I020	銭貨 7点
平安京跡・史跡本願寺境内	07HK-W I023	小刀・銭貨

表7 ガラス処理一覧表

遺跡名	調査記号	内容
平安京右京六条四坊二町・西京極遺跡	06HK-QX001	ガラス玉 14点
平安京跡・史跡本願寺境内	07HK-W I020	ガラス玉 9点

表8 骨の処理一覧表

遺跡名	調査記号	内容
平安京左京三条二坊十町	06H K -MN002	イノシシ・シカ・ネズミ等

表9 取り上げ・土層転写一覧表

遺跡名	調査記号	内容
平安京左京三条二坊十町	06H K -MN002	網代製品の取り上げ
平安宮豊楽院消暑堂跡・北廊跡	07HK-LZ002	北廊基壇の土層転写

表10 洗浄・選別一覧表

遺跡名	調査記号	内容
京都市指定名勝 知恩院方丈庭園	05RT-TO002	江戸時代の池
平安京左京三条二坊十町	06HKMN002	各遺構
平安京左京四条一坊十二・十三町	06HK-YR001	平安時代以前の流路
平安京跡・史跡本願寺境内	06HK-W I019	江戸時代の池
平安京右京五条一坊一～四町	06HK-VH004	平安時代の池
平安京右京六条二坊三町	06HK-XH001	平安時代の池
平安京右京六条二坊六・十一町	06HK-XH002	平安時代の川
大藪遺跡	06MK-RK001	弥生時代の溝
平安京左京五条三坊十一町	07HK-WK001	土坑の種実同定

表11 樹種同定一覧表

遺跡名	調査記号	内容
平安京左京三条二坊十町	06HK-MN002	井戸部材・木製品約 300点
平安京左京四条一坊十三町	06HK-YL001	木製品 7点
平安京跡・史跡本願寺境内	06HK-W I019	木製品約 50点
平安京右京六条二坊六・十一町	06HK-XH002	杭・礎板・曲物 12点
平安京右京六条四坊二町・西京極遺跡	06HK-QX001	井戸材等 15点
平安京右京六条二坊三・六町	07HK-XH003	柱根 8点
長岡京右京二条三坊一・八町・上里遺跡	07NG-EW006	柱根 17点
植物園北遺跡	07R H-YA001	炭化木材 7点

II 復元彩色

7 種実同定

表 10 参照。

8 樹種同定

表 11 参照。

9 その他

醍醐寺三宝院庭園 (09FD- DT009) の庭石の補修を実施した。

1993 年に高倉小学校の発掘調査で剥ぎ取った土層断面のパネルを、加工・補修し京都アスニー（丸太町七本松）に納入・展示した。（1 階平安京創生館にて展示中）

10 受託事業

本年度は、東京大学の下駄約 270 点・その他木製品 320 点の処理を開始した。

（竜子 正彦）

II 復元彩色

本年度の復元彩色は総数 394 点で、内訳は下表の通りである。発掘調査概報と国庫補助概報のための復元が主なものであった。その他受託業務として、京都府、長岡京市からの 38 点がある。ほかに、平成 19 年 2 月 22 日、(財)京都府社会保険協会主催の総合ライフセミナーにおいて、「京の地下は玉手箱」のテーマで講演を行った。内容は主に発掘調査と成果の活用についてで、遺物復元のほかに復元模型の制作や推定復元図の制作についても言及した。（出水みゆき）

表 12 復元彩色一覧表

内容	調査記号ほか	点数
調査概報	06HK-HW	45
調査概報	06HK-QX1	43
調査概報	06HK-XH2-2	31
調査概報	07HK-VI1	27
調査概報	06HK-GD1	23
調査概報	06HK-VH4	20
調査概報	06HK-YL	17
調査概報	07NG-EW6	17
調査概報	07KS-ST001	17
調査概報	07NG-EW6	17
調査概報	06HK-QS1	16
調査概報	06HK-XH001	12
調査概報	06HK-QR001	10
調査概報	06MK-RK001	10
調査概報	06NG-YE4	10
調査概報	07HK-XH3	7
調査概報	07KS-IH	6
調査概報	07HK-SM7	3
調査概報	06HK-YR	2
調査概報	06HK-XZ1	1
国庫補助	07RH-YA001	5
国庫補助	07RH-KW1	5
国庫補助	06HK-SG14	2
国庫補助	07HK-WL	1
展示・貸出	京都アスニー	5
展示	出前授業	3
展示	考古資料館	1
受託	長岡京市	27
受託	京都府	11
		合計394点

第3章 普及啓発事業等報告

I 普及啓発事業報告

1 「院政期の京都」に係る事業開催

① 遺跡めぐり

日 時 平成19年10月27日(土)

場 所 安楽寿院、城南宮、北向不動院 ほか

(「鳥羽離宮跡をめぐる」：スタンプラリー)

遺跡マップを作成し、参加者に配布

参加者 約250名

② 講演とシンポジウムの開催

日 時 平成19年11月17日(土)

場 所 京都アスニー 4階ホール

講 師 井上 満郎氏、鈴木 久男氏、

上村 和直

演 題 「院政期の京都」(井上)

「鳥羽離宮と法金剛院」(鈴木)

「白河殿と法住寺殿」(上村)

参加者 約350名

③ ブックレットの発行

「白河と鳥羽」 同日開催の講演会・

写真展の来場者、埋蔵文化財関係機関、

京都市内小中学校(私立学校を含む。)

で配布

④ 写真展の開催

日 時 平成19年11月1日～12月17日

場 所 京都アスニー

内 容 写真展「院政期の京都」

写真53点、遺物260点を展示

2 現地説明会の開催ほか

(1) 平成18年4月14日 「植物園北遺跡」

参加者：約280名

(2) 平成19年5月12日 「平安京跡(旧城巽中学

校)」 参加者：約150名

(3) 平成19年6月9日 「長岡京跡(伏見向日町線)」

参加者：約200名

(4) 平成19年6月23日 「平安京跡(五条通拡幅)」

参加者：約300名

(5) 平成19年7月28日 「平安京跡(旧城巽中学校)」

参加者：約250名

(6) 平成19年9月8日 「本能寺跡」

参加者：約150名

(7) 平成19年9月22日 「平安宮豊楽院清暑堂跡」

参加者：約400名

(8) 平成19年10月6日 「平安京跡(旧城巽中学校)」

参加者：約650名

(9) 平成19年11月10日 「伏見城跡(京都銀行丹

波橋寮)」

参加者：約300名

(10) 平成19年11月10日 「平安京跡(五条通拡幅)」

参加者：約200名

(11) 平成19年12月1日 「長岡京跡(伏見向日町線)」

参加者：約350名

(12) 平成20年1月21日 「特別史跡・特別名勝慈照

寺(銀閣寺)」

参加者：約450名

(13) 平成20年3月8日 「西京極遺跡・平安京跡」

参加者：約270名

(広報発表のみ)

(1) 平成19年5月10日 「史跡本願寺境内」(10社)

(2) 平成19年6月25日 「平安宮朝堂院昌福堂跡」

(7社)

(3) 平成19年11月21日 「平安京跡(旧城巽中学

校)」(6社)

(4) 平成19年12月26日 「本能寺城跡」(8社)

3 報告書の刊行

(1) 平成19年度 京都市内遺跡発掘調査報告

I 普及啓発事業報告

- | | | | | | |
|------|--------|---------------------|------|--------------------------------------|---------------------------|
| (2) | 平成19年度 | 京都市内遺跡立会調査報告 | (28) | 発掘調査報告 | 鳥羽離宮跡 |
| (3) | 平成19年度 | 京都市内遺跡分布調査報告 | (29) | 発掘調査報告 | 平安京左京三条三坊九町跡 |
| (4) | 平成17年度 | 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報 | (30) | 発掘調査報告 | 長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡 |
| (5) | 発掘調査報告 | 長岡京右京一条四坊十四・十五町跡 | (31) | 発掘調査報告 | 平安京右京六条二坊三・六町跡 |
| (6) | 発掘調査報告 | 平安宮正親司跡 | (32) | 研究紀要第10号 | —(財)京都市埋蔵文化財研究所設立30周年記念号— |
| (7) | 発掘調査報告 | 常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡 | | | |
| (8) | 発掘調査報告 | 平安京右京三条一坊六町跡 | | | |
| (9) | 発掘調査報告 | 平安京左京八条四坊四・五町跡 | 4 | 「リーフレット京都」(No.219～No.230)の発行 | |
| (10) | 発掘調査報告 | 平安京右京六条二坊三町跡 | | ・No.219 生活・文化12「硯の裏側—遺物整理から—」 | |
| (11) | 発掘調査報告 | 長岡京右京二条三坊八・九町跡、上里遺跡 | | ・No.220 考古アラカルト40「推定画を描く」 | |
| (12) | 発掘調査報告 | 史跡賀茂御祖神社境内 | | ・No.221 発掘ニュース78「弥生時代の墓地—西京極遺跡—」 | |
| (13) | 発掘調査報告 | 伏見城跡 | | ・No.222 生産・技術8「平安宮の赤い色」 | |
| (14) | 発掘調査報告 | 平安京右京六条二坊六・十一町跡 | | ・No.223 発掘ニュース79「室町時代の伏見」 | |
| (15) | 発掘調査報告 | 平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡 | | ・No.224 信仰・祭祀11「柱跡に土器を納める—竪穴住居のマツリ—」 | |
| (16) | 発掘調査報告 | 平安京右京三条二坊十四町跡 | | ・No.225 発掘ニュース80「三条界隈のゴミ穴」 | |
| (17) | 発掘調査報告 | 白河街区跡・岡崎遺跡 | | ・No.226 遺跡を訪ねて10「一条通を歩く」 | |
| (18) | 発掘調査報告 | 平安京左京六条四坊三町跡 | | ・No.227 考古アラカルト41「金閣寺出土の防火砂弾」 | |
| (19) | 発掘調査報告 | 平安京左京三条四坊十町跡 | | ・No.228 土器・瓦26「遊山の器」 | |
| (20) | 発掘調査報告 | 平安京左京八条二坊三町跡 | | ・No.229 考古アラカルト42「種実の同定」 | |
| (21) | 発掘調査報告 | 平安京左京四条二坊十四町跡 | | ・No.230 発掘ニュース81「発掘成果をふりかえって2007」 | |
| (22) | 発掘調査報告 | 平安京右京北辺三坊八町(宇多院)跡 | | | |
| (23) | 発掘調査報告 | 長岡京左京一条四坊十二町跡 | 5 | 全国埋蔵文化財法人連絡協議会への参加 | |
| (24) | 発掘調査報告 | 羽束師志水町遺跡・長岡京跡 | (1) | 平成19年6月7・8日 | 於：埼玉県(ホテルブリランテ武蔵野) |
| (25) | 発掘調査報告 | 平安京跡・御土居跡 | | | 「第28回全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会」 |
| (26) | 発掘調査報告 | 平安京跡・史跡西寺跡 | | | 専務理事 吉田 正和 |
| (27) | 発掘調査報告 | 特別史跡・特別名勝鹿苑寺(金閣寺)庭園 | (2) | 平成19年6月15日 | 於：堺市(大阪府文) |

- 化財センター)
「平成19年度第1回近畿地区OA委員会」
調査業務 宮原 健吾
- (3) 平成19年7月20日 於：大阪市（ホテル
アウィーナ大阪）
「平成19年度第1回（第35回）近畿ブロック
主担者会議」調査課長 吉崎 伸
館長 長宗 繁一
- (4) 平成19年10月12日 於：大津市（コラボ
しが21）
「第13回近畿ブロック埋文研修会」
主任 小檜山 一良（発表者）
統括主任 加納 敬二
主任 網 伸也
調査研究技師 柏田 有香
調査研究技師 近藤 奈央
調査研究技師 西森 正晃
- (5) 平成19年11月30日 於：枚方市（メセナ
ひらかた）
「第22回近畿ブロック事務担当者会議」
総務係長 金島 恵一
主任 佐藤 正典
- (6) 平成19年11月30日 於：堺市（大阪府文
化財センター）
「平成19年度第2回近畿地区OA委員会」
主任 宮原 健吾
- (7) 平成20年2月22日 於：京都市（ルビノ
京都堀川）
「平成19年度近畿ブロック会議」
次長 土井 保志
総務係長 金島 恵一
- (8) 平成20年2月22日 於：堺市（大阪府文
化財センター）
「平成19年度第3回近畿地区OA委員会」
主任 宮原 健吾
- (9) 平成20年2月29日 於：八尾市（八尾市
文化会館）
「平成19年度第2回（第36回）近畿ブロック
主担者会議」調査課長 吉崎 伸
館長 長宗 繁一
- 6 その他研究会等への派遣
- (1) 平成19年4月～20年3月（毎月開催）
於：向日市（京都府埋文調査研究センター）
「長岡京連絡協議会」主任 高橋 潔 ほか
- (2) 平成20年1月8日 於：奈良文化財研究所
「木簡の情報解読・発信・保存・活用に関するワー
クショップ」主任 竜子 正彦
- 7 講師等の派遣
(表13参照)
- 8 ホームページアクセス件数
アクセス件数 30,409件
更新数 162件

表 13 講師等派遣一覧表

No.	件名	機関名	氏名	日時	備考
1	非常勤講師の委嘱(考古学実習Ⅰ・Ⅲ)	奈良大学	辻 純一	19.4.1.～19.9.30	1週4時間担当(火曜日)
2	非常勤講師の委嘱(考古学調査実習Ⅰ)	立命館大学	高橋 潔	19.4.1.～20.3.31	1週2時間担当(水曜日)
3	非常勤講師の委嘱(考古学実習ⅠC)	立命館大学	山本 雅和	19.4.1.～20.3.31	1週2時間担当(水曜日)
4	非常勤講師の委嘱(日本考古学A・B)	近畿大学	網 伸也	19.4.1.～20.3.31	1週2時間担当(土曜日)
5	非常勤講師の委嘱(考古学実習Ⅰ・Ⅱ)	花園大学	南 孝雄	19.4.1.～20.3.20	1週2時間担当(土曜日)
6	非常勤講師の委嘱(日本史特論)	府立朱雀 高等学校	辻 裕司	19.4.1.～20.3.31	金曜日 19:35～21:10
7	非常勤講師の委嘱(京都労働学校)	社団法人京都勤労者学園	山本 雅和	2019.4.9	
8	出前授業(総合学習)火起こしの体験等	市立勸修小学校	辻 純一、ほか	2019.5.9	6年生4クラス
9	講師派遣依頼(上里遺跡の発掘調査)	乙訓の文化遺産を守る会	南出 俊彦	2019.6.9	
10	発掘体験	市立高倉小学校	吉崎 伸、ほか	2019.5.21	5年生19名保護者8名
11	非常勤講師の委嘱(ほっとHOT公民館ゆったり倶楽部)	松原市教育委員会	辻 純一	2019.6.13・2019.6.20	
12	出前授業(総合学習)火起こしの体験	市立陵ヶ岡小学校	辻 純一、吉崎 伸、ほか	2019.6.19	希望者30名
13	発掘現場見学会	ノートルダム学院小学校・市立松ヶ崎小学校	吉崎 伸、ほか	19.6.26・27	ノートルダム6年生160名・松ヶ崎6年生60名、5年生60名
14	土曜講座 火起こしの体験等	市立下京中学校	吉崎 伸、ほか	2019.6.30	生徒・保護者計40名
15	学校周辺の遺跡見学会	ノートルダム学院小学校	吉崎 伸、ほか	2019.7.30	
16	夏期講座解説員の派遣(閑院宮邸跡庭園)	京都国立博物館	近藤 奈央	2019.8.2	
17	現地講師の派遣依頼	大阪府文化財センター	長宗 繁一	2019.9.9	
18	非常勤講師の委嘱(古代・中世瓦調査課程)	奈良文化財研究所	網 伸也	2019.9.10	
19	講師派遣依頼(備前歴史フォーラム)	備前市教育委員会	能芝 勉	2019.10.28	
20	みやこ子ども土曜塾 土器作り、火起こし体験等(プレ開催)	京都市教育委員会	吉崎 伸、ほか	2019.10.30	
21	出前授業(総合学習)火起こしの体験	市立陵ヶ岡小学校	辻 純一、ほか	2019.11.13	
22	出前授業(総合学習)土器作り	市立西野小学校	吉崎 伸、ほか	2019.11.15	2クラス対象
23	講師派遣依頼(古代庭園研究会)	奈良文化財研究所	網 伸也	19.11.15・16	
24	講師派遣依頼(本能寺の調査成果)	艶芸サロン	山本 雅和	2019.11.22	
25	講師派遣依頼(弥生時代遺跡検討会)	京都の弥生時代遺跡を考える会	柏田 有香	2019.12.8	
26	講師派遣依頼(上里遺跡の発掘調査)	乙訓の文化遺産を守る会	高橋 潔	2019.12.15	
27	講師派遣依頼(住民大学講座)	(財)平野区画整理記念館	上村 和直	2019.1.27	
28	みやこ子ども土曜塾土器作り、火起こし等	京都市教育委員会	吉崎 伸、ほか	2020.2.2	
29	講師派遣依頼(第11回古代瓦研究会シンポジウム)	奈良文化財研究所	網 伸也	20.2.2・3	
30	出前授業(総合学習)火起こし、土器で炊飯	市立陵ヶ岡小学校	吉崎 伸、ほか	2020.2.5	希望者34名
31	講師派遣依頼(第109回埋文セミナー)	(財)京都府埋文センター	西森 正晃	2020.2.24	
32	スライドでみるおとくへの発掘(後援)	乙訓文化財事務連絡協議会	高橋 潔(発表)	2020.3.2	
33	出前授業(総合学習)土器作り、火起こし等	市立池田小学校	吉崎 伸、ほか	2020.3.3	
34	講師派遣依頼(シンポジウム乾山はなにをもとめたか)	立命館大学	平尾 政幸	2020.3.23	
35	講師派遣依頼(平安京の邸宅と池・庭)	平安京の<居住と住宅>研究会	丸川 義広	2020.3.23	
36	FM845「ワカバン!」出演(ラジオ番組)	(株)京都リビングFM845	吉崎 伸、ほか	10～12月を除く各月	

II 京都市考古資料館状況

1 特別展示の実施

① 特別展示「京都発掘 30 年～都のうつわ～」

(18.10.28～19.12.3)

財団法人京都市埋蔵文化財研究所設立 30 年を記念し、設立からの調査成果を紹介した。

展示遺物は、時期別に写真パネル等も用いてわかりやすい展示内容とした。

② 特別展示「紫式部の生きた京都」(20.2.1～

21.1.31)

紫式部の源氏物語が世に知られて千年を迎えるにあたり、これを記念した特別展示「紫式部の生きた京都」を開催した。

天徳四年の内裏焼亡から万寿四年の藤原道長の死去までの摂関期を中心に、式部が生き、藤原氏が権勢を謳歌した時代を、写真パネルや遺物により展示。

2 速報展示の実施

① 速報展「本能寺の鬼・瓦」の開催(19.9.15～

19.9.30)

19 年 7～8 月に実施した旧本能寺境内の発掘調査で出土した瓦を中心に速報展を開催した。

3 小・中学生夏期教室の開催

日 時 平成 19 年 8 月 21・22 日 午前 10 時～正午

場 所 資料館、御堂ヶ池 1 号墳・蛇塚古墳他

内 容 小学生 5・6 年生、中学生と保護者(参加者 24 名)

8 月 21 日 拓本・泥メンコづくりほか

8 月 22 日 嵯峨野の古墳めぐり

4 文化財講座の開催

(表 14 参照)

5 情報コーナーにおける普及啓発

1 階情報コーナーにおいて、展示案内チラシ等を掲示し、パソコンによる情報展示では、クイズなどのプログラムを実施している。また、レーザーディスクやビデオによる展示資料・遺跡などの紹介を行う。

6 考古資料の貸出

ア 継続貸出分 32 件 804 点(前年度以前からの継続貸出分)

イ 新規貸出分 22 件 366 点(表 15 参照)

7 博物館学芸員課程実習生の受入れ

(表 16 参照)

8 平成 18 年度京都市立中・総合養護学校「生きた探究・チャレンジ体験」の受入れ

京都市教育委員会の中中学生を対象とした、「生きた探究・チャレンジ体験」事業を受入れを実施した。なお、17 年度から文部科学省が提唱する「キャリア教育」の一環として、中学校を中心に 5 日間以上の職業体験が全国で実施されたことから、チャレンジ体験も原則 5 日間に拡充されたため、これに沿った日数で実施している。(表 17 参照)

9 教育機関の学外授業等の受入れ

小学校や大学等の学外授業の受入れを行った。(表 18 参照)

10 関係機関等への協力

施設見学や展示解説の受け入れを実施した。(表

表 14 文化財講座一覧表

回数	年月日	演 題	講 師 名	受講者数
第 189 回	2019.4.28	「平安京左京六条三坊五町跡(元尚徳中)の発掘調査」	丸川 義広	108
第 190 回	2019.5.26	「史跡・恭仁宮跡(山城国分寺跡)の発掘調査」	府文化財保護課 奈良 康正	116
第 191 回	2019.6.23	「坂本龍馬の「いろは丸」(「ワット京都」から)	吉崎 伸	81
第 192 回	2019.7.28	「伏見城城下町(伏見区総合庁舎建設予定地)の発掘調査」	山本 雅和	93
第 193 回	2019.9.22	「平安宮の赤い色～考古資料からのアプローチ～」	東京文化財研究所 北野 信彦	138
第 194 回	2019.12.15	「西京極遺跡の発掘調査」	西森 正晃・ 柏田 有香	97
第 195 回	2020.1.26	京都市平安京創生館土層剥ぎ取り模型設置記念講座「高倉小学校の発掘調査と土層剥ぎ取り」	山本 雅和・ 竜子 正彦	112
第 196 回	2020.2.23	考古資料館特別展示「紫式部の生きた京都」によせて	原山 充志	218
第 197 回	2020.3.22	京都の文化財シリーズ第7回「柚の国～京北・文化財のしおり」	市文化財保護課 古谷 優子	74

※ 受講者総数 1,037 名

※ 京都アスニー「京都学講座」の一環として開催。

表 15 新規貸出一覧表

No.	件 名	貸 出 先	貸出期間	点 数
1	朝鮮通信使・四百年記念特別展	財団法人高麗美術館	19. 4.22-19. 5.27	2
2	特別展覧会	京都国立博物館	19. 4.24-19. 5.27	16
3	「発掘された日本列島 2007 ～新発見考古速報展～」	発掘された日本列島展実行委員会	19. 1.10-20. 3.10	27
4	自治会館での展示	市環境局	19. 4. 1-20. 3.31	15
5	貸出遺物の一時差替え	京都御苑管理事務所	19. 4. 6-19. 6.20	2
6	特別展「珉平焼」展	兵庫陶芸美術館	19. 4.24-19. 9.16	3
7	平成 19 年度特別企画展	仙台市富沢遺跡保存館	19. 6.20-19. 9.30	17
8	企画展示	国立歴史民俗博物館	19. 9.18-19.12.21	65
9	特別展「乾山の芸術と光琳」	出光美術館ほか	19.11. 3-20. 4.13	20
10	特別展「秀吉お伽衆」	大阪城天守閣特別事業委員会	19. 9.18-19.11.30	8
11	市民考古学講座に伴う企画展示	財団法人向日市埋文センター	19. 7.25-19. 9.10	3
12	常設展示	兵庫県立考古博物館	19. 8.27-20. 3.31	2
13	夏休み拓本教室	市立朱雀第八小学校	19. 8. 1-19. 8.10	56
14	企画展「戦国の大津」	大津市歴史資料館	19.10. 6-19.11.18	20
15	第 2 3 回小さな展覧会	(財)京都府埋文センター	19. 8. 3-19. 8.31	15
16	19 年度「京都発掘だより 2007」	府立山城郷土資料館	19. 9. 1-19.10.17	15
17	特別展示「都の緑釉瓦」	帝塚山大学附属博物館	19.10. 4-19.11.30	10
18	松花堂美術館開館 5 周年展覧会	八幡市教育委員会	19.10.31-19.11.22	21
19	博物館実習 12 月展に伴う展示	龍谷大学文学部	19.10. 4-20. 3.31	9
20	ギャラリーにて展示	東急リパブル株式会社	19.10. 4-20. 3.31	8
21	京都産業大学の講義に伴う展示	京都産業大学文化学部	19.11.30-19.12. 2	13
22	企画展「織部一天下と流行一」	土岐市美濃陶磁歴史館	19.12. 5-20. 2.28	19

19 参照)

11 その他機関への協力等

京都新聞「クイズみやこの歴史」等を実施した。(表

20 参照)

12 入館状況

(表 21 参照)

表16 博物館実習受入れ一覧表

No.	大 学 名	人数	期 間	内 容
1	京都女子大学	2	19.9.4-7	京都市の埋蔵文化財について、資料館業務、写真撮影、保存処理等についての講義・実習を行った。
2	立命館大学	2		
3	京都造形芸術大学	2		
4	ノートルダム女子大学	1		
5	京都教育大学	1		
6	同志社大学	2		
7	京都橘大学	1		
8	京都精華大学	1		
9	京都女子大学	2	19.9.11-14	
10	立命館大学	1		
11	京都造形芸術大学	2		
12	京都文教大学	1		
13	京都教育大学	1		
14	同志社大学	1		
15	京都橘大学	1		
16	大阪国際大学	1		
17	京都精華大学	3	2019.5.20	
18	仏教大学	47		

表17 市内中学生チャレンジ体験受入れ一覧表

No.	学 校 名	人数	期 間	内 容
1	小栗栖中学校	2	19.5.22～25	埋蔵文化財について、現場での発掘体験から整理作業、資料館での展示公開までの一連の作業の体験を行った。 ①発掘調査の体験 ②出土遺物の整理作業の体験 ③出土遺物保存処理の体験 ④資料館業務の体験
2	上京中学校	4	19.6.6～12	
3	神川中学校	4	19.6.26～29	
4	西賀茂中学校	5	19.7.3～6	
5	春日丘中学校	3		
6	加茂川中学校	4	19.11.6～9	
7	太秦中学校	3	19.11.13～16	
8	向島中学校	3		
9	二条中学校	4		
10	七条中学校	1	19.12.4～7	
11	西京高校附属中学校	1		
12	安祥寺中学校	2	20.1.22～25	
13	大枝中学校	6	20.2.5～8	
計		42	(男子40名 女子2名)	

表18 教育機関の学外授業等の受入れ一覧表

No.	機 関 名	人数	日 時	内 容
1	立命館大学	60	2019.5.12	資料館概要及び展示解説
2	西陣中央小学校6年生	84	2019.5.15	展示解説
3	二条城北小学校6年生	105	2019.5.29	展示解説・遺物見学
4	京都女子大学	97	2019.6.2	展示解説
5	乾隆小学校6年生	44	2019.6.6	展示解説
6	京都橘大学	15	2019.6.14	展示解説
7	京都橘大学	100	2019.6.16	展示解説
8	東京大学	10	2019.6.16	展示解説
9	京都市青葉寮	15	2019.6.20	展示解説
10	京都女子大学	20	2019.10.6	資料館概要及び展示解説
11	京都橘大学	103	2019.11.17	展示解説
12	尾張旭市立三郷小学校	101	2019.11.18	展示解説
13	京都女子大学	50	2019.11.24	展示解説
14	京都女子大学附属小学校	7	2019.11.24	遺跡及び展示解説
15	京都市青葉寮	15	2019.12.22	展示解説
16	同志社大学楽洛キャンパス	33	2020.3.9	展示見学
17	第四錦林小学校6年生オリエンテーリング	52	2020.3.11	展示見学
18	京都府立盲学校	5	2020.3.13	展示及び出土品解説
計		916		

表 19 関係機関等への協力一覧表

No.	件名	機関名	日時	人数	備考
1	遺跡解説	右京中央老人福祉センター	19.4.19	25	歴史文化講習会
2	展示解説・遺跡めぐり	右京中央老人福祉センター	19.4.27	18	〃
3	遺跡・展示解説	じゅらくだい倶楽部・NPO平安京	19.5.12	55	史跡ウォーク「平安宮の遺跡と聚楽第を巡る」
4	遺跡めぐり	西京老人福祉センター	19.5.23	33	第2回歴史探訪
5	遺跡解説	上京老人福祉センター	19.5.29	23	教養講座「上京の中近世の遺跡を巡る」
6	展示解説・遺跡めぐり	上京老人福祉センター	19.6.5	25	〃
7	遺跡解説	上京老人福祉センター	19.6.30	30	教養講座「京都の出雲郷を巡る」
8	展示解説・遺跡めぐり	上京老人福祉センター	19.7.6	27	〃
9	遺跡解説	アーツ・シア大学(大阪)	19.7.26	36	西陣界限の史跡を巡る
10	展示解説	NPO平安京	19.9.15	40	史跡ウォーク「平安宮の遺跡と聚楽第を巡る」
11	遺跡解説	上京老人福祉センター	19.10.6	30	教養講座「一条通りを歩く」
12	展示解説・遺跡めぐり	上京老人福祉センター	19.10.11	30	〃
13	遺跡めぐり	西京老人福祉センター	19.11.2	30	第3回歴史探訪
14	史跡めぐり	仁和地域包括支援センター	19.11.22	20	元気クラブ「ぼちぼち」史跡めぐりウォーキング
15	展示・資料見学	上京老人福祉センター	20.1.29	20	教養講座「陶磁器から見た桃山時代」
16	遺跡解説・遺跡めぐり	仁和地域包括支援センター	20.2.28	20	元気クラブ「ぼちぼち」史跡めぐりウォーキング
計				462	

表 20 その他機関への協力等一覧表

No.	件名	機関名	日時	備考
1	京都新聞「クイズみやこの歴史」連載	京都新聞社	通年	隔週掲載(20.3終了)
2	3階貴賓室及び階段写真撮影	株式会社INAX	19.5.18	季刊誌INAXREPORT
3	「京都ちゃちゃちゃっ」出演	関西テレビ京都ファン社	19.5.22	「ミニチュア玩具について」
4	上京歴史探訪館ボランティア説明会講師派遣	上京歴史探訪館運営委員会	19.6.27	
5	特別研修生の見学	国立歴史民俗博物館	19.7.3	6名受入れ
6	ブライダルミュージアム京都学講座への講師派遣	財団法人大学コンソーシアム京都	19.7.22	
7	ゴールデンスピリッツへの講師派遣	財団法人京都市生涯学習振興財団	19.8.24	
8	府民講座への講師派遣	京都府立総合資料館	19.9.11	
9	施設見学	京都市会文教委員会共産党委員	19.9.19	4名受入れ
10	第5回伝統文化祭への協力	伝統文化祭「西陣千両ヶ辻」実行委員会	19.9.23	
11	2007京都・西陣夢まつり街中ギャラリーへの協力	西陣織工業組合	19.10.19 ～21	
12	中国陝西省考古研究院見学受入れ	奈良文化財研究所	19.11.8	文化庁招聘 5名受入れ
13	発掘調査等に係る調査	鹿児島県立埋蔵文化財センター	19.12.12	3名受入れ 展示見学
14	平安京創生館土層剥取りパネル設置オープニング事業への協力	財団法人京都市生涯学習振興財団	20.1.9	正親小学校6年生の見学解説

表 21 入館者数一覧表

月	開館日数	一般			団体			合計	一日平均
		12才以上	12才未満	小計	12才以上	12才未満	小計		
	日	人	人	人	人	人	人	人	
4	26	1,274	51	1,325	133	0	133	1,458	56.1
5	26	1,350	57	1,407	344	179	523	1,930	74.2
6	26	1,144	80	1,224	335	42	377	1,601	61.6
7	26	1,143	78	1,221	156	0	156	1,377	53.0
8	27	1,237	199	1,436	0	0	0	1,436	53.2
9	26	1,551	70	1,621	178	0	178	1,799	69.2
10	26	1,255	43	1,298	80	0	80	1,378	53.0
11	26	1,622	70	1,692	209	95	304	1,996	76.8
12	23	1,142	55	1,197	97	0	97	1,294	56.3
1	24	1,204	43	1,247	132	0	132	1,379	57.5
2	25	1,806	61	1,867	368	0	368	2,235	89.4
3	26	2,255	58	2,313	111	48	159	2,472	95.1
計	307	16,983	865	17,848	2,143	364	2,507	20,355	66.3

※参考 平成18年度 開館日数 307日 入館者数 19,837人(一日平均 64.6人)

Ⅲ 組織構成

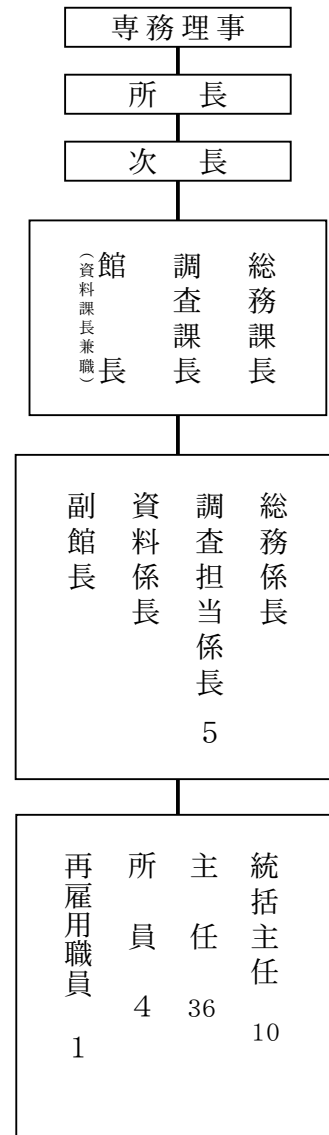
(平成20年3月31日現在)

表22 役員・評議員名簿

[役員]		[評議員]	
理事長	山岸 吉和	評議員	五十川 伸矢
専務理事	吉田 正和	評議員	岡野 路子
理事	尼崎 博正	評議員	糟谷 範子
理事	井上 満郎	評議員	北山 俊二
理事	上田 正昭	評議員	桑原 毅
理事	西川 幸治	評議員	鈴木 眞咲
理事	村井 康彦	評議員	伊達 仁美
理事	和田 晴吾	評議員	西山 良平
監事	廣瀬 伸彦	評議員	平竹 耕三
監事	森口 源一	評議員	山内 喜美子

(ア行順)

表23 組織構成表



うち 4名 (財) 大阪府文化財センターへ派遣
1名 (財) 和歌山県文化財センターへ派遣

付 章

伏見城跡出土の江戸時代人骨の分析

「伏見人骨資料からの江戸時代町民の人口学的分析」・・・・・・・・ 1～9

片山一道、五十嵐健行、藤澤珠織

「伏見人骨資料からみる江戸時代人の体格、虫歯、病気」・・・・・・・・ 10～32

京都大学大学院理学研究科 自然人類学研究室 藤澤珠織

京都大学名誉教授 片山一道

伏見人骨資料からの江戸時代町民の人口学的分析

片山一道、五十嵐健行、藤澤珠織

伏見人骨資料は、ひとつの遺跡から出土した人骨の標本数が古人骨資料としては稀にみるほど大きいので、人口学的な観点から非常に有意義な情報を提供してくれるものと期待できる。それをもとに生命表分析を試行することで、さまざまな年齢での平均余命を推定できるのは間違いなからう。ここでは、その資料の人口学的分析によって得られた結果を図表と短報のかたちで提示するとともに、ごく重要な情報だけをかいつまんで読み取り、それらを要約する。この分析の詳細については、いずれ論文の形式でまとめた。

1. 表1 a,b,c は、藤澤・片山（2009）の表1（3頁）を集計、年齢別と性別に死亡者数をまとめたものである。そのうち表1 aは、20歳未満の死亡人口について、成長段階で区分したもので、表1 cは20歳以降と同様に10歳区切りで分けたものである。いずれも実数に基づく。さらに表1 bは、より現実的な生命表を求める意図で幼児の死亡数を20歳未満死亡数の半数になるよう補正したものである。これは近代以前には、乳児死亡者数が20歳未満死亡者数の50%以上、60%程度であったとの経験則（中橋、私信）を拠り所とする。おそらくは死亡者人口の実態により近い分布を示すと考えられる。表1から読みとれるポイントは、20歳未満の死亡者の割合が少なくとも全死亡者の2割程度に達すること、なかでも乳児や幼児で高いこと、死亡率が高齢者に集中するのではなく、むしろ熟年者で高いこと、80歳を超える者の死亡率も少なくないこと（長生きをする者は長生きしたこと）、若年の壮年者でも一定の死亡率を示すことなどである。

2. 表2は、表1のa、b、cに対応して、全体人口だけでなく、男性人口と女性人口のそれぞれについて、生命表分析を行い、それぞれの詳細を示すものである。委細は割愛するが、それらの結果から読みとれる要点は、以下の通りである。乳児の平均余命が37歳から34歳程度であること、その数値が男性のほうが女性よりも高かったらしいこと（実数につき、41歳対32歳、補正值につき、38歳28歳）、20歳年齢でも平均余命は25歳程度にすぎなかったこと、年齢をかさねるごとに年齢値に平均余命値を足した年齢値（いわゆる平均寿命値）が大きくなったこと、乳児の平均余命値は鬼頭（1983）が示す江戸時代農村部のそれと大差ないか幾分小さめであったことなどである。

3. 図1は、男女ごとに死亡者数の年齢分布を図示するものである。年齢ごとの死亡者数には、男女で違いが認められ、女性のほうがより若い年齢に重心が傾くことが読みとれる。女性では壮年から熟年にかけての年齢でピークがあるが、男性では熟年の年齢でピークがあらわれる。

4. 図2の生存曲線でも、そのことがはっきりと読みとれる。あきらかに女性のほうが下方で推移する生存曲線を示す。つまり、成年の若い段階で死亡する者の割合は女性のほうが高かったようである。おそらくは、妊娠、出産、子育てに関係する要因が大きな影響を与えていたのではあるまいか。もちろん、栄養面の問題や流行病なども関係していた可能性もあり、今後の検討課題とならう。

5. 参考までに、伏見人骨資料で求めた江戸時代人と現代日本人の間で生存曲線を比較した（図3）。い

うまでもないことだが、江戸時代人の生存曲線は現代人のものに比較して、はるかに低いところで推移する。その原因が乳幼少時と成人前期の死亡率の高さに関係することが読みとれる。また、図 3c は興味深い情報を図示する。江戸時代人と現代人との間で生存曲線の傾向がことなることである。前者では男性のほうが高いところで推移するが、後者ではその逆の傾向を示す。このことは江戸時代には、女性のほうの生活条件が相対的に悪かったため、より若い年齢で死亡する者が多かったことを示唆する。

<謝辞>

本研究は、(財)京都市埋蔵文化財研究所の協力で実施できた。深謝したい。また平成 21 年度日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究 (C)、『江戸時代京都町民の人物像、生命表、病歴などを探る考古学的研究』(研究代表者：片山一道、課題番号：21500883)により実施された。

<引用文献>

藤澤珠織・片山一道 (2009) 基礎データの概要、表1 出土人骨一覧. 『江戸時代京都町民の人物像、生命表、病歴などを探る骨考古学的研究』(平成 20 年度科学研究費補助金、基盤研究C、研究成果報告書)、pp. 3-15.

鬼頭 宏 (1983) 『日本二千年の人口史』、PHP 出版.

中橋孝博 (私信)

表1 年齢別・性別死亡数

a. 成長段階・年齢区分（実数）

死亡年齢段階（歳）	男性	女性	不明	合計
0-1（乳児）	0	0	17	17
2-5（幼児）	0	0	19	19
6-11（小児）	0	0	9	9
12-19（思春期）	4	7	0	11
20-29	17	19	1	37
30-39	20	21	0	41
40-49	37	21	1	59
50-59	23	6	0	29
60-69	16	4	0	20
70-79	7	4	0	11
80-89	6	2	0	8
小計	130	84	47	261

b. 成長段階・年齢区分（乳児は想定数）

死亡年齢段階（歳）	男性	女性	不明	合計
0-1（乳児）	0	0	(28)	(28)
2-5（幼児）	0	0	19	19
6-11（小児）	0	0	9	9
12-19（思春期）	4	7	0	11
20-29	17	19	1	37
30-39	20	21	0	41
40-49	37	21	1	59
50-59	23	6	0	29
60-69	16	4	0	20
70-79	7	4	0	11
80-89	6	2	0	8
小計	130	84	(58)	(272)

c.10 歳区切りの年齢区分

10年区切り死亡段階	男性	女性	不明	合計
0-9	0	0	41	41
10-19	4	7	4	15
20-29	17	19	1	37
30-39	20	21	0	41
40-49	37	21	1	59
50-59	23	6	0	29
60-69	16	4	0	20
70-79	7	4	0	11
80-	6	2	0	8
合計	130	84	47	261

表2 生命表

a. 成長段階・年齢区分 (実数)

a-1. 全体人口

死亡年齢段階 (歳)	Dx	dx	lx	q _x	L _x	T _x	Ex
0-1 (乳児)	17	6.51	100.00	0.07	193.49	3741.38	37.41
2-5 (幼児)	19	7.28	93.49	0.08	359.39	3547.89	37.95
6-11 (小児)	9	3.45	86.21	0.04	506.90	3188.51	36.99
12-19 (思春期)	11	4.21	82.76	0.05	645.21	2681.61	32.40
20-29	37	14.18	78.54	0.18	714.56	2036.40	25.93
30-39	41	15.71	64.37	0.24	565.13	1321.84	20.54
40-49	59	22.61	48.66	0.46	373.56	756.70	15.55
50-59	29	11.11	26.05	0.43	204.98	383.14	14.71
60-69	20	7.66	14.94	0.51	111.11	178.16	11.92
70-79	11	4.21	7.28	0.58	51.72	67.05	9.21
80-	8	3.07	3.07	1.00	15.33	15.33	5.00
合計	261	100.00			3741.38		

a-2. 男性人口

死亡年齢段階 (歳)	Dx	dx	lx	q _x	L _x	T _x	Ex
0-1 (乳児)	9	5.54	100.00	0.06	194.46	4114.66	41.15
2-5 (幼児)	10	6.19	94.46	0.07	365.47	3920.20	41.50
6-11 (小児)	5	2.93	88.27	0.03	520.85	3554.72	40.27
12-19 (思春期)	4	2.61	85.34	0.03	672.31	3033.88	35.55
20-29	18	11.40	82.74	0.14	770.36	2361.56	28.54
30-39	20	13.03	71.34	0.18	648.21	1591.21	22.31
40-49	38	24.43	58.31	0.42	460.91	943.00	16.17
50-59	23	14.98	33.88	0.44	263.84	482.08	14.23
60-69	16	10.42	18.89	0.55	136.81	218.24	11.55
70-79	7	4.56	8.47	0.54	61.89	81.43	9.62
80-89	6	3.91	3.91	1.00	19.54	19.54	5.00
合計	154	100.00			4114.66		

a-3. 女性人口

死亡年齢段階 (歳)	Dx	dx	lx	q _x	L _x	T _x	Ex
0-1 (乳児)	9	7.91	100.00	0.08	192.09	3208.37	32.08
2-5 (幼児)	10	8.84	92.09	0.10	350.70	3016.28	32.75
6-11 (小児)	5	4.19	83.26	0.05	486.98	2665.58	32.02
12-19 (思春期)	7	6.51	79.07	0.08	606.51	2178.60	27.55
20-29	20	18.14	72.56	0.25	634.88	1572.09	21.67
30-39	21	19.53	54.42	0.36	446.51	937.21	17.22
40-49	22	20.00	34.88	0.57	248.84	490.70	14.07
50-59	6	5.58	14.88	0.38	120.93	241.86	16.25
60-69	4	3.72	9.30	0.40	74.42	120.93	13.00
70-79	4	3.72	5.58	0.67	37.21	46.51	8.33
80-89	2	1.86	1.86	1.00	9.30	9.30	5.00
合計	108	100.00			3208.37		

b. 成長段階・年齢区分（乳児は想定数）

b-1. 全体人口

死亡年齢段階（歳）	Dx	dx	lx	qx	Lx	Tx	Ex
0-1（乳児）	(28)	10.29	100.00	0.10	189.71	3411.76	34.12
2-5（幼児）	19	6.99	89.71	0.08	330.15	3222.06	35.92
6-11（小児）	9	3.31	82.72	0.04	433.46	2891.91	34.96
12-19（思春期）	11	4.04	79.41	0.05	504.41	2458.46	30.96
20-29	37	13.60	75.37	0.18	685.66	1954.04	25.93
30-39	41	15.07	61.76	0.24	542.28	1268.38	20.54
40-49	59	21.69	46.69	0.46	358.46	726.10	15.55
50-59	29	10.66	25.00	0.43	196.69	367.65	14.71
60-69	20	7.35	14.34	0.51	106.62	170.96	11.92
70-79	11	4.04	6.99	0.58	49.63	64.34	9.21
80-	8	2.94	2.94	1.00	14.71	14.71	5.00
合計	272	100.00			3411.76		

b-2. 男性人口

死亡年齢段階（歳）	Dx	dx	lx	qx	Lx	Tx	Ex
0-1（乳児）	(14)	8.81	100.00	0.09	191.19	3830.19	38.30
2-5（幼児）	9.5	5.97	91.19	0.07	342.14	3638.99	39.90
6-11（小児）	4.5	2.83	85.22	0.03	462.26	3296.86	38.69
12-19（思春期）	4	2.52	82.39	0.03	554.72	2834.59	34.40
20-29	17.5	11.01	79.87	0.14	743.71	2279.87	28.54
30-39	20	12.58	68.87	0.18	625.79	1536.16	22.31
40-49	37.5	23.58	56.29	0.42	444.97	910.38	16.17
50-59	23	14.47	32.70	0.44	254.72	465.41	14.23
60-69	16	10.06	18.24	0.55	132.08	210.69	11.55
70-79	7	4.40	8.18	0.54	59.75	78.62	9.62
80-	6	3.77	3.77	1.00	18.87	18.87	5.00
合計	159	100.00			3830.19		

b-3. 女性人口

死亡年齢段階（歳）	Dx	dx	lx	qx	Lx	Tx	Ex
0-1（乳児）	(14)	12.39	100.00	0.12	187.61	2823.01	28.23
2-5（幼児）	9.5	8.41	87.61	0.10	313.27	2635.40	30.08
6-11（小児）	4.5	3.98	79.20	0.05	392.92	2322.12	29.32
12-19（思春期）	7	6.19	75.22	0.08	433.63	1929.20	25.65
20-29	19.5	17.26	69.03	0.25	603.98	1495.58	21.67
30-39	21	18.58	51.77	0.36	424.78	891.59	17.22
40-49	21.5	19.03	33.19	0.57	236.73	466.81	14.07
50-59	6	5.31	14.16	0.38	115.04	230.09	16.25
60-69	4	3.54	8.85	0.40	70.80	115.04	13.00
70-79	4	3.54	5.31	0.67	35.40	44.25	8.33
80-	2	1.77	1.77	1.00	8.85	8.85	5.00
合計	113	100.00			2823.01		

c.10 歳区切りの年齢区分

c-1. 全体人口

死亡年齢段階 (歳)	Dx (人数)	dx	lx	qx	Lx	Tx	Ex
0-9	41	15.71	100.00	0.16	921.46	3772.03	37.72
10-19	15	5.75	84.29	0.07	814.18	2850.57	33.82
20-29	37	14.18	78.54	0.18	714.56	2036.40	25.93
30-39	41	15.71	64.37	0.24	565.13	1321.84	20.54
40-49	59	22.61	48.66	0.46	373.56	756.70	15.55
50-59	29	11.11	26.05	0.43	204.98	383.14	14.71
60-69	20	7.66	14.94	0.51	111.11	178.16	11.92
70-79	11	4.21	7.28	0.58	51.72	67.05	9.21
80-	8	3.07	3.07	1.00	15.33	15.33	5.00
合計	261	100.00			3772.03		

c-2. 男性人口

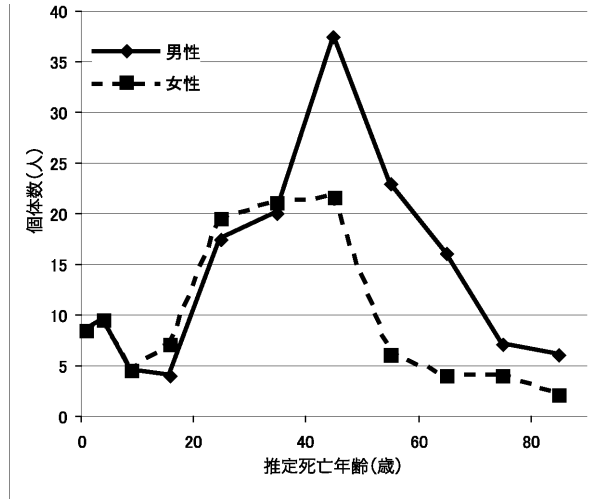
死亡年齢段階 (歳)	Dx (人数)	dx	lx	qx	Lx	Tx	Ex
0-9	20.5	13.36	100.00	0.13	933.22	4141.69	41.42
10-19	6	3.91	86.64	0.05	846.91	3208.47	37.03
20-29	17.5	11.40	82.74	0.14	770.36	2361.56	28.54
30-39	20	13.03	71.34	0.18	648.21	1591.21	22.31
40-49	37.5	24.43	58.31	0.42	460.91	943.00	16.17
50-59	23	14.98	33.88	0.44	263.84	482.08	14.23
60-69	16	10.42	18.89	0.55	136.81	218.24	11.55
70-79	7	4.56	8.47	0.54	61.89	81.43	9.62
80-	6	3.91	3.91	1.00	19.54	19.54	5.00
合計	153.5	100.00			4141.69		

c-3. 女性人口

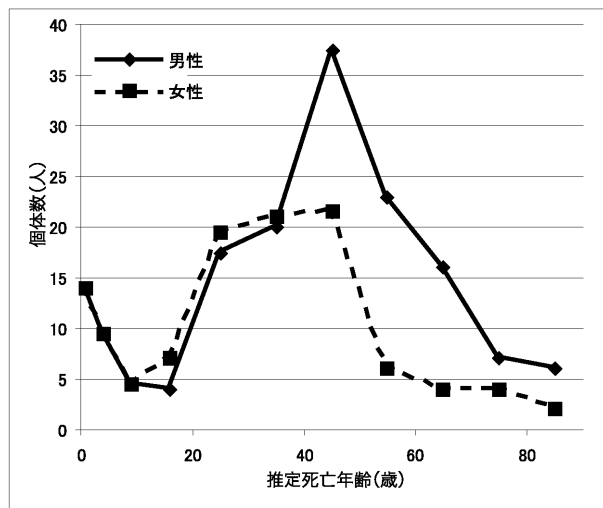
死亡年齢段階 (歳)	Dx (人数)	dx (人数%)	lx	qx	Lx	Tx	Ex
0-9	20.5	19.07	100.00	0.19	904.65	3244.19	32.44
10-19	9	8.37	80.93	0.10	767.44	2339.53	28.91
20-29	19.5	18.14	72.56	0.25	634.88	1572.09	21.67
30-39	21	19.53	54.42	0.36	446.51	937.21	17.22
40-49	21.5	20.00	34.88	0.57	248.84	490.70	14.07
50-59	6	5.58	14.88	0.38	120.93	241.86	16.25
60-69	4	3.72	9.30	0.40	74.42	120.93	13.00
70-79	4	3.72	5.58	0.67	37.21	46.51	8.33
80-	2	1.86	1.86	1.00	9.30	9.30	5.00
合計	107.5	100.00			3244.19		

図1 死亡年齢分布

a. 成長段階・年齢区分 (実数)



b. 成長段階・年齢区分 (乳児は想定数)



c. 10歳区切りの年齢区分

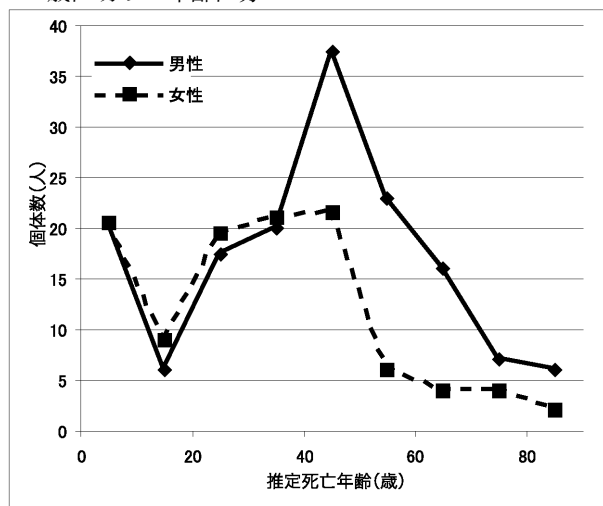
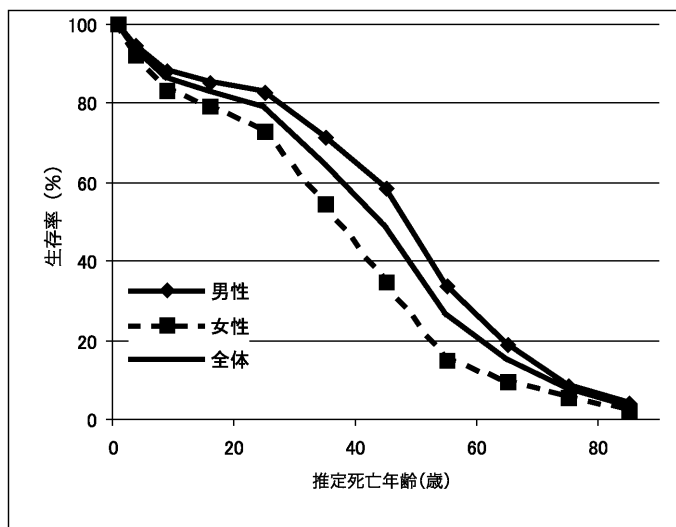
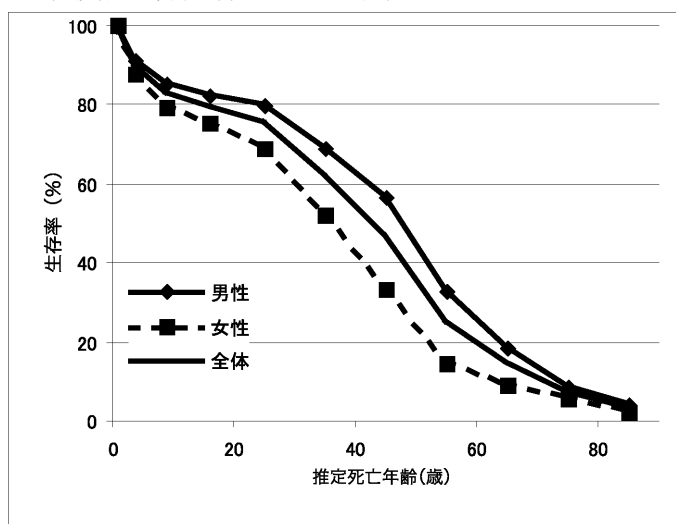


図2 生存曲線

a. 成長段階・年齢区分（実数）



b. 成長段階・年齢区分（乳児は想定数）



c. 10歳区切りの年齢区分

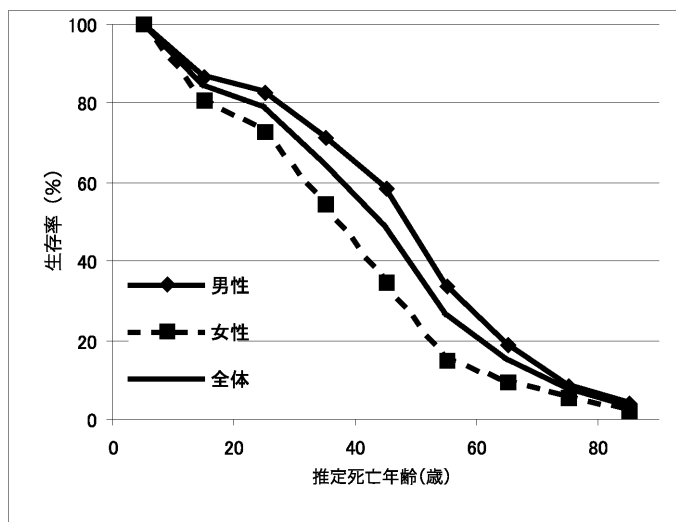
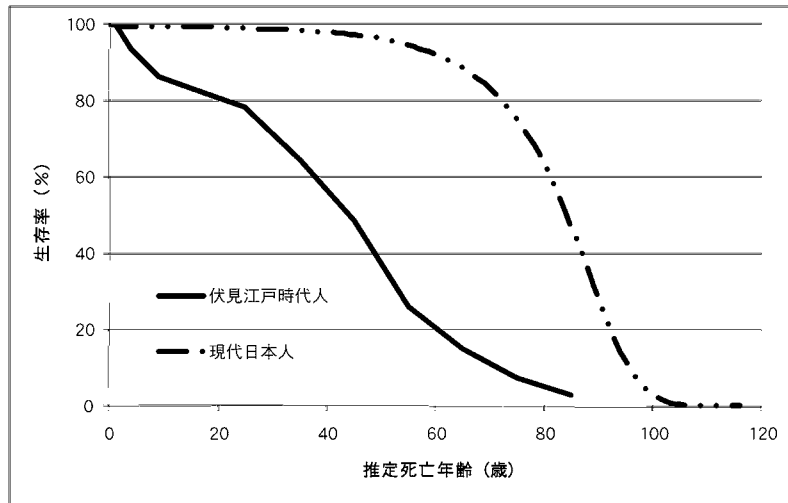
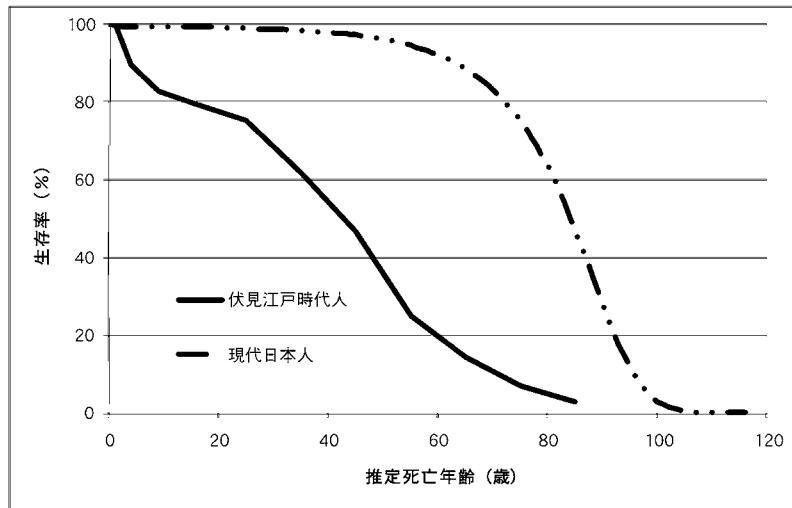


図3 伏見江戸時代人と現代日本人（H12年度国勢調査）の生存曲線の比較

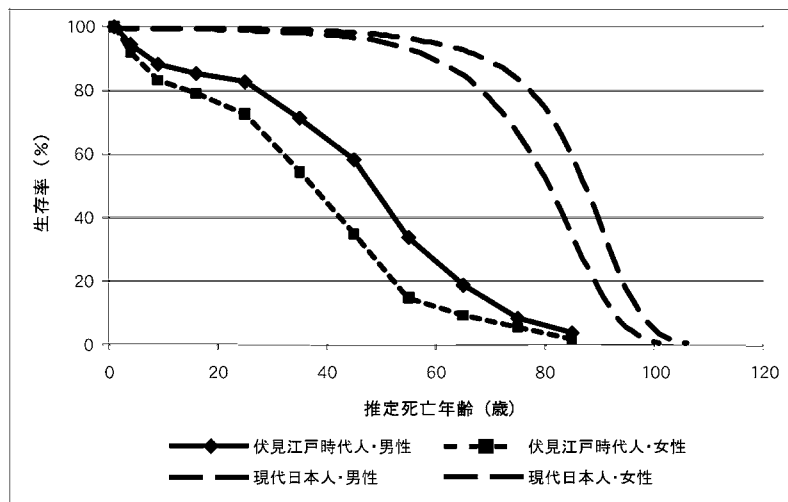
a. 男女合計（実数）



b. 男女合計（乳児想定数）



c. 男女別（実数）



伏見人骨資料からみる江戸時代人の体格、虫歯、病気

京都大学大学院理学研究科 自然人類学研究室 藤澤珠織

京都大学名誉教授 片山一道

1. はじめに

京都市の伏見城跡遺跡に埋蔵された近世墓地から 600 基近くの墓が確認され、多くの人骨が土葬や火葬された状態で発見された。考古学的な調査によって、墓地が営まれた時期は 17 世紀の中葉から 20 世紀初頭にかけてであることが判明したが、上層部は火葬骨がほとんどで、土葬人骨の多くは江戸時代の前期から終末にかけての時代に属するものと推測できる。

この墓地では、少なくとも 630 人分の人骨が数えられた。これらの性別判定の結果、男性骨が 254 人分、女性骨が 178 人分、性別不明の人骨は 198 人分であった。また死亡年齢を推定した結果、胎児から非常に高齢の者に至るまで、さまざまな年齢層の遺骨が含まれていることが判明した。なお、これら人骨の性別、推定死亡年齢の分布についての詳細は、すでに一昨年度の報告書に記載した(藤澤・片山, 2007)。

本稿は 2007 年度から 2008 年度に実施した当該人骨調査の一部を報告するものであるが、特に頭骨や四肢骨の計測値、齲歯の出現率などを詳細に示す。また、いくつかの特記すべき疾病痕を記載する。

2. 人骨資料と研究方法

成人で性差が判定できる人骨で、なおかつ保存状態が良好なものだけを用いた。頭骨、四肢骨ともに、主要な計測項目と示数を選択して、いずれもマルチンの方法に準拠して求めた。いくつかの計測値と示数値について、縄文時代人骨、中世人骨、近代人骨などと比較した。縄文人は岡山県津雲貝塚人骨(清野・平井, 1928)、中世人は山口県吉母浜遺跡人骨(九州大学医学部解剖学第二講座, 1988)、近代人は畿内の解剖献体人骨(宮本, 1928)についての報告を比較資料とした。

この墓地で出土した人骨に残る総ての歯 1300 点余りについて、齲歯の割合を調べるために、齲蝕の有無を判定した。実際には齲蝕の程度を 4 段階、つまり齲蝕がエナメル質に止まるもの (C1)、象牙質に及ぶもの (C2)、歯髓腔にまで及ぶもの (C3)、歯冠の三分の二以上が崩壊し残根状態であるもの (C4) に分けて記録した。全調査歯に対する齲歯の割合を齲歯率とするが、現実には発掘人骨の場合、死後に消失した歯も多く、齲歯率を表示するのは難しい。そこで、佐倉 (1963) が考案した一人当たりの齲歯数推定値を計算した。成人の歯は通常 32 本であり、上下左右ともに、同じ種類の歯が中央から対称に 8 本ずつ並んで構成される。このとき左右の同歯種を一つの群として扱うと、上顎 8 群、下顎 8 群の 16 群に分けられる。佐倉の方法では、遊離歯を含む遺存歯すべてを、この 16 群に分ける。各群ごとに齲歯率を求め、それを総和、さらに 2 倍したものが、一人平均齲歯数推定値となる。

そのほか、いくつかの特に目立つ疾病痕について、伏見人骨で観察されたものを写真で表示し、考え得る原因疾患について推察する。

3. 検査結果

頭蓋骨と四肢骨の計測結果を表示し、簡単な分析を加えた検査結果について図などをまじえつつ説明する。また齲歯の出現率を求めた結果を示し、個々の歯における齲蝕の好発部位や進行の程度についても触れる。その他の疾病痕についてはできるだけ簡明に記載する。

-1. 頭骨の計測値と示数

主要な計測値と示数について、標本数、平均値、標準偏差、最大値、および最小値を表1と表2に示す。また伏見人骨の特徴を抽出するために、主要項目の平均値を抜粋し、畿内の近代人骨を基準にして縄文時代人骨、中世人骨などと比較する関係偏差折線を求めたので、図1と図2に示す。関係偏差折線とは、各計測値について「(基準集団の平均値－比較集団の平均値)÷基準集団の標準偏差」で求めた値をつないだグラフである。参考までに、比較人骨資料についての平均値と示数を表3と表4に示す。

計測値(図1)のうち男性人骨については、伏見の江戸時代人骨はすべての項目について、近代人骨の標準偏差の1単位内に収まる。このことは、どの計測値についても、伏見人骨と近代人骨との間で大きな違いがないことを意味する。女性人骨については、頭蓋最大長とバジオン・プレグマ高で近代人骨よりも大きな値を、下顎枝高が小さな値を示すが、それでも1単位を少し超える程度の違いでしかない。したがって女性の頭骨についても、男性骨と同様、どの計測値も近代人骨との間で違いがないものと評価できる。

頭骨の計測値から求めた示数について、同様に関係偏差折線を描いて比較したのが図2である。どの示数についても男女ともに、伏見人骨と近代人骨との間の値は、縄文時代人骨および中世人骨と近代人骨との間の値よりも小さい傾向がうかがえ、伏見人骨と近代人骨の相似性が強いことが示される。注目すべきは上顔示数と頭蓋長幅示数である。伏見人骨は男女ともに、上顔示数が近代人骨よりも小さい傾向にある。ことに女性人骨は近代人骨よりも1単位以上も小さい。それでも縄文時代人骨ほどは小さくない。このことから伏見人骨は、縄文人骨ほどではないが、近代日本人よりも上顔部が幅広で丸顔の傾向にあることが分かる。次に頭蓋長幅示数について、中世から明治初頭期の日本人頭蓋は、この値が小さいことが多くの研究で報告されている。しかしながら、表1と図2で読みとれるように、伏見人骨は男女ともに中頭の上ほどの値となっており、近代人骨と比べても大きな違いはない。このことは伏見人骨が、中世や江戸時代の人骨資料の多くと異なり、長頭に傾く傾向が弱いことを意味しており、これが伏見人骨だけの特徴かどうか、今後の大きな検討課題である。

-2. 四肢骨の計測値と示数

四肢長骨の主要な計測値と示数を求めたので、その成績を表5に示す。また各四肢骨の最大長を抜粋し、プロポーシオンを表す示数を求め、表6と表7に示す。

伏見人骨の男性の上肢骨について、上腕骨最大長が縄文人骨より有意に大きく、橈骨最大長は有意に小さいことが判明した。伏見人骨の女性の橈骨は縄文人骨や中世人骨に比べて有意に短いことが分かった。

下肢骨については、男性では、どの時代の人骨資料の間でも有意差は認められなかった。女性では、伏

見人骨の大腿骨と脛骨ともに縄文時代人との比較で有意に短いことが分かった。縄文時代人から近代人にかけて通覧すると、上肢、下肢ともに、近位側の上腕骨と大腿骨では大きな変化がないのに、遠位側の橈骨と脛骨では、時代とともに短くなる傾向が読みとれる。いずれにせよ伏見人骨は近代人骨との比較において、どの骨の最大長についてもほとんど違いが認められないことがわかった。なお、伏見人骨について、藤井の式（藤井, 1960）を用いて四肢骨最大長から求めた身長推定値の平均は、男性では 157.9cm (n=42)、女性が 144.3cm (n=23)、標準偏差はそれぞれ、39.6mm と 25.6mm であった。

-3. 齲歯の出現率

なんらかの歯が残っている合計 117 人分の人骨について、合計 1336 本の歯で齲蝕の有無を確認した。そのうち、いずれかの段階にある齲蝕状態が合計 447 本の歯で認められた。その観察値を上下の歯列で歯種別に示すのが表 8 である。上顎の遺存歯数は 601 本で、齲蝕がみられたものは 175 本 (29.1%)、下顎の遺存歯は 735 本で、齲蝕がみられたものは 272 本 (37.0%) だった。この人骨集団での齲歯率、つまり観察した全歯に占める齲歯の割合は 33.5% となった。また、一人平均齲歯数推定値は 9.8 本と計算された。

どの歯に齲蝕が多くみられたかについて、切歯と犬歯、小白歯、大白歯という 3 つのグループにわけて集計した結果を述べる。上顎の切歯と犬歯は 185 本が遺存し、このうち齲蝕があったものの割合は 12.4% で、同様に小白歯は遺存歯 170 本のうち 27.6% に、大白歯は遺存歯 246 本のうち 43.0% に齲蝕が見られた。下顎では切歯と犬歯の遺存歯 212 本のうち、齲蝕があったものの割合は 12.3% で、同様に小白歯は 211 本のうち 32.2%、大白歯は 312 本のうち 57.1% に齲蝕があった。上下顎ともに、齲蝕は前方歯よりも後方歯に出現する割合が高く、特に大白歯に顕著なことがわかった。

齲蝕が歯のどこに出現していたかを、歯冠咬合面、歯冠側面、歯頸部、歯根部にわけて観察した結果を述べる。なお齲蝕の出現は歯 1 本につき一か所とは限らない。つまり、歯冠咬合面に一か所、側面に一か所、合計二か所などとカウントする例もある。しかしここでは、簡便を期すために一本の歯につき一か所の齲蝕があった歯、上顎 155 本と下顎 241 本について、出現部位の割合を示す。上顎では 155 本の齲蝕歯のうち、歯冠咬合面に齲蝕のあったものの割合が 63.9%、歯冠側面に齲蝕のあったものが 14.2%、歯頸部に齲蝕のあったものが 16.8%、歯根部に齲蝕のあったものが 5.2% という結果であった。同様に、下顎では齲蝕歯 241 本のうち、歯冠咬合面に齲蝕のあったものの割合が 71.4%、歯冠側面に齲蝕のあったものが 12.4%、歯頸部に齲蝕のあったものが 12.4%、歯根部に齲蝕のあったものが 3.7% という結果であった。上下顎ともに、歯冠咬合面の齲蝕の割合が半数以上を占め、歯頸部や歯根部の齲蝕は比較的少ない傾向が見られた。

次に齲蝕の進行の程度を、一本の歯につき一か所の齲蝕があった歯、上顎 155 本と下顎 241 本について述べる。齲蝕の深さは C1 から C4 の 4 段階に分類しており、上顎では C1 の割合が 63.9%、C2 が 30.3%、C3 が 5.2%、C4 が 0.6% であった。下顎では C1 が 63.1%、C2 が 32.4%、C3 が 2.5%、C4 が 1.2% あり、釘植していて齲蝕深度が観察できなかったものが 2 本 (0.8%) だった。上下顎ともに、齲蝕の 6 割以上がエナメル質に止まる程度の深さであった。

発掘人骨の場合、歯が汚れていたり、一部が損壊していたりなどのために、ことにエナメル質の部分だ

けが齧蝕される軽い齧歯では判定が難しいことが少なくない。観察者間で誤差もあるので、他の研究者の観察結果と直接に比較するのは困難が伴う。そのため現時点ではあくまでも参考にすぎないが、齧歯率と一人平均齧歯数推定値について、他集団で求められた結果と比較するのが表9である。一般に江戸時代人骨では齧歯率が高いようだが、一人平均齧歯数推定値でみると、伏見人骨の値が9.8本と、突出して高いことが注目に値する。つまり、伏見人骨では、齧歯率、一人平均齧歯数ともに非常に高い値を示しており、実際に齧歯が蔓延していたことが示唆される。ただしこれには死亡年齢の値も関係してこよう。表10の比較資料(佐倉, 1963)における人骨の死亡年齢段階は、縄文の吉胡貝塚人骨では壮年が3.5割、熟年が6割弱、老年が0.5割である(個体数62体、遺存歯750本)。中世資料は室町時代の人骨で、死亡年齢段階は壮年が7割強、熟年2割弱、不明1割弱である(個体数64体、遺存歯数548本)。江戸時代資料は深川の寺院で出土した人骨で、死亡年齢段階は壮年約7割、熟年約3割、青年が1割未満である(個体数80体、遺存歯530本)。現在人資料は昭和20年代の生体調査の結果で、当時17才の学生のものである(個体数1823人)。これに対し、伏見人骨資料の死亡年齢段階は、個体数117体において壮年4割、熟年4割、老年2割で、熟年者と老年者を合わせた割合が高く、比較資料との間に死亡年齢段階の違いが見受けられる。これらの詳細については、観察者間誤差のほかに資料の死亡年齢段階等も考慮しつつ、あらためて比較検討する必要がある。

-4. 骨病変の事例

<梅毒>

梅毒の症状が骨にまで及ぶものを骨梅毒といい、頭蓋骨や四肢骨などに融解、増殖性の変化が認められることで、それと判定できる。伏見人骨でも、いくつかの頭蓋で骨表面に凹凸不整や星芒状の癍痕などが観察できた(写真1)(個体番号104(「藤澤・片山, 2007」にある「付表2、出土人骨一覧表」のナンバーと対応する、以下同様)老年段階で死亡した男性と推定)。江戸時代人は梅毒の罹患率が高かったことが指摘されており、ことに江戸の市中に住んだ成人では約半数が梅毒に罹患していたものと推測する報告がある(鈴木, 1998)。伏見人骨でも観察可能な56体のうち30%を超える19体で、何らかの梅毒病痕が検出できた。男性に限ると、観察個体36体のうちの約半数に罹患が認められた。また頭蓋骨や四肢骨の多くで骨梅毒の出現率が5%~15%程度であるのに対し、頻発部位とされる脛骨では、より高い30%以上の出現率が認められた。このほかにも一部の骨しか残っておらず全身の骨が観察できない多くの個体があり、頭蓋骨、鎖骨、上腕骨、橈骨、大腿骨、脛骨などの破片で骨梅毒に特徴的な病変が多く観察された(写真2、3)。

<椎骨などの関節疾患>

骨盤を構成する仙骨と腸骨の間の仙腸関節が完全に癒合し、その他の関節部でも全身性の癒合を起こした個体が確認された(写真4)(個体番号76、熟年段階で死亡した男性と推定)。この人骨の主は生前、背骨などを屈曲できないため、日常生活に大きな支障をきたしていたのは間違いない。他にも椎骨に重度の病変を示す何人分かの人骨が見つかった。それらを鑑別診断することはできないが、おそらくは強直性脊椎炎、全身性特発性骨増殖(DISH)、前縦靭帯骨化などが考えられる。前縦靭帯骨化の特徴的な症状として、

特に椎骨の前面左右側のいずれかに片側性で蝸をたらしめたような強い骨化様の変化を生じることが指摘されている（写真5）（個体番号93、老年段階で死亡した男性と推定）。これらは加齢的な疾患であることが多いが、原因は一様ではない。

<変形性関節症>

関節部でクッションの役割をする軟骨が擦り減ることにより起こるとされる（写真6、写真7）。写真7（個体番号165、老年段階で死亡した男性と推定）では、肘関節をなす各骨の関節面がガラス状に光沢を持ち硬化している。写真6（個体番号155、老年段階で死亡した女性と推定）では、同様な症状が第2頸椎の歯突起前面で観察できる。これらの変化は加齢に伴い出現し次第に増強することが指摘されている（J.Rogers and T.Waldron, 1995）。

<骨棘形成>

これも加齢に伴う病変とされるが、各椎骨椎体の上下関節面の周囲に棘状の骨増殖が生じる。その代表例を写真8（個体番号165、既出）に示す。この人骨集団全630体には、一部の骨しか残っていない個体も多くあるが、そのうち数十体分以上にのぼる骨格で、この症状が観察された。

<骨折>

古人骨で骨折痕がみられることは少なくないが、伏見人骨では四肢骨について、明確な骨折痕はわずか一例しか観察できなかった。熟年で死亡した男性の左上腕骨の骨幹中央部でみられる、若木骨折らしきものが治癒した痕である（写真9、個体番号37）。実際に四肢骨を骨折する者の数が少なかったことを物語る可能性が強い。椎骨で圧迫骨折を起こした痕は何例かみられた。写真8（個体番号165、既出）は第2腰椎で上下方向に潰れる圧迫骨折を起こした例である（写真の上から5番目にある椎骨）。

<根尖膿瘍>

齲歯などが悪化して、歯根に炎症性の病変を起こして顎骨の一部が融解するような状態となる根尖膿瘍は、何例か観察された（写真10）（個体番号110、熟年で死亡した男性と推定）。

<その他の病変>

多孔性、穿孔性、溶骨性などの変化が生じており、なんらかの病変である疑いが強いものが、頭骨、胸骨、上腕骨などで、何例か観察された。写真11（個体番号138、熟年で死亡した男性と推定）、写真12（個体番号150、壮年で死亡した女性と推定）、写真13（個体番号10、壮年で死亡した女性と推定）などである。これらが何の病変であるか、あるいは傷痕であるのか、あるいは別の原因で生じたのか、今のところ不明であり、さらなる検討を要する。

4. まとめ

伏見江戸人骨の頭骨計測値および頭蓋示数、四肢骨最大長は、男女ともに近代人骨と大きな違いのないことが明らかとなった。ただ伏見人骨は近代人骨に比べて上顔部が幅広でどちらかというと丸顔の傾向を示す点で、近代人骨とやや異なる。一方で頭蓋長幅示数をみると、伏見江戸人骨は近代人骨との差が少ない。これは、他の中世から明治初頭期の人骨資料の多くと違って、伏見人骨では長頭に傾く傾向が弱いことを

示唆する。なお四肢骨最大長による身長推定値は男性が157.9cm(n=42, s.d.=39.6mm)、女性が144.3cm(n=23, s.d.=25.6mm)であった。

伏見人骨にみられる一人平均齶歯数推定値の高さは、この集団における齶歯の蔓延を示唆する。また疾患の痕跡が多くあり、特に梅毒や関節病変が著明に観察された。

謝辞

本人骨資料を調査するにあたり、(財)京都市埋蔵文化財研究所の皆様には多大なご支援をいただいた。深く感謝の意を表します。

参考文献

- 百々幸雄. 石田肇, 1988. 頭蓋の形態小変異の出現型からみた土井ヶ浜弥生人. 日本民族、文化の生成 1:127-142
- 百々幸雄. 石田肇, 1989. 日本人頭蓋にみられる非計測的小変異の遺伝性に関する研究. ヒト骨格に非計測形質の遺伝性に関する総合的研究:17-22
- 藤井明, 1960. 四肢長骨の長さと言長との関係に就て. 順天堂大学体育学部紀要 3:49-61
- 藤澤珠織. 片山一道, 2007. 京都市伏見区出土人骨の人類学的所見. 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-27, 伏見城跡:188-190,250-281.
- Juliet Rogers and Tony Waldron, 1995. A Field Guide to Joint Disease in Archaeology
- 佐倉朔, 1963. 日本人に於ける齶歯頻度の時代的推移. 人類学雑誌 71:153-77
- 瀬田季茂. 吉野峰生, 1990. 白骨死体の鑑定. 令文社
- 鈴木隆雄, 1998. 骨から見た日本人. 講談社選書メチエ 142:183-207
- T.D. White, P.A. Folkens, 2000. Human Osteology (2nd ed.), London: Academic Press: 337-373

表1 頭蓋骨の主要計測値(mm)

Martin No.	計測項目	伏見人骨									
		男性					女性				
		調査数	平均	標準偏差	最大	最小	調査数	平均	標準偏差	最大	最小
頭蓋骨											
1	頭蓋最大長	14	182.5	7.9	198	155	13	174.4	7.8	186	158
8	頭蓋最大幅	13	143.3	5.2	161	132	13	137.6	4.3	144	133
17	ハジマ・ブリマ高	11	139.8	5.2	150	132	6	132.2	4.8	138	125
5	頭蓋底長	11	104.0	3.8	110	99	6	99.0	1.7	102	97
40	顔長	4	102.9	5.8	108	89	4	95.9	3.8	101	91
45	頬骨弓幅	11	137.6	3.8	144	132	4	127.4	1.2	129	126
45(1)	後頬骨幅	11	121.4	6.0	129	111	4	112.3	3.1	117	110
46	中顔幅	13	103.5	6.2	114	93	6	96.0	5.8	106	91
47	顔高	5	126.1	7.4	136	100	6	115.4	2.0	118	112
48	上顔高	7	76.6	4.2	81	63	6	67.3	4.3	73	62
49a	眼窩間幅	8	22.0	0.7	23	21	4	20.2	2.1	22	17
50	前眼窩間幅	13	19.8	1.4	22	17	7	17.5	1.4	20	16
44	両眼窩幅	14	101.4	4.5	107	95	5	96.3	4.4	102	91
51	眼窩幅	16	43.7	2.1	47	41	5	42.3	1.2	44	41
52	眼窩高	15	35.8	2.4	41	30	6	35.3	3.3	42	32
54	鼻幅	13	26.7	1.0	29	26	7	25.1	2.2	28	21
55	鼻高	13	54.2	2.4	58	50	7	48.5	2.2	52	45
56	鼻骨長	7	25.6	3.5	30	21	3	21.6	4.1	26	18
57	鼻骨最小幅	14	8.1	2.0	12	5	6	6.8	2.5	10	4
57(1)	鼻骨最大幅	6	17.7	1.7	20	16	4	16.7	2.3	19	13
下顎骨											
65	下顎関節突起幅	8	126.7	3.0	133	123	2	115.9	6.3	120	111
67	前下顎幅	14	48.2	2.9	53	44	9	45.1	3.2	52	41
66	下顎角幅	9	98.8	6.9	110	90	7	89.2	3.6	97	86
68	下顎長	7	73.2	5.9	81	63	6	68.6	3.5	74	65
68(1)	下顎投影最大長	9	109.0	4.2	116	103	5	105.4	5.2	113	100
69	頤高	9	37.6	3.1	42	27	5	31.7	3.0	35	17
69(2)	下顎体高	10	27.3	4.5	38	21	9	24.3	2.0	28	16
69(3)	下顎体厚	16	13.3	1.7	16	10	11	10.9	1.3	13	9
70	下顎枝高	9	64.6	4.3	75	60	6	51.7	5.2	56	52
71a	最小下顎枝幅	15	36.0	2.9	39	31	11	30.9	2.3	33	28
71(1)	下顎切痕幅	10	38.2	2.5	42	34	6	35.2	3.1	40	33

表2 頭蓋示数(%)

Martin No.	示数	伏見人骨									
		男性					女性				
		調査数	平均	標準偏差	最大	最小	調査数	平均	標準偏差	最大	最小
8/1	頭蓋長幅示数	13	78.7	4.7	87	69	13	79.1	5.4	91	72
17/1	頭蓋長高示数	11	76.5	2.9	80	70	6	75.6	5.1	81	69
17/8	頭蓋幅高示数	11	97.8	4.8	99	92	6	97.3	3.2	98	94
40/5	顎示数	4	97.9	2.3	98	86	4	96.6	4.7	97	91
45/8	横頭顔示数	11	96.6	4.9	98	90	4	94.7	2.1	97	92
47/46 (v)	顔示数	5	121.3	4.3	98	75	5	118.9	6.5	127	111
48/46 (v)	上顔示数	7	73.2	4.5	60	45	5	68.6	2.8	71	64
47/45 (k)	顔示数	5	91.1	4.7	98	87	3	90.0	1.8	92	89
48/45 (k)	上顔示数	6	55.4	3.7	60	49	3	50.8	1.9	53	49
50/44	眼窩間示数	12	19.4	1.2	21	17	5	18.5	1.3	20	17
52/51	眼窩示数	15	81.7	5.6	92	73	6	80.9	4.0	86	75
54/55	鼻示数	12	49.1	3.6	57	45	7	51.8	3.9	58	47
68/65	下顎幅長示数	6	58.5	5.5	65	50	2	60.9	0.6	61	60
62(2)/69	下顎高示数	13	74.8	9.4	92	61	6	77.9	11.5	93	64
66/65	下顎幅示数	6	81.2	5.3	87	73	2	76.8	5.7	81	73

表3 比較資料の頭蓋骨の計測値(mm)

Martin No.	計測項目	近代人骨 ^{※1}				中世人骨 ^{※2}		縄文人骨 ^{※3}	
		男性		女性		男性	女性	男性	女性
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	平均	平均	平均
	頭蓋骨								
1	頭蓋最大長	178.3	5.4	169.3	4.8	181.8	176.4	186.2	175.8
8	頭蓋最大幅	141.2	4.6	137.7	3.7	136.2	132.0	144.4	141.9
17	バジナル・ブレグマ高	139.7	5.7	132.5	3.5	139.4	133.0	134.0	126.1
5	頭蓋底長	102.1	3.7	95.0	3.3	102.4	98.0	103.4	96.3
40	顔長	100.1	3.8	94.3	4.2	100.6	96.5	102.7	95.8
45	頬骨幅	133.5	4.1	125.8	3.2	135.2	128.3	143.2	132.8
45(1)	後頬骨幅	—	—	—	—	—	—	—	—
46	中顔幅	100.1	4.3	95.9	3.6	100.3	98.6	103.6	100.8
47	顔高	122.1	6.8	115.4	4.7	117.3	111.5	115.8	103.3
48	上顔高	72.9	4.3	68.3	3.5	69.9	65.5	67.0	63.1
49a	眼窩間幅								
50	前眼窩間幅	18.2	1.8	17.1	1.7	—	—	19.2	18.2
44	両眼窩幅	98.0	3.7	94.3	3.2	—	—	102.0	97.6
51	眼窩幅	43.4	1.9	41.7	1.8	42.0	41.1	43.7	41.2
52	眼窩高	34.4	2.2	34.2	1.6	34.4	33.9	33.6	33.4
54	鼻幅	26.4	1.8	25.1	1.9	26.0	25.9	26.6	25.4
55	鼻高	52.4	2.9	48.6	2.9	51.4	48.6	48.6	45.2
56	鼻骨長	25.2	3.1	23.1	2.7	—	—	—	18.0
57	鼻骨最小幅	7.2	1.8	7.0	1.5	—	—	9.2	8.8
57(1)	鼻骨最大幅								
	下顎骨								
65	下顎関節突起幅	120.5	6.6	115.5	5.3	122.7	118.0	129.6	124.3
67	前下顎幅							50.3	47.3
66	下顎角幅	100.5	5.3	91.8	3.9	102.8	95.9	105.4	98.1
68	下顎長	—	—	—	—	—	—	75.0	73.4
68(1)	下顎投影最大長					104.8	100.1		
69	頤高	36.5	3.4	33.3	2.3	32.1	29.9	33.5	29.0
69(2)	下顎体高	—	—	—	—	—	—	—	—
69(3)	下顎体厚	—	—	—	—	13.5	12.2	12.9	12.3
70	下顎枝高	60.9	5.1	55.5	3.5	—	—	61.8	56.4
71a	最小下顎枝幅	33.6	2.8	31.5	2.2	35.9	34.6	—	—
71(1)	下顎切痕幅	—	—	—	—	—	—	—	—

空欄(—)は計測値なし

表4 比較資料の頭蓋示数(%)

Martin No.	示数	近代人骨 ^{※1}				中世人骨 ^{※2}		縄文人骨 ^{※3}	
		男性		女性		男性	女性	男性	女性
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	平均	平均	平均
8/1	頭蓋長幅示数	79.7	3.4	81.5	4.2	74.9	74.9	77.7	80.8
17/1	頭蓋長高示数	78.5	3.3	77.9	3.1	76.8	75.4	71.6	71.5
17/8	頭蓋幅高示数	99.3	4.8	95.8	3.0	102.5	100.7	92.2	89.3
40/5	顎示数	98.0	4.2	99.7	4.6	98.2	98.5	99.3	99.7
45/8	横頭顔示数	94.7	3.5	91.5	3.9	99.3	97.2	98.0	94.8
47/45 (k)	顔示数	91.7	5.9	91.6	3.5	86.4	86.3	79.6	78.1
48/45 (k)	上顔示数	54.6	3.2	54.6	2.6	51.7	51.6	48.3	48.1
50/44	眼窩間示数	18.6	1.6	18.1	1.3	—	—	18.7	18.8
52/51	眼窩示数	78.5	4.5	81.7	4.6	82.1	82.7	76.6	81.5
54/55	鼻示数	50.3	4.0	51.2	4.1	50.5	53.5	54.5	56.1

空欄(—)は計測値なし

※1 解剖献体(主に畿内出身者)の計測値と示数、宮本(1925)、平井・田嶋(1928)より

※2 吉母浜遺跡(山口)出土人骨の計測値と示数(顎示数と横頭顔示数は計測値より計算)、九州大学医学部解剖学第二講座(1988)より

※3 津雲貝塚(岡山)出土人骨の計測値と示数、清野・宮本(1926)、清野・平井(1928)より

表5 四肢骨の計測値(mm), 示数(%)

Martin No.	項目	調査数	男性				女性					
			平均	標準偏差	最大	最小	調査数	平均	標準偏差	最大	最小	
1	上腕骨	最大長	19	299.0	13.5	320	266	13	266.8	11.1	292	251
2		全長	19	295.9	13.8	318	264	13	265.4	10.7	290	250
5		中央最大径	16	22.4	1.6	25	19	9	19.8	1.8	23	17
6		中央最小径	16	17.9	2.0	21	14	9	15.1	0.9	16	13
7		骨体最小周	17	62.1	4.2	68	54	10	54.2	3.9	61	47
7a		中央周	15	65.7	4.9	73	57	8	58.0	4.6	64	50
6/5		骨体断面示数	16	79.8	6.3	95	65	9	76.8	4.0	83	70
7/1		長厚示数	16	20.8	1.2	23	18	8	20.1	1.3	22	18
1	橈骨	最大長	31	227.7	9.3	252	211	16	197.6	7.9	213	182
2		生理学長	31	211.0	8.3	231	195	16	183.7	7.8	197	166
4		骨体横径	20	17.0	1.3	19	15	10	14.8	1.4	17	13
4a		骨体中央横径	17	15.4	1.6	18	12	9	13.7	1.5	16	11
5		骨体矢状径	20	11.6	1.1	15	10	10	10.0	0.7	11	9
5a		骨体中央矢状径	17	12.1	1.1	15	10	9	10.0	0.7	11	9
5(5)		骨体中央周	16	43.4	3.5	51	38	9	37.3	3.1	41	32
5/4		断面示数	20	68.3	4.2	79	61	10	67.9	4.9	77	59
5a/4a		中央断面示数	17	78.9	5.0	86	71	9	73.5	6.2	83	60
5(5)/2		中央位長厚示数	16	20.6	1.7	24	18	9	20.1	1.3	22	18
1	尺骨	最大長	20	243.9	9.2	262	229	13	214.0	9.3	229	195
2		機能長	24	214.1	8.2	233	201	15	187.1	7.9	202	170
2a		生理学長	20	220.4	9.3	240	207	14	193.0	8.9	208	175
3a		骨体中央周	9	47.9	3.9	56	43	8	40.0	3.0	43	34
11		中央最小径	12	12.6	0.9	14	12	8	10.4	0.8	12	9
12		中央最大径	12	16.5	1.4	20	15	8	13.9	1.2	16	12
11/12		中央断面示数	12	76.9	5.0	83	67	8	75.5	3.8	81	69
1	大腿骨	最大長	23	415.8	19.3	447	373	12	372.3	14.6	389	341
2		自然位長	23	412.1	18.1	442	372	12	370.2	15.0	388	338
6		骨体中央矢状径	18	27.9	2.5	32	23	10	23.8	1.8	26	20
7		骨体中央横径	18	26.6	2.8	33	22	10	24.0	1.7	26	21
8		骨体中央周	18	84.0	8.7	97	64	10	74.7	4.7	81	67
9'		骨体上最大径	17	31.7	3.4	37	25	10	28.7	1.6	31	26
10'		骨体上最小径	17	24.2	2.3	30	21	10	20.8	1.9	23	18
8/2		大腿・長厚示数	16	20.3	2.0	23	16	7	20.1	0.7	21	19
6/7		骨体中央断面示数	18	105.6	9.4	120	85	10	99.2	7.4	111	88
10'/9'		骨体上断面示数	17	76.8	6.4	88	67	10	72.5	5.3	82	64
1	脛骨	全長	20	333.6	17.9	369	305	11	300.5	13.5	323	280
1a		最大長	20	336.3	17.5	371	307	11	303.5	13.8	326	281
8		中央最大矢状径	11	28.2	3.6	34	22	3	24.8	0.8	26	24
8a		栄養孔位最大径	16	33.5	3.7	41	25	10	28.5	1.4	31	27
9		中央横径	11	21.5	2.6	26	18	3	19.4	3.2	22	16
9a		栄養孔位横径	16	23.7	2.0	28	19	10	20.7	2.3	25	17
10		骨体周	8	80.5	8.8	95	70	3	68.7	5.1	73	63
10b		骨体最小周	15	75.1	6.4	86	60	9	62.0	3.1	67	59
9/8		中央断面示数	11	76.7	6.4	85	62	3	78.1	12.0	88	65
9a/8a		栄養孔位断面示数	16	71.1	6.6	84	56	10	72.6	7.6	84	59
10b/1		長厚示数	12	21.9	1.9	27	20	6	20.2	1.0	21	19
1	腓骨	最大長	8	336.3	14.9	359	319	5	309.0	11.6	326	294
2		中央最大径	7	14.5	2.0	18	12	3	12.8	2.5	14	10
3		中央最小径	7	11.5	1.1	13	10	3	9.0	0.7	10	8
4		中央周	6	42.5	5.0	50	36	3	36.8	5.1	40	31
3/2		中央断面示数	7	79.9	5.8	88	73	3	71.5	11.0	84	63
腕示数	橈骨(1)/上腕骨(1)	16	75.8	2.8	83	72	11	74.0	3.0	78	68	
脚示数	脛骨(1a)/大腿骨(1)	20	80.6	2.6	85	75	11	81.8	3.3	88	78	
腿腕示数	上腕骨(1)/大腿骨(1)	16	71.9	1.8	76	69	10	72.4	3.3	78	69	
腿腕示数	(上腕骨(1)+橈骨(1))/ (大腿骨(1)+脛骨(1a))	14	70.0	1.6	74	68	10	69.0	1.5	72	67	

表6 四肢骨最大長の比較

	男性			女性		
	調査数	平均	標準偏差	調査数	平均	標準偏差
上腕骨最大長						
縄文 津雲貝塚	18	287.4 *	13.4	15	264.9	9.5
中世 吉母浜遺跡	19	297.2	14.0	27	273.2	11.5
江戸 伏見城跡	19	299.0	13.5	13	266.8	11.1
近代 (解剖献体)	30	294.1	15.6	20	273.9	12.7
橈骨最大長						
縄文 津雲貝塚	14	234.2 *	9.4	17	208.8 **	10.1
中世 吉母浜遺跡	18	231.0	9.6	26	209.3 **	7.5
江戸 伏見城跡	31	227.7	9.3	16	197.6	7.9
近代 (解剖献体)	30	223.1	11.6	20	201.3	8.8
大腿骨最大長						
縄文 津雲貝塚	16	415.7	20.6	20	383.2 *	13.9
中世 吉母浜遺跡	19	416.8	22.7	24	377.8	19.1
江戸 伏見城跡	23	415.8	19.3	12	372.3	14.6
近代 (解剖献体)	30	413.7	24.0	20	382.3	20.6
脛骨最大長						
縄文 津雲貝塚	12	346.6	17.0	15	322.5 **	12.3
中世 吉母浜遺跡	13	346.5	13.4	24	311.6	14.2
江戸 伏見城跡	20	336.3	17.5	11	303.5	13.8
近代 (解剖献体)	30	331.9	20.5	20	305.1	17.2

*, **: 伏見の江戸時代人との間に5%または1%の危険率で有意差あり

表7 四肢骨示数の比較

	男性			女性		
	調査数	平均	標準偏差	調査数	平均	標準偏差
腕示数						
縄文 津雲貝塚	14	81.9 **	2.8	12	77.3 *	3.1
中世 吉母浜遺跡	18	77.5 *	1.9	25	76.1 *	2.1
江戸 伏見城跡	16	75.8	2.8	11	74.0	3.0
近代 (解剖献体)	30	75.9	2.4	20	73.5	2.5
脚示数						
縄文 津雲貝塚	12	84.1 **	2.3	14	84.1	2.2
中世 吉母浜遺跡	13	81.9	2.0	22	82.3	2.1
江戸 伏見城跡	20	80.6	2.6	11	81.8	3.3
近代 (解剖献体)	30	80.3	2.2	20	79.8 *	2.1
上腕 - 大腿示数						
縄文 津雲貝塚	14	69.1 **	1.7	12	70.0	1.7
中世 吉母浜遺跡	18	71.5	2.2	23	72.4	2.3
江戸 伏見城跡	16	71.9	1.8	10	72.4	3.3
近代 (解剖献体)	30	71.1	1.8	20	71.7	1.8
腿腕示数						
縄文 津雲貝塚	11	68.2 **	1.3	5	67.9	1.0
中世 吉母浜遺跡	13	69.6	1.7	20	69.9	1.9
江戸 伏見城跡	14	70.0	1.6	10	69.0	1.5
近代 (解剖献体)	30	69.4	1.5	20	69.2	1.6

*, **: 伏見の江戸時代人との間に5%または1%の危険率で有意差あり

表8 齲菌率と一人平均の齲菌数推定値

総合	上顎											下顎											合計	一人平均齲菌数 推定値 ^{※2}	調査 個体数
	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3									
遺存歯	44	53	88	79	91	107	90	49	53	94	95	95	116	118	106	88	1336								
齲蝕歯 ^{※1}	3	7	13	15	32	44	38	23	8	11	23	45	66	62	50	447	9.8	117							
齲菌率 ^{※1}	0.07	0.13	0.15	0.19	0.35	0.41	0.42	0.47	0.15	0.11	0.12	0.24	0.39	0.56	0.58	0.57	4.91								

※1 齲菌率=齲菌数/調査歯数

※2 一人平均齲菌数推定値=2×各歯種別齲菌率の総和

表9 齲菌率(%)の他時代との比較

時代・遺跡名	齲菌率	一人平均齲菌数 推定値
伏見	33.50	9.8
縄文 [*]	14.00	2.5
中世 [*]	14.60	4.3
江戸 [*]	20.40	5.2
現代 [*]	8.68	2.5

※ 伏見以外の値は(佐倉, 1963)より抜粋

図1 伏見江戸時代人頭骨と近代人骨および中世人骨、縄文人骨との計測値比較（基準線：近代人骨）

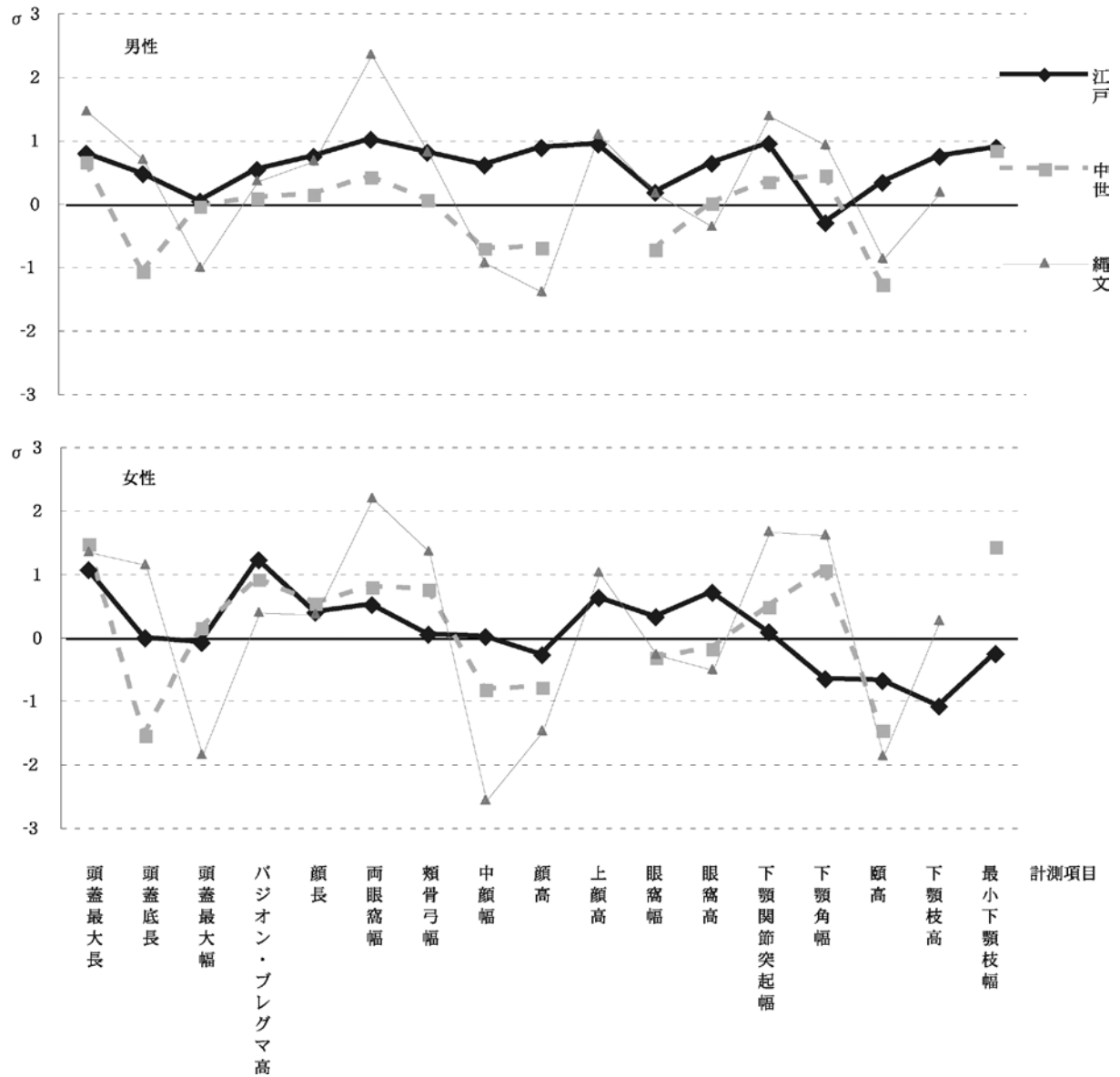


図2 伏見江戸時代人頭骨と近代人骨および中世人骨、縄文人骨との示数比較（基準線：近代人骨）

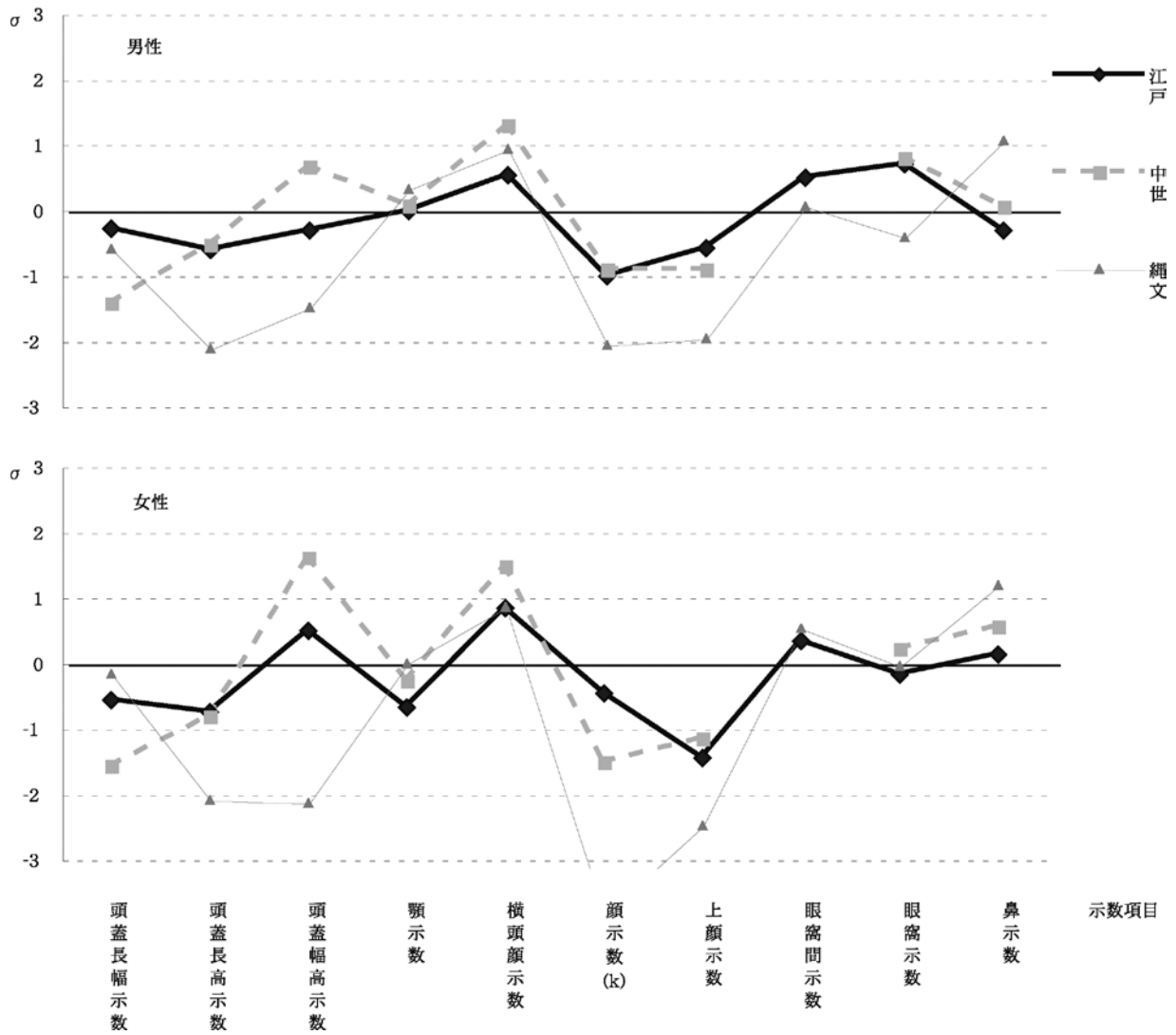




写真1 梅毒（頭蓋骨）

左上は頭蓋骨を斜め前方から見た写真。右はその病変部を拡大したもの。骨表面に凹凸の不整が見られる。

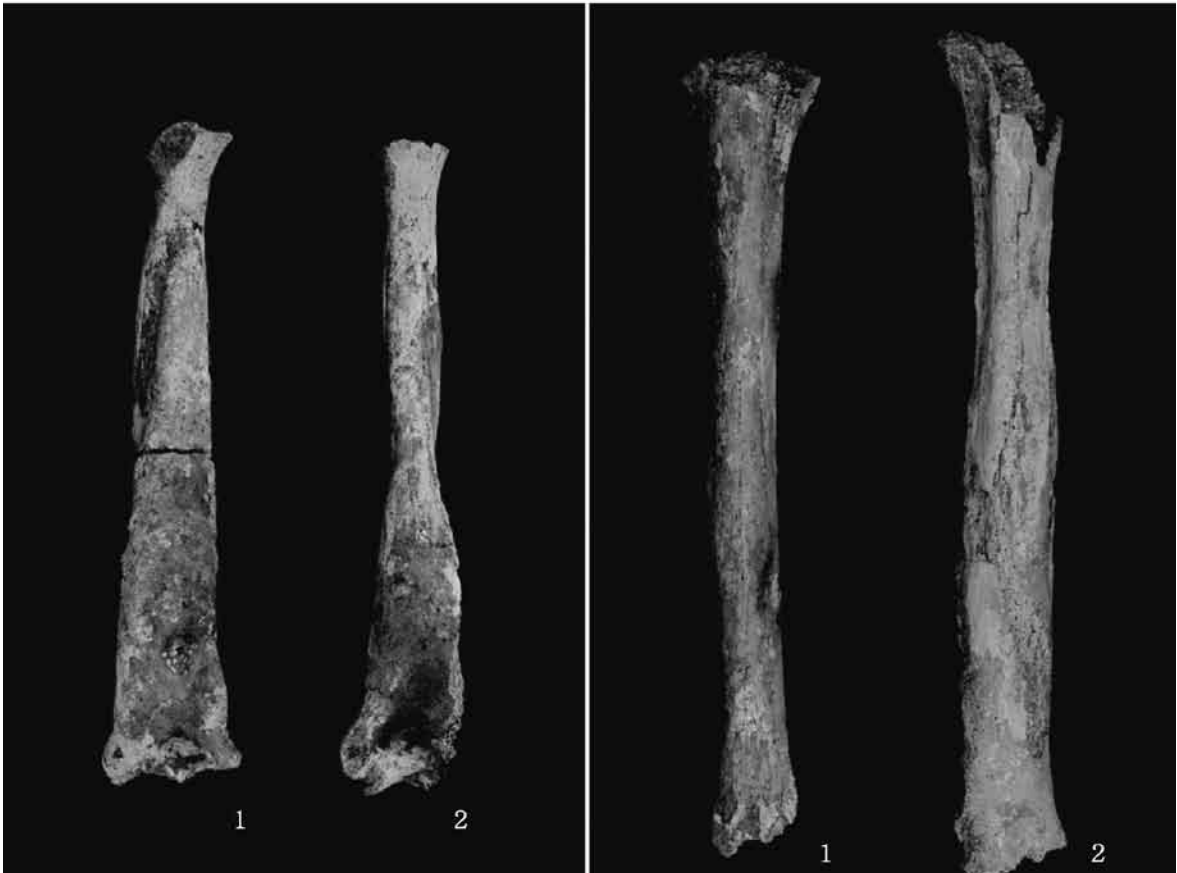


写真2 梅毒（1：左上腕骨，2：右上腕骨，ともに後面） 写真3 梅毒（1：右脛骨，2：左脛骨，ともに前面）
写真2・3とも、全体に骨幹部分の膨大と骨表面の凹凸不整が見られる。



写真4 椎骨等の疾患
 1：胸骨（前面）の骨棘形成 2：頸椎（前面）の骨棘形成 3：胸椎（前面）の蠟様骨化病変 4：寛骨と腰椎（前面）の癒合

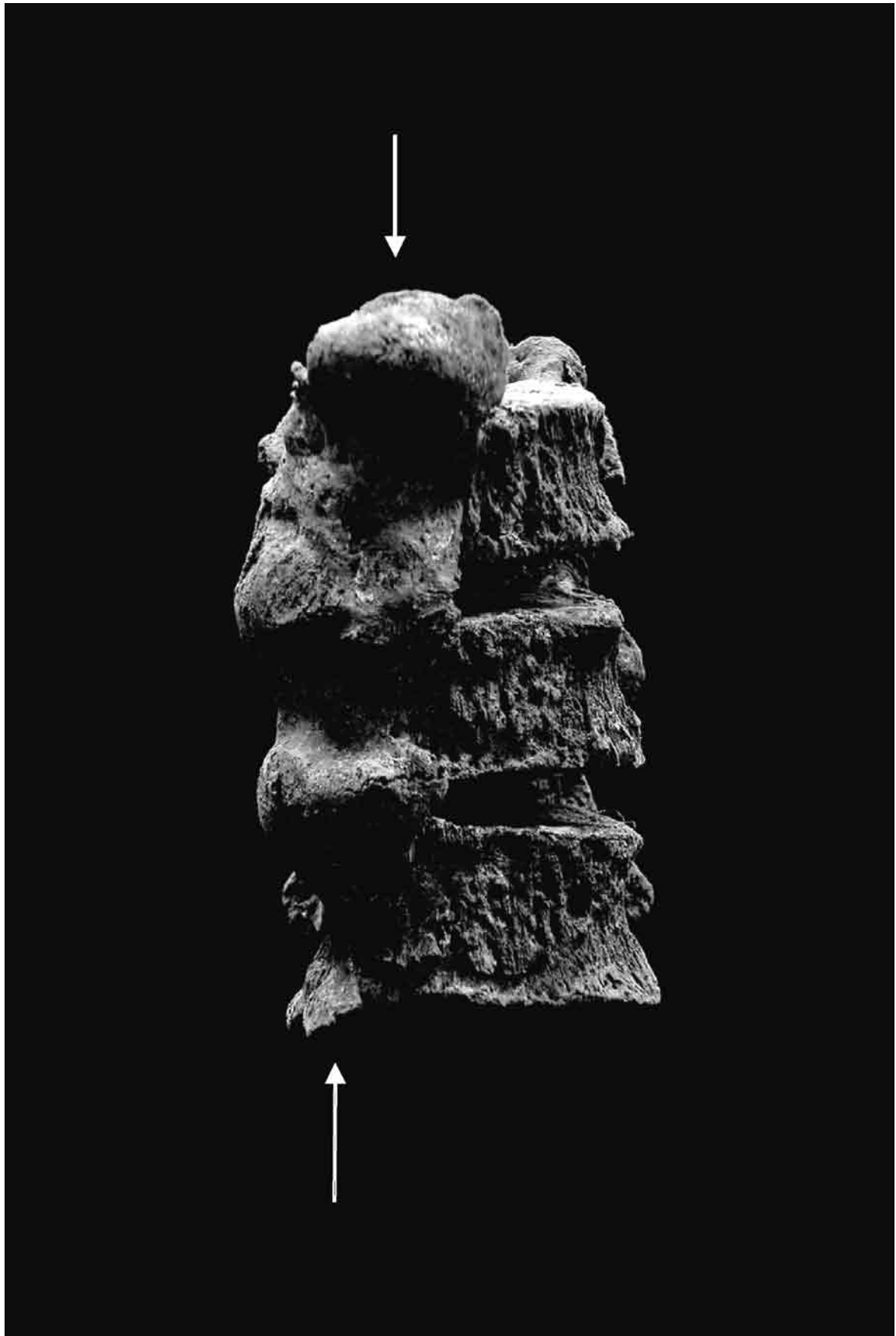


写真5 椎骨の疾患（胸椎 前面）
椎体の前面片側に、蠟をたらしたような骨化病変がある。

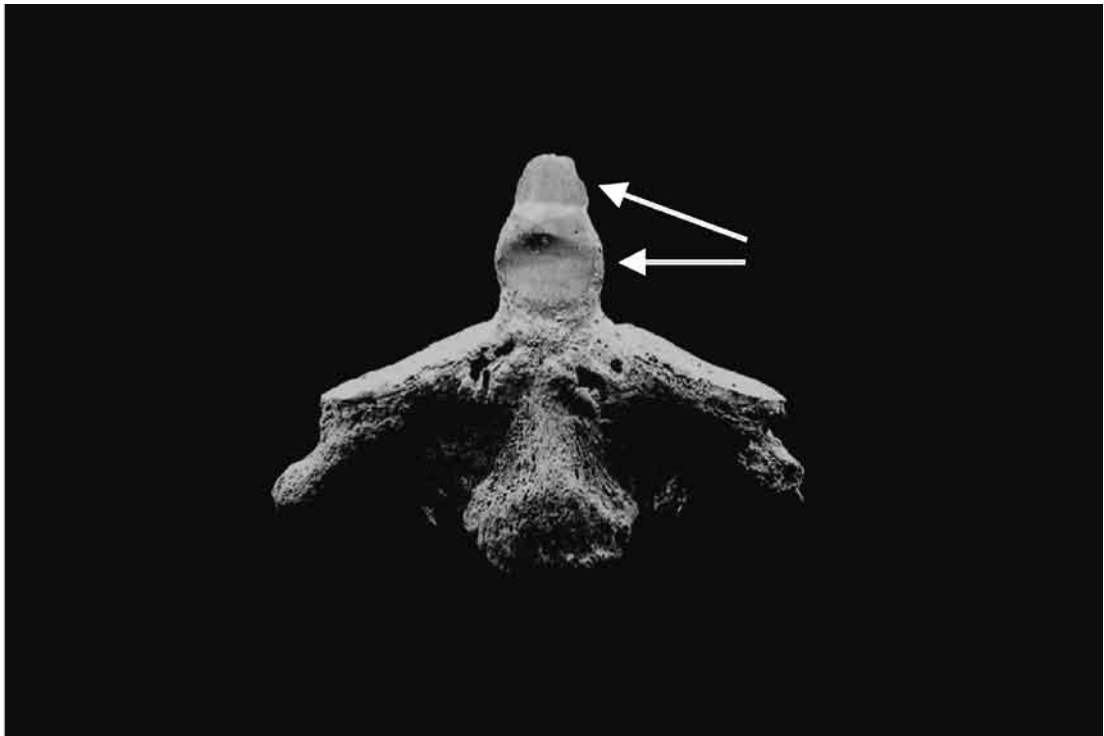


写真6 変形性関節症（第二頸椎 前面）
矢印部分はガラス様の光沢を持ち硬化している。



写真7 変形性肘関節症（1：左上腕骨，2：左尺骨，3：左橈骨，ともに前面）
矢印部分はガラス様の光沢を持ち硬化している。

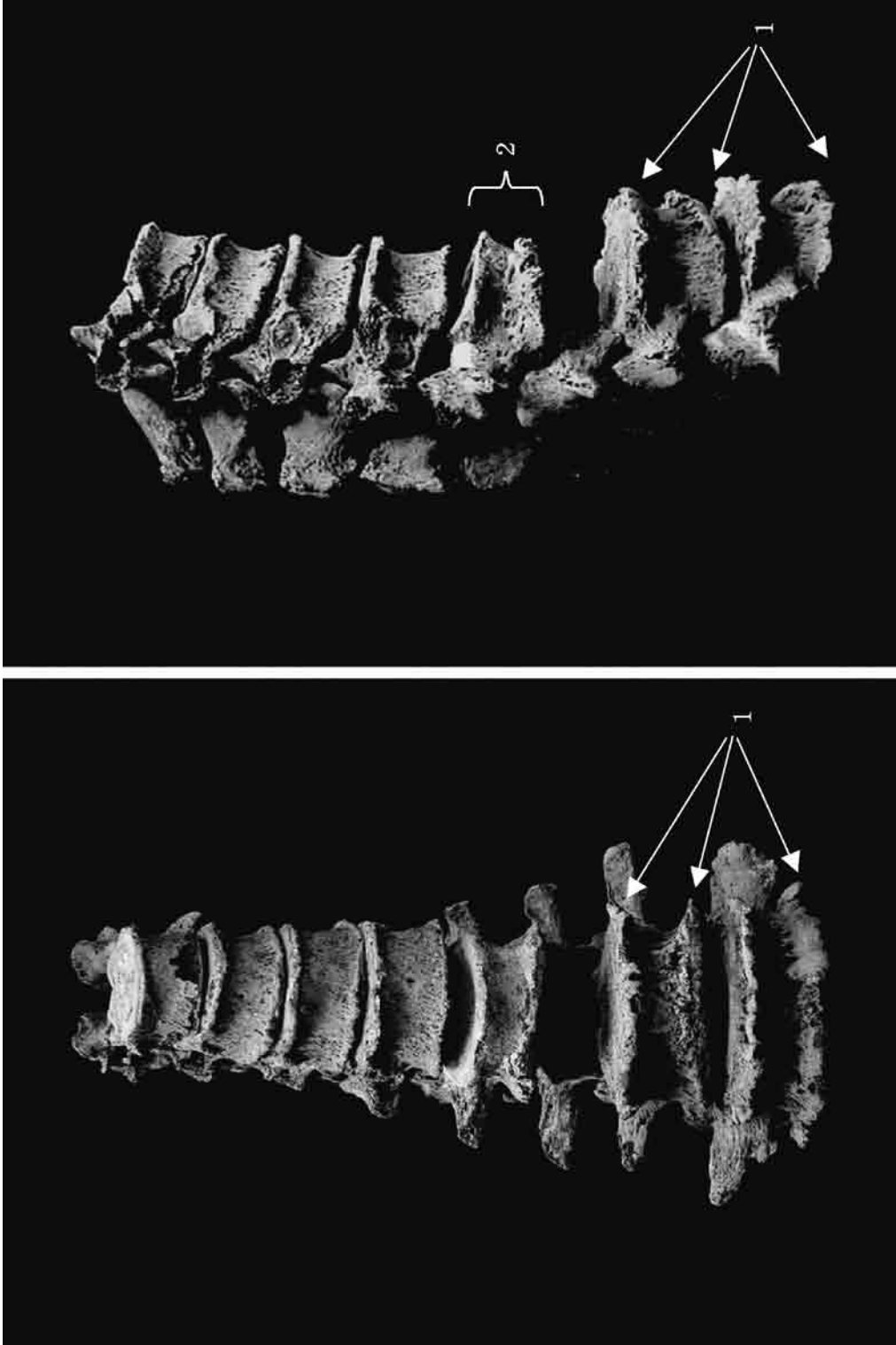


写真 8 圧迫骨折と骨棘形成 左：椎骨前面 右：椎骨側面
 1 は著明な骨棘形成の部位、2 は圧迫骨折の部位を示す



写真9 骨折痕 (1: 右上腕骨, 2: 左上腕骨, ともに前面)
2の矢印部分が骨折痕。1は同一個体の正常な右上腕骨。

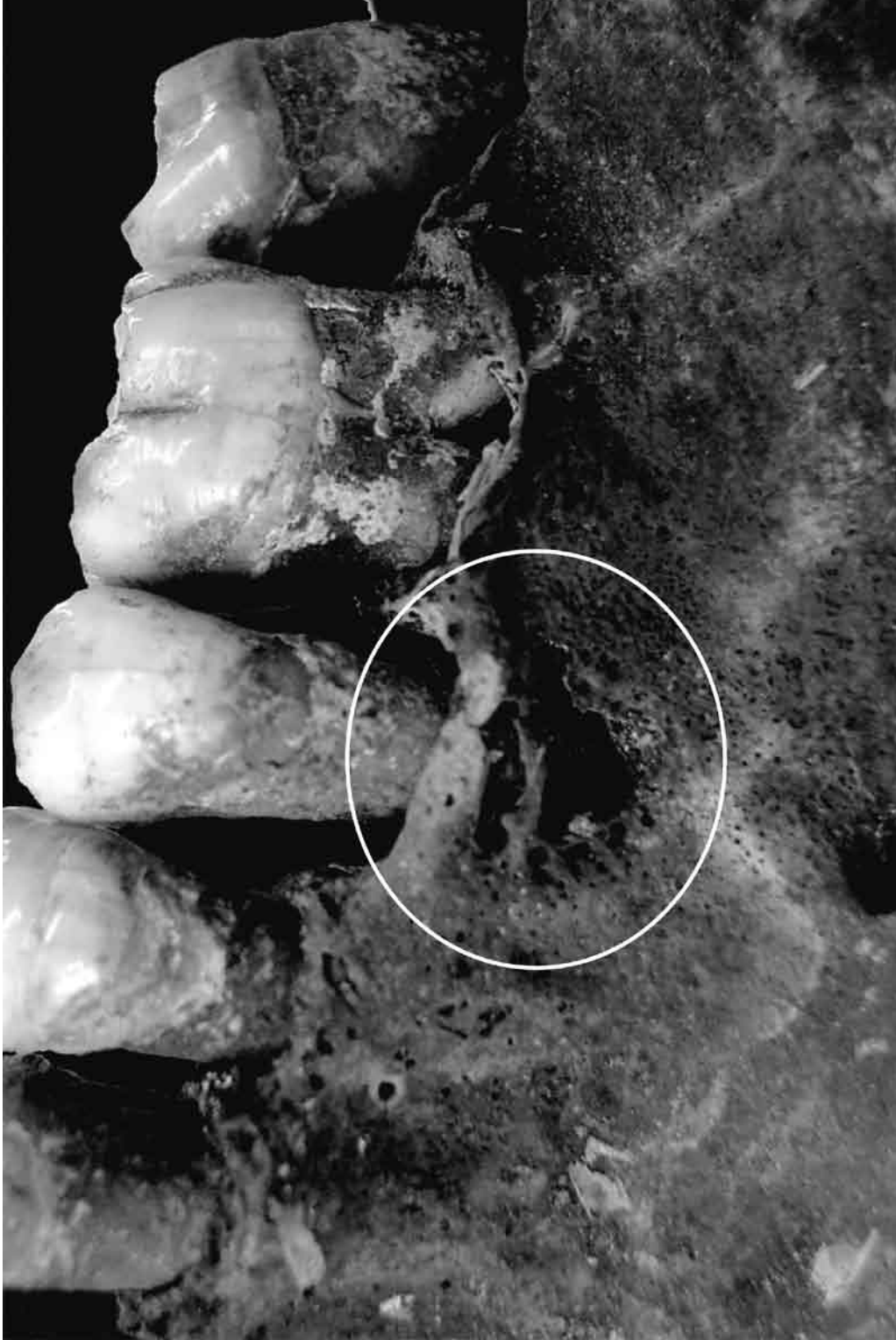


写真 10 下顎骨(左側面)
円で示した部分が根尖膿瘍による病痕と考えられる部分

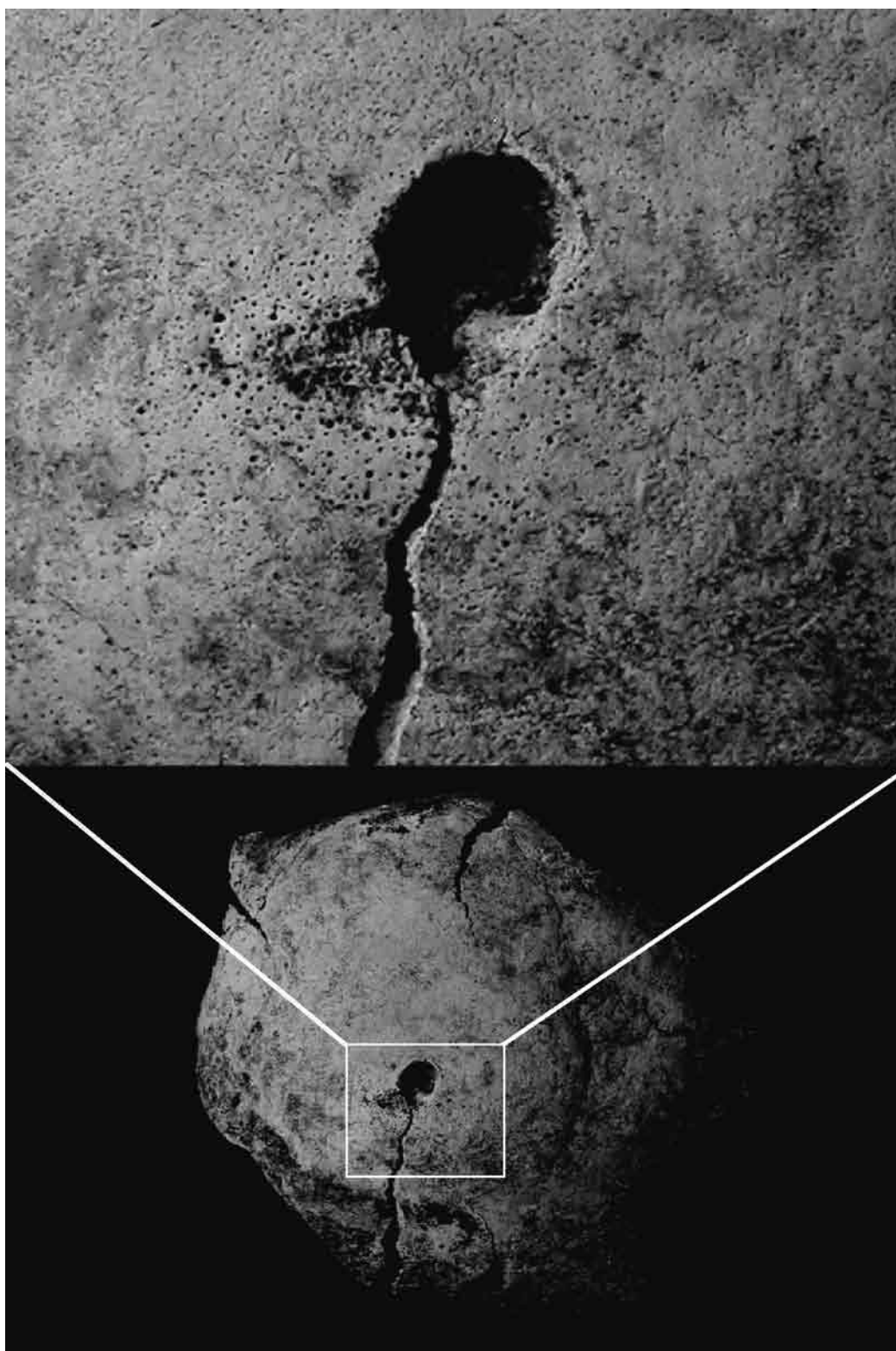


写真 11 穿孔性の病変 (?)
左は前頭骨を上から見た写真、右はその病変部を拡大したもの

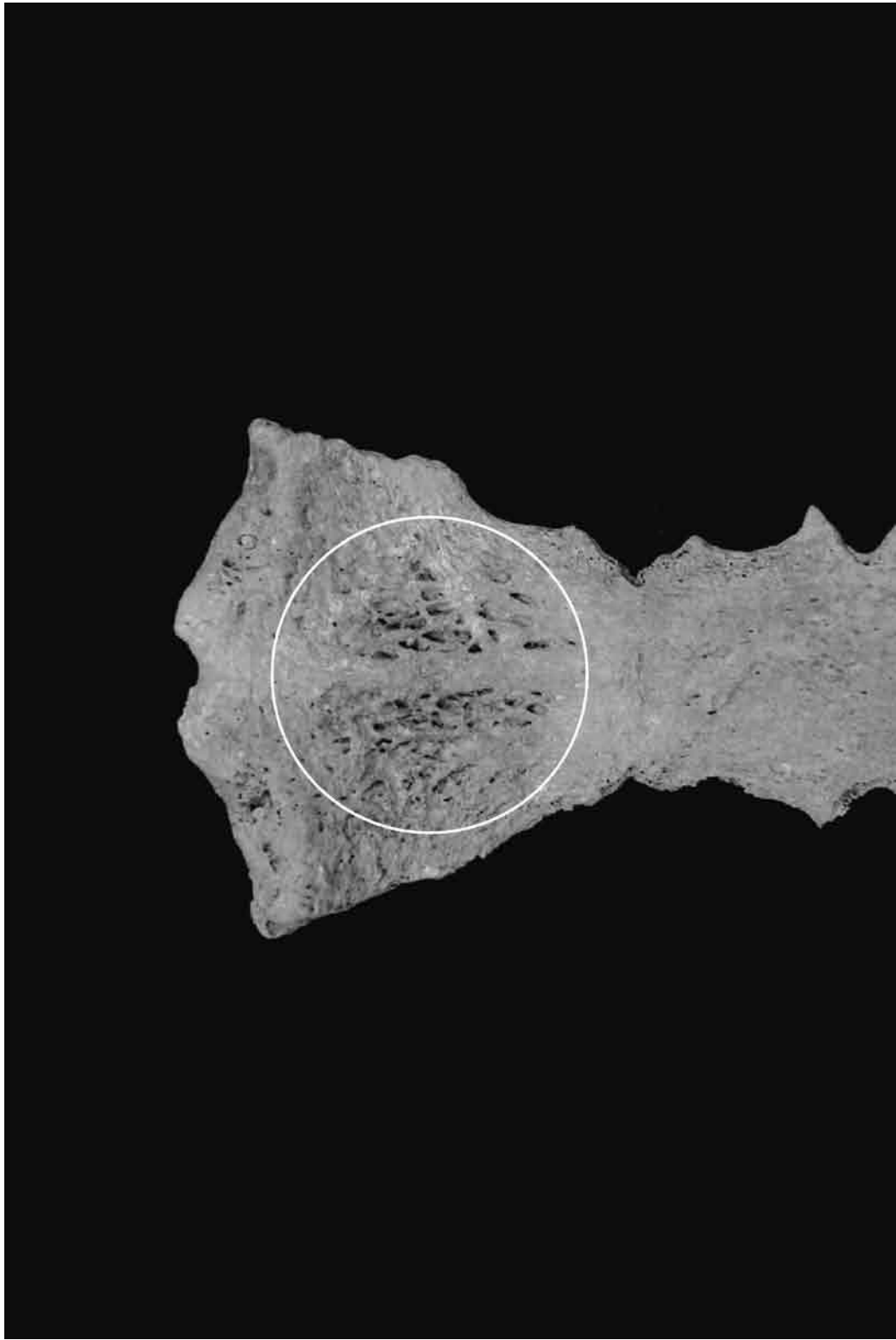


写真 12 胸骨（前面）
円で示した部分は多孔性の病変（?）

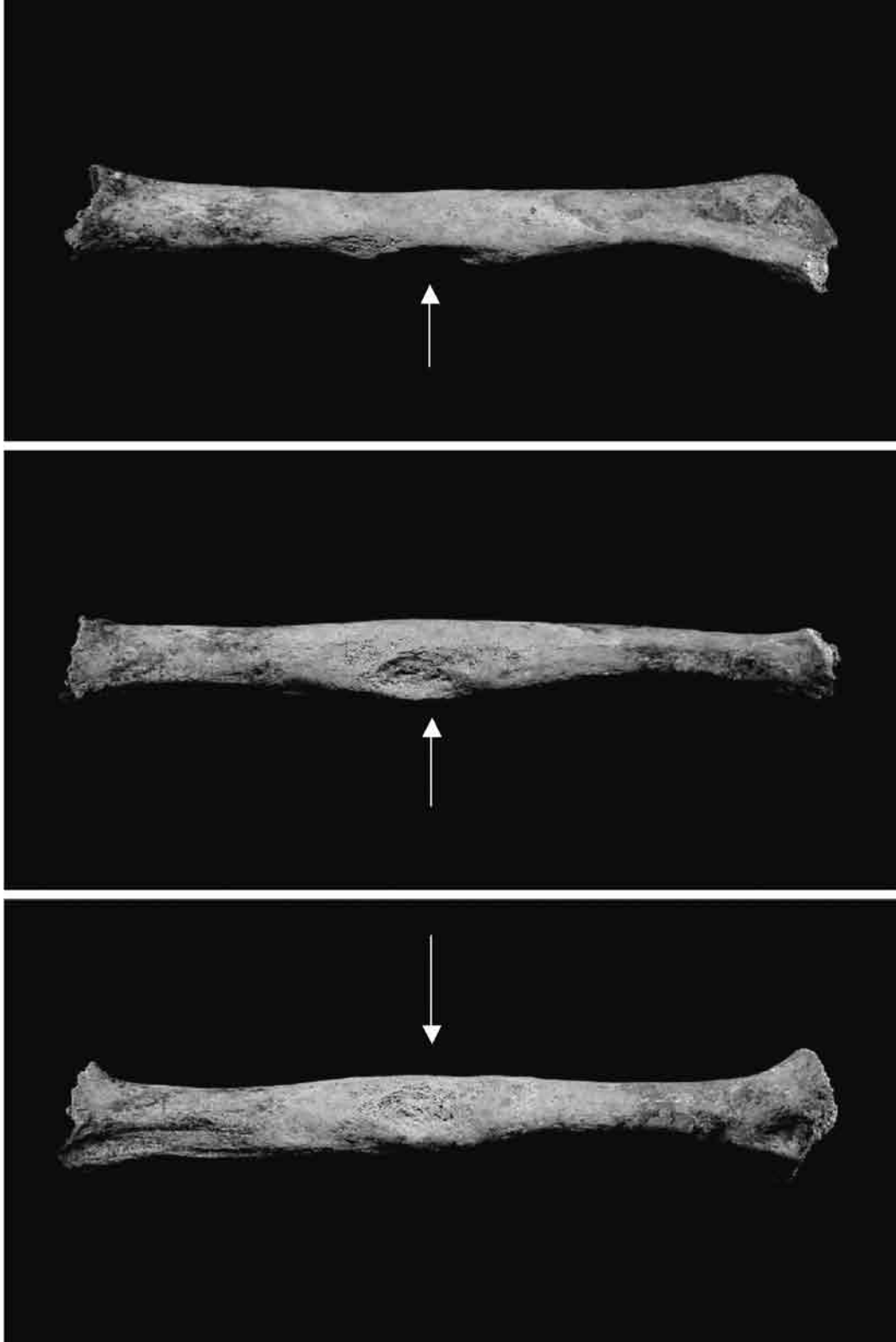


写真 13 上腕骨
矢印で示した部分に融解様(?)の病変がみられる。写真は同じ部位を前面、内側面、後面と角度を変えて見たもの。

平成 19 年度
財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報

発行日 2010 年 2 月 25 日

編 集
発 行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 (有) 関西プロセス